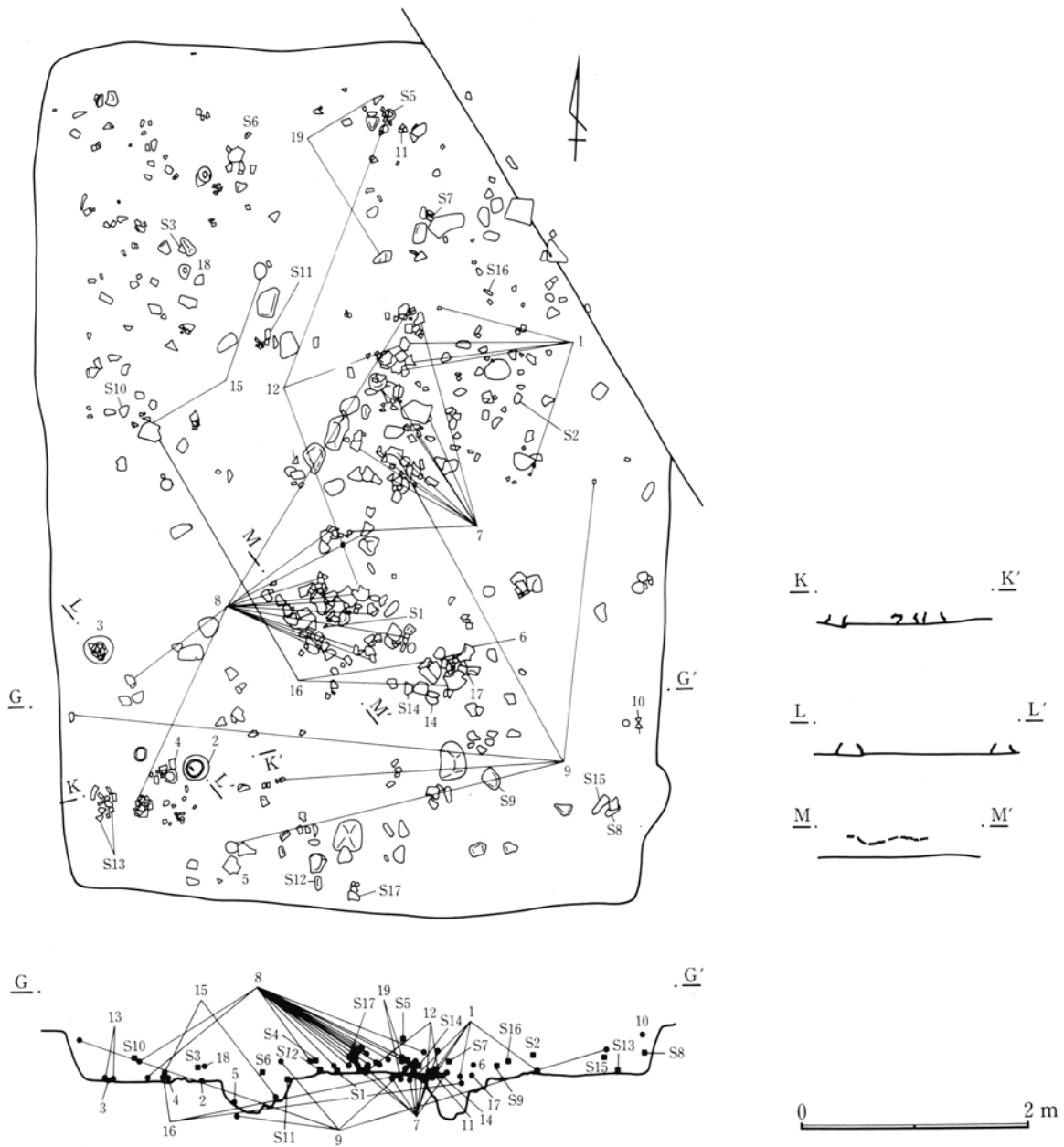


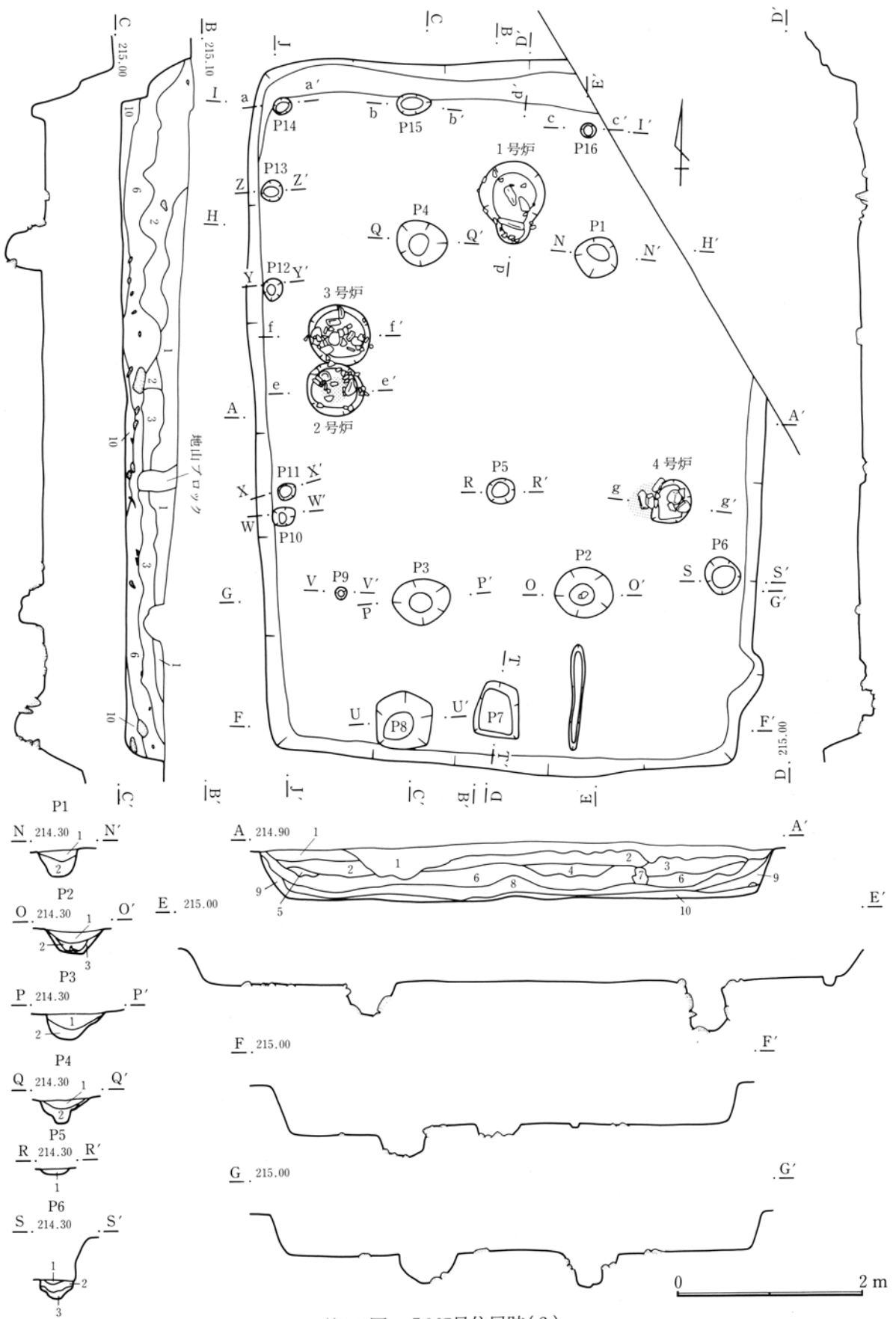
- 2号炉 中央西壁寄りに作られる。径60cmの落ち込みの中央部分に焼土が検出されている。
- 3号炉 2号炉の北に接して作られている。ほぼ同じ大きさの落ち込みと、ごくわずかの焼土が認められた。
- 4号炉 中央東寄りに作られている。やや不定型な落ち込みと、西側に礫と焼土を伴うが、地山中の礫をそのまま炉石として用いているような状況が見られた。

出土遺物 礫を伴い、土器類は中央から南西寄りが多く検出されている。床面に据えられた状態で出土するものも見られる。

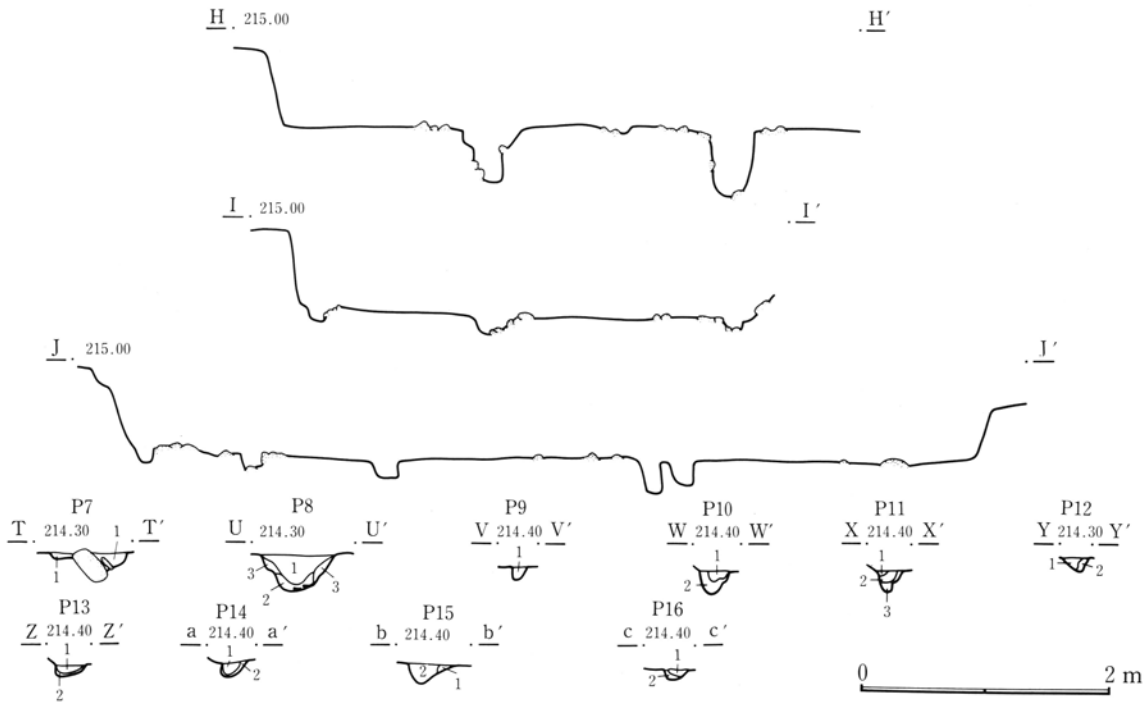
調査所見 わずかの未調査、重複部分があるものの遺存状態は良好である。地山中に礫の混入が多く、柱穴等の掘り込みはかなり浅く、床面も礫の露出が目立つ。炉と考えた施設は4カ所あるが、2・3号炉に関してはごく短期の使用と思われる。



第274図 C267号住居跡(1)



第275図 C267号住居跡(2)

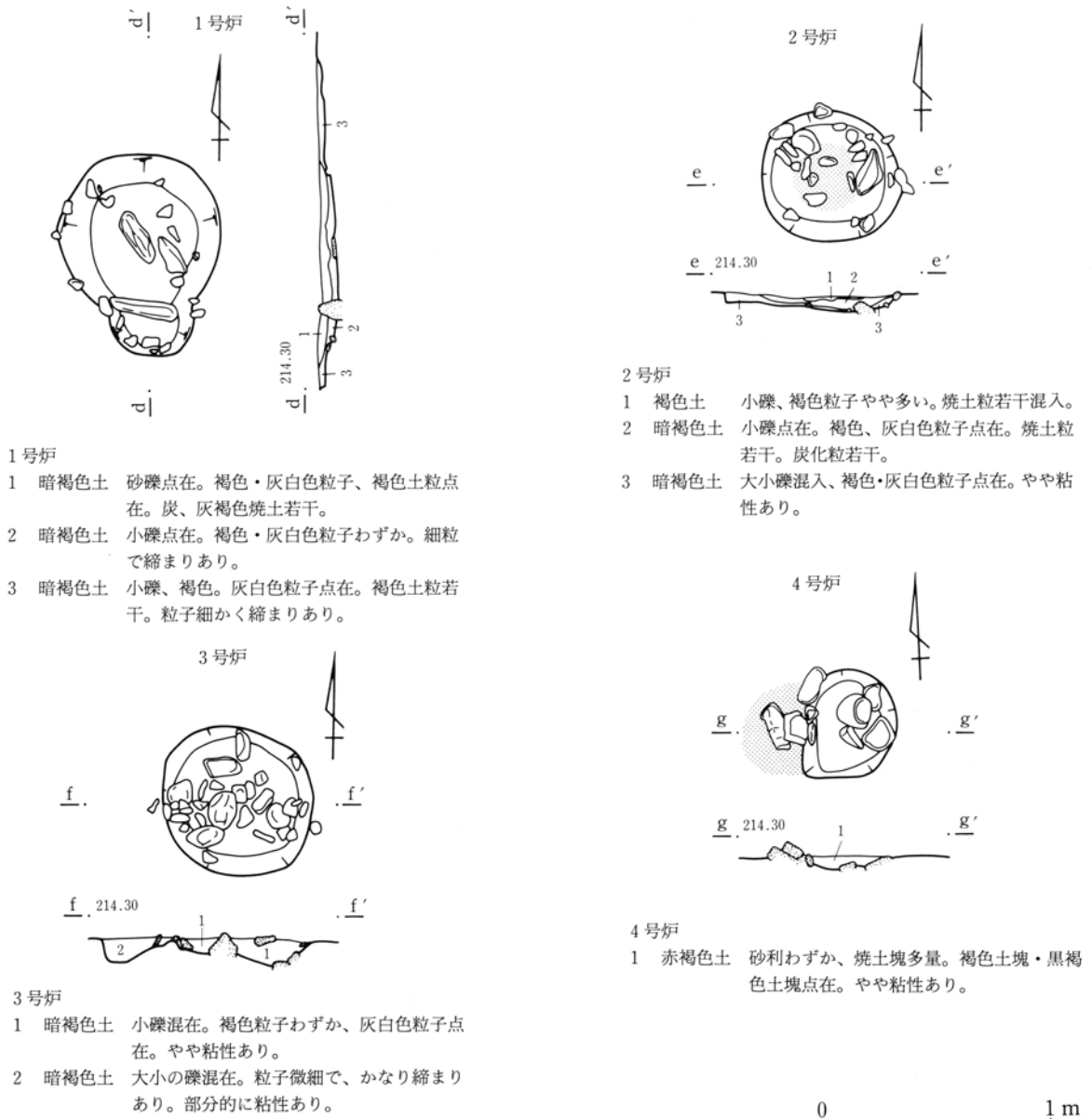


- 1 暗褐色土 砂礫、黄褐色粒子を少量含む。
- 2 暗褐色土 1 よりも砂礫、小石をやや多く含む。
- 3 暗褐色土 砂礫、2 よりさらに多く含む。黄褐色粒子を少量含む。
- 4 暗褐色土 3 よりややきめの細かい土をベースとし、砂礫、黄褐色粒子を少量含む。
- 5 暗褐色土 やや硬質の土をベースとし、砂礫、黄褐色粒子をごく少量含む。
- 6 黒褐色土 砂礫多く含み、黄褐色粒子を多く含む。
- 7 黒褐色土 柔らかい土をベースとし、砂礫、黄褐色粒子少量含む。
- 8 黒褐色土 暗い色調の土をベースとし、砂礫、黄褐色粒子を少量含む。
- 9 暗褐色土 やや黄色味を帯びた色調を呈し、黄色粒子を少量含む。
- 10 黒色土 砂礫、小石、同大の黄色粒子を少量含む。
- P 1 ~ 4・7
- 1 暗褐色土 砂粒、黄色粒子多く含む。地山の小礫含む。
- 2 暗褐色土 砂粒混入するが、1 より粘性あり。地山の小礫含む。
- 3 暗褐色土 褐色粘性土を含み、色調はやや明るい。
- P 5
- 1 暗褐色土 砂粒、炭化物含む。
- P 6
- 1 暗褐色土 砂利、小礫やや多い。褐色・灰白色粒子多量。
- 2 黒褐色土 小礫、褐色・灰白色粒子点在し、褐色土塊若干含む。
- 3 暗褐色土 小礫若干。褐色・灰白色粒子点在。粒子はやや粗い。
- P 8
- 1 黒褐色土 砂粒、黄色粒子を混入。
- 2 黒褐色土 1 と似るが、砂粒の混入やや少なく、粘性示す、地山粘土を混入。
- 3 黒褐色土 砂粒少なく、粘性示す。

- P 9
- 1 暗褐色土 砂利やや多。灰白色粒子点在。褐色粘性土やや多くまだら状。
- P 10
- 1 暗褐色土 砂利、小礫点在。暗褐色粘性土塊多量。
- 2 暗褐色土 1 よりやや濃色、褐色粘性土やや含む。
- P 11
- 1 暗褐色土 小礫やや多い。褐色・灰白色粒子点在。
- 2 黒褐色土 小礫点在。褐色・灰白色粒子、やや縮まりあり。
- 3 褐色土 褐色粘性土多く、砂礫点在。黒褐色土塊若干、まだら状。
- P 12
- 1 黒褐色土 褐色粒子・土粒、やや多く混入。褐色土粒点在。縮まりはない。
- 2 暗褐色土 褐色・灰白色粒子点在。やや縮まりあり。
- P 13
- 1 暗褐色土 褐色・灰白色粒子点在。やや縮まりあり。
- 2 暗褐色土 褐色・灰白色粒子点在。褐色土粒若干混在。よく縮まる。
- P 14
- 1 黒褐色土 褐色・灰白色粒子点在。小礫若干。褐色土やや多く混在。
- 2 暗褐色土 褐色・灰白色粒子若干。褐色土混入、まだら状を呈す。縮まりあり。
- P 15
- 1 暗褐色土 小礫若干。褐色・灰白色粒子多量。褐色土塊多量。よく縮まる。
- 2 黒褐色土 褐色・灰白色粒子多量。砂礫若干。褐色粘性土やや多く含む。
- P 16
- 1 暗褐色土 小礫わずか。褐色、灰白色粒子点在。褐色土粒若干。縮まっている。
- 2 暗褐色土 褐色・灰白色粒子多量。褐色土粒多量。縮まりあり。

第276図 C267号住居跡(3)

第3章 遺 構



第277図 C267号住居跡炉

C270号住居跡 (第278~280・551・552図 PL. 48・49・198・285)

位置 Ck-1-39・40 **形状** 隅丸長方形 **規模** 長辺6.82m、短辺5.84m、壁高0.36m

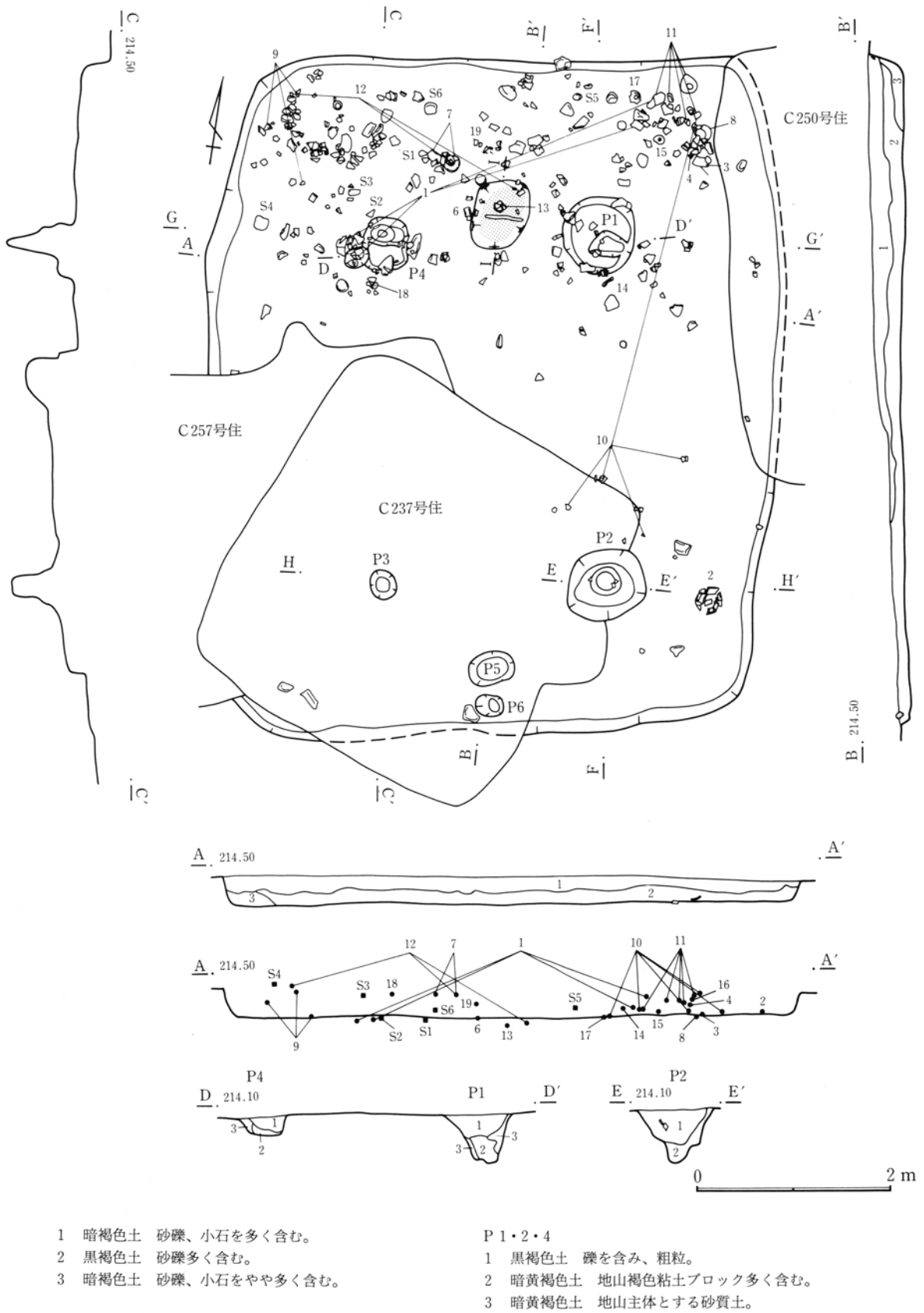
重複 南西部分にC237号住居跡(平安時代)、C257号住居跡(古墳時代)が重複、さらに北東隅をわずかに、C250号住居跡(平安時代)が切っている。 **埋没土** 砂礫を多く混入する砂礫土で埋まる。

床面 わずかに凹凸が見られるものの比較的平坦で、炉の周辺部分を中心に締まっている。

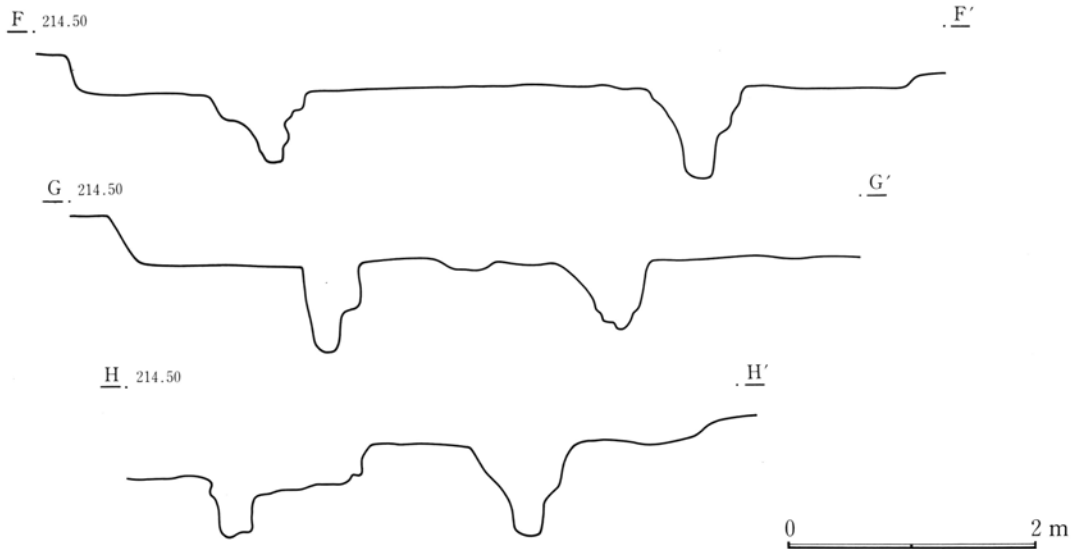
貯蔵穴 検出されなかった。 **柱穴** ほぼ対角線上に4本を検出した。重複により上部を削られたP3以外は、2段の掘り込みを持つ。 **炉** 中央北寄り、北側の柱穴間に作られる。長径約70cmの浅い掘り込みのほぼ中央に、長さ40cmの板状の砂岩が横に立てるように据えられ、その北側から小型甕13が出土している。

出土遺物 住居の北側に集中するように壺、甕類を中心に出土している。

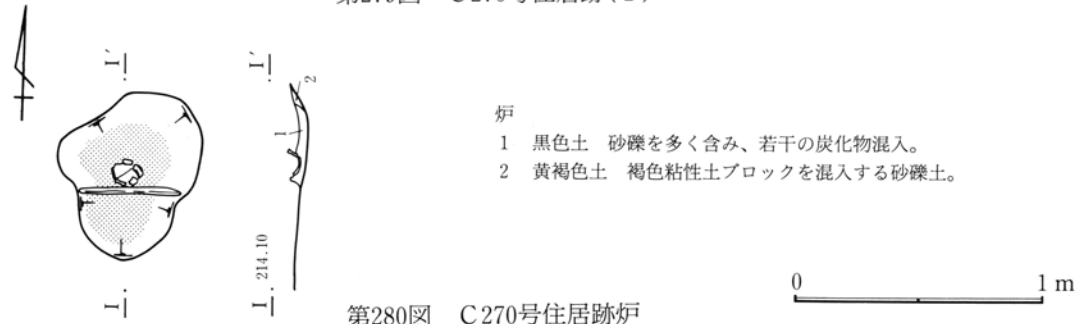
調査所見 南側、及び東壁部分は重複により遺存状態が悪いが、その他の壁は比較的良く残っている。4本柱の隅丸正方形を呈す住居である。出土土器も比較的状態の良いものが多かった。



第278図 C270号住居跡(1)



第279図 C270号住居跡(2)



第280図 C270号住居跡炉

炉

- 1 黒色土 砂礫を多く含み、若干の炭化物混入。
- 2 黄褐色土 褐色粘性土ブロックを混入する砂礫土。

C275号住居跡 (第281・282・553～555図 PL. 49・199・200・285)

位置 Co・p-41 形状 隅丸方形 規模 長辺5.14m、短辺4.91m、壁高0.37m

重複 なし。 埋没土 礫を多く含み、下層には粘性土粒が混入する。

床面 地山の礫層が露出し、やや凹凸が見られる。全体にかなり硬質である。

貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 対角線上に4本を検出。径はいずれも約50cm、底径はやや小さく、深さは30～60cmである。

炉 中央北よりに作られる。長さ70cm、幅50cm、深さ5cm程の掘り込みの中央に長さ22cmの角柱状の砂岩が据えられている。焼土はわずかに認められたに過ぎない。

出土遺物 比較的大型の破片類が見られたが、南側に集中して検出されている。床面直上からのものが多い。

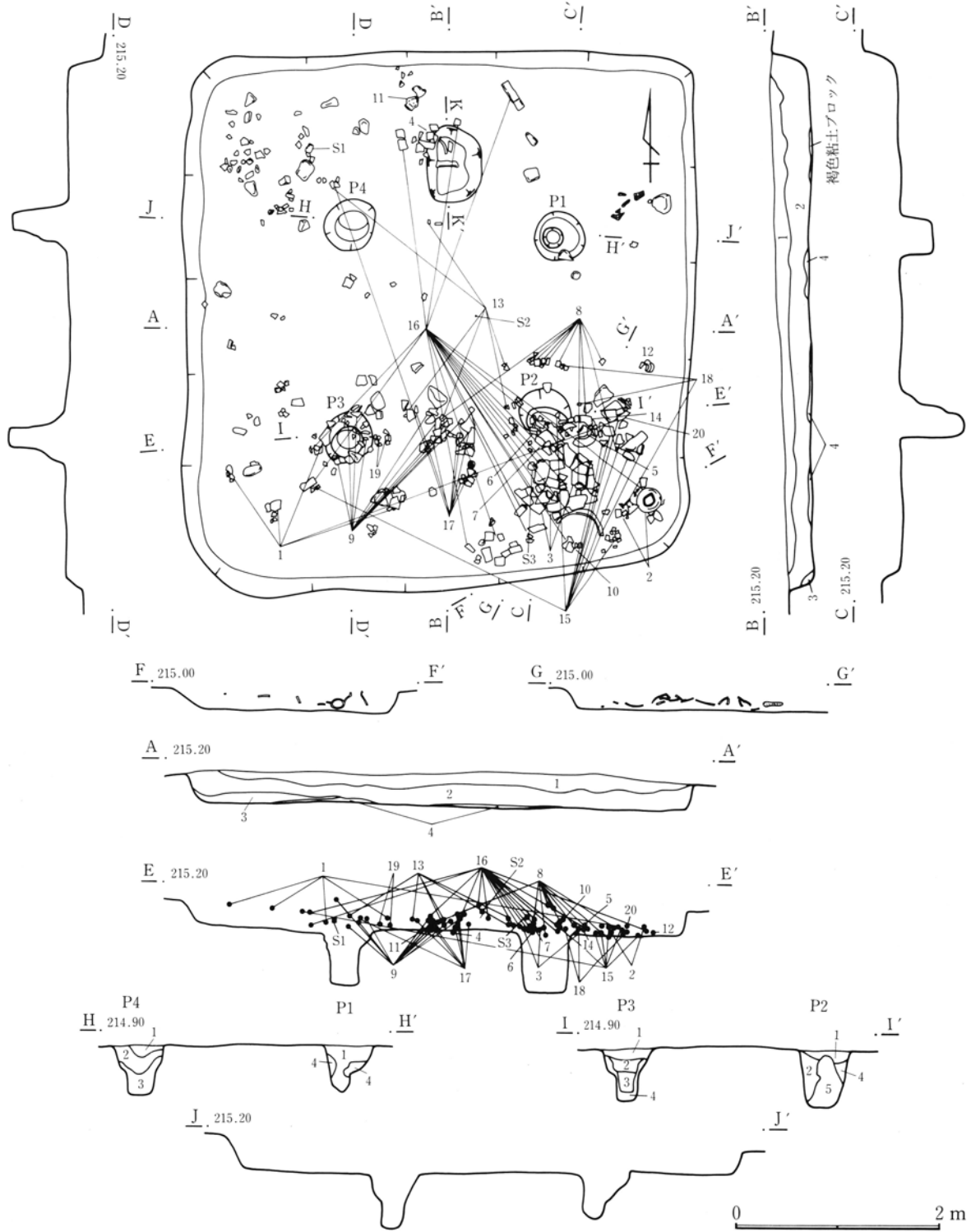
調査所見 重複のない数少ない住居である。隅丸正方形で、各壁の立ち上がりはやや斜めのところもあるが比較的しっかりとしている。遺物の出土場所には偏りが見られ、住居南側にほとんどが集中し、炉周辺に若干検出されている。

C277号住居跡 (第283・556図 PL. 49・197・285)

位置 Cm・n-42 形状 隅丸長方形 規模 長辺5.77m、短辺不明、壁高0.37m

重複 東側半分をC256号住居跡(古墳時代)に切られている。

埋没土 礫、特に地山を構成する黄色土粒が多く含まれる。



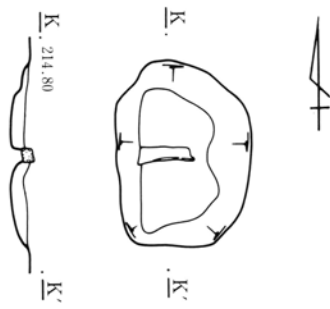
- 1 黒褐色土 大小の礫を含み。褐色・灰白色粒子多量。褐色土粒やや多。
- 2 黒褐色土 小礫点在。褐色、灰白色粒子やや多。褐色土粒点在し、所どころに集中。締まりはない。
- 3 暗褐色土 砂礫多量。褐色粘性土粒多く混入。
- 4 褐色土 砂利層大部分。床面。

P 1 ~ 4

- 1 暗褐色土 砂礫、小石をやや多く含む。
- 2 黒褐色土 砂礫、小石を少量、黄褐色粒子少量含む。炭化材を処々に含む。
- 3 暗褐色土 黄色粒子を少量含む。
- 4 黄褐色土 粘質。砂礫、小石を少量含む。
- 5 黄褐色土 やや砂質。砂礫、少量含む。

第281図 C275号住居跡

第3章 遺 構

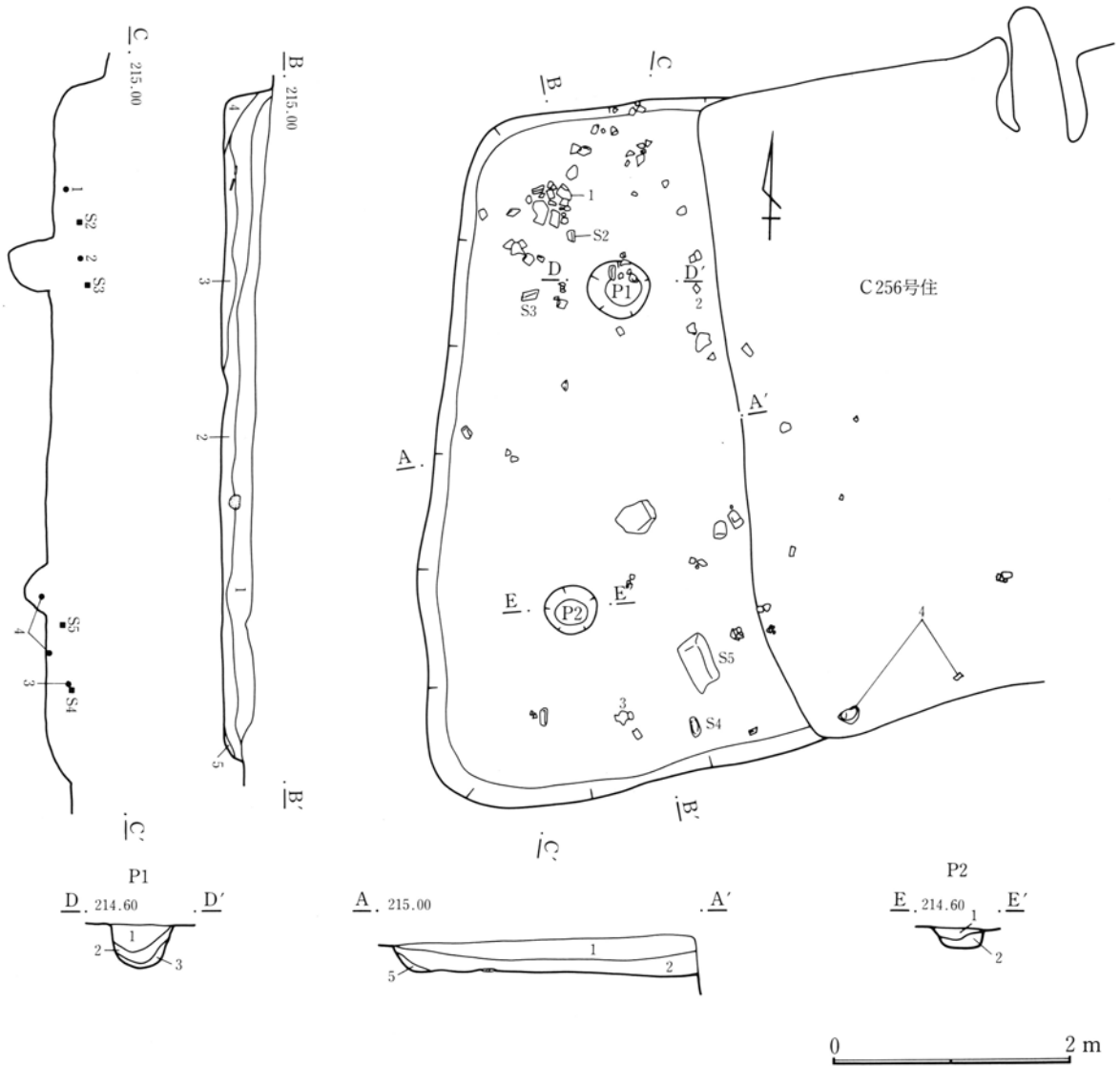


炉

1 黒褐色土 砂質地山土の崩壊土をやや多く含み、炭化材、砂礫を少量含む。

0 1 m

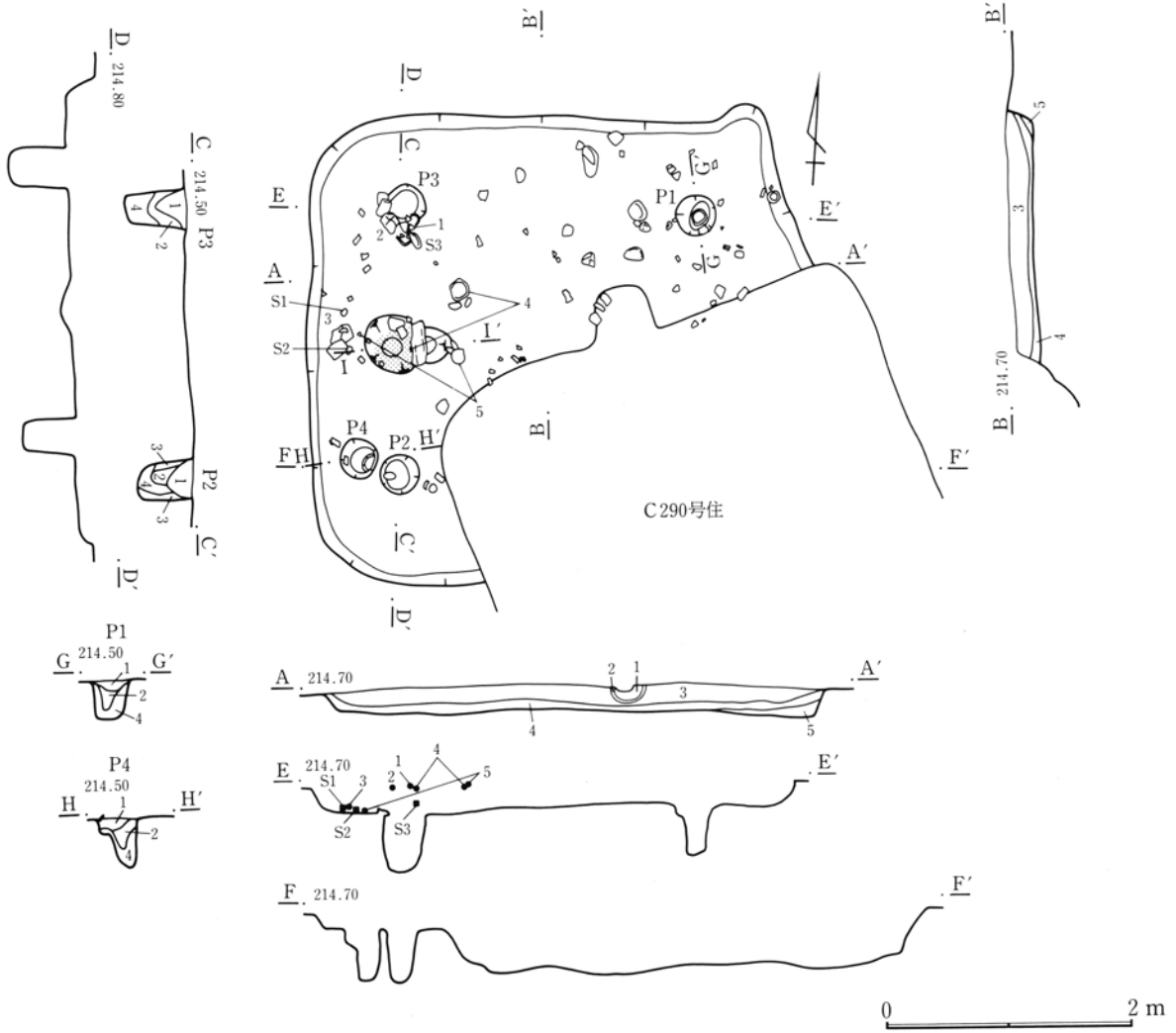
第282図 C275号住居跡炉



- 1 黒褐色土 礫を多量に含み、粗粒。
- 2 黒褐色土 砂礫を多く含み、地山黄色粒子の混入目立つ。
- 3 黒褐色土 2に似るが、礫の混入やや少なくなる。
- 4 褐色土 地山黄色砂粒を多く含む。
- 5 黄褐色土 地山の崩落土。

- P1・2
- 1 暗褐色土 黄褐色粒子、砂礫をやや多く含む。
- 2 黒褐色土 砂礫、小石を少量含む。
- 3 黄褐色土 砂礫、小石を少量含む。

第283図 C277号住居跡

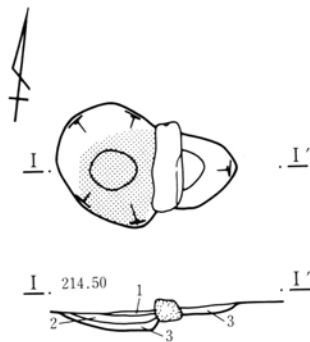


- 1 黒褐色土 黄色砂粒多く含む。290号住煙道。
- 2 暗赤褐色土 黄色砂粒、若干の焼土含む。
- 3 黒褐色土 礫、若干の褐色粘性土ブロック混入。
- 4 黒褐色土 礫を含む。
- 5 黄褐色土 地山黄色砂礫を多く混入。

P 1 ~ 4

- 1 暗褐色土 軟質。砂礫をやや多く含む。
- 2 黒褐色土 砂礫、黄褐色粒子を多く含み、黄色味がかった色調を呈す。
- 3 黄褐色土 やや砂質。黄褐色粒子を多量に含む。
- 4 暗黄褐色土 砂質で黄褐色粒子を多く含む。

第284図 C297号住居跡



炉

- 1 暗褐色土 やや粘性強い。砂礫をやや多く含む。
- 2 赤褐色土 焼土。砂礫、灰を少量、炭化材を微量含む。
- 3 茶褐色土 砂礫、同大の黄褐色粒子をやや多く含む。

第285図 C297号住居跡炉

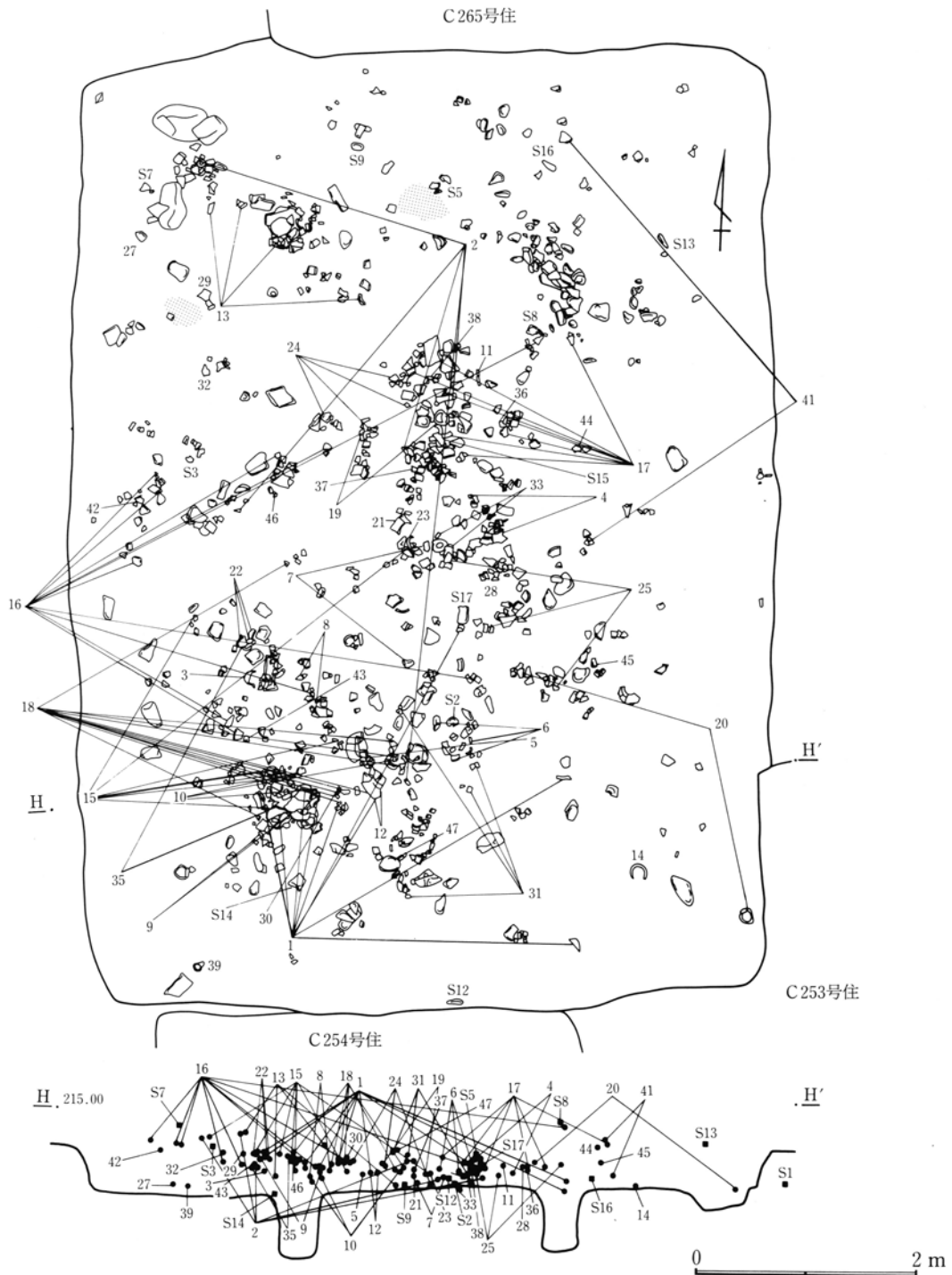
第3章 遺 構

床面 緩やかな凹凸が見られ、締めりはあまりなかった。 貯蔵穴 検出されなかった。

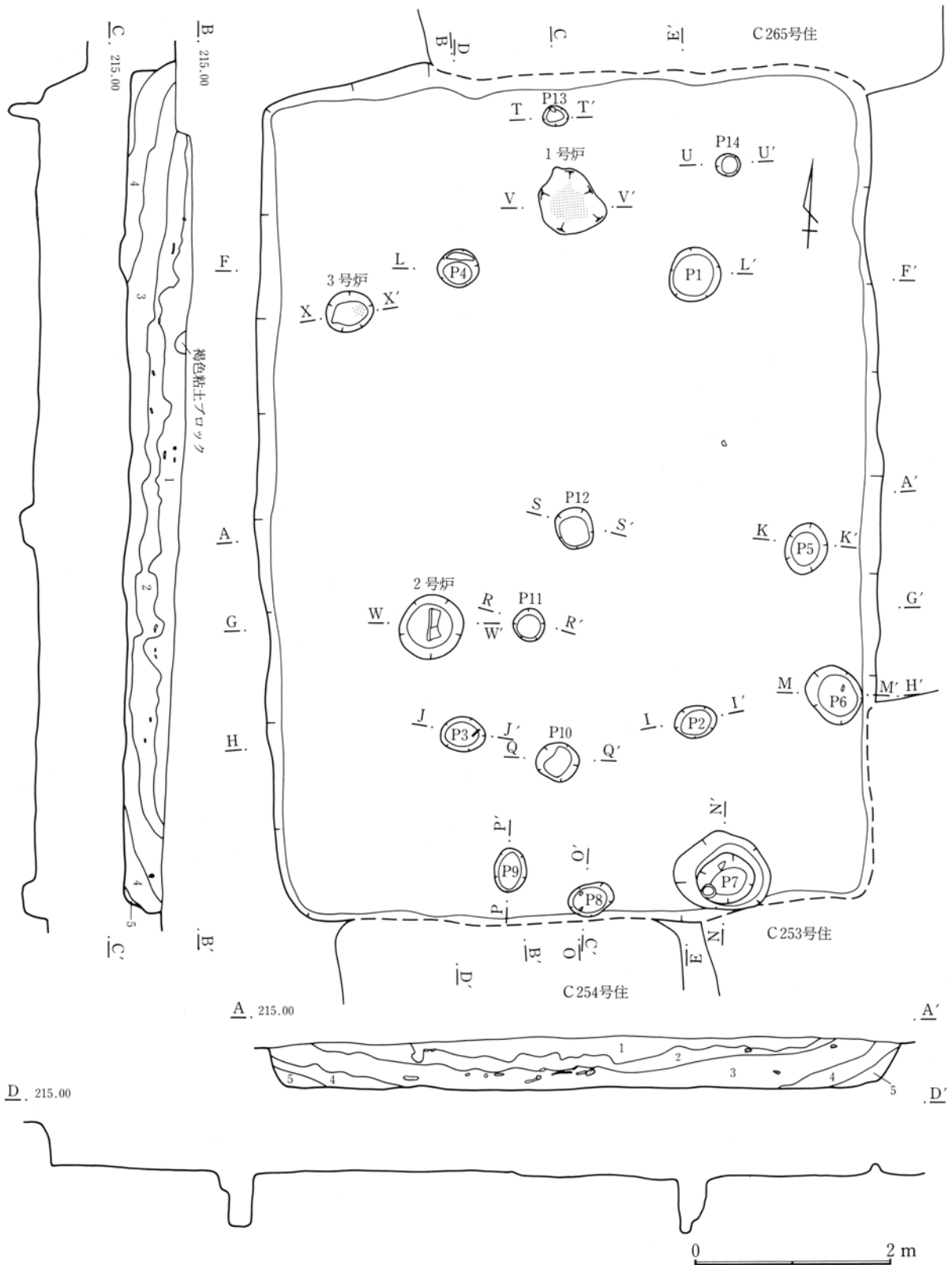
柱穴 西側列の2本を検出、東側については重複により削られている。 炉 検出されなかった。

出土遺物 土器の点数は少ない。P 1の北西に1が潰れた状態で、また3が南壁近くで横倒しに出土している。また、作業台と思われる大きな扁平の礫が、床に置かれた状態で住居南寄り出土している。

調査所見 東側を大きく削られており、検出できたのは全体の2分の1程である。長方形の住居であるが南西隅が攪乱のためか、形状がはっきりしなかった。



第286図 C 300号住居跡(1)

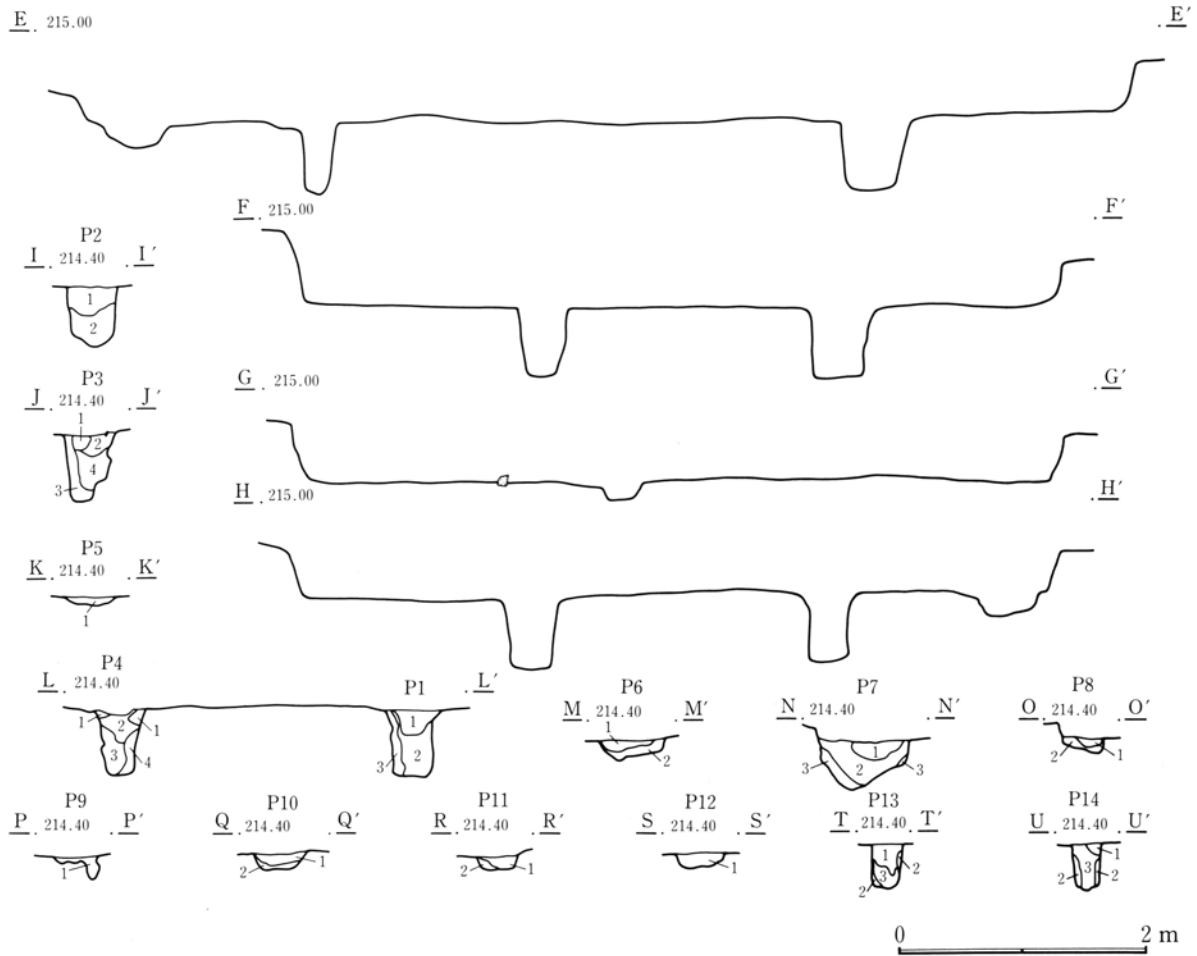


- 1 黒褐色土 小礫、褐色、灰白色粒子多量。褐色土粒や
や多い。全体に硬く締まる。
- 2 黒褐色土 小礫やや多い。褐色・灰白色粒子点在。褐
色土粒若干混入。
- 3 暗褐色土 褐色粘性土混入。小礫やや多。

- 4 黒褐色土 2よりも濃色。小礫やや多い。褐色・灰白
色粒子多く点在。
- 5 褐色土 褐色粘性土塊・土粒多量に含まれ、黒褐色土
とまだら状を呈す。

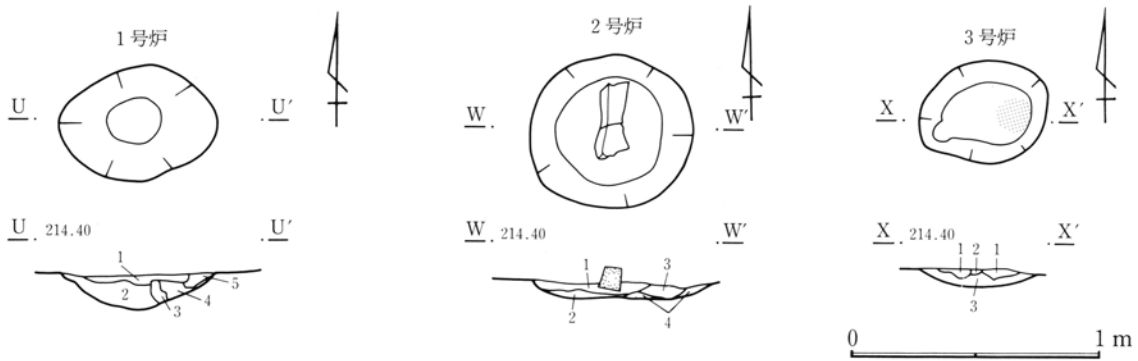
第287図 C300号住居跡(2)

第3章 遺 構



- | | |
|--|--|
| <p>P 1</p> <p>1 黒褐色土 砂粒、黄色粒子含む。</p> <p>2 暗褐色土 砂粒、黄色粒子、若干の粘土を混入。</p> <p>3 暗褐色土 黄色砂粒、粘土ブロック多く含む。</p> <p>P 2</p> <p>1 暗褐色土 小礫やや多い。褐色土粒多量。</p> <p>2 暗褐色土 褐色土粒多量。砂利若干。</p> <p>P 3</p> <p>1 淡褐色土 砂粒含む粘土ブロック。</p> <p>2 黒褐色土 小砂礫を含む。</p> <p>3 黒褐色土 砂礫、地山黄褐色砂粒を含む。</p> <p>4 黒褐色土 地山黄褐色粒を多量に含む他、粘土ブロックの混入あり。</p> <p>P 4</p> <p>1 淡褐色土 褐色粘土を含む。</p> <p>2 暗褐色土 砂礫、黄色粒子多く含む。</p> <p>3 淡褐色土 砂礫、黄色粒子多く含む。2より粘土の混入多い。</p> <p>4 淡褐色土 粘土主体とし、若干の砂粒含む。</p> <p>P 5</p> <p>1 黒褐色土 小礫多量。褐色・灰白色粒子多量。</p> <p>P 6</p> <p>1 黒褐色土 小礫多量。褐色土粒多量に含む。</p> <p>2 暗褐色土 小礫、褐色・灰白色ローム土やや多い。</p> <p>P 7</p> <p>1 黒褐色土 小礫若干、褐色・灰白色粒子点在。</p> | <p>2 黒褐色土 小礫点在。褐色土粒やや多い。</p> <p>3 暗褐色土 小礫、褐色土粒多量。</p> <p>P 8</p> <p>1 黒褐色土 小礫やや多い。褐色・灰白色粒子やや多い。</p> <p>2 黒褐色土 小礫点在。褐色土粒、土塊若干。</p> <p>P 9</p> <p>1 黒褐色土 砂利、小礫点在。褐色粘性土粒やや多い。灰白色粒子若干。</p> <p>P 10</p> <p>1 黒褐色土 小礫やや多く混入。褐色土粒やや多い。</p> <p>2 暗褐色土 小礫若干。褐色粘性土やや多い。</p> <p>P 11</p> <p>1 黒褐色土 砂粒、若干の褐色粘性土ブロック混入。</p> <p>2 暗褐色土 砂粒を多く含む、褐色粘性土ブロック混入。</p> <p>P 12</p> <p>1 暗褐色土 砂粒を多く含む。</p> <p>P 13</p> <p>1 黒褐色土 砂礫、黄色粒子含む。</p> <p>2 黒褐色土 砂粒、粘土ブロック含む。</p> <p>3 黒褐色土 砂粒、粘土ブロック含む。</p> <p>P 14</p> <p>1 黄褐色粘質土塊</p> <p>2 黄褐色土 やや粘質。砂礫をやや多く含む。暗褐色土塊を少量含む。</p> <p>3 黒褐色土 砂礫、小石、黄褐色粒子を少量含む。</p> |
|--|--|

第288図 C300号住居跡(3)



- 1号炉
- 1 赤褐色土 やや粘質。砂礫を少量含む。
 - 2 暗黄褐色土 粘質で、砂礫を含む。炭化材を微量含む。
 - 3 暗褐色土 粘性弱く、粒子の多い土のブロック、砂礫を含む。
 - 4 暗褐色土 粘質。やや黒味がかかった色調を呈し、砂礫を微量含む。
 - 5 黒褐色土 砂礫を少量含む。粘性は弱い。
- 2号炉
- 1 暗褐色土 砂礫、黄褐色粒子を少量含む。焼土を微量含む。
 - 2 黄褐色砂質土 砂質地山の崩土。
 - 3 黄褐色土 砂礫を少量含む。暗褐色土ブロックを微量含む。
 - 4 黄褐色粘質土 微砂礫を少量含む。
- 3号炉
- 1 明褐色土 小礫若干。焼土主体。
 - 2 暗褐色土 小礫わずか。明褐色焼土塊混入。
 - 3 褐色土 黄褐色砂利塊、黒褐色土塊若干混入。明褐色土粒若干混入。

第289図 C300号住居跡炉

C297号住居跡 (第284・285・557図 PL. 49・50・200・286)

位置 Co-37・38 形状 隅丸方形 規模 長辺4.00m、短辺3.72m、壁高0.23m

重複 C290号住居跡 (古墳時代) に南東部分を切られている。

埋没土 小礫、褐色、黄褐色の粒子が多く含まれる。 床面 平坦で、全体に礫混じりの土で硬く締まる。

貯蔵穴 明確なものは検出されなかった。

柱穴 4本柱穴と思われるが、南東部分については削られている。径30cmで深さは30~50cm、ほぼ垂直に掘り込まれる。

炉 住居の西よりP2と3の間に作られる。長さ36cm、幅13cmの河原石が据えられ、西および、東側がやや低くなっている。焼土は炉石の西側に検出され、炭化材の混入も見られた。

出土遺物 炉の周辺部分で見られたが少ない。

調査所見 主軸を東西に持つかなり小型の住居である。重複で削られた部分以外は遺存状態も比較的良好である。据えられた炉石は大型で、しっかりと据えられている。

C300号住居跡 (第286~289・558~560図 PL. 50・201・202・286)

位置 Co-p-39・40 形状 隅丸長方形 規模 長辺8.48m、短辺6.32m、壁高0.73m

重複 北壁部分にC265号住居跡 (奈良時代) が、南東隅部分にはC253号住居跡 (平安時代) が、南壁中央にはC254号住居跡 (古墳時代) がわずかに重複するが、いずれも壁上部の削平にとどまっている。

埋没土 礫、褐色、灰白色粒子多量に含む。 床面 凹凸があるものの、かなり締まった状態でしっかりとしている。 貯蔵穴 南壁のやや東寄りに作られている。径1m弱で、深さ約40cmである。

柱穴 支柱穴はP1~4の4本と思われるが、中央南北方向にP8、P12、P13がそれぞれ南壁、中央、北壁にあり棟持ち柱と思われる。

炉 3カ所検出されている。

第3章 遺 構

- 1号炉 中央北寄りに作られる。長円形の掘り込みを有す地床炉である。上層部に若干の焼土、炭化物が見られる。
- 2号炉 ほぼ中央西寄りに作られる。円形の浅い掘り込みの中央に長さ約30cmの中央がやや細くなった角柱状の砂岩が据えられている。焼土は少ない。
- 3号炉 住居北側の西壁に寄った所に作られる。長円形の浅い掘り込みの東部分にブロック状の焼土が検出されている。

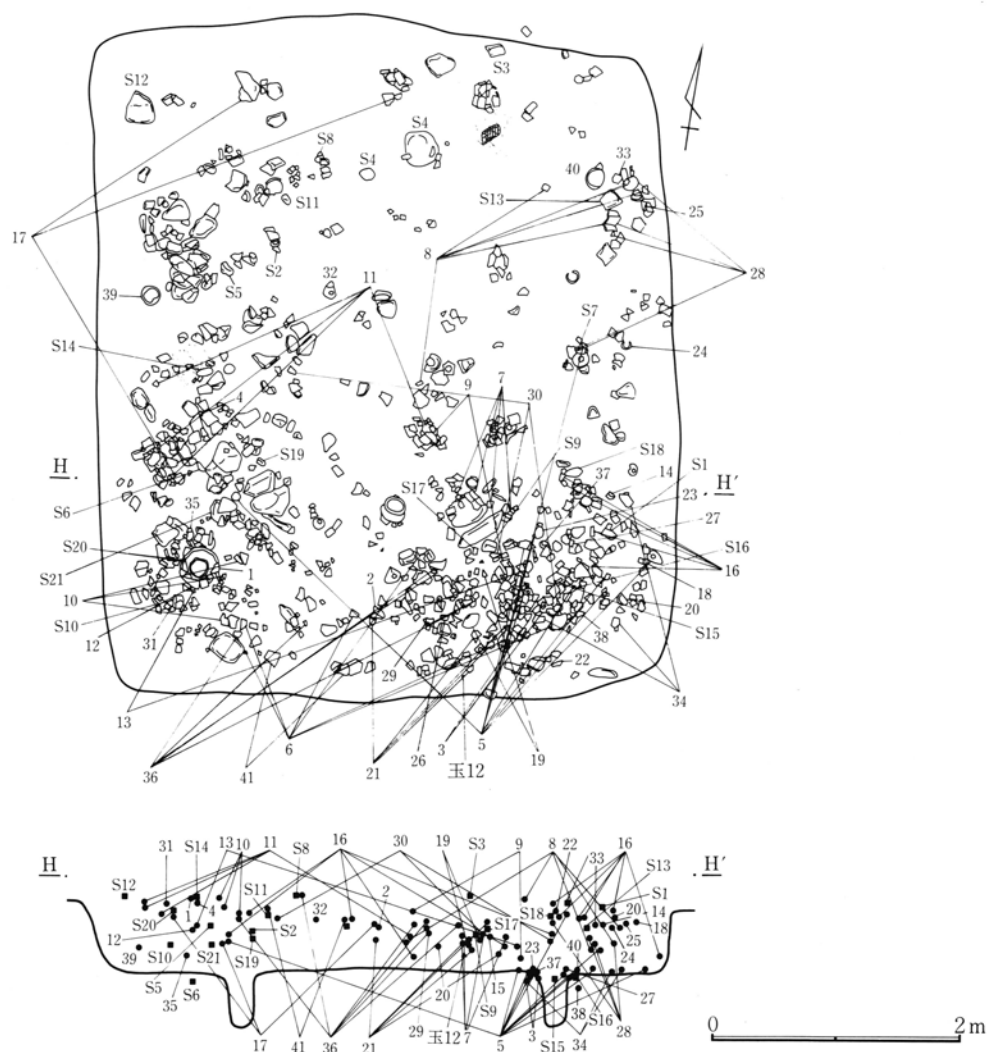
出土遺物 かなり多量の壺、甕、高坏、鉢、およびミニチュア土器等が見られるが、出土位置的にはやや床面より浮いた状態でのものが多かった。

調査所見 長辺が約8.5mの比較的大型の住居で、各壁の立ち上がりもしっかりとしており、遺存状態はかなり良好であった。土器類は量的には多かったが完形品はほとんど見られなかった。

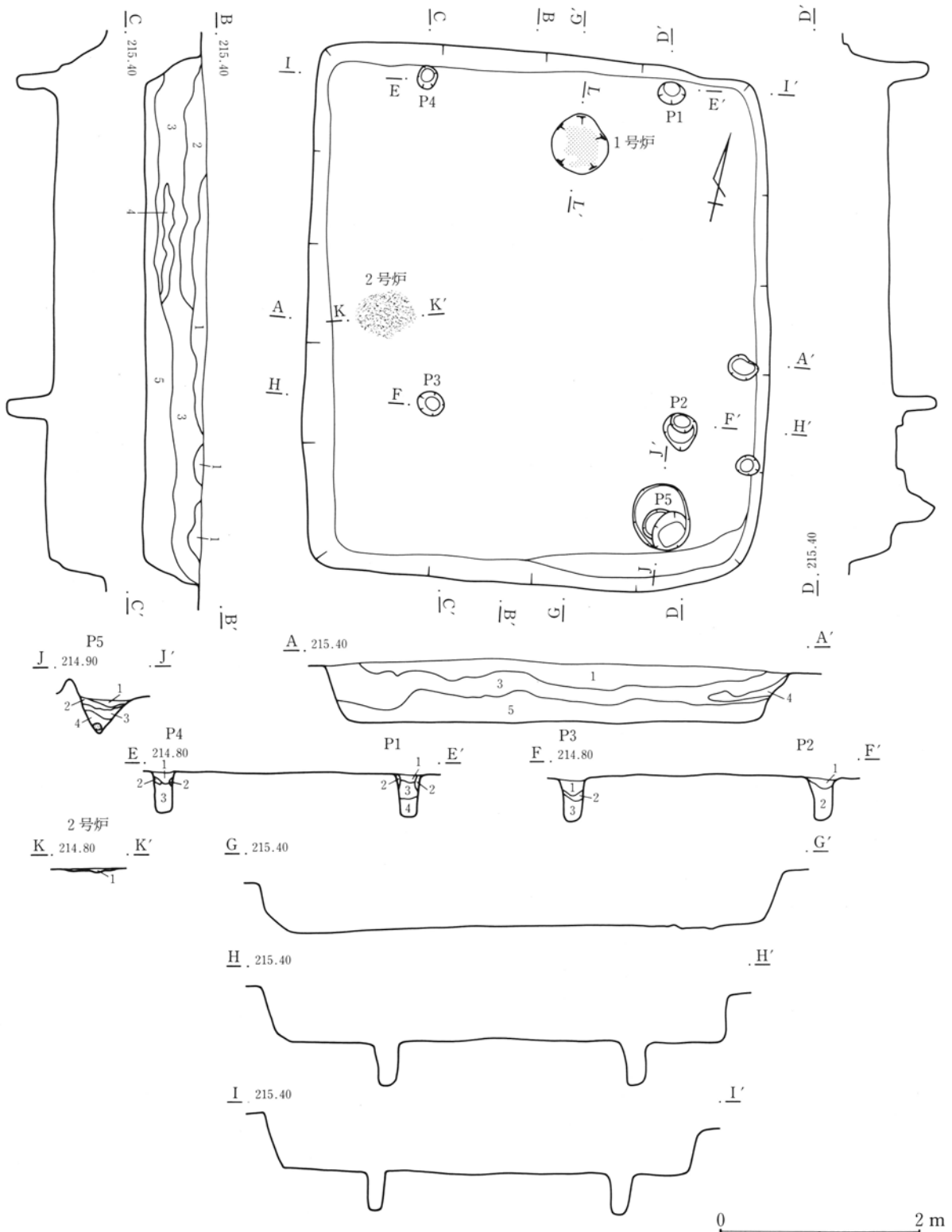
C 303号住居跡 (第290~292・561・562図 PL. 50・51・203・204・286・287)

位置 Cq-40・41 **形状** 隅丸長方形 **規模** 長辺5.27m、短辺4.62m、壁高0.63m

重複 本址を切る遺構は無い。 **埋没土** 小礫の混入多く、また所々に粘性土のブロックが見られる。



第290図 C 303号住居跡(1)



- | | | | |
|--------|-------------------------------------|--------|--------------------------------------|
| 1 黒褐色土 | 小礫多量に含む。褐色・灰白色粒子多量。 | 4 褐色土 | 小礫、褐色粘性土多量。やや粘性のある土塊点在。黒褐色土とまだら状をなす。 |
| 2 暗褐色土 | 小礫多量に含む。灰白色・褐色粒子多量。褐色粘性土含む。 | 5 暗褐色土 | 褐色粘性土多量。暗褐色土塊点在。 |
| 3 黒褐色土 | 小礫やや多く点在。褐色粘性土粒所どころ混入。褐色・灰白色粒子やや多量。 | | |

第291図 C301号住居跡(2)

第3章 遺 構

P 1・4

- 1 黒褐色土 砂礫を多く含み、褐色粘性土若干混入。
- 2 黄褐色土 砂礫を多く含み、褐色粘性土をブロック状に混入。
- 3 暗褐色土 砂礫を多く含み、地山暗褐色粘土を混入。
- 4 暗褐色土 3に近似するが、褐色粘性土ブロック含む。

P 2

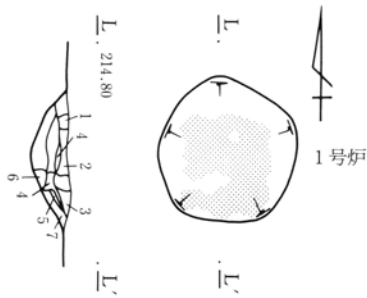
- 1 暗褐色土 礫を含む。少量の炭化物混入。
- 2 暗褐色土 礫を含む。褐色粘性土を少量含み、やや粘性あり。

P 3

- 1 暗褐色土 小礫を混入。
- 2 暗褐色土 小礫を混入。褐色粘性土若干含む。
- 3 暗褐色土 小礫を混入。褐色粘性土ブロック、粘土ブロック混入。

P 5

- 1 黒褐色土 礫、少量の炭化物混入。
- 2 暗黄褐色土 礫を若干含み、褐色粘性土をやや多く含む。
- 3 暗褐色土 砂粒含み、やや粘性あり。
- 4 暗褐色土 砂粒含み、やや粘性あり。若干の褐色粘性土含む。



1・2号炉

- 1 淡褐色土 褐色粘性土、焼土の混土ブロック。
- 2 黒褐色土 砂粒を含み、若干の炭化物混入。
- 3 赤褐色土 焼土塊。
- 4 赤褐色土 焼土化した粘土。やや発泡し、レンガ様となる。
- 5 赤褐色土 焼土。4に似るがやや粘性を示す。
- 6 淡褐色土 砂粒、褐色粘性土含む。
- 7 暗黄褐色土 地山粘土。

0 2 m

第292図 C301号住居跡炉

床面 平坦で、全体に良く踏みしめられている。 **貯蔵穴** 南東のコーナー近くに作られる。長径65cm、短径50cm程の大きさであるが、南部分が深く掘り込まれる。

柱穴 4本であるが、北側の2本は壁にほとんど接して掘り込まれている。

炉 2カ所検出した。

1号炉 中央の北寄りに作られる。円形の浅いレンズ状の掘り込みの上層部に煉瓦状に赤化した焼土が検出されている。

2号炉 中央西よりに、若干の焼土と炭化物の広がりが検出されている。

出土遺物 遺物はかなり多く、上層と下層にやや集中して検出されている。壺、甕、高坏、鉢、甑等が見られる。

調査所見 調査区内では珍しく、後世の遺構による削平が無く、遺存状態の良好な住居である。平面形状が方形に近く、柱穴のあり方もやや異質である。

C324号住居跡 (第293・294・563~565図 PL. 51・205・288・289)

位置 Ck・1・m-45~47 **形状** 隅丸長方形 **規模** 長辺9.62m、短辺7.43m、壁高0.77m

重複 北側にC302・306号住居跡(平安時代)およびC127号住居跡(古墳時代)が重複する。

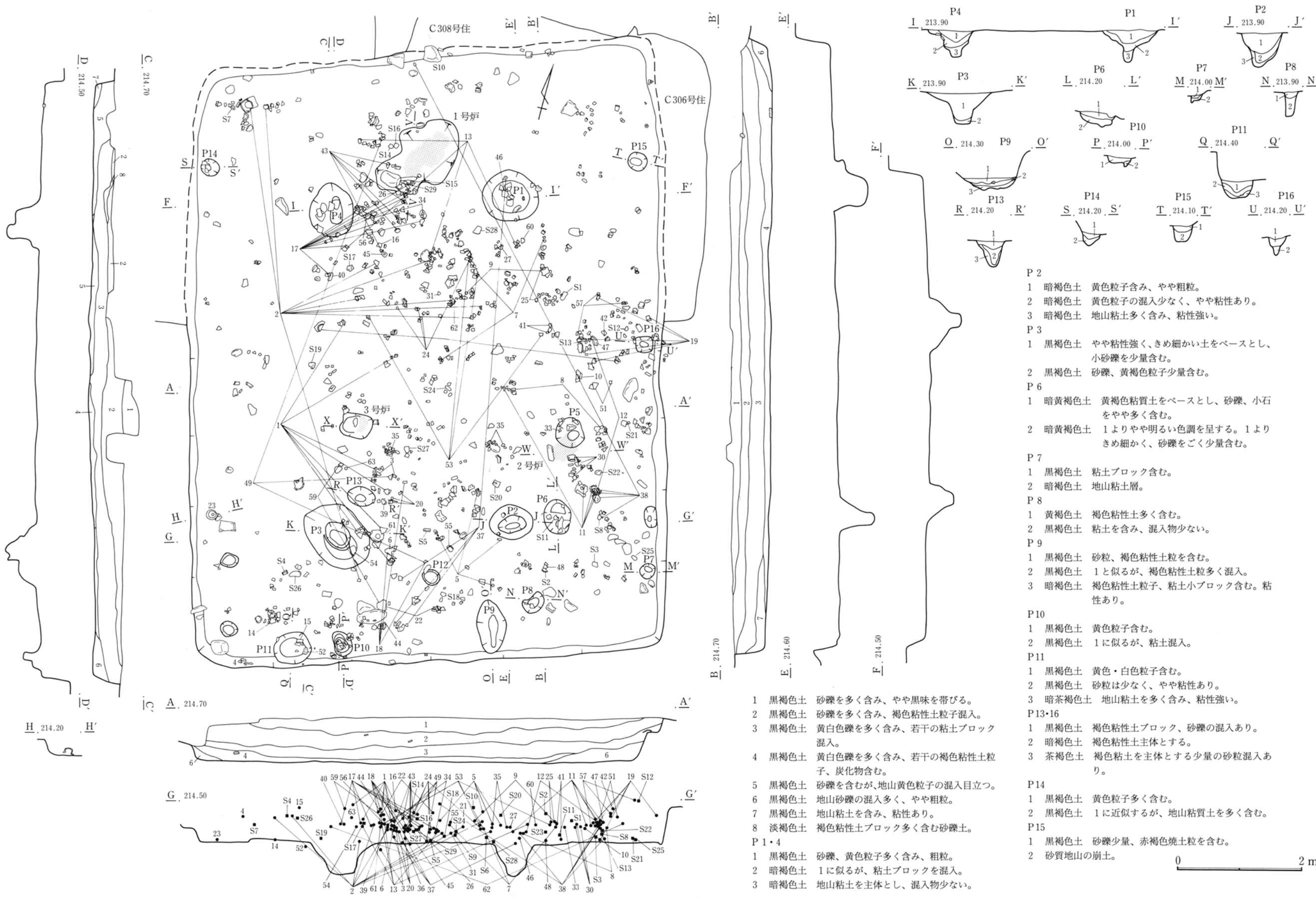
埋没土 砂礫の混入多く、黄褐色粘土ブロック混在する。下層には炭化材が多く見られる。

床面 全体に平坦で、中心部分は比較的締まりが良い。炭化材の広がりが見られる。

貯蔵穴 南壁のやや西寄りに検出された。壁に接して掘り込まれている。径約60cm、深さは30cmである。

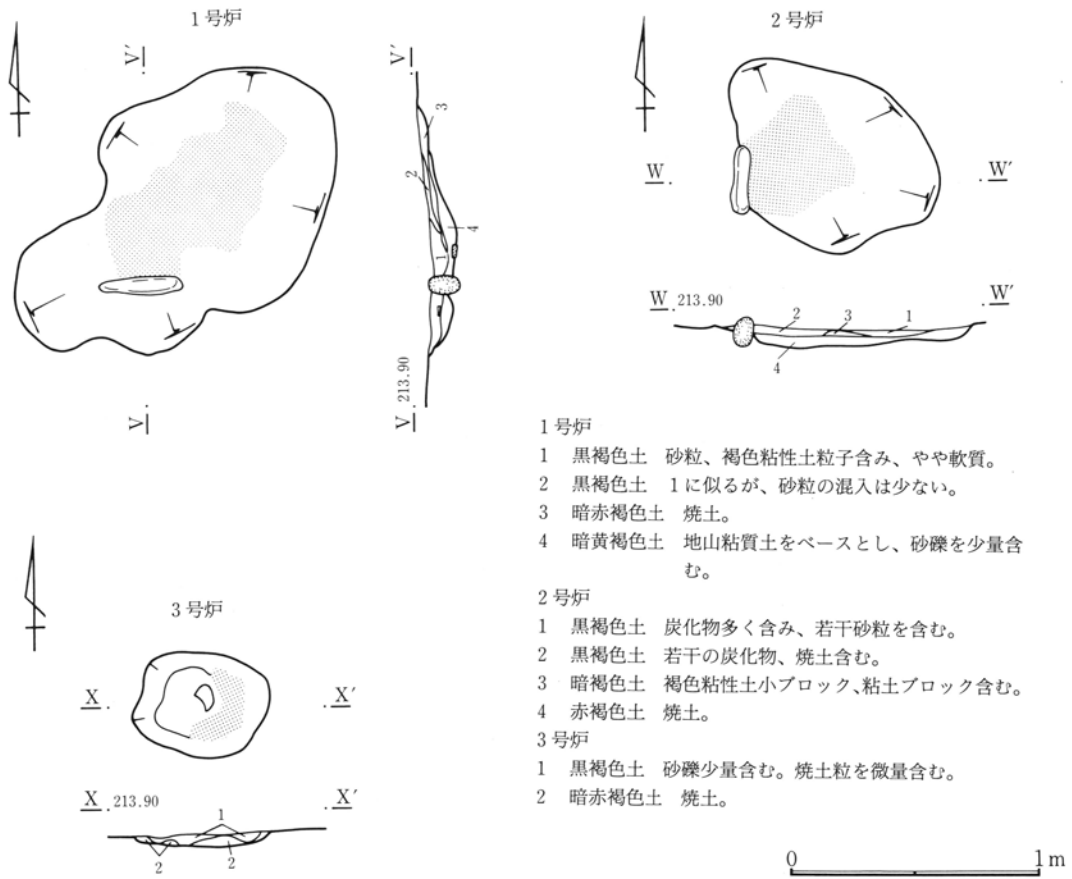
柱穴 主柱穴は4本である。いずれも上端径に比して底径が小さくなる。深さは50~60cmである。

炉 3カ所検出された。



第293図 C324号住居跡

0 2 m



第294図 C324号住居跡炉

- 1号炉 北よりのP 1 と 4 の間に作られる。床面に長さ33cmの細長い河原石が据えられた地床炉である。石の北側に不定型な落ち込みが見られ、焼土が検出されている。
- 2号炉 住居の東寄り、P 5 に接して作られている。浅い落ち込みの西端部分に、長さ27cmの細長い河原石が据えられ、東側には焼土が検出されている。P 5 に焼土が載っていることから、P 5 が埋められた後に作られていることがわかる。
- 3号炉 住居の西寄りに作られる。長円形の浅い掘り込みの東部分に弧状の焼土が見られる。なお、上面に長さ10cm程の河原石が出土したが、炉石ではないと判断される。

出土遺物 かなり上層より壺、甕、高坏、鉢等の破片類を中心に出土している。また紡錘車が1点見られる。

調査所見 本区において2番目の規模を持つ住居である。北側は住居の重複で壊されてはいるものの、全体的に遺存状態は良い。

C332号住居跡 (第295・566図 PL. 52・206・289)

位置 Ct-39 **形状** 隅丸長方形 **規模** 長辺(5.20)m、短辺4.44m、壁高0.46m

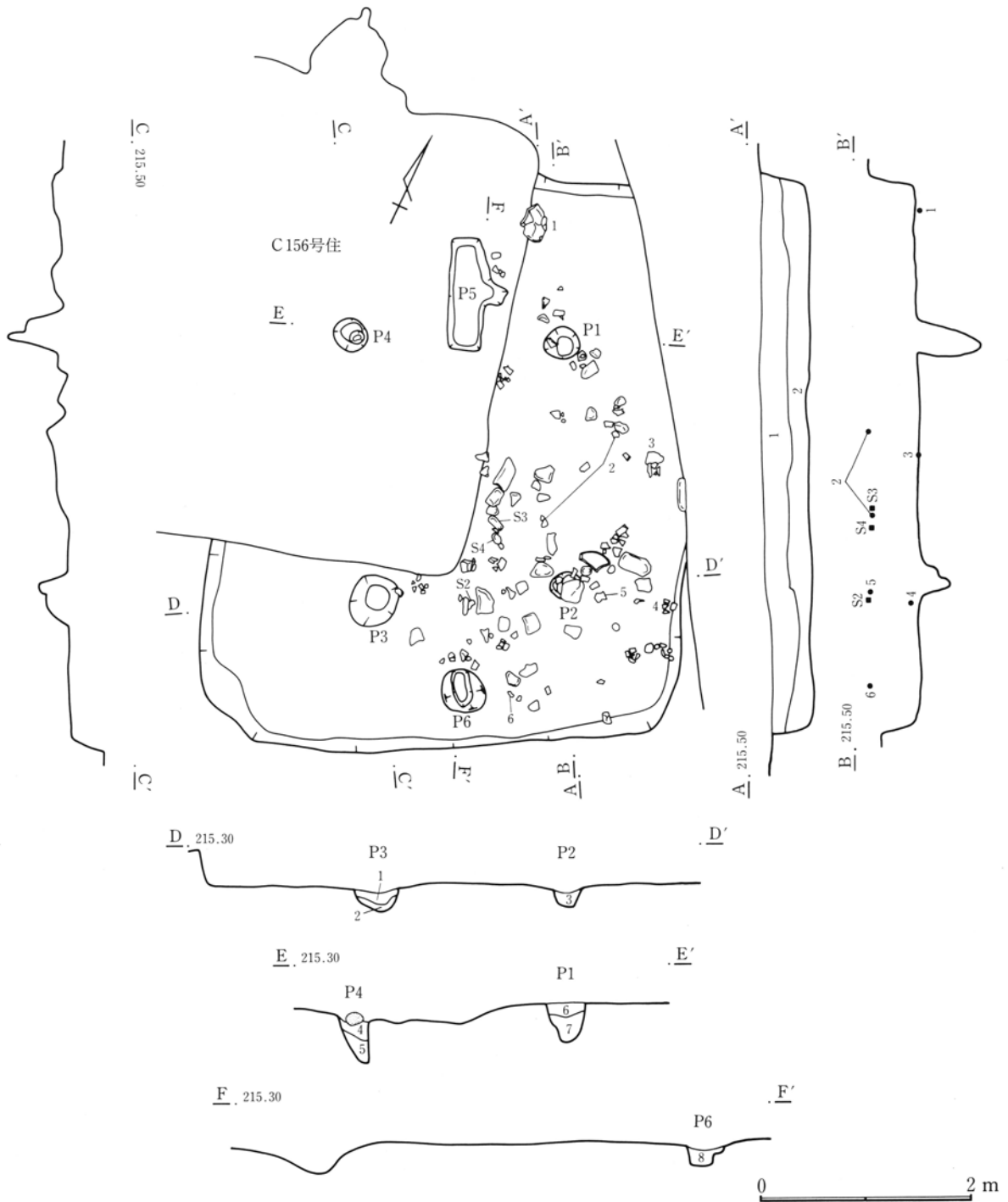
重複 調査区の東壁に一部掛かり、北西部分をC156号住居跡(奈良時代)によって切られる。

埋没土 礫を含み粘性土ブロック、砂粒の混入が多い。

床面 遺存部分はやや凹凸が見られるものの、中央部分は平坦で縮まりもある。

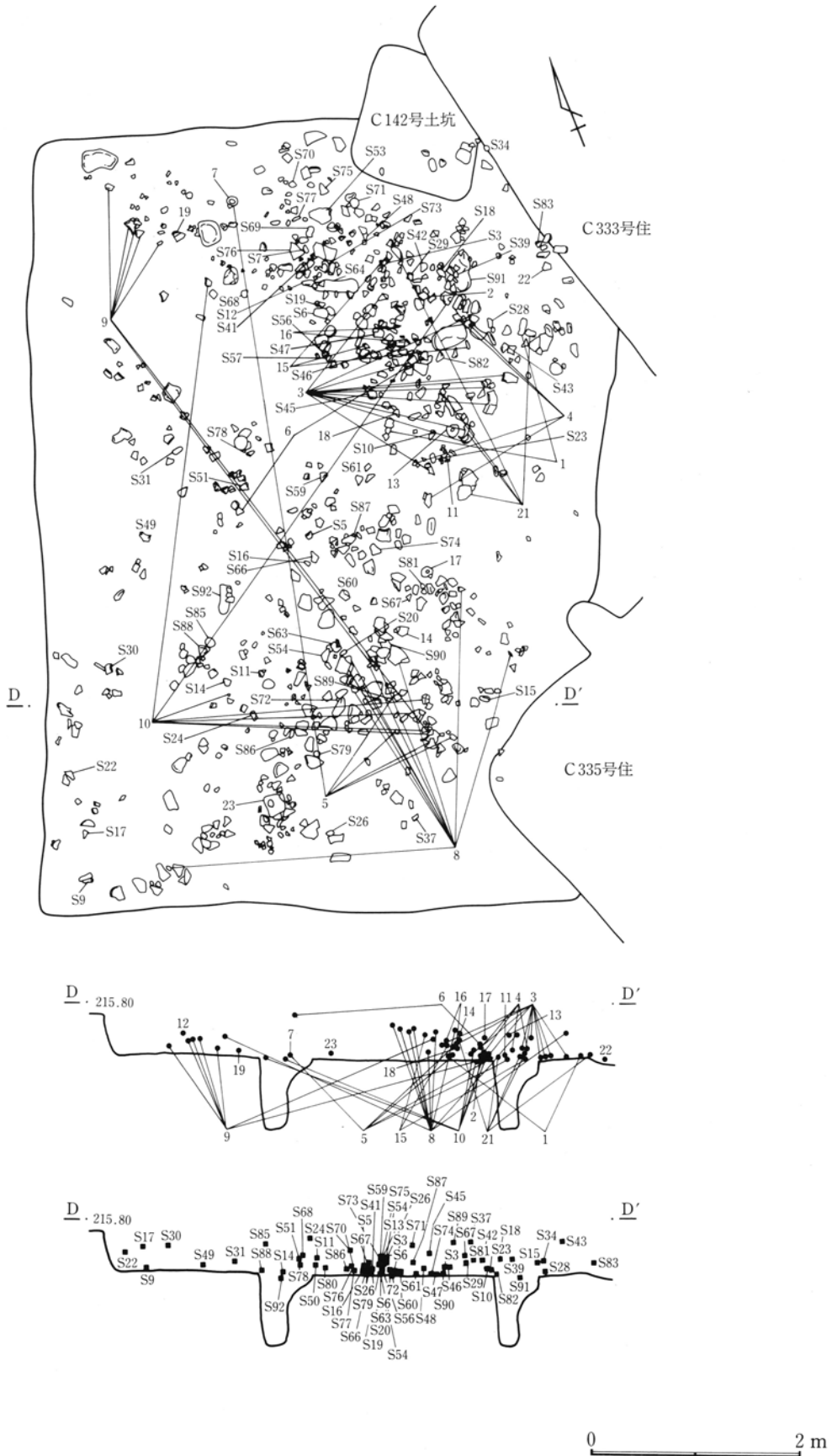
貯蔵穴 明確なものは検出されなかった。

柱穴 支柱穴4本を検出した。径は30~40cmであるが、掘り方はばらつきが見られる。

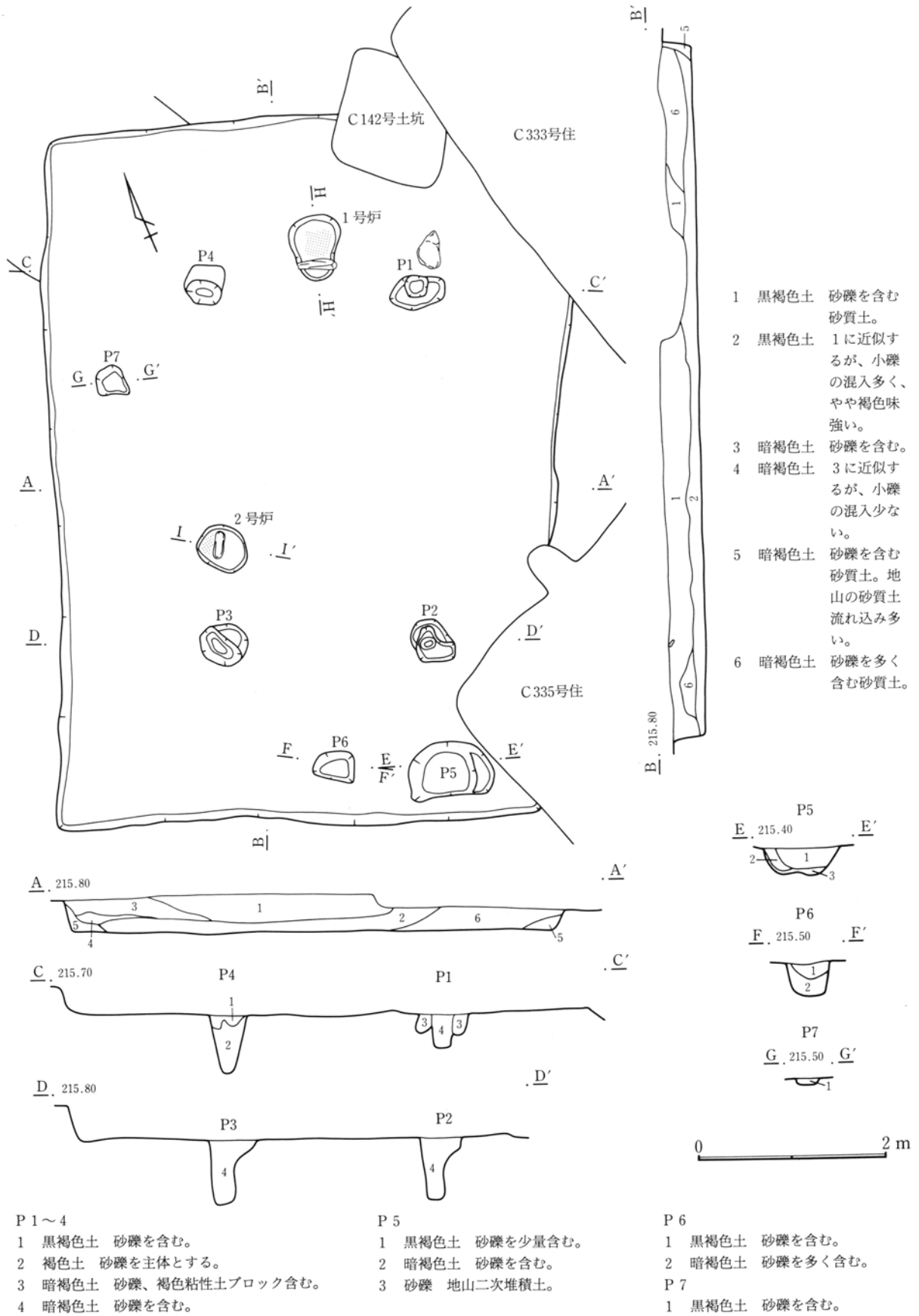


- | | | | |
|-----------|----------------------------------|--------|------------------------------------|
| 1 暗褐色土 | 砂粒、黒褐色土粒を含む。 | 4 暗褐色土 | 全体的に黒っぽい。褐色粘性土粒含む。 |
| 2 暗褐色土 | 全体に黄色味がる。褐色粘性土ブロック、粒子、砂粒をやや多く含む。 | 5 暗褐色土 | 褐色粘性土ブロック、粘質化したものを含み、全体に黄色味がかっている。 |
| P 1 ~ 4・6 | | | |
| 1 暗褐色土 | 褐色粘性土粒、炭化物をわずかに含む。小砂礫を若干含む。 | 6 暗褐色土 | 褐色粘性土粒少量、小砂礫をわずかに含む。 |
| 2 暗褐色土 | 上層よりも褐色粘性土粒多く、やや明るい。 | 7 暗褐色土 | やや黒っぽい。比較的大きな褐色粘性土ブロックを含む。小砂粒を含む。 |
| 3 暗褐色土 | 褐色粘性土ブロックをやや多く含む。 | 8 暗褐色土 | 粘質。粒子細かい。砂粒を含む。 |

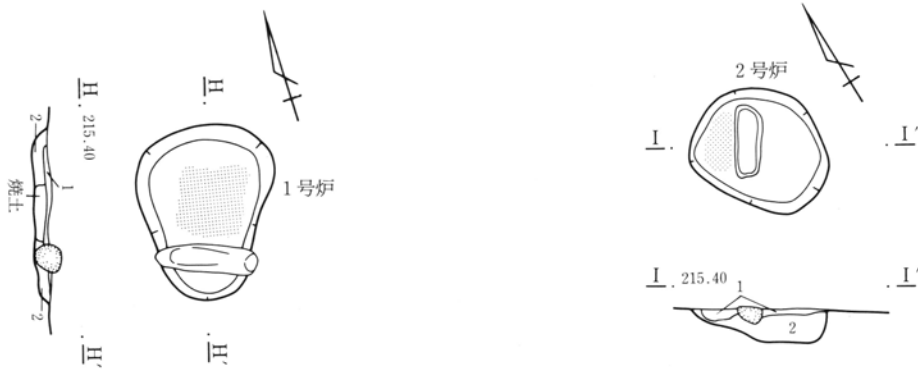
第295図 C332号住居跡



第296図 C 336号住居跡(1)



第297図 C336号住居跡(2)



1号炉

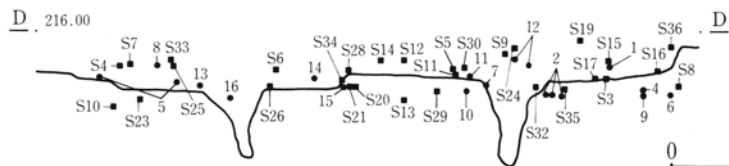
- 1 暗褐色土 砂礫を多く含む。焼土粒、炭化物は認められない。
- 2 褐色土 砂礫、地山の二次堆積土。

2号炉

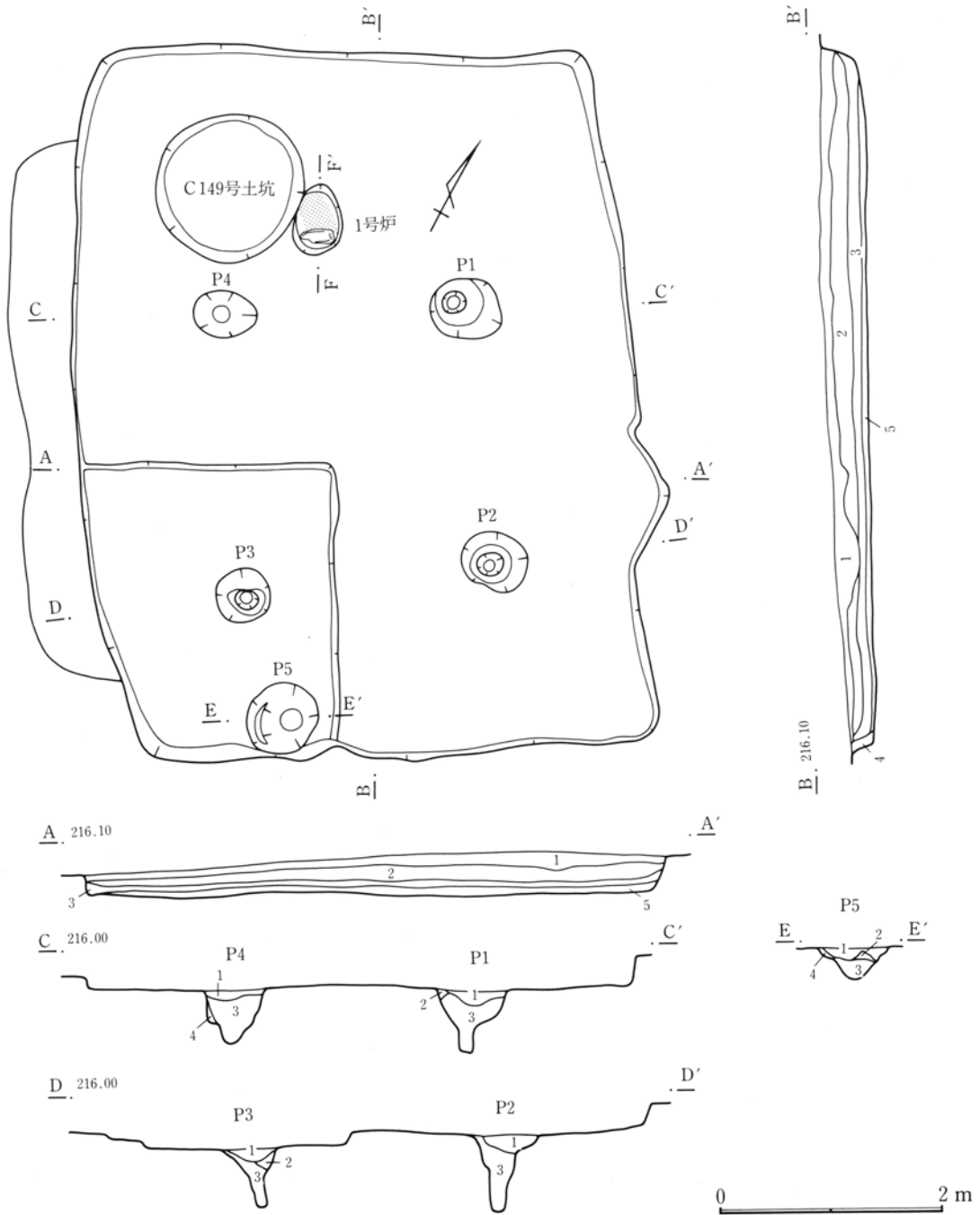
- 1 黒褐色土 砂礫を含む。焼土粒、炭化物なし。
- 2 砂礫 地山の二次堆積土。

0 1 m

第298図 C336号住居跡炉

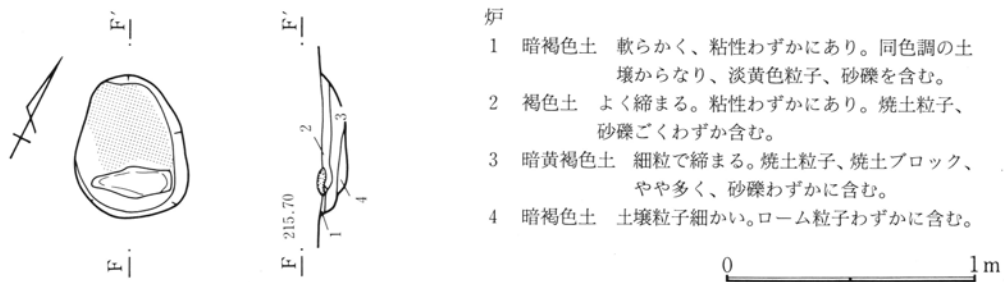


第299図 C338号住居跡(1)



- | | |
|--|--|
| 1 暗褐色土 締まり良い。淡褐色土ブロックわずか。 | 3 暗褐色土 やや締まり悪い。砂礫、暗黄褐色土粒子わずかに含む。 |
| 2 黒褐色土 やや軟らかく、締まりやや弱い。粒粗粒。 | 4 暗黄褐色土 もろい砂質土。くすんだ色調の暗黄褐色土粒子砂質を主体、砂礫わずかに含む。 |
| 3 暗褐色土 やや軟らかく、締まりやや弱い。土壤粒子細かい。砂礫わずかに含む。 | |
| 4 暗黄褐色土 軟質で締まり弱い。粒子やや粗く暗黄褐色土粒子主体とする。 | P 5 |
| 5 褐色土 締まり良い。砂礫やや多く、粘性の弱い褐色粘性土ブロックわずかに含む。 | 1 暗褐色土 やや硬く、ややよく締まる。砂礫わずかに含む。 |
| P 1~4 | 2 暗褐色土 よく締まる。1より、粒子粗く砂質の細かい淡黄褐色土ブロック、砂礫若干含む。 |
| 1 暗褐色土 やや締まり良い。砂礫やや多く含む。 | 3 黒褐色土 やや粘質。粒子細かい。砂礫、淡黄褐色土粒子、炭化物をごくわずかに含む。 |
| 2 暗褐色土 締まり良い。粘質の黄褐色土ブロックやや多く、砂礫ごくわずかに含む。 | 4 淡黄褐色土 やや砂質で硬い。砂礫をやや多く含む。 |

第300図 C 338号住居跡(2)



第301図 C338号住居跡炉

炉

- 1 暗褐色土 軟らかく、粘性わずかにあり。同色調の土壌からなり、淡黄色粒子、砂礫を含む。
- 2 褐色土 よく締まる。粘性わずかにあり。焼土粒子、砂礫ごくわずかに含む。
- 3 暗黄褐色土 細粒で締まる。焼土粒子、焼土ブロック、やや多く、砂礫わずかに含む。
- 4 暗褐色土 土壌粒子細かい。ローム粒子わずかに含む。

炉 重複により削られており、検出されなかった。

出土遺物 礫の出土が目立ち、土器類の点数は少ない。

調査所見 北西部分は重複により削られ、東側の一部は調査区外となる。また炉のあったと推定される部分には近世の耕作坑が掘り込まれている。

C336号住居跡 (第296~298・567・568図 PL. 52・206・289~293)

位置 Cr・s-44・45 形状 隅丸長方形 規模 長辺7.40m、短辺5.25m、壁高0.43m

重複 調査区の北寄りで検出された。南東隅にC335号住居跡(平安時代)が、北東隅にはC333号住居跡(奈良時代)が重複している。また、北壁に方形のC142号土坑(弥生時代)が重複するが、本址によって切られている。 埋没土 礫を多く含み、かなりの砂質である。

床面 概ね平坦で中央部分はかなり締まっているが、地山に含まれる礫の露出が顕著である。

貯蔵穴 南東隅に掘り込まれている。長径1mの長円形を呈し、深さは30cm程である。

柱穴 支柱穴は4本が検出されている。掘り方の不定型なものが見られる。深さはP1を除き、60~70cmとかなり深い。

炉 2カ所検出した。

1号炉 住居北側の柱穴間に作られる。長さ40cmの河原石が据えられた地床炉である。若干の掘り込みと焼土が検出されている。

2号炉 西より、P3の北側に作られている。浅い径50cm程の掘り込みの中央に長さ約30cmの砂岩が据えられている。石の西側でわずかに焼土が検出されている。

出土遺物 礫が多く含まれ、土器類に関してはあまり多くはなかった。遺物および礫は、やや東側に多く見られた。

調査所見 大型の住居である。若干壊されている部分もあるが、全体的には遺存状態は良かった。主軸方向が東に偏しており、周囲の住居と異なっている。

C338号住居跡 (第299~301・569図 PL. 52・53・204・294・295)

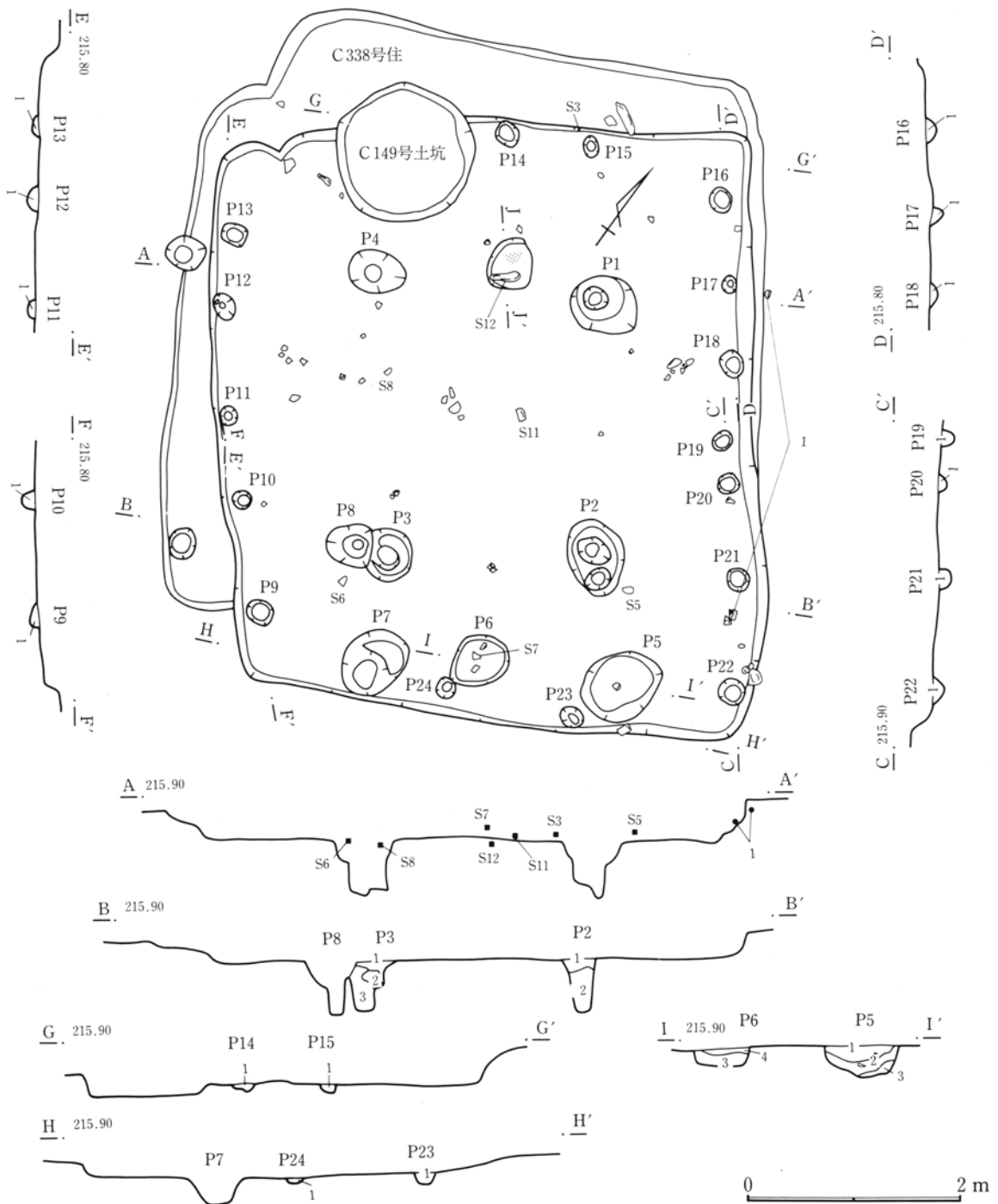
位置 Cs・t-49 形状 隅丸長方形 規模 長辺6.16m、短辺4.98m、壁高0.38m

重複 住居内の北西部分にC149号土坑(平安時代)が重複する。

埋没土 礫の混入多く、粗粒土で埋まる。 床面 凹凸顕著で、明確な使用面は不明瞭であった。

貯蔵穴 南西壁に接して掘り込まれる。径約60cm、深さは約30cmを測る。断面は丸底の逆円すい状を呈す。

柱穴 支柱穴4本を検出。径50~60cmで、深さは50~60cmである。いずれも中段から下が急激に細くなる。



P 2・3

- 1 淡褐色土 縮まり良い。暗黄褐色土ブロックわずかに混入、砂礫をわずかに含む。
- 2 明黄褐色土 縮まり良い。粘質の褐色粘性土ブロックを主体とし、砂礫をごくわずかに含む。
- 3 黄褐色土 黄褐色砂質粒子を主体とし、褐色粘性土ブロックわずか、砂礫やや多く含む。

P 5・6

- 1 褐色土 縮まり良い。砂礫わずかに含む。
- 2 暗褐色土 縮まり良い。砂礫、炭化物粒子少量含む。
- 3 黄褐色土 やや砂質の黄褐色土粒子の層（地山）。
- 4 淡褐色土 粒子粗く、脆弱。砂礫わずかに含む。

P 9～14・17～19・24

- 1 褐色土 ややもろい。砂質の暗黄褐色土粒子やや多く、砂礫わずかに含む。

P 15・16・20・21

- 1 褐色土 縮まり良くやや粘質。黄褐色土ブロックやや多く、砂礫ごくわずかに含む。

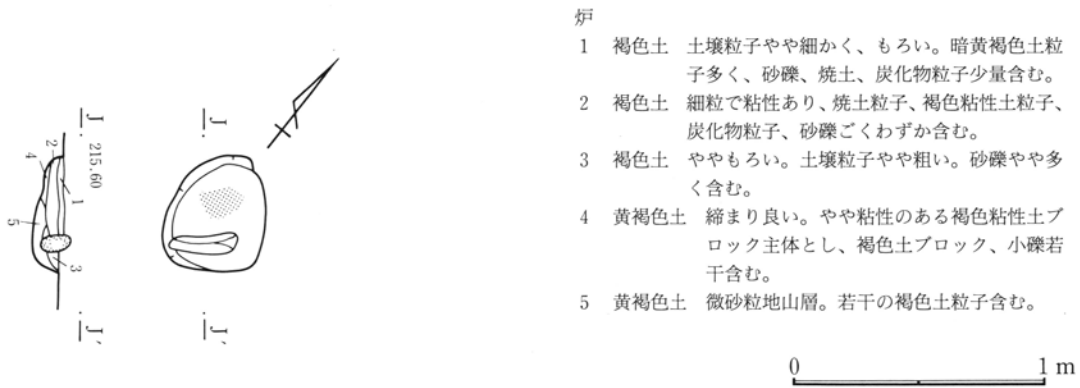
P 22

- 1 褐色土 砂質の黄褐色土粒子、砂礫多く含む。

P 23

- 1 暗褐色土 土壌粒子やや細かい。若干砂質でやや脆い。砂礫わずか。暗黄褐色粒子ごくわずかに含む。

第302図 C339号住居跡



第303図 C339号住居跡炉

- 炉
- 1 褐色土 土壌粒子やや細かく、もろい。暗黄褐色土粒子多く、砂礫、焼土、炭化物粒子少量含む。
 - 2 褐色土 細粒で粘性あり、焼土粒子、褐色粘性土粒子、炭化物粒子、砂礫ごくわずか含む。
 - 3 褐色土 ややもろい。土壌粒子やや粗い。砂礫やや多く含む。
 - 4 黄褐色土 締まり良い。やや粘性のある褐色粘性土ブロック主体とし、褐色土ブロック、小礫若干含む。
 - 5 黄褐色土 微粒粒地山層。若干の褐色土粒子含む。

炉 住居の北よりに作られる。60cm程の長円形に浅く掘り下げられた部分に長さ約30cmの砂岩が据えられている。北側に焼土の広がりが見られる。

出土遺物 覆土中には長さ数10cmの大型の礫も見られた。土器類はあまり多くはなかったが、東壁際で壺、甕の胴上半部分が置かれた状態で出土している。

調査所見 本住居はC339号住居を埋め戻し、床面のレベルをかさ上げし、北側に拡張したものと判断される。

C339号住居跡 (第302・303・570図 PL. 53・206・295)

位置 Cs・t-49 **形状** 隅丸長方形 **規模** 長辺5.56m、短辺4.98m、壁高0.40m

重複 ほとんど重なってC338号住居跡(弥生時代)が重なる。

埋没土 埋土のほとんどが削られている状況であった。

床面 かなり荒れており、凹凸が著しい。地山の礫層が多く露出した状態である。

貯蔵穴 南壁に掘り込まれたP5が相当するものと思われる。深さは約30cmである。

柱穴 4本柱穴であるが、北側のP1・4はC338号住居跡の柱穴と共通している。P2およびP3については接して掘り込みが見られる。

炉 北側柱穴間に作られている。やや掘り下げた径40cm程の場所に長さ25cm程の棒状の河原石が据えられ、石の北側に若干の焼土が検出されている。

出土遺物 覆土が大部分削られているためにほとんど検出されなかった。土器はわずかに高坏の破片が東壁際で出土しているのみである。

調査所見 壁の状況、柱穴の在り方などから、C338号住居跡の拡張前の住居と思われる。

C344号住居跡 (第304・571・572図 PL. 53・207・208・296)

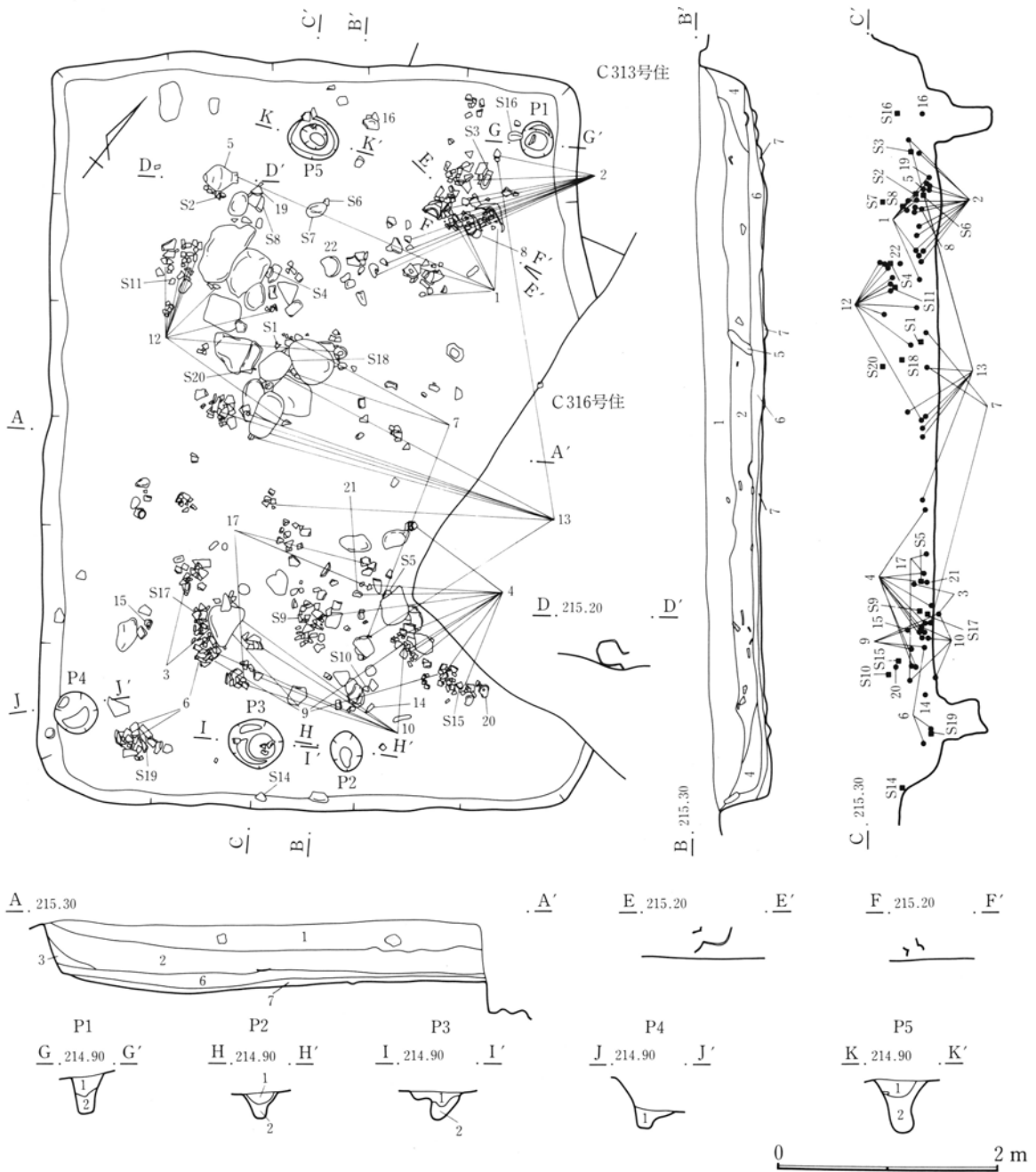
位置 Co-43・44・p-44 **形状** 隅丸長方形 **規模** 長辺6.65m、短辺4.88m、壁高0.64m

重複 北東隅をC313号住居跡(平安時代)に、東壁部分にはC316号住居跡(古墳時代)が三角形に重複している。 **埋没土** 小礫、地山の砂質黄色土を混入。

床面 平坦で、中央部分は比較的締まる。壁際はなだらかに壁に至る。

貯蔵穴 明確なものは検出されなかった。

柱穴 いわゆる主柱穴的なものは検出されなかった。北壁寄り中央にP5を、東寄りにはP4を、また南壁寄り中央でP2、3がさらに西隅にP4を検出した。 **炉** 検出されなかった。



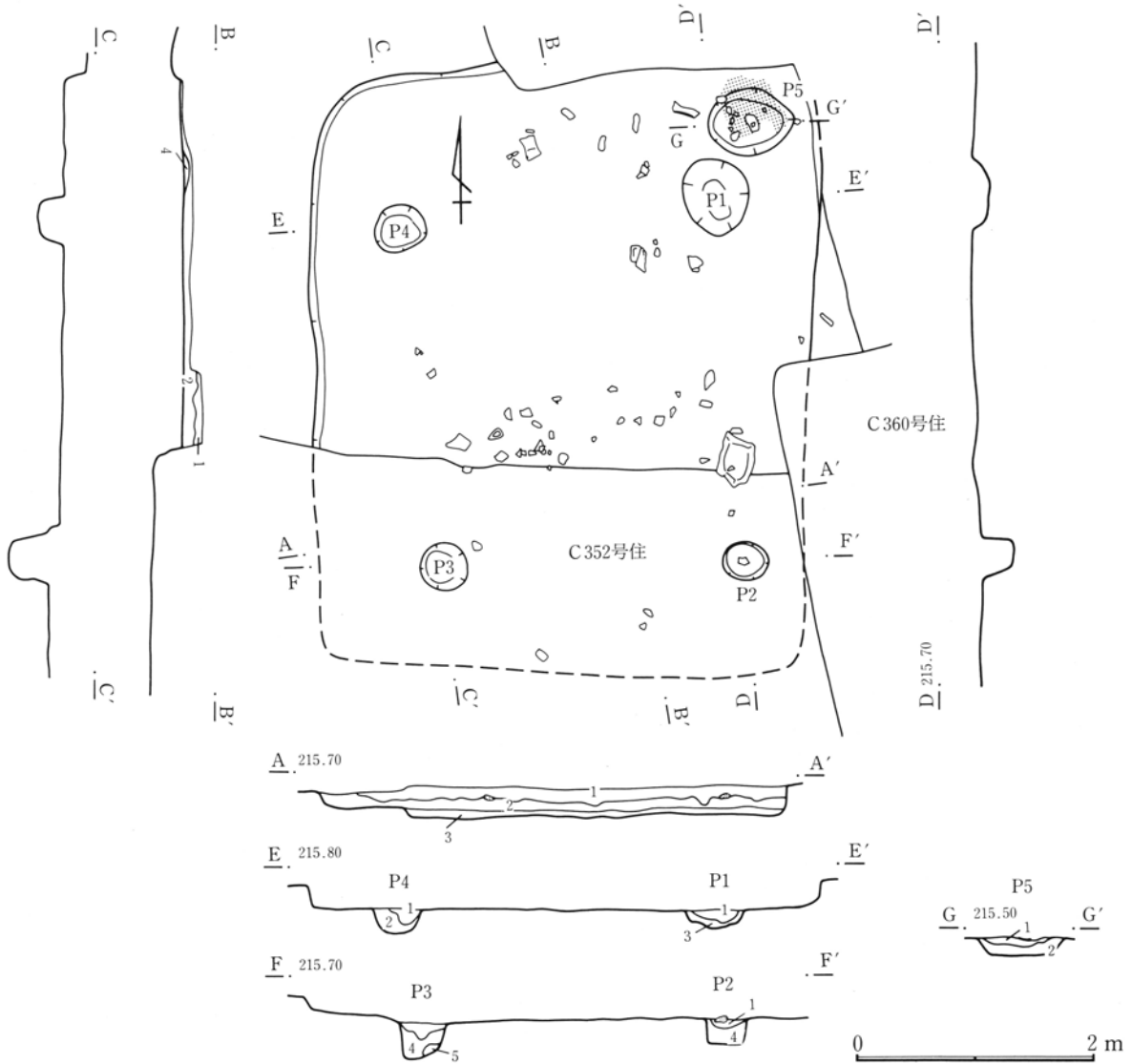
- 1 黒褐色土 粗粒土、砂礫、黄褐色粒子をやや多く含む。
 - 2 黒褐色土 1よりやや黒い色調、ややきめの細かい土をベースとし、砂礫1よりやや少ない。
 - 3 暗褐色土 黄褐色粒子多く含む。
 - 4 黒褐色土 砂礫、小石を少量含む。
 - 5 黄褐色砂質土 砂質地山の崩落土ブロック。
 - 6 暗褐色土 砂礫を少量含む。
 - 7 黄褐色粘質土 砂礫、小石をごく少量含む。
- P 1
- 1 黒褐色土 砂礫土の混入多い。
 - 2 黒褐色土 地山砂礫を含み、粘土をブロック状に少量混入。

- P 2
- 1 黒褐色土 砂礫を若干混入。
 - 2 暗褐色土 地山褐色土多く含む。
- P 3
- 1 黒褐色土
 - 2 黄黒褐色土
- P 4
- 1 黒褐色土 小礫を多く含む砂利質土。
- P 5
- 1 黒褐色土 地山砂礫をブロック状に混入。
 - 2 黄褐色土 地山砂礫土多く含む。

第304図 C344号住居跡

出土遺物 北側と南側に分かれて集中する。北側には大型の礫が混入する。壺、甕、鉢等が出土している。ほぼ完形になるものも多く見られる。

調査所見 東側は一部重複により切られているものの、全体的には遺存状態は良い。壁の立ち上がりが丸みを持っており、他の住居と様相を異にしている。さらに炉が検出されておらず、柱穴も壁際に偏って掘り込まれている。



- | | |
|--|--|
| 1 黒色土 締まりやや良、少量の小礫含む。ごくわずかの炭化物混入。 | 3 暗褐色土 締まりやや良、若干の小礫、黄褐色粘土含む。焼土粒わずかに混入。 |
| 2 黒褐色土 締まりやや良、1に比べ小礫の混入少なく若干の黄色土粒混入。 | 4 黒褐色土 1に似るが、小礫の混入やや少なく、砂質でやや軟質。 |
| 3 黒褐色土 締まりやや良、2に比べ、やや黄色味強い。黄色土、小礫、焼土粒わずかに含む。 | 5 褐色土 締まりやや良、粘土ブロックをかなり含み、一部赤化。 |
| 4 褐色土 締まりやや良、少量の焼土、小礫、黄褐色粘土含む。 | |
| P 1~4 | |
| 1 黒褐色土 締まりやや良、若干の小礫、わずかの黄褐色砂含む。 | P 5 |
| 2 暗褐色土 締まりやや良、若干の小礫、黄色土粒、少量の黄褐色砂含む。 | 1 暗褐色土 締まりやや良、若干の小礫、黄褐色粘土、焼土含む。 |
| | 2 褐色土 締まりやや悪い、基盤砂礫をかなり含む砂質土。 |

第305図 C345号住居跡

C 345号住居跡 (第305・573図 PL. 54・296)

位置 Cr-45・46 形状 隅丸長方形 規模 長辺5.03m、短辺4.53m、壁高0.26m

重複 C 315号住居跡 (平安時代) がほとんど掛かり、北側にはC 331号住居跡 (古墳時代) が、さらに南側はC 352号住居跡 (古墳時代) が重複している。このため遺存状態は極めて悪い。

埋没土 本来の覆土部分はほとんど残っておらず、わずかに床面近くの部分が残るだけである。

床面 細かな凹凸が目立つが、全体に平坦である。地山の小礫が多く露出している。

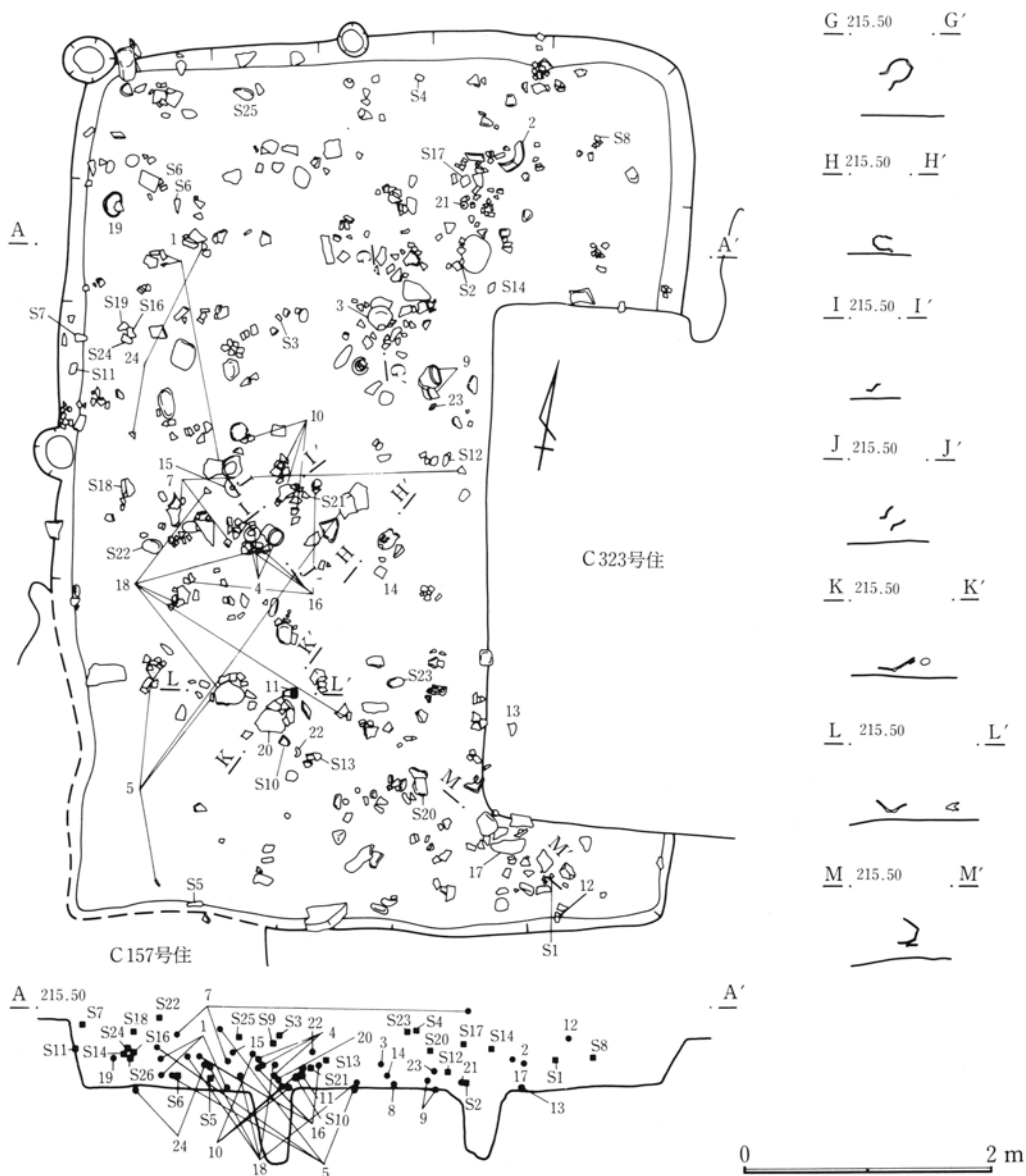
貯蔵穴 北東隅に検出した。径70cmで深さは15cm、底面は平らである。上部に焼土と粘質土が認められる。

柱穴 4本を検出した。ほぼ対角線上にあり、径はいずれも約40cm、深さは15~30cmと比較的浅い掘り込みである。

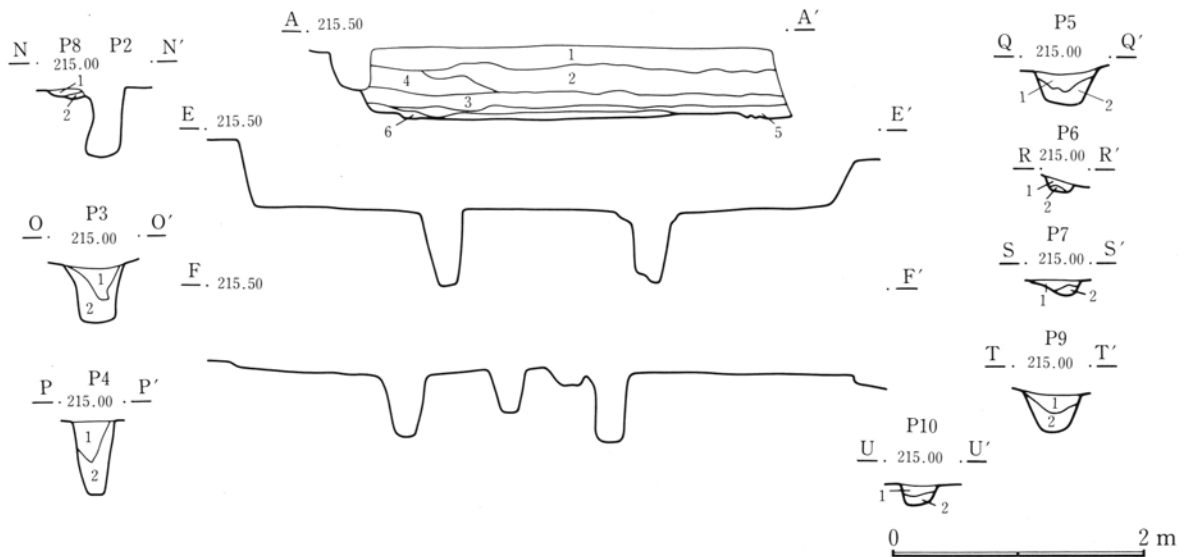
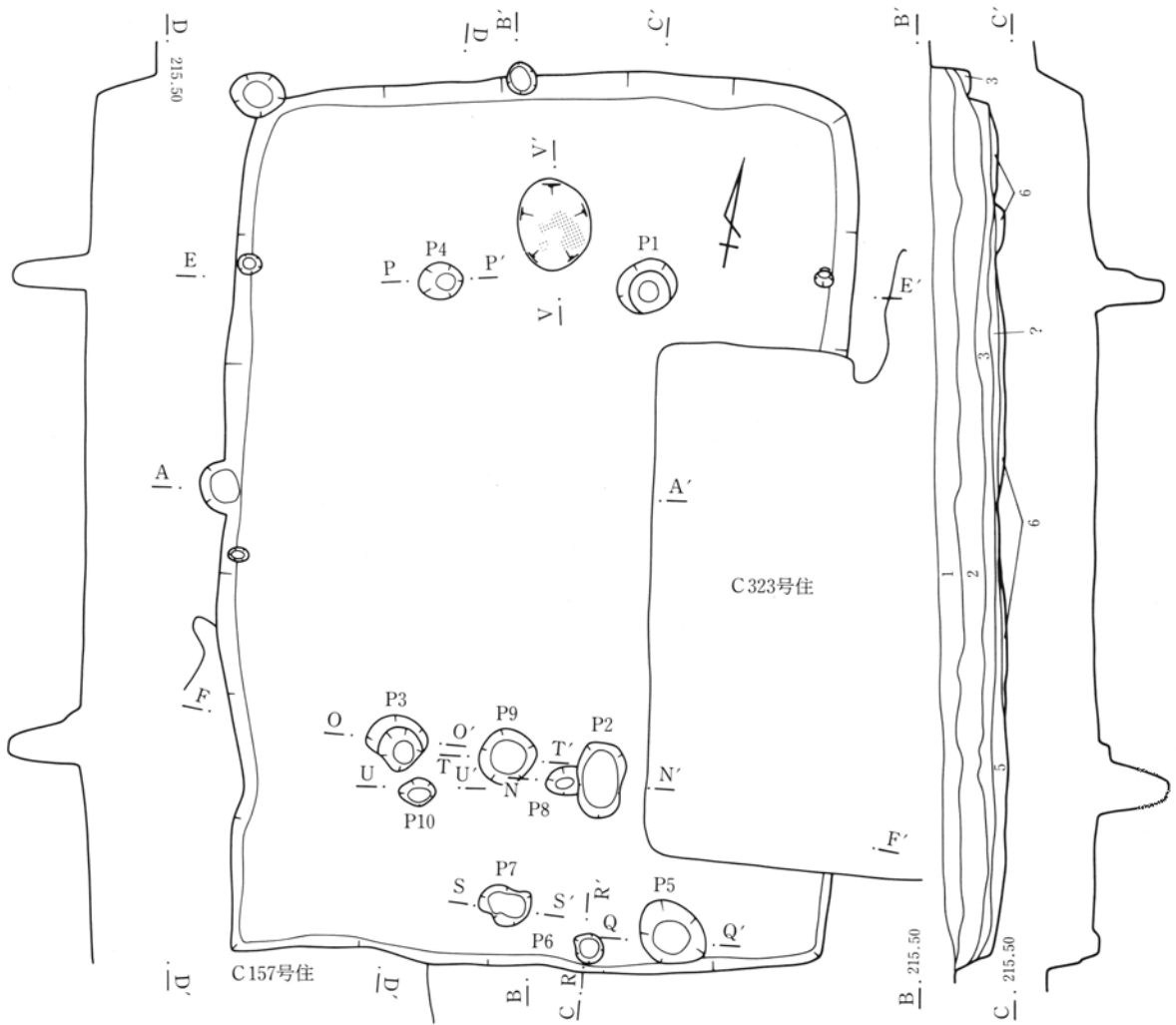
炉 明確なものは検出されなかった。

出土遺物 ほとんど見られなかった。

調査所見 重複により遺存状態は悪かった。特に東側部分の状況ははっきりしなかった。



第306図 C 347号住居跡 (1)



- | | |
|----------------------|--------------------------------------|
| 1 暗褐色土 砂礫、小石を多く含む。 | 4 暗褐色土 やや黄色味がかかった色調を呈し、黄褐色粒子をやや多く含む。 |
| 2 暗褐色土 砂礫、小石をやや多く含む。 | 5 黒褐色土 砂礫、小石をやや多く含む。 |
| 3 暗褐色土 砂礫、小石を少量含む。 | 6 黄褐色土 やや粘質、砂礫、黄褐色粒子を微量含む。 |

第307図 C347号住居跡(2)

第3章 遺 構

P 3・4

- 1 黒褐色土 砂礫、褐色粘性土ブロック含む。
- 2 黒褐色土 褐色粘性土ブロックやや多く混入、礫は少ない。

P 5

- 1 黒褐色土 砂粒多く含む。黒味強い。
- 2 黒褐色土 地山褐色粘性土粒、砂粒を含む。

P 6

- 1 黒褐色土 褐色砂粒を多く含む。
- 2 黄褐色土 褐色砂粒土ブロック。

P 7

- 1 黒褐色土 砂粒を多く含む。黒味強い。

2 暗黄褐色土 地山褐色粘性土ブロック混入。

P 8

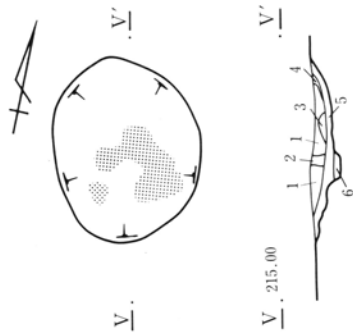
- 1 黒褐色土 砂礫を少量含む。
- 2 茶褐色土 褐色粘性土ブロックを含む粘性土。

P 9

- 1 黒色土 砂礫を若干混入。
- 2 黒褐色土 褐色粘性土ブロックを混入。

P 10

- 1 暗褐色土 砂粒、褐色粘性土ブロックを多く含む。
- 2 暗褐色土 1に似るが、やや軟質。



炉

- 1 黒褐色土 少量の砂礫含む。
- 2 橙褐色土 焼土塊。
- 3 橙褐色土 焼土ブロック混入。
- 4 淡褐色土 少量の焼土粒、褐色粘性土を若干混入。
- 5 赤褐色土 焼土ブロック、砂粒を含む。
- 6 赤褐色土 若干の焼土、褐色粘性土、砂粒を含む。

0 1m

第308図 C347号住居跡炉

C347号住居跡 (第306～308・574・575図 PL. 54・208・209・297・298)

位置 Cs・t-40・41 形状 隅丸長方形 規模 長辺7.03m、短辺4.92m、壁高0.54m

重複 南西隅にC157号住居跡(奈良時代)が、東壁にC323号住居跡(古墳時代)が重複している。

埋没土 多量の小礫と、黄色粒子が混入する。 床面 平坦で、締まりが良い。

貯蔵穴 南壁の東寄りに検出された。径50cm、深さは30cmを測る。

柱穴 主柱穴は4本を検出した。南側列にはP8～10の補助柱穴が見られる。また、入り口部にも小ピットが検出されている。

炉 北側柱穴間に作られた地床炉である。楕円形の落ち込み内に若干の焼土が検出されている。

出土遺物 覆土全体から出土している。壺、甕、鉢、高坏等の他に土製紡錘車が4点見られる。

調査所見 部分的に重複部分が見られるが、全体に遺存状態は良い。床面の状態、壁の立ち上がりはしっかりしている。

C353号住居跡 (第309～311・576～578図 PL. 54・55・210・298・299)

位置 Cp・q-45 形状 隅丸長方形 規模 長辺6.36m、短辺4.95m、壁高0.53m

重複 南部分にC314号住居跡(平安時代)、C319号住居跡(古墳時代)が重複しており、北西部分はC352号住居跡(古墳時代)が切っている。

埋没土 礫を混入し、粗粒である。地山の砂粒土、粘土ブロックを混入する。

床面 かなりの凹凸が見られ、地山中の礫が露出している。中央部分は比較的硬く踏みしめられている。

貯蔵穴 南西壁際に作られている。長径70cmの楕円形で深さは約40cmである。

柱穴 主柱穴4本を検出した。径60cm程で、深さは40～50cmを測る。北西に位置するP4は上部が重複により削られている。

炉 住居中央北側の柱穴間に作られる。不定形な掘り込みのほぼ中央に、長さ20cmの砂岩が据えられ、周囲に焼土が検出されている。

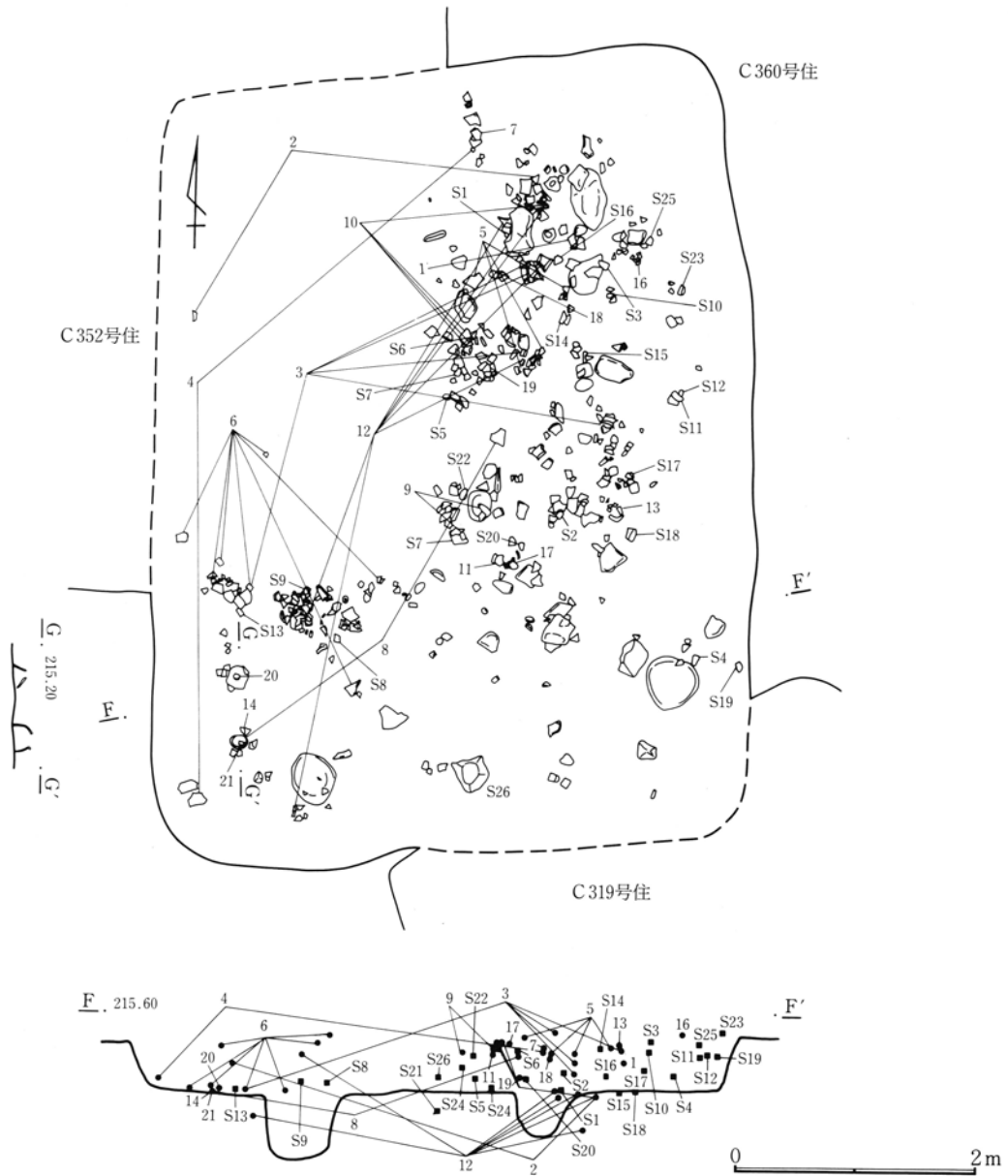
出土遺物 重複のある部分を除き、比較的多くの土器、石器類が検出されている。P 1の上部から3が倒れ込むような状態で出土している他、4が床面に置かれた状態で出土している。

調査所見 重複はあるが、遺存状態は比較的良好である。壁高は約60cmを測る。

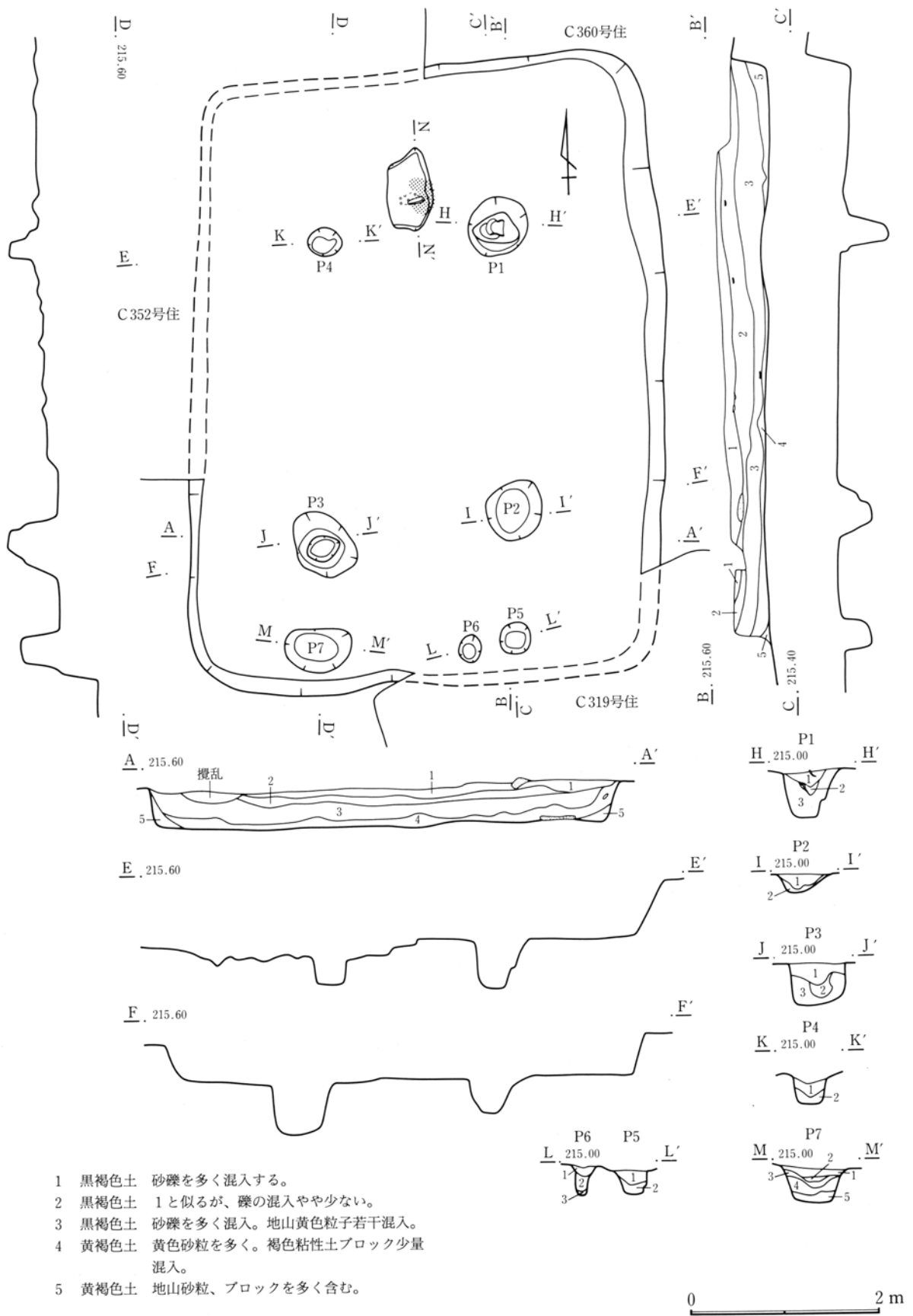
C 354号住居跡 (第312~314・579図 PL. 55・56・210・299)

位置 Cp・q-47 形状 隅丸長方形 規模 長辺(6.58)m、短辺(5.59)m、壁高0.53m

重複 C 358号住居跡(古墳時代)がすっぽり収まる形で重複し、北側にC 351号住居跡(古墳時代)が重複する。また、西側にはC 309・320号住居跡(平安時代)が掛かる。このため壁の立ち上がりが確認されたのは、北西と南東部分のみである。

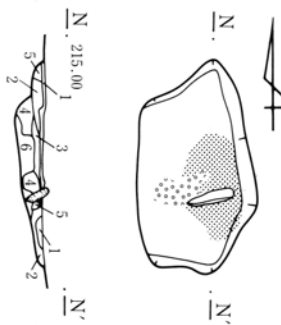


第309図 C 353号住居跡 (1)



第310図 C353号住居跡(2)

- P 1
 1 暗褐色土 砂礫若干、黄褐色粒子少量含む。
 2 暗褐色土 暗褐色土粒子基調とし、黄褐色土ブロック少量、砂礫、黄褐色粒子多く含む。
 3 黄褐色粘質土 砂礫、黄褐色粒子を少量含む。
- P 2
 1 黒褐色土 砂礫、炭化材を微量含む。
 2 暗褐色土 砂礫、黄褐色粒子を少量含む。
- P 3
 1 黒褐色土 砂礫を多く含む。
 2 暗黄褐色土 砂礫を含む。
 3 黄褐色土 粘質地山土に似るが、砂礫やや多く含む。
- P 4
 1 暗黄褐色土 砂礫を多量に、黄褐色粒子をやや多く含む粘質土。
- 2 暗黄褐色土 1よりさらに粘質、砂礫、黄褐色粒子、黒褐色土ブロック若干含む。
- P 5・6
 1 暗褐色土 砂礫土、褐色土粒・土塊、暗褐色土塊、黒褐色土粒・土塊混入。
 2 黒褐色土 砂礫、褐色土粒・土塊多く点在。
 3 暗褐色土 褐色土粒多量。黒褐色土若干。
- P 7
 1 黒褐色土 砂礫多く含む。
 2 黒褐色土 砂礫、小石を多量に含み、黄褐色粒子を少量含む。
 3 暗褐色土 砂礫を含む。
 4 暗褐色土 砂礫、同大の黄褐色粒子多く含む。
 5 暗褐色砂質土 砂礫、同大の黄褐色砂礫含む。



- 炉
 1 暗褐色土 粗い土をベースとし、砂礫をやや多く含む。黄褐色粒子を微量含む。
 2 暗黄褐色粘質土 砂礫含み、黄褐色粒子少量含む。
 3 暗赤褐色焼土 焼土。砂礫を少量含む。
 4 黒褐色土 砂礫を若干含む。
 5 暗褐色土 黄褐色砂粒を少量含む。
 6 黄褐色粘質土 黄褐色砂礫を微量含む。

第311図 C353号住居跡炉

埋没土 遺存部分はわずかである。地山の礫が多く含まれ、下層は粒子細かくやや砂質となる。

床面 重複が及んでいない場所ではかなり平坦で、しっかりとしている。

貯蔵穴 明確なものははっきりとしなかったが、P20が相当するか。

柱穴 かなり多くのピットが検出されており、本址に関連すると判断できなかったものも多い。主柱穴は4本と思われ、P1～7が相当するものと思われる。また、入り口部の施設としてP23・24があげられる。

炉 住居の中央北より、柱穴間に作られる。円形に掘り下げられた部分の南寄り部分に、長さ約35cmの河原石が据えられており、北側に焼土が検出されている。

出土遺物 重複により削られた部分が多く、遺物の出土量は多くはないが、1・6・10が南東隅においてまともに出土している。

調査所見 重複が著しく全体的に遺存状態は良くなかったが、床面の状態は良好であった。わずかな遺存部分において出土した土器は、ほぼ完形に近い状態で検出されている。

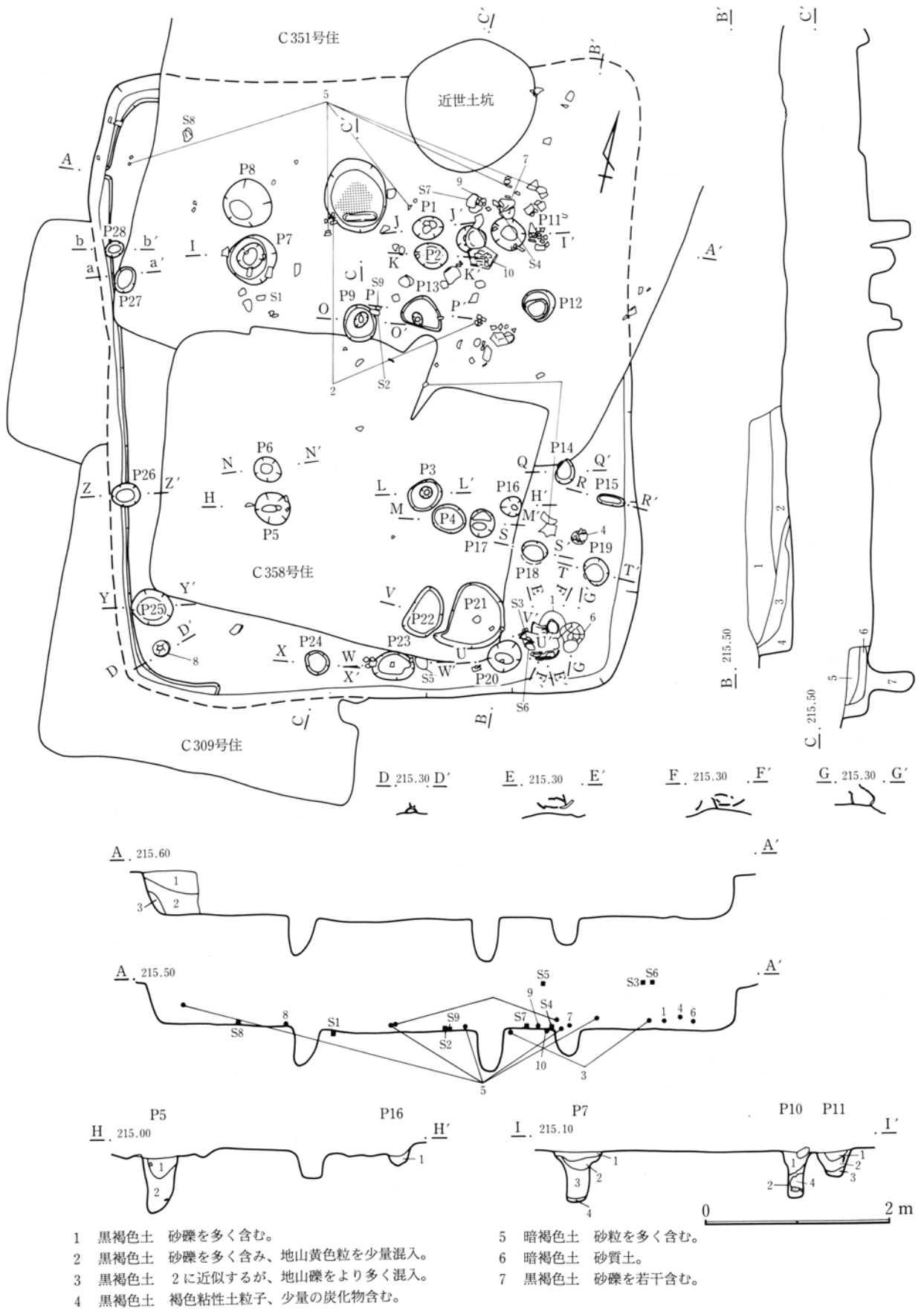
C361号住居跡 (第315～318・580図 PL. 56・211・299・301)

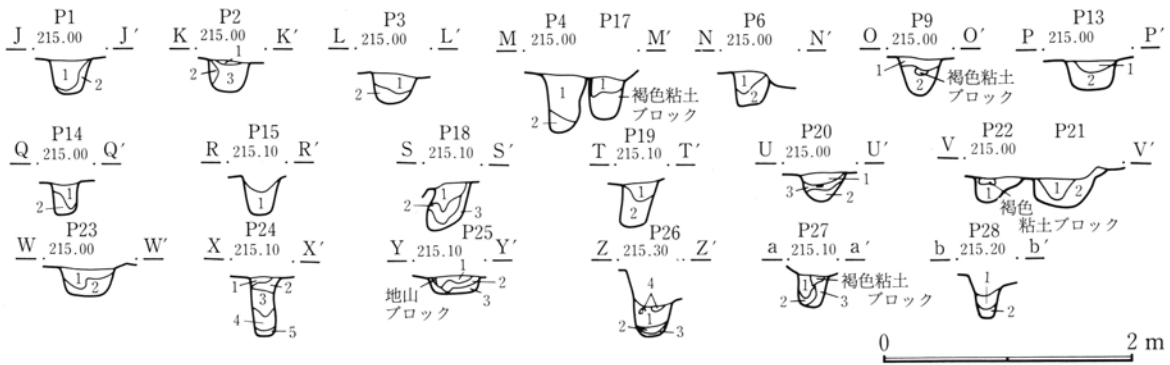
位置 Cq-42・43 **形状** 隅丸長方形 **規模** 長辺(6.02)m、短辺(4.50)m、壁高0.53m

重複 南側から東側にかけてC305・346・318・357号住居跡(古墳時代)に切られる。

埋没土 礫を多く混入し、黄褐色の粒子が目立つ。 **床面** 遺存部分は平坦で締まりも良く、中央部分はかなり踏みしめられた状態であった。P7の南に粘土が検出されている。 **貯蔵穴** 検出されなかった。

柱穴 4本柱穴かと思われるが、明確な対応関係は把握できなかった。P11・12は入り口施設になると思わ

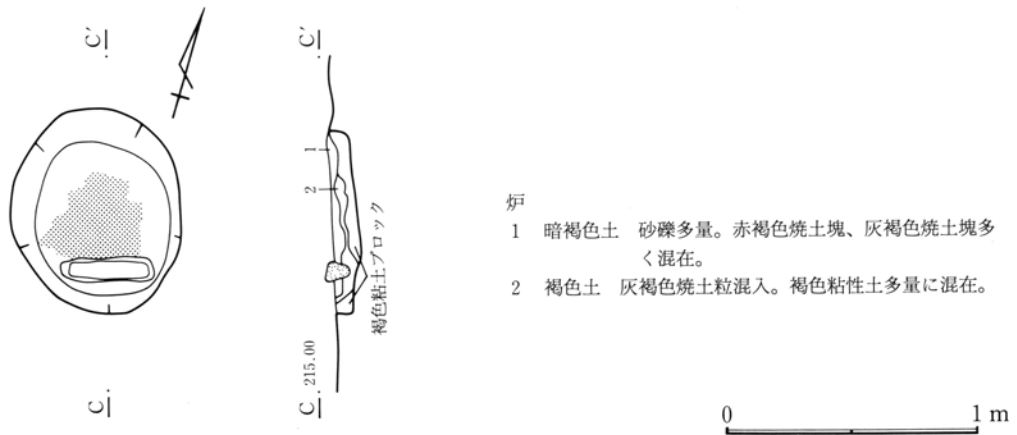




- P 1**
 1 暗褐色土 砂礫点在。褐色土塊混入し、暗褐色土塊とまだら状を呈す。
 2 暗褐色土 砂礫点在。褐色土粒・土塊点在。
- P 2**
 1 暗褐色土 砂礫多く点在。褐色土粒・土塊点在。
 2 暗褐色土 砂礫、灰白色粒子やや多。褐色土粒・土塊多量。かなり縮まりあり。
 3 暗褐色土 灰白色粒子点在。暗褐色土塊多量。淡褐色、褐色土塊、黒褐色土塊等混入。
- P 3**
 1 黒褐色土 小礫。褐色土塊、褐色土粒多量。
 2 黒褐色土 砂礫、褐色土粒・土塊若干。
- P 4**
 1 暗褐色土 砂礫点在。褐色土塊、暗褐色土塊混入。
 2 暗褐色土 小礫点在。褐色、暗褐色土塊やや多い。
- P 5**
 1 暗褐色土 砂礫若干、褐色土粒・土塊点在。黒褐色土塊混在。かなり縮まりあり。
 2 黒褐色土 砂礫、褐色土粒点在。褐色・暗褐色土塊、若干混在。下層ほど粒子細かく縮まる。
- P 6**
 1 黒褐色土 砂利若干、褐色土粒・土塊、明褐色土点在。
 2 暗褐色土 砂礫質。褐色粘性土塊若干。
- P 7・10・11**
 1 暗褐色土 砂礫を多く含む。
 2 暗褐色土 砂礫、粘土ブロック斑に含む。
 3 暗褐色土 2に近似。粘土の混入やや多い。
 4 暗褐色土 粘土を主体とし、よく縮まる。
- P 9**
 1 黒褐色土 砂礫、褐色・灰白色粒子点在。褐色土塊若干含む。
 2 暗褐色土 砂利塊、褐色・灰白色粒子やや多い。褐色土粒・土塊やや多。
- P 13**
 1 黒褐色土 砂礫質、褐色土粒・土塊点在。
 2 褐色土 礫若干。褐色土粒・土塊、淡褐色土塊（やや粘性あり）多量。
- P 14**
 1 黒褐色土 砂利点在。褐色粒子点在。
 2 暗褐色土 砂利多量。褐色土粒・土塊若干。
- P 15**
 1 黒褐色土 砂礫、褐色粒子点在。褐色土粒若干。かなり縮まりあり。
- P 16**
 1 黒褐色土 砂利やや多く混入。褐色土粒多量。
- P 17**
 1 暗褐色土 砂礫点在。黒褐色土若干。粘性土。

- P 18**
 1 黒褐色土 砂利やや多。小礫点在。褐色土粒・土塊やや多。まだら状を呈す。
 2 黒褐色土 砂礫若干。褐色粒子・土粒点在。
 3 黄褐色粘質土 砂礫を若干含む。
- P 19**
 1 暗褐色土 砂礫多量。褐色土粒・土塊、黒褐色土塊等が雑然と混入。
 2 暗褐色土 砂利多量。褐色粘性土粒多量。黒褐色土塊・土粒点在。
- P 20**
 1 黒褐色土 砂利やや多。褐色土粒・土塊若干。
 2 黒褐色土 砂利やや多。1よりも若干多い。
 3 褐色土 砂礫質。黒褐色土粒とまだら状。
- P 21**
 1 黒褐色土 砂利多量。褐色土粒やや多。
 2 暗褐色土 所どころに砂利塊散在。褐色土粒・土塊点在。
- P 22**
 1 黒褐色土 砂礫多く混入。褐色・灰白色粒子多量。褐色土粒・土塊若干。
- P 23**
 1 黒褐色土 砂利やや多。褐色土粒やや多。
 2 褐色土 砂礫質。暗褐色土塊混入。
- P 24**
 1 黒褐色土 砂利やや多。褐色土粒・土塊若干。粒子微細。
 2 暗褐色土 砂礫質、褐色土粒・土塊やや多く点在。
 3 黒褐色土 砂礫、灰白色粒子若干。褐色土粒・土塊若干。
 4 黒褐色土 砂礫多く点在。暗褐色土塊、褐色土粒やや多く点在。
 5 暗褐色土 砂礫若干混入。やや粘性あり。
- P 25**
 1 黒褐色土 砂礫多量、褐色土粒、土塊点在。
 2 暗褐色土 砂礫多量、褐色粒子、褐色粘性土粒、粘性土塊等雑然と混在。
 3 黄褐色粘質土 砂礫を若干含む。
- P 26**
 1 黒褐色土 細粒土、黄褐色粒子を少量含む。
 2 黒褐色土 やや砂質の土を基調とし、砂粒多く含む。
 3 黄褐色砂質土
 4 黄褐色砂質土ブロック
- P 27**
 1 黒褐色土 砂礫質。褐色土粒・土塊点在。
 2 暗褐色土 砂礫若干、褐色土粒・土塊多量。
 3 黄褐色粘質土 砂礫を若干含む。
- P 28**
 1 黒褐色土 砂礫、やや多く、黄褐色砂粒を少量含む。
 2 黒褐色土 砂礫、少量含む。

第313図 C354号住居跡(2)



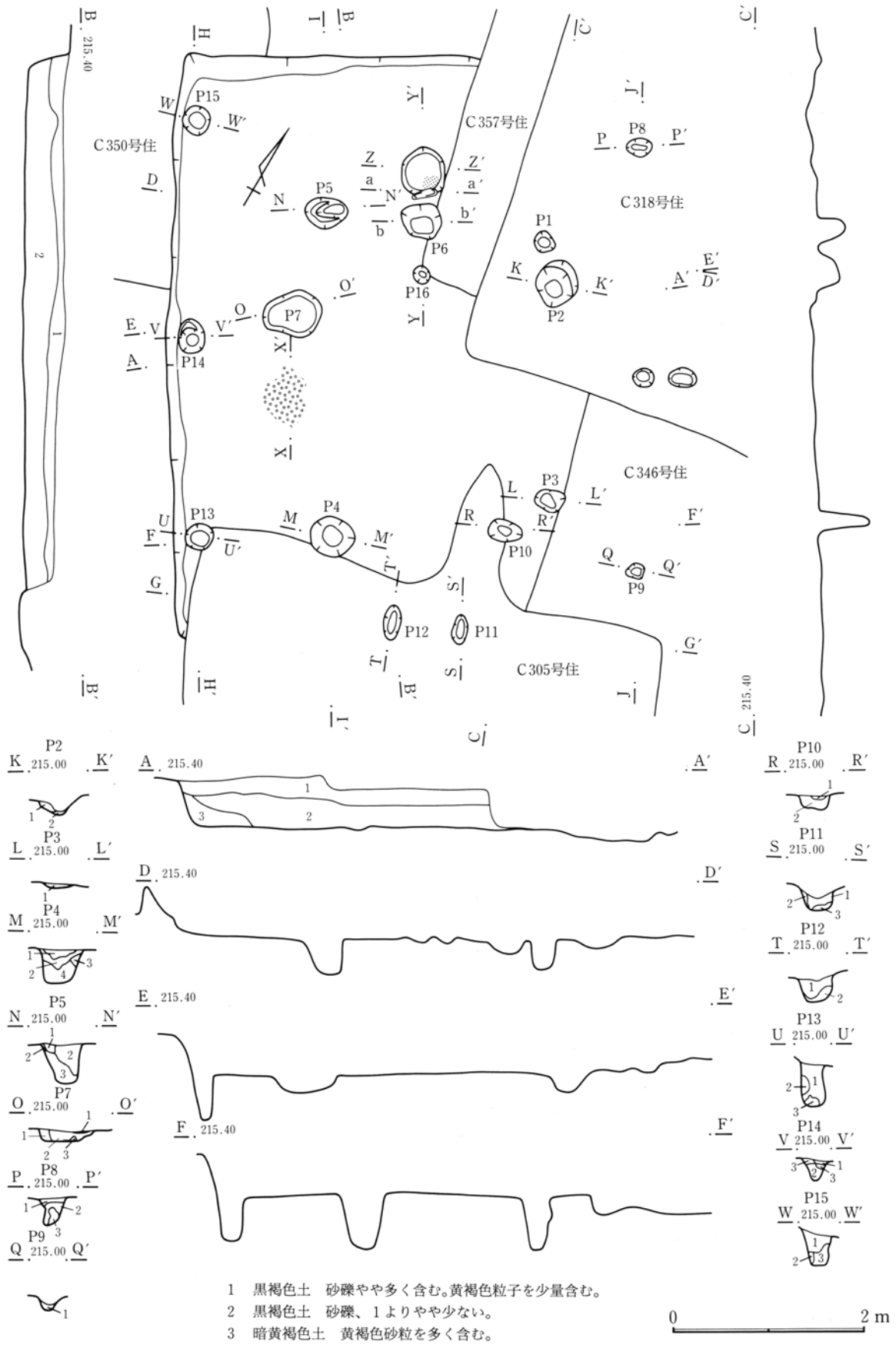
第314図 C354号住居跡炉

れる。また、西壁下の隅および中央に壁柱穴が検出されている。

炉 中央北寄りに作られる。周辺部は凹凸が顕著で、南にP6が位置する。長さ40cmの河原石が据えられ、北側に若干の焼土が検出されている。

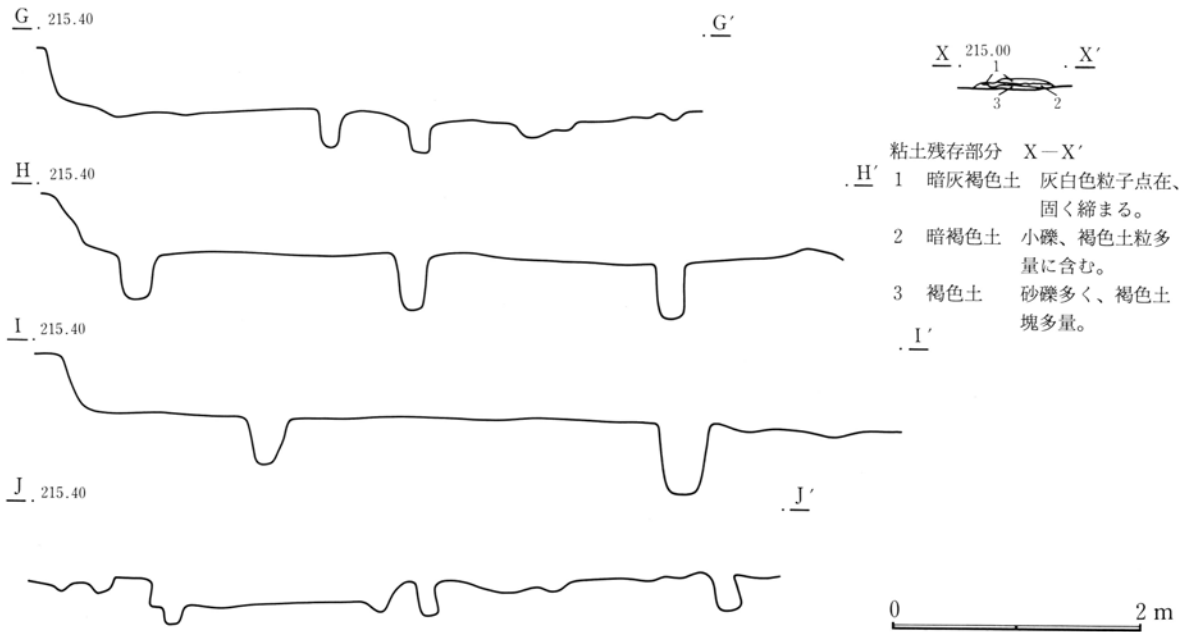


第315図 C361号住居跡(1)



第316図 C361号住居跡(2)

第3章 遺 構



粘土残存部分 X-X'

- H' 1 暗灰褐色土 灰白色粒子点在、固く締まる。
 2 暗褐色土 小礫、褐色土粒多量に含む。
 3 褐色土 砂礫多く、褐色土塊多量。

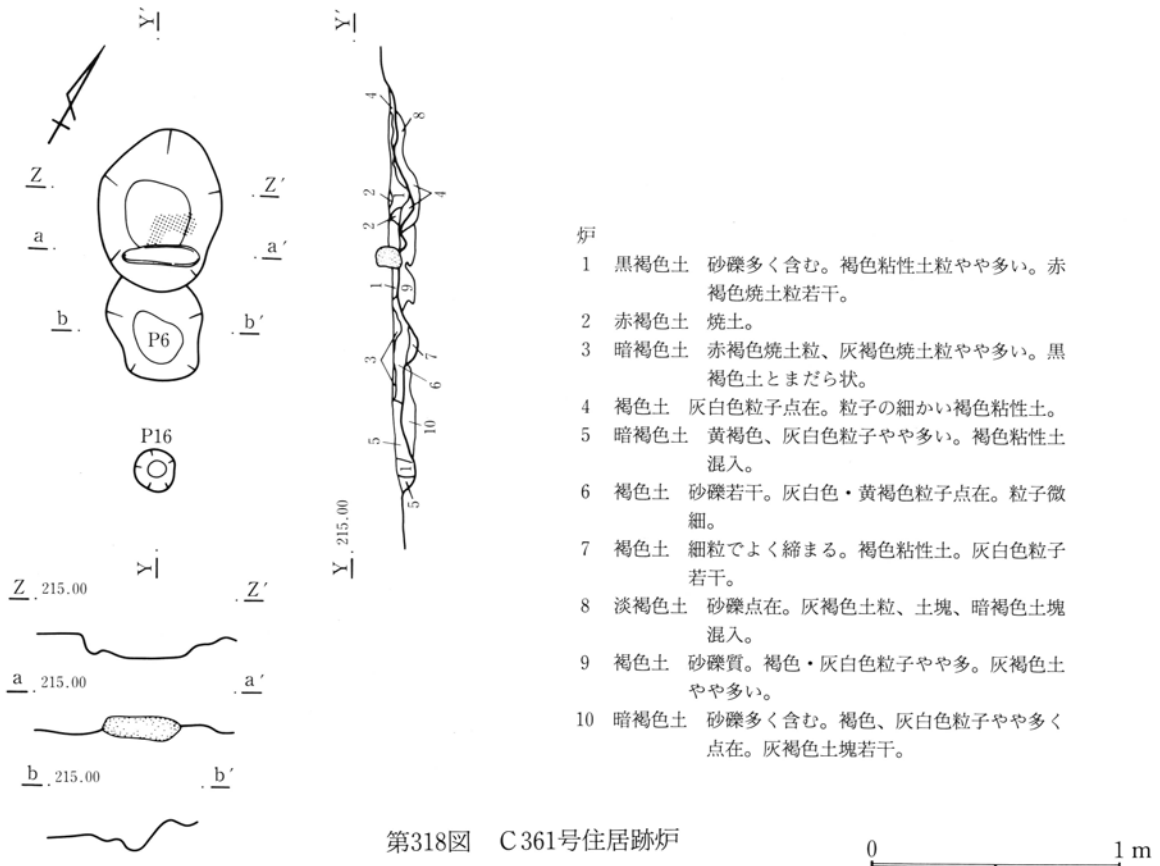
- P 2
 1 黒褐色土 小礫、褐色・灰白色粒子やや多。
 2 暗褐色土 灰白色粒子、褐色土粒・土塊多く含む。
- P 3
 1 黒褐色土 小礫点在。褐色土粒・土塊含む。
- P 4
 1 暗褐色土 小礫多量。褐色土粒・土塊多量。
 2 暗褐色土 砂礫、灰白色粒子点在。褐色粘性土多量。
 3 褐色土 礫若干。灰白色粒子点在。黄褐色土多量。
 4 暗褐色土 小礫若干。褐色土塊、粘性土塊若干含む。粒子細かく、締まりあり。
- P 5
 1 暗褐色土 砂礫やや多い。黒褐色土粒と褐色土粒がまだらに混入。
 2 褐色土 礫点在。褐色粘性土混在。
 3 暗褐色土 小礫点在。褐色粘性土粒・土塊、粘性土塊点在。
- P 7
 1 黒褐色土 砂礫やや多い。褐色・灰白色粒子やや多。褐色土粒やや多。
 2 暗褐色土 小礫点在。褐色粘性土多量。
 3 暗褐色土 砂礫若干。褐色粘性土と黒褐色土混入。
- P 8
 1 褐色土 灰白色粒子、暗褐色土塊点在。粘性あり。
 2 暗褐色土 小礫、灰白色粒子点在。褐色土粒・土塊やや多い。
 3 褐色土 砂礫若干。灰白色粒子点在。粘性あり。
- P 9
 1 暗褐色土 褐色・灰白色粒子若干。暗褐色土塊（やや粘性あり）若干。

- P 10
 1 黒褐色土 小礫やや多い。褐色粘性土粒やや多い。
 2 暗褐色土 小礫点在。褐色土塊と黒褐色土とがまだら状を呈す。
- P 11
 1 黒褐色土 砂礫やや多。褐色・灰白色粒子やや多。褐色、暗褐色土塊混入。
 2 褐色土 砂礫質。褐色粘性土多量。
 3 暗褐色土 砂礫。褐色粒子・土塊やや多い。
- P 12
 1 黒褐色土 小礫多い。褐色・灰白色粒子点在。暗褐色粘性土塊やや多い。
 2 暗褐色土 砂礫点在。褐色土塊若干。粒子微細で、やや粘性あり。
- P 13
 1 黒褐色土 褐色土粒、褐色粘性土塊、灰白色粒やや多く混入。よく締まる。
 2 褐色土 褐色粘性土、及び若干の粘性土塊からなる。
 3 褐色土 褐色粘性土主体。暗褐色土塊が若干混入。
- P 14
 1 黒褐色土 褐色・灰白色粒子点在。粒子微細。
 2 黒褐色土 褐色・灰白色粒子点在。褐色土粒点在。
 3 褐色土 褐色粘性土、褐色土粒、若干の砂利の混土。
- P 15
 1 黒褐色土 小礫、褐色土塊やや多い。粒子微細。
 2 黒褐色土 褐色土塊・土粒やや多。まだら状。粒子微細。
 3 暗褐色土 砂礫若干、褐色粘性土塊多量。粒子微細で、かなり締まりあり。

第317図 C361号住居跡(3)

出土遺物 周辺部分がかなり削られているが、中央部分には多くの土器類が遺存していた。壺、甕、片口等の他に紡錘車が1点出土している。

調査所見 東側を重複で大きく壊されているが、炉を含めた中央部分は比較的遺存状態は良かった。



C364号住居跡 (第319・320・581図 PL. 59・211・301)

位置 Cn・o-46 形状 隅丸方形 規模 長辺(5.40)m、短辺5.30m、壁高0.45m

重複 南にC356号住居跡(奈良時代)が、ほとんど入り込む形でC349号住居跡(古墳時代)が重複している。さらに北壁部分についても、C334・343・348号住居跡(古墳時代)が重複する。

埋没土 部分的に確認したに過ぎない、砂礫を多く含むかなり締まった粗粒土で埋まる。

床面 重複部分は荒れているが、その他は比較的平坦で、締まっている。

貯蔵穴 南西隅寄りに作られている。平面の掘り方は長円形で中段を持ち、深さは25cm程である。

柱穴 支柱穴は4ないしは6本と思われ、北列は重複が見られることから、建て替えも考えられる。

炉 中央の北寄りに作られる。焼土を伴う浅い落ち込みの地床炉である。

出土遺物 重複のない部分に若干の土器類が見られた。壺、甕、高坏、ミニチュア土器等が出土しており、9は貯蔵穴内からの出土である。

調査所見 南北壁の遺存状態は悪かったが、東西壁の高さは35cmを測る。遺物は炉周辺部に礫を伴って出土。

C365号住居跡 (第321図 PL. 59・301)

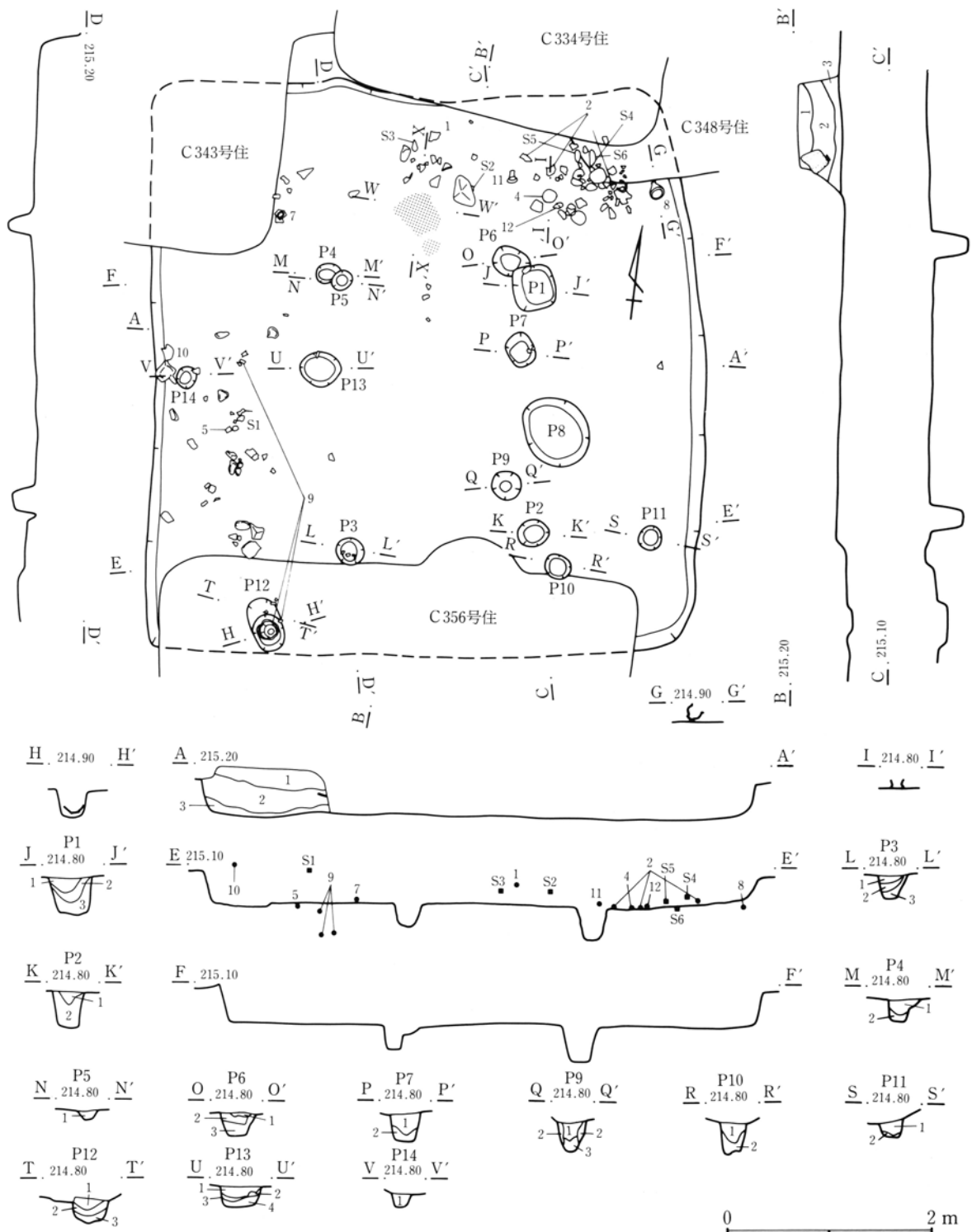
位置 Ct-46 形状 不明 規模 長辺一、短辺一、壁高0.22m

重複 C337号住居跡(古墳時代)にほとんど切られている。埋没土 礫を含む。

床面 面としては確認できなかった。貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 検出されなかった。

炉 検出されなかった。出土遺物 わずかに土器片が見られたに過ぎない。

調査所見 ほとんど切られており、西側のわずかな部分のみの検出である。全容は不明である。



- 1 暗褐色土 砂礫やや多く、黄褐色粒子を少量含む。
- 2 黒褐色土 砂礫、黄褐色礫を多く含む。
- 3 暗褐色土 粗い土をベースとし、砂礫、黄褐色粒子多く含む。

- P 1
- 1 暗褐色土 小礫、褐色粘性土ブロック、黒色土の混土。
- 2 暗褐色土 小礫、褐色粘性土粒子の混入多い。
- 3 暗褐色土 若干の礫、褐色粘性土小ブロックの混土。少量の炭化物混入。

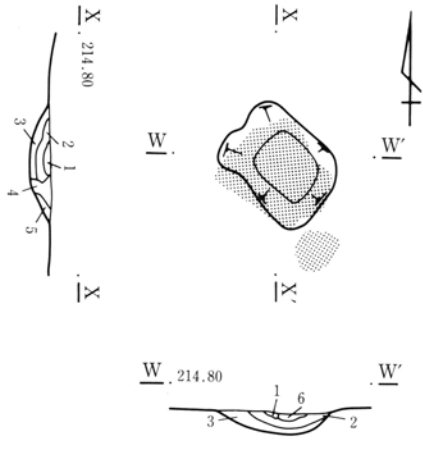
- P 2
- 1 黒褐色土 砂礫を多く含む。
- 2 黒褐色土 砂礫、地山黄色粒子を混入。

- P 3
- 1 暗褐色土 砂粒を多く含む。
- 2 暗褐色土 褐色粘性土粒子、砂礫の混土。
- 3 暗褐色土 褐色粘性土粒子、砂礫の混土。2よりやや締まり良い。

第319図 C364号住居跡

- P 4
 1 黒褐色土 砂礫を多く含む。
 2 黒褐色土 少量の砂粒、粘性土を多く含む。
- P 5
 1 黒褐色土 砂礫、若干の炭化合物含む。
- P 6
 1 黒褐色土 砂礫を少量含む。
 2 暗褐色土 砂礫、黄褐色粒子少量含む。
 3 暗褐色土 砂礫、黄褐色粒子を2よりやや多く含む。
- P 7
 1 暗褐色土 黄褐色粒子、砂礫を少量含む。
 2 暗黄褐色粘質土 砂礫を微量含む。
- P 9
 1 暗褐色土 砂礫、地山黄色粒子混入。
 2 暗褐色土 砂粒、地山粘土を含む。
 3 暗褐色土 砂礫を多く含み、1よりやや黒味強い。
- P 10
 1 黒褐色土 砂礫を微量含む。
 2 黒褐色土 砂礫、同大の黄褐色粒子を多く含む。

- P 11
 1 暗褐色土 砂礫、多く含む。
 2 暗黄褐色粘質土 砂礫を少量含む。
- P 12
 1 黒褐色土 砂礫、褐色粘性土を多く含む。
 2 黒褐色土 砂礫、褐色粒、粘土ブロックの混土。
 3 黒褐色土 2に近似。地山粘土を多く含み、少量の炭化合物混入。
- P 13
 1 黒褐色土 砂礫、同大の黄褐色粒子を微量含む。
 2 暗黄褐色粘質土 砂礫を含む。
 3 暗黄褐色粘質土 黄褐色粒子を少量含む。
 4 黒褐色土 砂礫を少量含む。
- P 14
 1 暗褐色土 砂礫やや多く含む。



- 炉
 1 赤褐色土 焼土、砂粒少量混入。
 2 暗赤褐色土 焼土化した粘質土。砂粒若干含む。
 3 暗黄褐色土 粘質土。砂粒を少量含む。
 4 暗褐色土 砂礫を多量に含む。
 5 黒褐色土 砂礫を少量含む。
 6 黒褐色土 砂礫、黄褐色粒子を多く含む。

第320図 C364号住居跡炉

C366号住居跡 (第322・582図 PL. 59・211)

位置 Cs・t-45・46 形状 隅丸長方形 規模 長辺(0.70)m、短辺6.10m、壁高0.10m

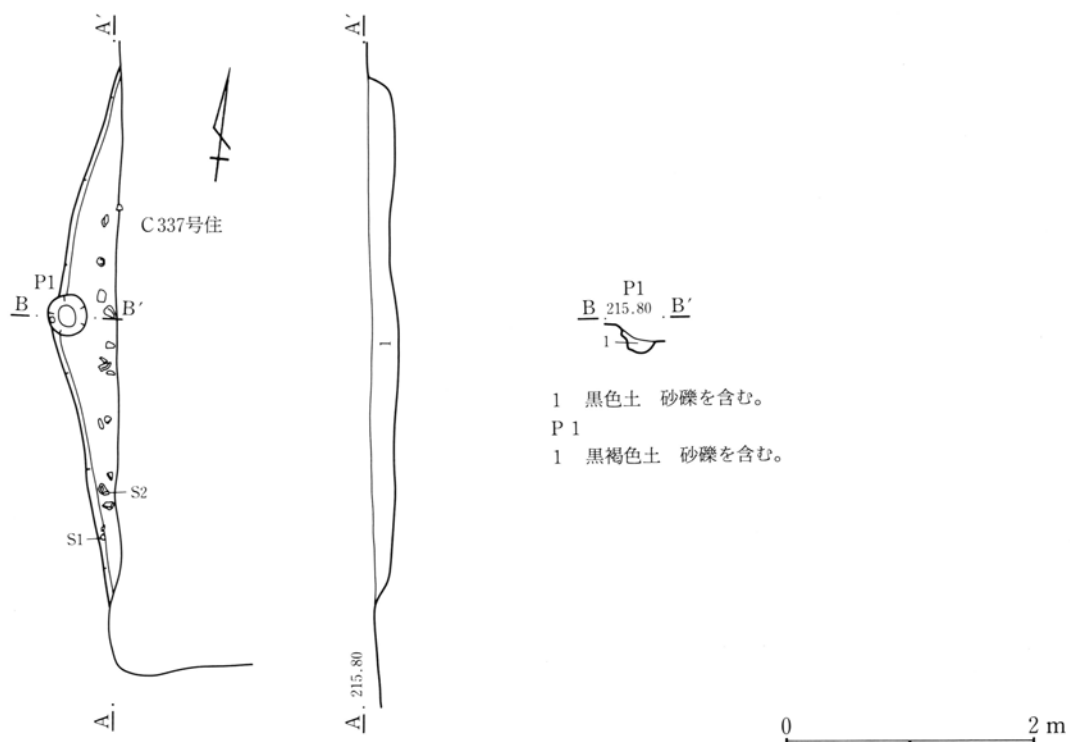
重複 大きくC337号住居跡(古墳時代)に切られており、南はC331号住居跡(古墳時代)に切られている。北壁、西壁もはっきりしない。

埋没土 礫を混入し粗粒。床面 わずかに確認した部分は平坦である。

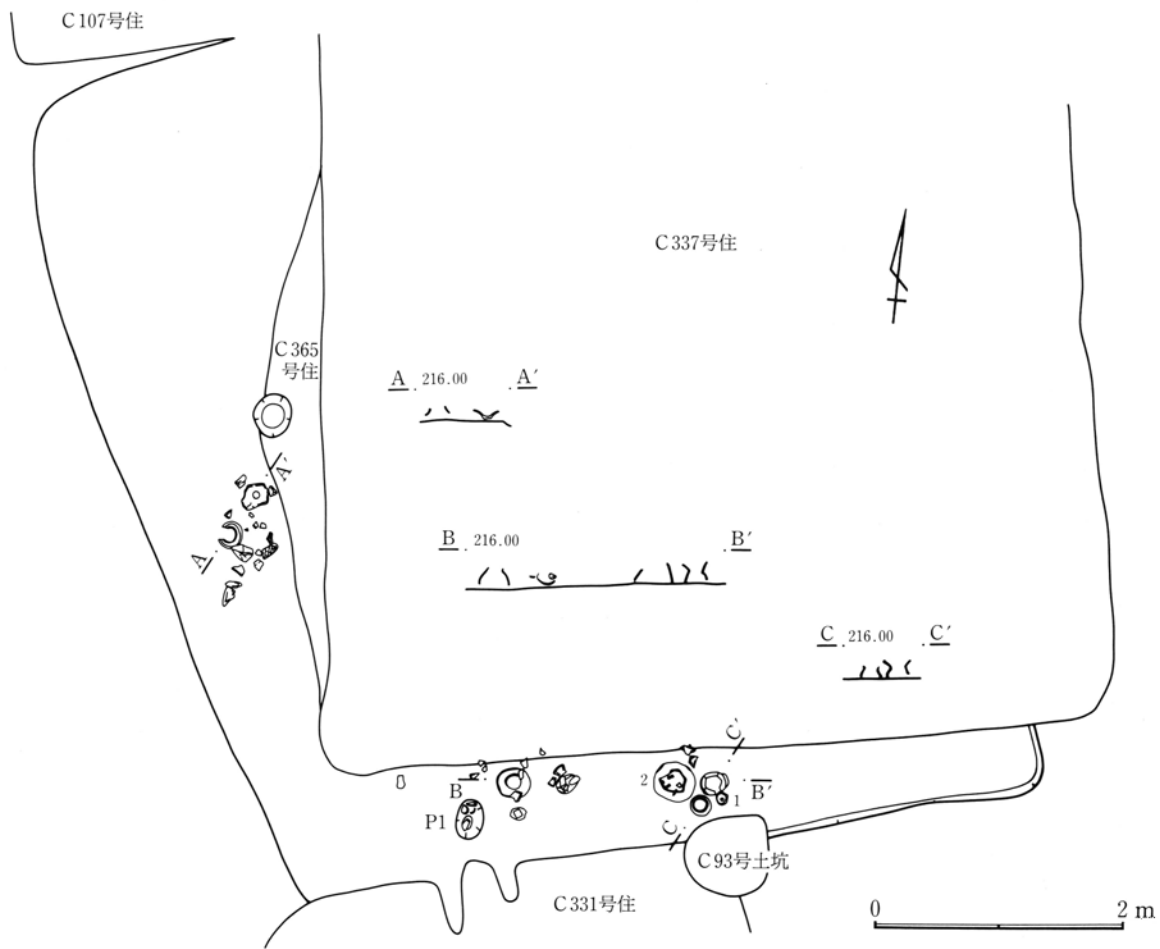
貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 西側列の2本のみ検出した。炉 検出されなかった。

出土遺物 わずかに残った南側と西側において壺、甕が出土している。

調査所見 重複によりほとんど壊されており、南側と西側のわずかな部分のみの調査である。比較的規模の大きな住居と思われるが、掘り込みは極めて浅い。



第321図 C365号住居跡



第322図 C366号住居跡

DS 103号住居跡 (第323~326・583~586図 PL. 60・61・212・213・301~307)

位置 Ct・Da-47・48 形状 隅丸長方形 規模 長辺7.53m、短辺5.34m、壁高0.58m

重複 調査区の北端に位置する。北側に DS 104号住居跡 (古墳時代) が重複する。

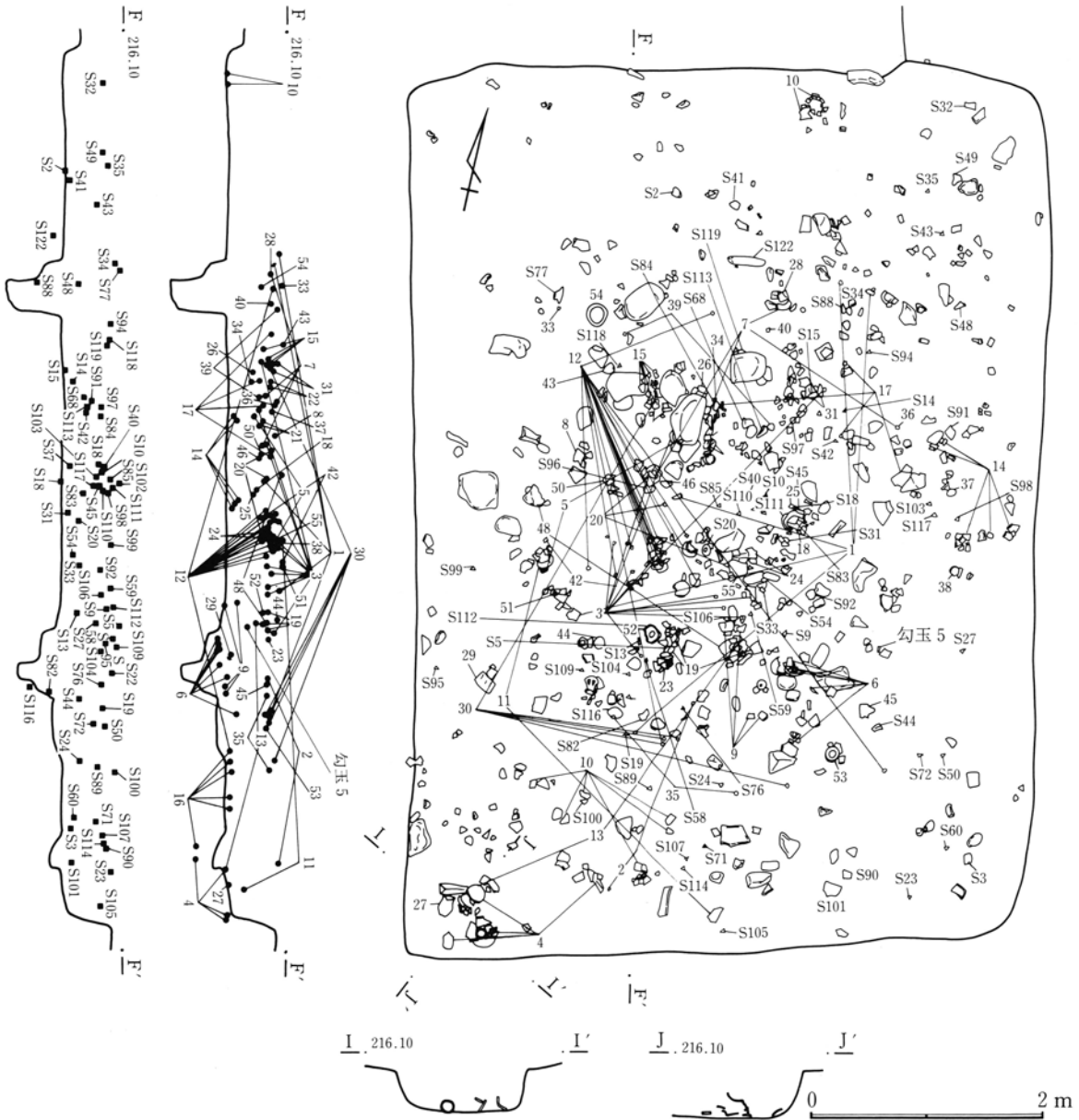
埋没土 地山の礫の混入が多い。 床面 やや凹凸が見られるが、全体的には平坦でかなり締まった部分も見られる。 貯蔵穴 南壁の西より検出された。径約50cmの円形で、深さは25cm程である。

柱穴 支柱穴は P 1~4 と思われ、P 2 を除きいずれも中段を持つ掘り方を呈す。また壁柱穴が、南側を除き 4~5 本掘り込まれている。P 6・7 は入り口施設に関係するものと考えられる。

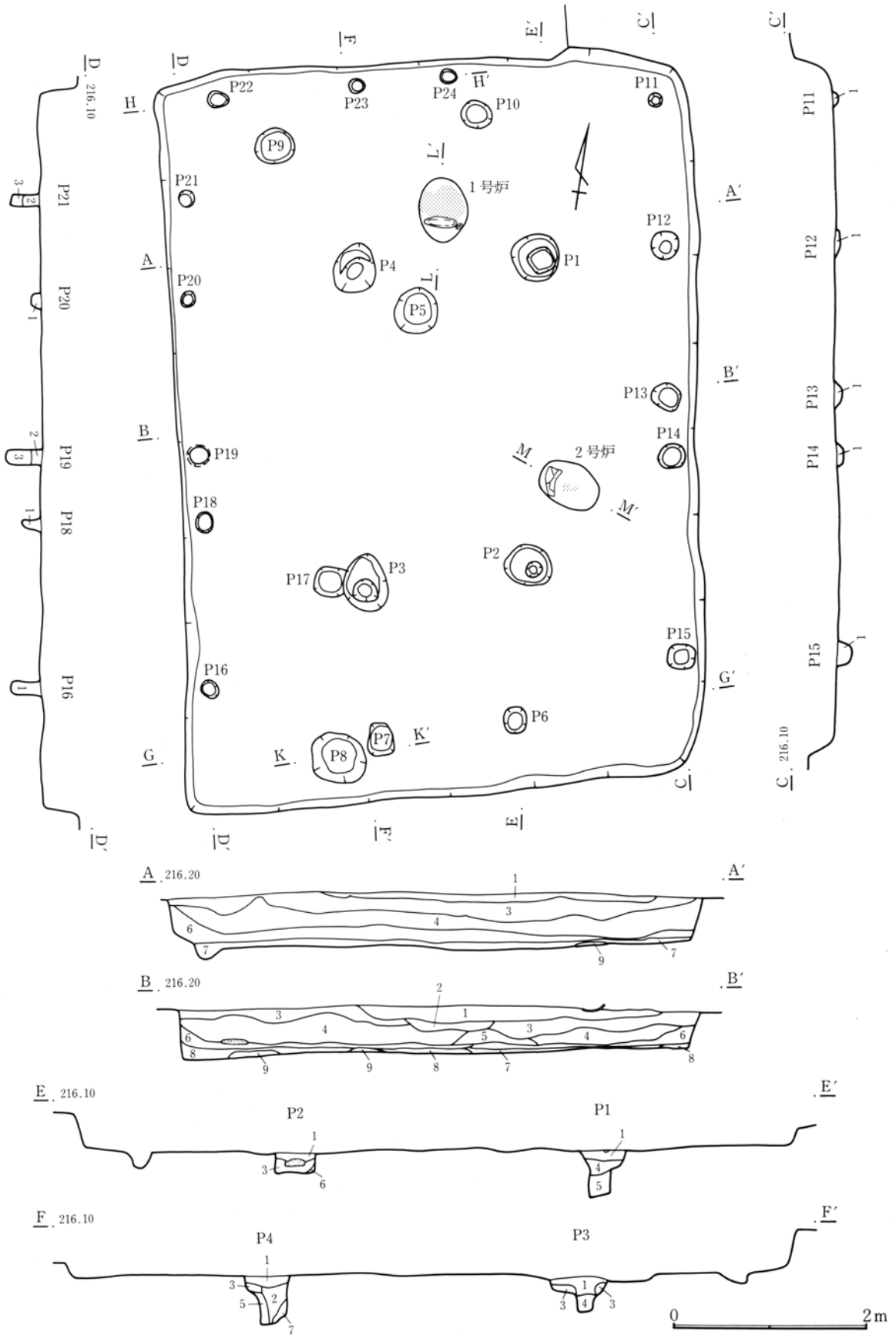
炉 2カ所検出されている。

1号炉 中央北よりに作られている。長円形に床面を掘り下げ、南に長さ35cmの河原石が据えられている。北側には焼土が見られる。

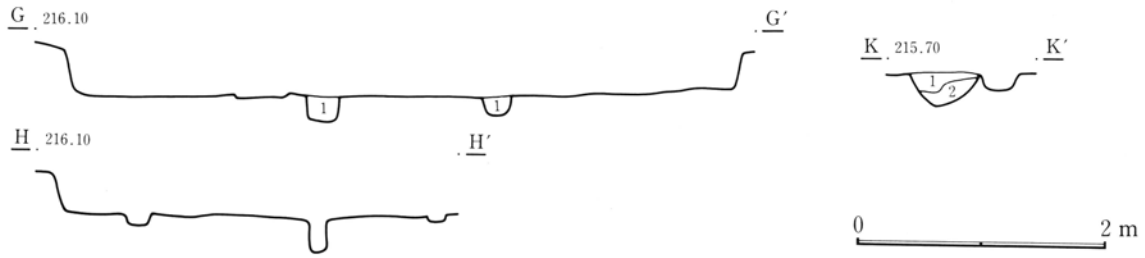
2号炉 中央東よりにあり、長円形の浅い掘り込みの西よりに、長さ30cmの河原石が据えられており、



第323図 DS 103号住居跡(1)

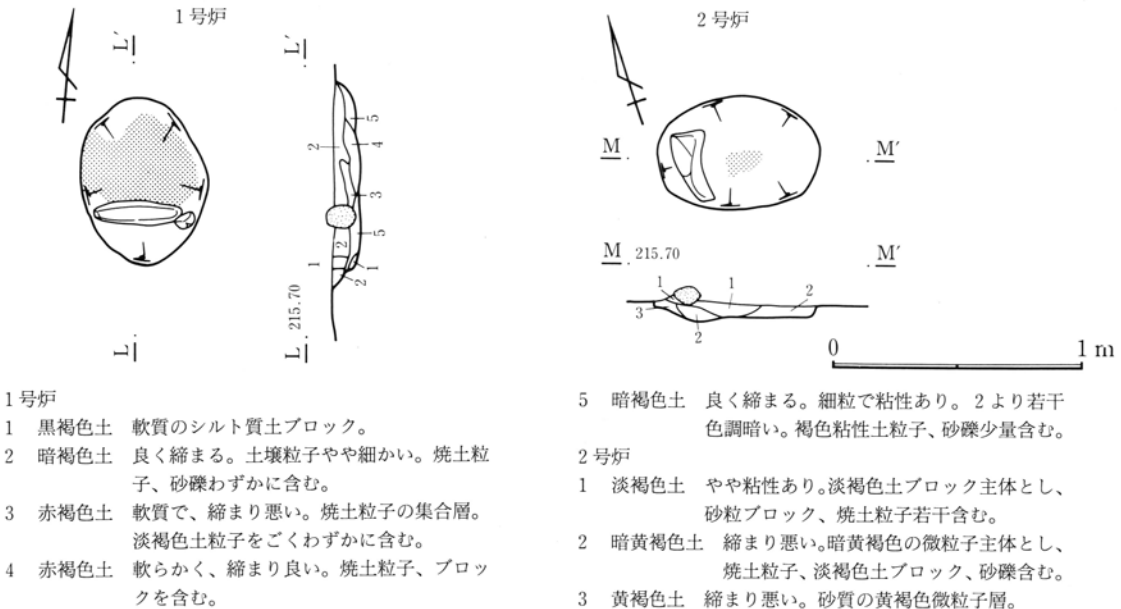


第324图 DS 103号住居跡(2)



- | | |
|--|---|
| <p>1 黒褐色土 やや締まり、淡褐色土ブロック、砂礫わずかに含む。</p> <p>2 黒褐色土 細粒で黒味強い。炭化物、砂礫若干含む。</p> <p>3 暗褐色土 締まり良い。細粒。砂礫ごくわずかに含む。</p> <p>4 淡褐色土 やや締まり良い。砂礫やや多く含む。</p> <p>5 淡褐色土 やや締まり弱い砂質土壌で、均一。砂礫わずかに含む。</p> <p>6 暗褐色土 やや軟質、細粒で、砂礫わずかに含む。</p> <p>7 暗褐色土 良く締まる。わずかに粘性のある黄褐色土ブロック、砂礫わずかに含む。</p> <p>8 暗褐色土 締まった砂質土。7より土壌粒子粗く、砂礫やや多く含む。</p> <p>9 黄褐色土 砂質ながら良く締まる。微細黄褐色粒子を含む。</p> <p>P 1~4</p> <p>1 暗褐色土 締まりよい。砂礫、褐色粘性土若干含む。</p> <p>2 暗褐色土 良く締まる。若干砂質。1より色調暗い。砂礫をごくわずか含む。</p> <p>3 暗褐色土 良く締まる。粘性ややあり。褐色粘性土粒子、砂礫わずかに含む。</p> | <p>4 暗褐色土 締まり良い。やや粘性のある褐色粘性土ブロック、砂礫ごくわずかに含む。</p> <p>5 暗黄褐色土 締まり良い。褐色粘性土ブロック主体とし、粘性のある暗褐色土粒若干混在。</p> <p>6 暗黄褐色土 粒子細かく、シルト質の褐色粒子層。</p> <p>7 暗黄褐色土 締まり悪い。暗黄褐色土粒子と微砂粒の混在層、砂礫わずかに含む。</p> <p>P 6・7</p> <p>1 暗褐色土 砂礫若干含む。粒子細かいが、粘性なし。</p> <p>P 8</p> <p>1 暗褐色土 良く締まる。砂礫、暗黄褐色土粒子少量含む。</p> <p>2 暗褐色土 締まり悪い。暗黄褐色を呈し、砂粒、暗黄褐色土粒子を若干含む。</p> <p>P 11~16・18~21</p> <p>1 暗褐色土 硬く、やや良く締まる。砂礫、暗黄褐色粒子ごくわずか含む。</p> <p>2 暗褐色土 締まり弱い。砂礫、暗黄褐色粒子若干含む。</p> <p>3 褐色土 軟質で締まり悪い。土壌粒子やや細かい。暗黄褐色粒子わずかに含む。</p> |
|--|---|

第325図 DS 103号住居跡(3)



- | | |
|--|--|
| <p>1号炉</p> <p>1 黒褐色土 軟質のシルト質土ブロック。</p> <p>2 暗褐色土 良く締まる。土壌粒子やや細かい。焼土粒子、砂礫わずかに含む。</p> <p>3 赤褐色土 軟質で、締まり悪い。焼土粒子の集合層。淡褐色土粒子をごくわずかに含む。</p> <p>4 赤褐色土 軟らかく、締まり良い。焼土粒子、ブロックを含む。</p> | <p>2号炉</p> <p>5 暗褐色土 良く締まる。細粒で粘性あり。2より若干色調暗い。褐色粘性土粒子、砂礫少量含む。</p> <p>1号炉</p> <p>1 淡褐色土 やや粘性あり。淡褐色土ブロック主体とし、砂粒ブロック、焼土粒子若干含む。</p> <p>2 暗黄褐色土 締まり悪い。暗黄褐色の微粒子主体とし、焼土粒子、淡褐色土ブロック、砂礫含む。</p> <p>3 黄褐色土 締まり悪い。砂質の黄褐色微粒子層。</p> |
|--|--|

第326図 DS 103号住居跡炉

中央部分に焼土がわずかに検出されている。

出土遺物 遺物量は多く、各種の土器が大形の礫と伴に出土している。土器は赤彩の壺、甕、高坏、鉢などが多く、甗、紡錘車等も見られる。

調査所見 北側に重複があるものの、かなり遺存状態は良く、出土遺物も多かった。本址はC 363号住居跡(敷

石住居跡)を壊して作っており、覆土中の礫はこの敷石住居跡のものも多く含まれているものと思われる。

DS 109号住居跡 (第327・587図 PL. 61・214・307)

位置 Ct・Da—50 形状 隅丸長方形 規模 長辺(3.60)m、短辺3.74m、壁高0.14m

重複 調査区の北端にあり、北側を DS 108号住居跡(奈良時代)に切られており、遺存状態は悪い。

埋没土 礫を多く含む粗粒土で埋まるが、きわめて残りは悪く荒れた部分が多い。

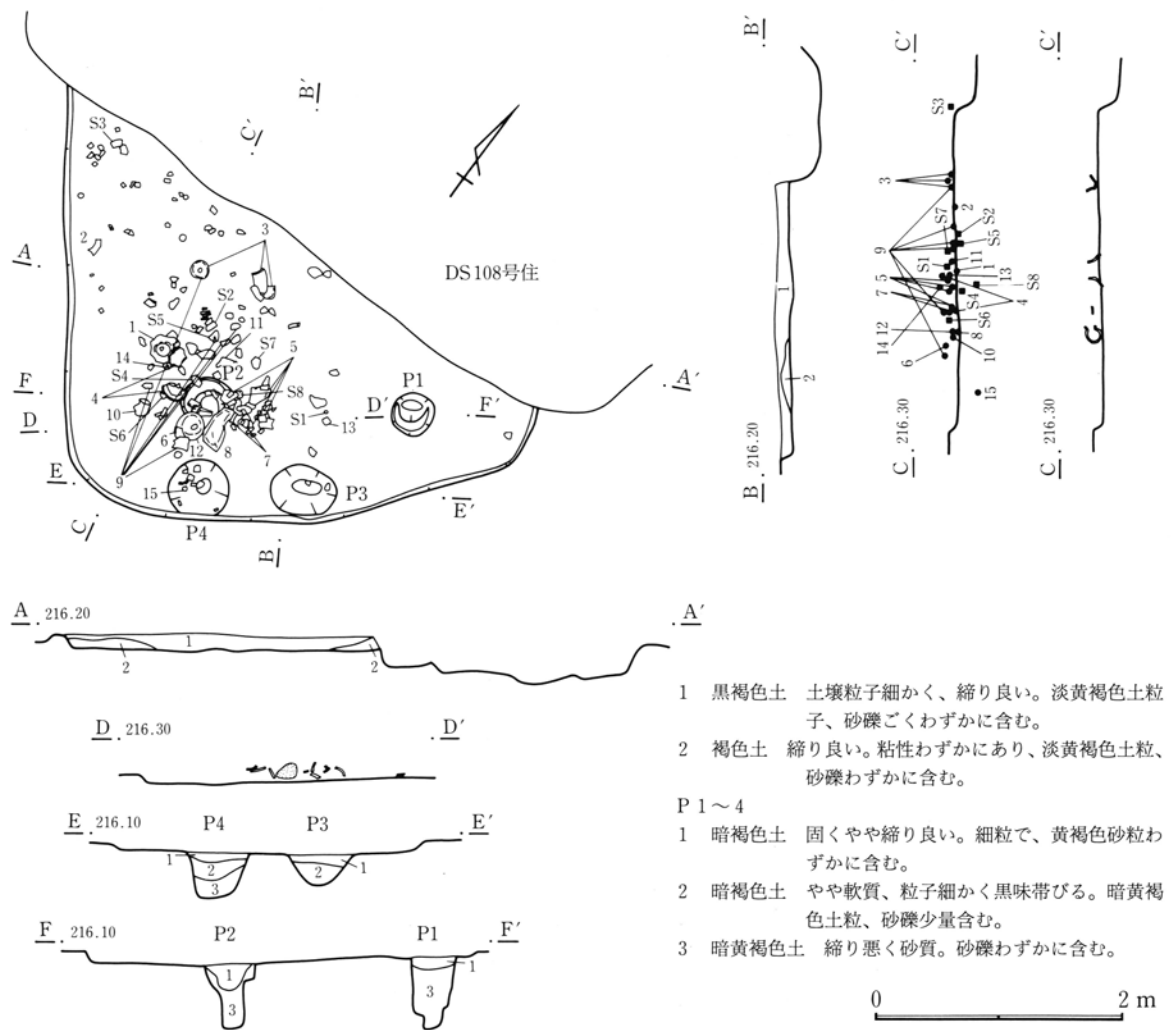
床面 比較的平坦で、中央部分はかなり締まっている。 貯蔵穴 南西よりのP 4が想定される。円形で

深さは約25cmである。 柱穴 4本と思われ、P 1・2が南列と思われるが、北側については壊されている。

炉 検出されなかった。

出土遺物 P 2の周辺にかなり集中して出土している。完形品は少なかったが壺、甕、高坏等の土器の他に紡錘車が2点見られる。

調査所見 北側を大きく壊されており、遺存状態は悪く、全容は不明であるが、出土遺物は少ないながらもまとまったものが見られた。



第327図 DS 109号住居跡

DS110号住居跡 (第328図 PL. 61・308)

位置 Da-49・50 形状 不明 規模 長辺(1.90)m、短辺(1.14)m、壁高0.26m

重複 調査区の北端にあり、北側の大部分は大溝によって切られ、西側にも DS108号住居跡が重複している。

埋没土 礫を含む粗粒土で地山の粘土がブロック状に混入する。

床面 わずかに検出したに過ぎなかったが、かなり平坦な状態である。 貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 P1を検出したが、柱穴かどうかははっきりしない。 炉 検出されなかった。

出土遺物 ほとんど見られなかった。

調査所見 ほとんど切られた状態で、わずかに南東の隅部分を検出したのみである。出土遺物もほとんど無く、全容は不明である。

DS111号住居跡 (第329～332・588～590図 PL. 61・215・216・308～314)

位置 Da・b-45・46 形状 隅丸長方形 規模 長辺(9.72)m、短辺7.12m、壁高0.23m

重複 北東部分には DS99・101号住居跡 (古墳時代) が南側には DS107・C337号住居跡 (古墳時代) が重複する。

埋没土 礫を大量に混入する粗粒土で埋まる。

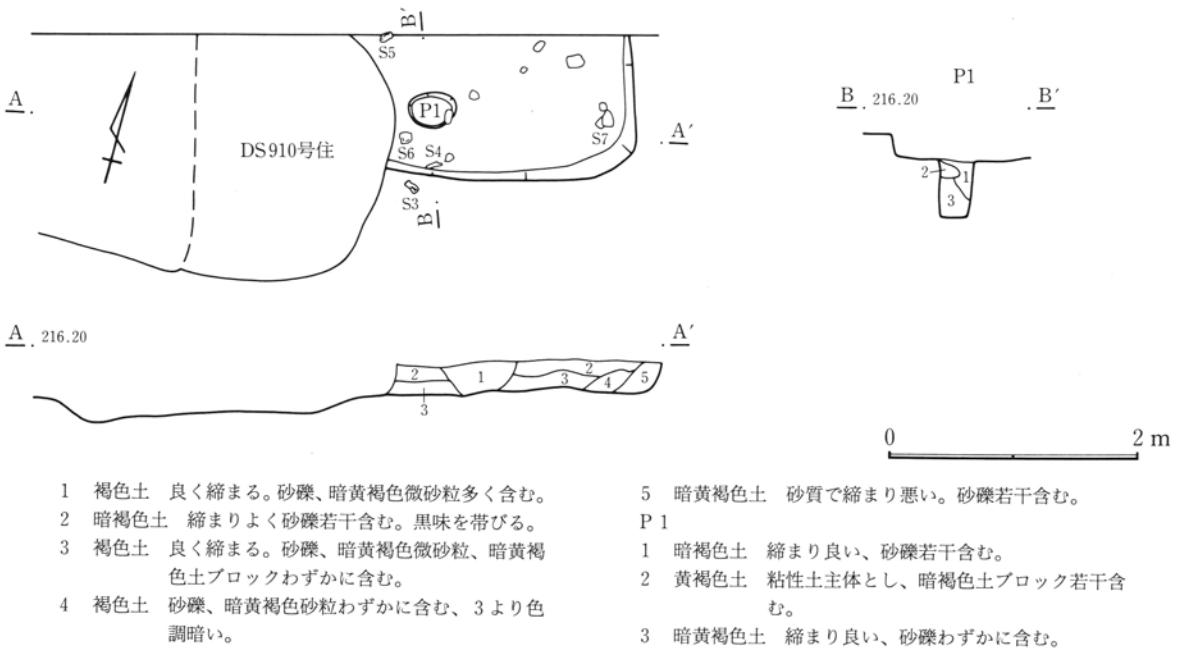
床面 細かな凹凸が見られるが、比較的平坦で中央部分はかなり踏みしめられ状態である。P2の北側に不定形な焼土範囲が2カ所検出されている。 貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 支柱穴は4本で、ほぼ対角線上に掘り込まれている。いずれも径は50～70cm、深さは約70cmである。掘り方は下がかなり小さくなる形状である。

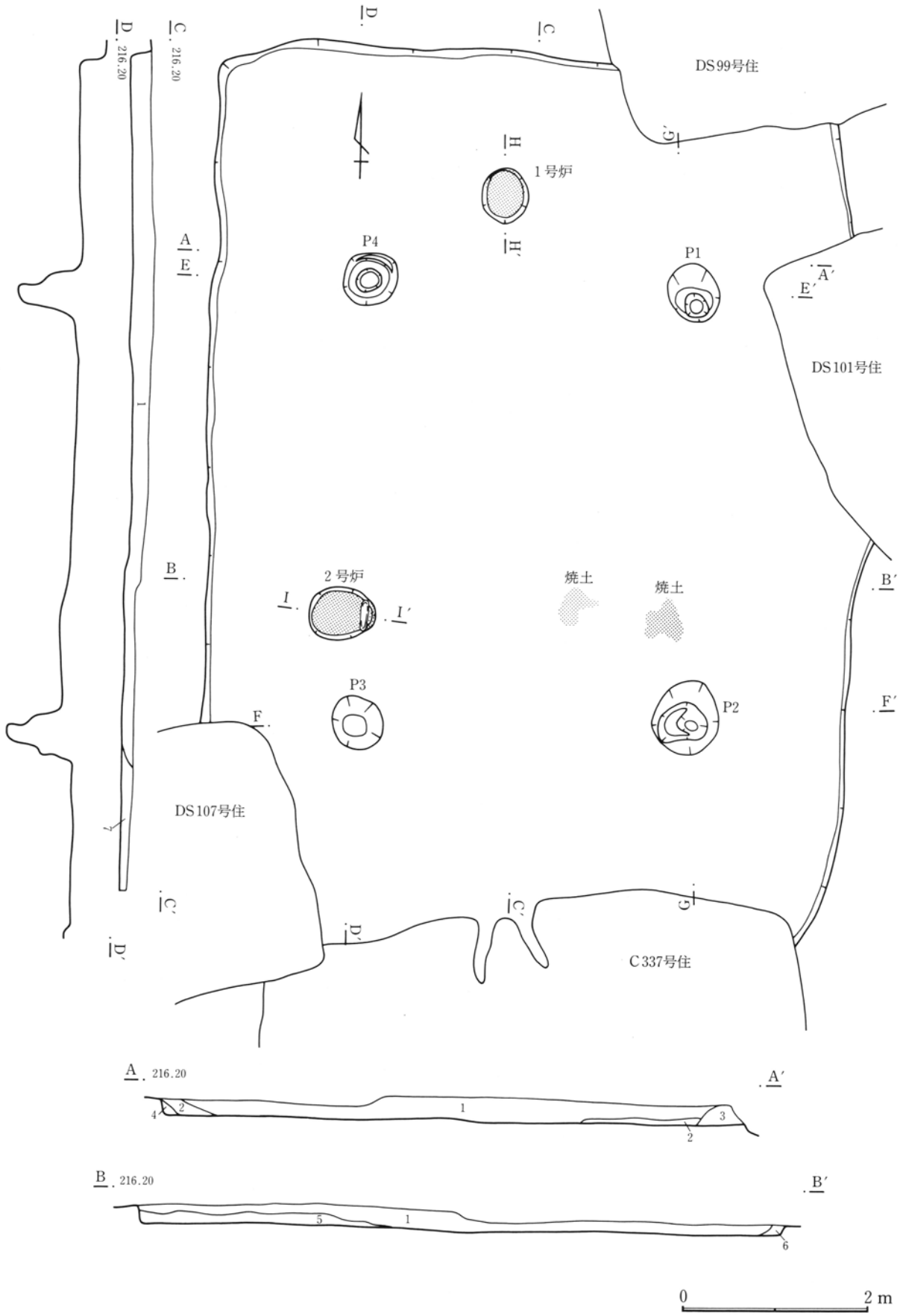
炉 明確なものは2カ所を検出した。

1号炉 中央北よりに作られている。長円形の浅い掘り込みを持つ地床炉である。炉石は見られず、焼土が全体に検出されている。

2号炉 住居の西寄り、P3の北側約1m程の所に位置する。長円形に浅く掘り込まれ、東に寄って棒状

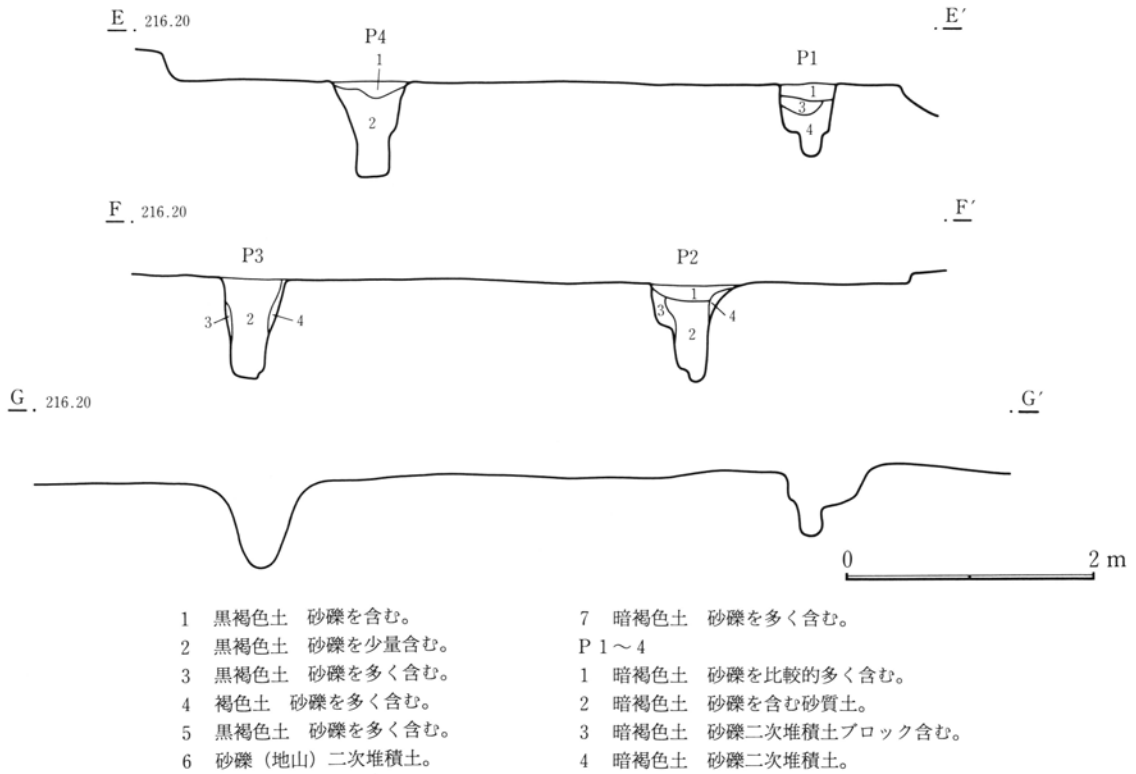


第328図 DS110号住居跡

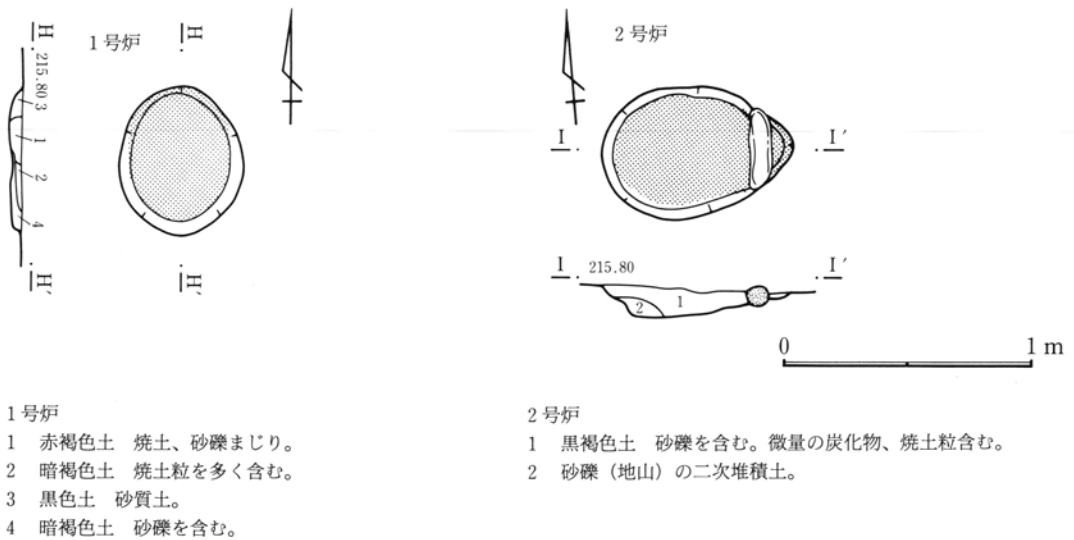


第330图 DS 111号住居跡(2)

第3章 遺 構



第331図 DS 111号住居跡(3)

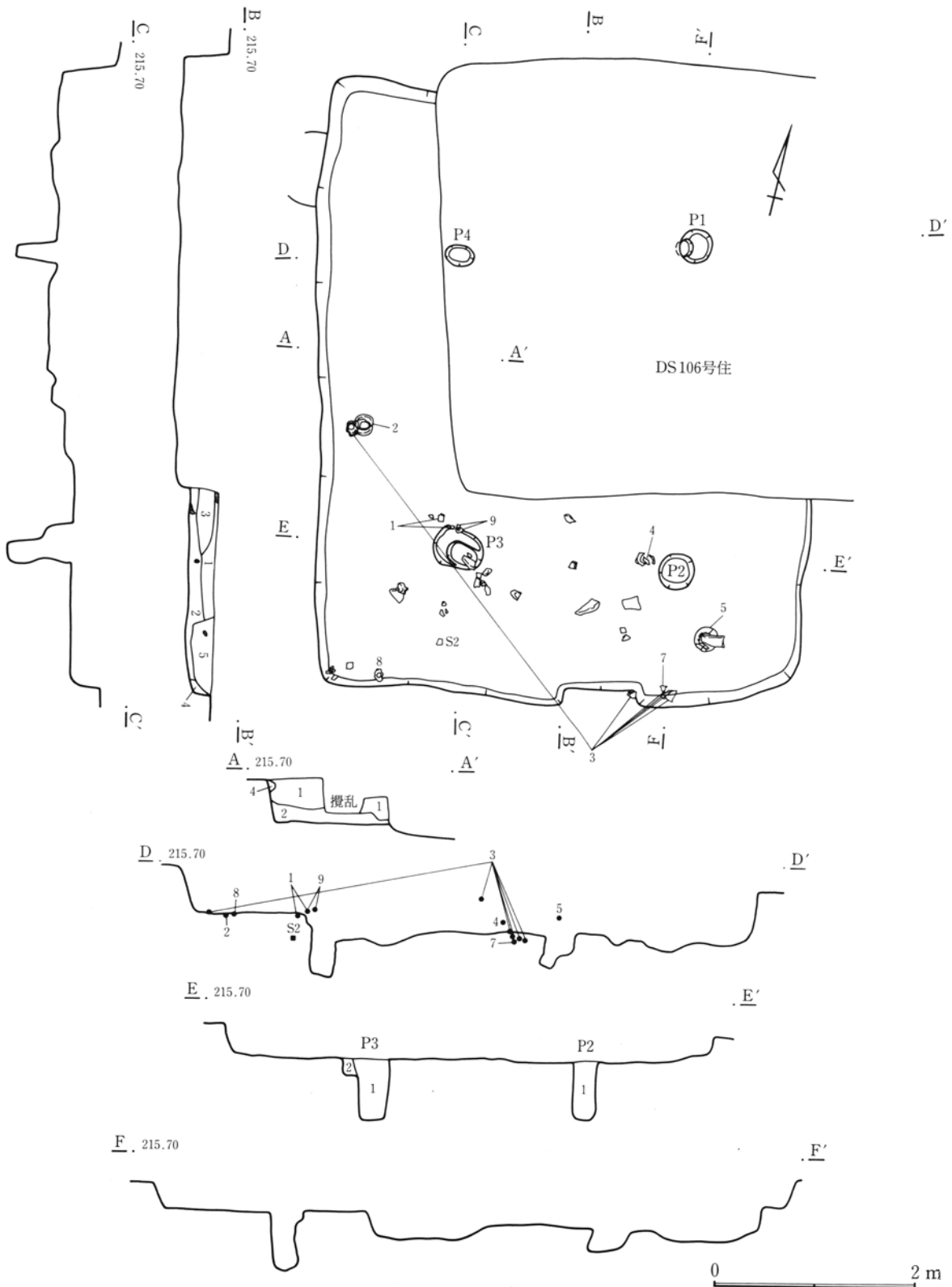


第332図 DS 111号住居跡炉

の長さ30cm程の河原石が据えられている。石の西側に焼土が検出されている。

出土遺物 かなりの大形礫と伴に多くの土器類が出土している。壺、甕、高坏、鉢、甑、小型土器の他に紡錘車が3点見られた。

調査所見 主軸方向をほぼ南北にとるかなり大形の住居で、遺物は投げ込まれたような状況が窺え大形の礫を伴い出土量も多かった。



- | | |
|----------------------------|---------------------|
| 1 黒褐色土 砂礫を多く含む。 | P 2・3 |
| 2 暗褐色土 砂礫、褐色土粒を含む。 | 1 黒褐色土 砂礫を含む。 |
| 3 暗褐色土 砂礫、褐色土粒を含む。2より砂礫多い。 | 2 暗褐色土 砂礫、褐色粘性土粒含む。 |
| 4 褐色土 褐色粘性土を多く含む。 | |
| 5 黒褐色土 砂礫を含む。やや粘性あり。 | |

第333図 DS112号住居跡

DS112号住居跡 (第333・591図 PL. 61・62・214・314)

位置 Da・b-41 形状 隅丸長方形 規模 長辺5.80m、短辺4.82m、壁高0.45m

重複 北側から東側にかけて DS106号住居跡 (古墳時代)、DS102号住居跡 (平安時代) に切られる。

埋没土 礫を含むがさほど多くはなく、下層はやや粘性を示す土で埋まる。

床面 かなりの部分は壊されているが、残った部分に関しては平坦で締まりも良かった。

貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 主柱穴4本を検出した。P1および4については重複によって上位部分は失われている。深さは約60cmを測り、ほぼ垂直に掘り込まれている。

炉 検出されなかった。

出土遺物 遺存部分が少ないために少なかった。壺、甕、高坏、片口等が散在して検出されている。

調査所見 炉をはじめ、切られている部分が多かったが、壁、床面はしっかりした状態の住居である。

2. 方形周溝墓

調査区内において2基が検出されているが、共に重複により明確な形状、出土遺物の確定には至らなかった。特にC2号方形周溝墓については、弥生時代の住居の覆土中に掘り込まれた部分が多く、調査の時点で認定が遅れてしまった。このため、溝の一部は推定部分も含まれる。また、出土遺物は重複のある部分については混乱を避けるために取り上げていない。

C1号方形周溝墓 (第334・592図 PL. 62)

位置 Ch・i-34・35 形状 方形 規模 縦11.2m、横(10.4)m

重複 本址を切る遺構はないが、部分的に縄文時代、および弥生時代の住居跡を切って作られているために、重複部分については溝の上端は明確には確認できなかった。埋没土 小礫混入する黒褐色土。

出土遺物 ほとんど見られなかったが、北側の溝において、ミニチュア土器、蓋等が出土している。

調査所見 溝幅は1m前後であるが、北側重複部分に関しては2m以上を測る。溝はほぼ方形に廻るが、東側については、重複遺構もあったが、溝は確認されなかった。主体部についても掘り込み等は確認できなかった。

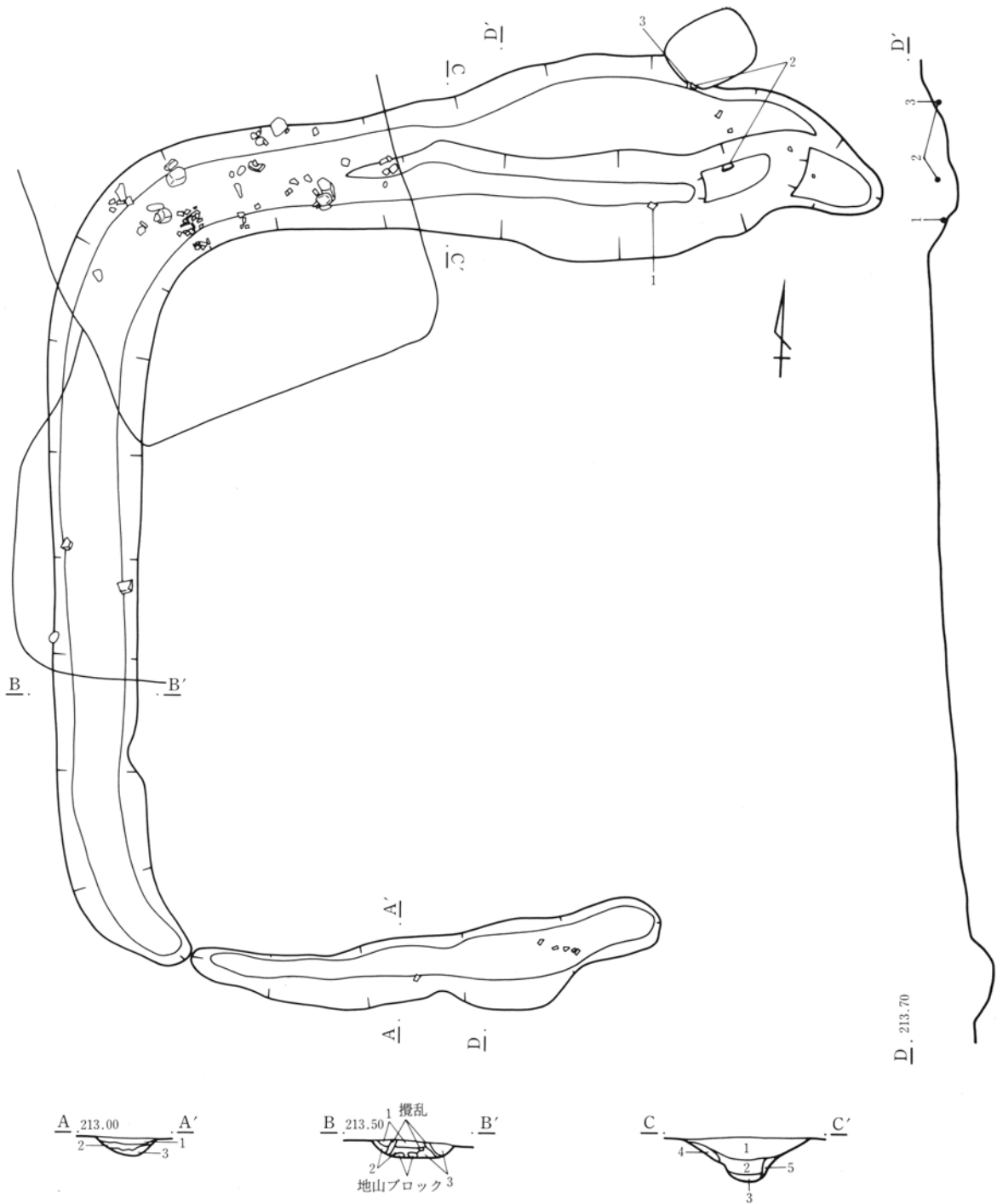
C2号方形周溝墓 (第335・593図 PL. 62・314)

位置 Cc・d-30・31 形状 方形 規模 縦12.0m、横(10.4)m

重複 本址を切るものとしては、北西部分にC92号住居跡 (古墳時代) が重複する。

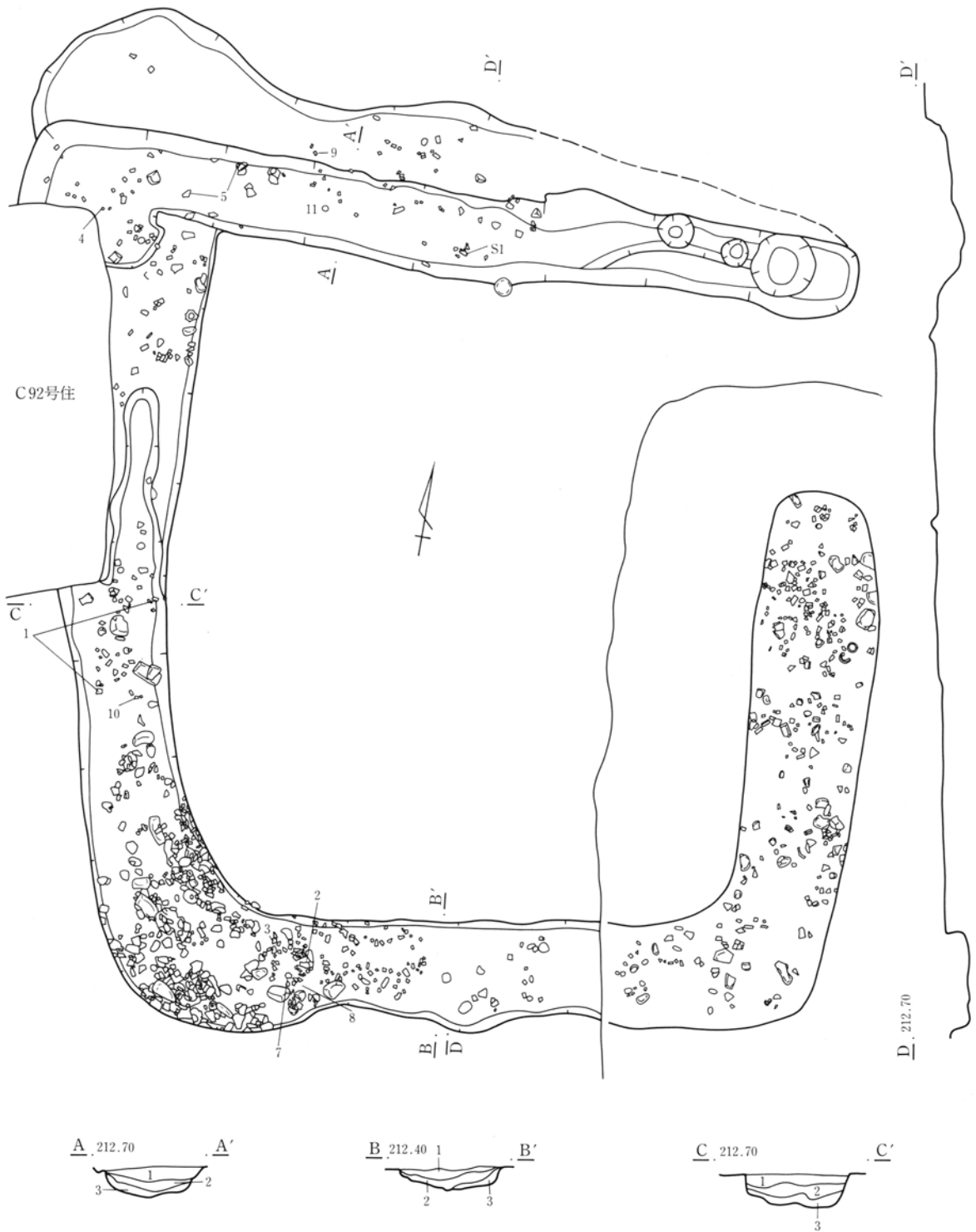
埋没土 小礫含む黒褐色土。出土遺物 重複のなかった南側、西側部分について見ると、かなり大形の礫を伴って、壺、甕、高坏等の破片が見られた。

調査所見 当初、本址の存在に気づかず調査を進めてしまったため、弥生の住居との重複部分においては混乱してしまった部分もある。形状はほぼ方形で、北東部分が切れている。溝幅は1~2mで、深さは30cm前後である。形状はC1号方形周溝墓に比べると、かなり正方形に近い形で、溝が巡るものと思われる。



- 1 暗褐色土 縮まりよく、粘性なし。小礫、地山土を多く含む。両端は混入物比較の少ない。
- 2 暗褐色土 縮まりあり、粘性弱く微小礫、地山土を若干含む。やや明色。
- 3 褐色土 縮まり弱く、粘性なし。地山土多く含む。
- 4 黄褐色土 縮まりあり、粘性弱い。地山土多く含む。
- 5 黄褐色土

第334図 C1号方形周溝墓



- 1 黒褐色土 若干の砂礫を含み、やや粘性持つ。
- 2 暗褐色土 砂礫及び褐色粘性土若干含み締まる。
- 3 明褐色土 2に似るが若干の炭化物含む。

第335図 C2号方形周溝墓

3. 土 坑

弥生時代の土坑としたものは計11基である。基本的に土器を出土しているものを取り上げた。その分布はかなりまばらな状況である。C79・87・142号土坑は、いずれも一辺1～1.5mの方形で深さは30cm前後である。ピット等は検出されず、若干の土器片が出土している。はっきりとした性格は不明である。また、C38号土坑の出土土器は時代的には古墳時代初頭に位置づけられるが、弥生時代に含めて報告する。

C3号土坑(第336図 PL. 65)

位置 Ca-35 形状 円形 規模 長径0.62m、短径0.58m、深さ0.47m

重複 C29号住居跡(古墳時代)とC50号住居跡(弥生時代)と接する。

埋没土 砂礫含む黒褐色土。 出土遺物 礫と伴に弥生土器の小破片が出土。

調査所見 C50号住居跡(弥生時代)の南西壁に接して位置する。底部で出土した礫2点は河原石で使用痕等は見られない。掘り方はしっかりとしており、ほぼ円形で底面が小さくなる。

C4号土坑(第336図 PL. 65)

位置 Cc-32 形状 長円形 規模 長径1.92m、短径0.92m、深さ0.18m

重複 C165号住居跡(縄文時代)を切る。 埋没土 砂礫、黄褐色の粘質土含む。

出土遺物 礫と伴に弥生土器の小破片が出土している。

調査所見 上面はかなり削られており、遺存状態は悪い。

C38号土坑(第336・594図 PL. 68)

位置 Cc-27 形状 長円形 規模 長径0.45m、短径0.35m、深さ0.18m

重複 なし。 埋没土 炭化物の混入見られる。

出土遺物 上層において台付甕の台部片が横向きに出土している。

調査所見 小型の土坑である。出土遺物は古墳時代初頭に比定できる。

C79号土坑(第336・594図 PL. 71・314)

位置 Cl-41 形状 方形 規模 長径1.85m、短径1.85m、深さ0.32m

重複 南部分をC264号住居跡(古墳時代)に切られ、北側はC240号住居跡(弥生時代)に接する。

埋没土 小礫多く含む粗粒。 出土遺物 蓋、壺、甕の胴部破片が見られる。

調査所見 ほぼ方形を呈し壁はほぼ垂直に掘り込まれる。中央部分に土器片と小礫が集中して検出されている。土器はかなり浮いた状態のものが多く、小礫は円形に敷いたような状況が看取される。

C87号土坑(第336・594図 PL. 72)

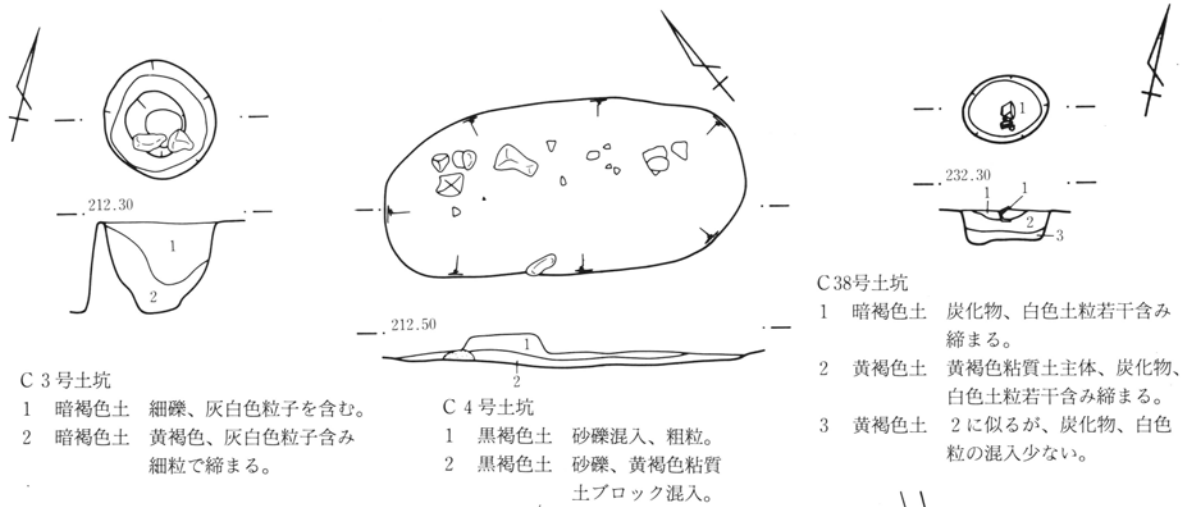
位置 Cl-41 形状 方形 規模 長径1.55m、短径(1.50)m、深さ0.35m

重複 北側をC241号住居跡(古墳時代)に、南東隅をC251号住居跡(平安時代)に切られ、西側部分をC240号住居跡(弥生時代)に切られている。 埋没土 礫を多く含む、地山の砂礫土混入する。

出土遺物 甕の口縁部が出土している。

調査所見 ほぼ方形を呈す。重複で壊されている部分が多い。南に位置するC87号土坑と類似している。

第3章 遺 構



C 3号土坑

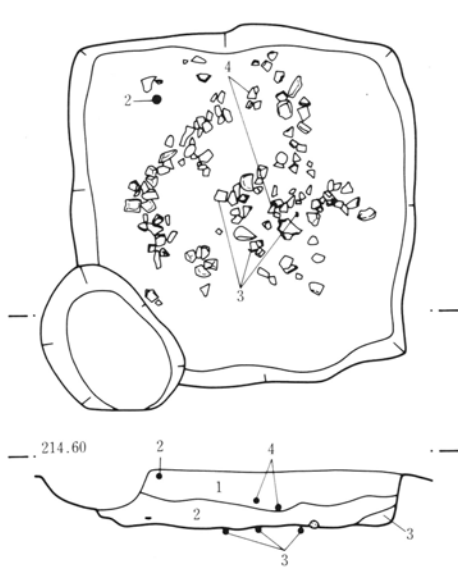
- 1 暗褐色土 細礫、灰白色粒子を含む。
- 2 暗褐色土 黄褐色、灰白色粒子含み細粒で締まる。

C 4号土坑

- 1 黒褐色土 砂礫混入、粗粒。
- 2 黒褐色土 砂礫、黄褐色粘質土ブロック混入。

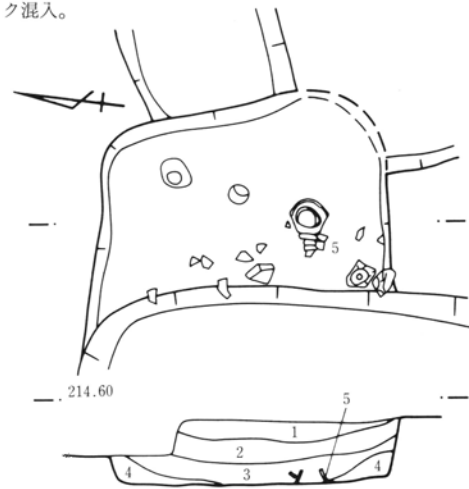
C 38号土坑

- 1 暗褐色土 炭化物、白色土粒若干含み締まる。
- 2 黄褐色土 黄褐色粘質土主体、炭化物、白色土粒若干含み締まる。
- 3 黄褐色土 2に似るが、炭化物、白色粒の混入少ない。



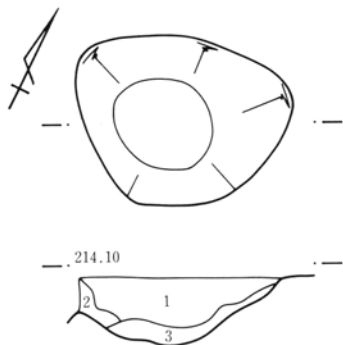
C 79号土坑

- 1 黒褐色土 砂礫、黄褐色粘質土粒子多く含む。
- 2 黒褐色土 砂礫の混入少なく、細粒。
- 3 黄褐色土 地山黄色砂粒を多く含む。



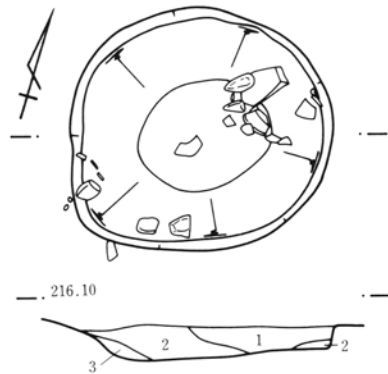
C 87号土坑

- 1 暗褐色土 砂礫を含み、粗粒。
- 2 暗褐色土 礫の混入多く、地山黄色砂粒含む。
- 3 暗褐色土 2に近似、礫の混入少なく黒味呈す。
- 4 暗褐色土 地山黄色砂礫の混入多く、色調やや明るい。



C 89号土坑

- 1 黒褐色土 砂礫をやや多く含む。
- 2 暗褐色土 砂礫土、小石若干含む。
- 3 茶褐色土 砂礫、小石、黄褐色粒子多く含む。



C 138号土坑

- 1 暗褐色土 粒子粗い。黒色土粒若干混在し、砂礫わずかに含む。
- 2 暗褐色土 粒子粗い。色調、土壌とも均一、砂礫や多く含む。
- 3 黒色土 粒子細かい。黒褐色土粒、砂礫若干含む。

0 1 m

第336図 土坑(1)

C 89号土坑 (第336図 PL. 73)

位置 Ci-42 形状 長円形 規模 長径1.15m、短径0.90m、深さ0.35m

重複 C 261号住居跡(弥生時代)の北東隅に接して掘り込まれている。

埋没土 礫を混入し粗粒。 出土遺物 小片がわずかに見られるのみである。

調査所見 掘り方はかなりしっかりしており、断面は鍋底状を呈す。

C 138号土坑 (第336図 PL. 78)

位置 Ct-48 形状 円形 規模 長径1.45m、短径1.30m、深さ0.20m

重複 DS 103号住居跡(弥生時代)の南西隅に重複する。 埋没土 砂礫、地山の粘質土ブロック混入。

出土遺物 小破片がわずかに見られた。

調査所見 弥生の住居と重複しており、掘り方がはっきりせず、上部は大きく削られている。住居と関連する可能性もある。

C 139号土坑 (第337図 PL. 79)

位置 Ct-47 形状 長円形 規模 長径1.25m、短径0.90m、深さ0.20m

重複 DS 103号住居跡(弥生時代)の南に重複する。 埋没土 砂礫、および地山の粘質土ブロックを混入。

出土遺物 小破片がわずかに出土している。

調査所見 弥生時代の住居と重複しており、上部は削られている。底面の形状はやや浅い鍋底状を呈す。住居施設の一部の可能性もある。

C 141号土坑 (第337図 PL. 79・314)

位置 Ct-47 形状 円形 規模 長径1.10m、短径(0.80)m、深さ0.20m

重複 DS 103号住居跡の南側に位置する。 埋没土 砂礫、地山粘質土を混入する。

出土遺物 小破片がわずかに見られた。

調査所見 上部を住居によって削られている。土坑としたが、上部は削られており、底面の形状はやや浅い鍋底状を呈す。C 139号土坑と近似する。

C 142号土坑 (第337図 PL. 79)

位置 Cs-44 形状 方形 規模 長径1.25m、短径1.15m、深さ0.15m

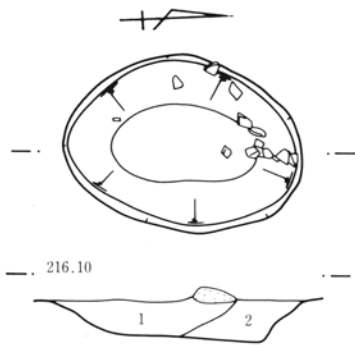
重複 南側をC 336号住居跡(弥生時代)に切られ、北東部分はC 333号住居跡(奈良時代)に切られている。

埋没土 小礫を多く混入する粗粒土で埋まる。 出土遺物 やや大きな礫と若干の土器の小破片が出土しているのみである。

調査所見 ほぼ方形を呈し、底面は平坦である。規模、形状がC 79・87号土坑と似ており、同様な性格を持つものと思われる。

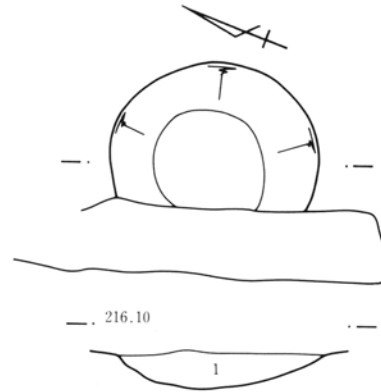
C 183号土坑 (第337図 PL. 84)

位置 Cs-46 形状 円形 規模 長径0.70m、短径0.65m、深さ0.40m



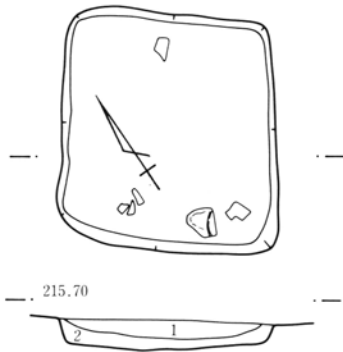
C139号土坑

- 1 黒褐色土 粒子粗く砂礫多く含む。縮り弱い。上層部分に炭化物若干混入。
- 2 暗褐色土 粗粒、黒褐色土粒、砂礫わずかに含む。縮り弱い。



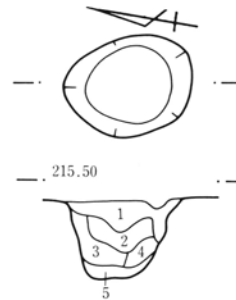
C141号土坑

- 1 暗褐色土 縮り良くやや砂質、褐色土粒、砂礫、炭化物粒子若干含む。



C142号土坑

- 1 暗褐色土 砂礫を含む。黄褐色土粒少量含む。
- 2 暗褐色土 砂礫、黄褐色粘質土粒少量含む。



C183号土坑

- 1 暗褐色土 黄褐色粘質土ブロックわずかに混在し、小礫わずかに含む。
- 2 暗褐色土 暗褐色土ブロックわずかに混在、砂礫若干含む。
- 3 褐色土 黄褐色粘質土ブロック、砂礫やや多く含む。
- 4 黄褐色土 褐色土ブロック少量、砂礫やや多く含む。
- 5 黄褐色土 粒子細かく粘性のある黄褐色粘質土。

0 1 m

第337図 土坑(2)

重複 上部をC337号住居跡(古墳時代)に削られている。 **埋没土** 礫を混入する粗粒土で埋まる。

出土遺物 見られなかった。

調査所見 C336号住居跡(弥生時代)の中にあり、住居施設の可能性もある。

第4章 出土遺物

第1節 縄文土器

1. 住居跡出土遺物

調査区内において出土した縄文土器の総点数は、住居跡、土坑等の遺構より出土したものの約10,000点、遺構外出土のもの約8,200点である。これらの土器は縄文前期前半から後期後半にかけて見られるが、その多寡を観察すると、明らかに変化が見られる。これは当然各時代毎の遺構の増加、減少と対応しているが、これらの平面分布を見ると明らかな変化が窺える。このことについては、後述する事としたい。

ここに記載した土器は各遺構内より出土したものの内、器形の復元が可能なもの、施文の判別可能なもの、時期の判断に必要と考えられるものであり、すべてではないことを明記しておく。

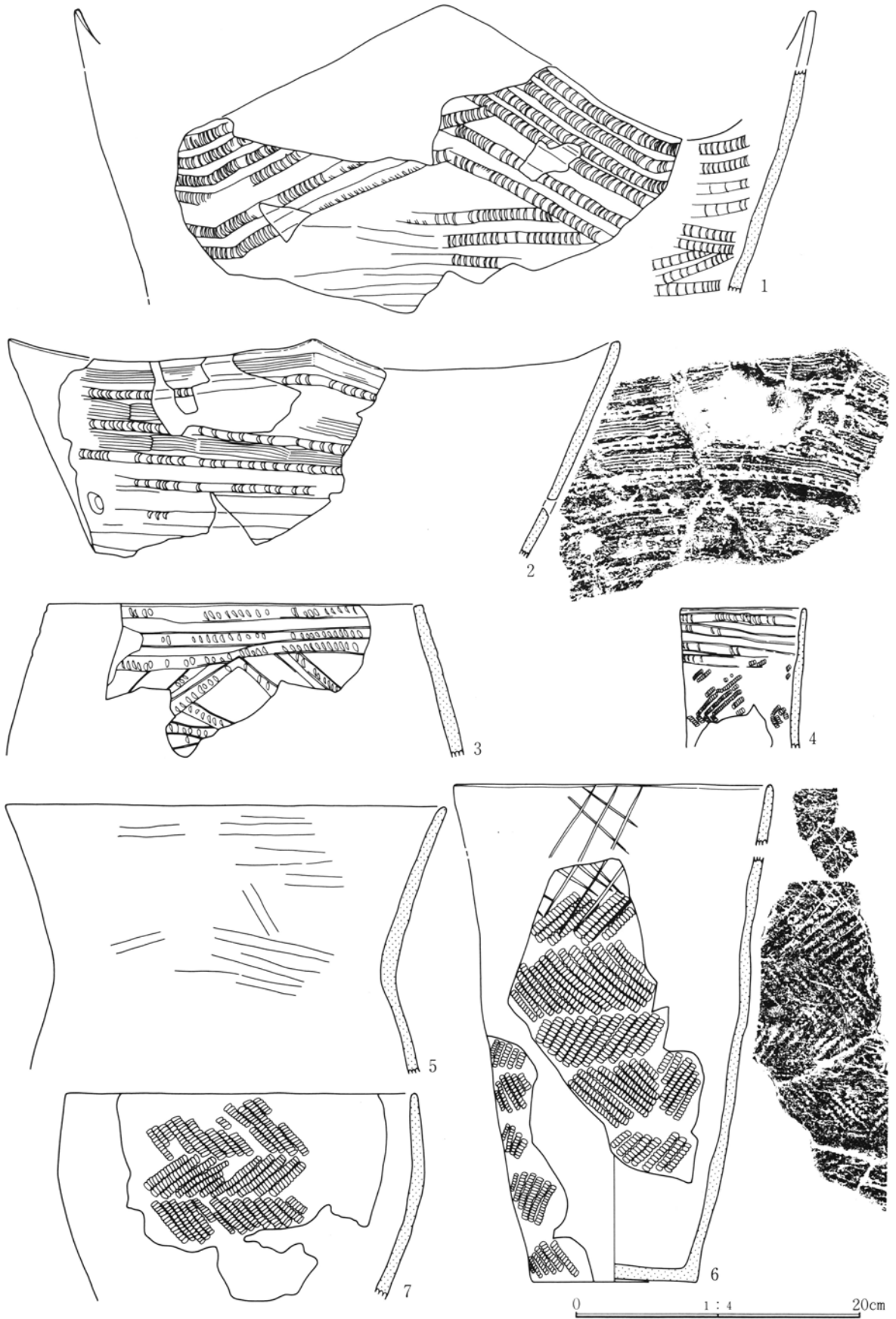
土器は前期から後期にかけて見られ、以下のとおり分類した。なお群馬県内の有尾式土器については議論のある中で、判断は後に譲ることとし、本稿では（いわゆる有尾系）として記述しておく。

- 第I群 前期前半～中葉の土器群（花積下層、関山、黒浜（有尾系）式に相当する。）
- 第II群 前期後半の土器群（諸磯、十三菩提式に相当する。）
- 第III群 中期初頭から前半の土器群（五領ケ台、阿玉台、勝坂式に相当する。）
- 第IV群 中期後半の土器群（加曾利E式に相当する。）
- 第V群 後期初頭から中葉の土器群（称名寺、堀之内、加曾利B式に相当する。）
- 第VI群 後期後半の土器群（曾谷（高井東式）に相当する。）

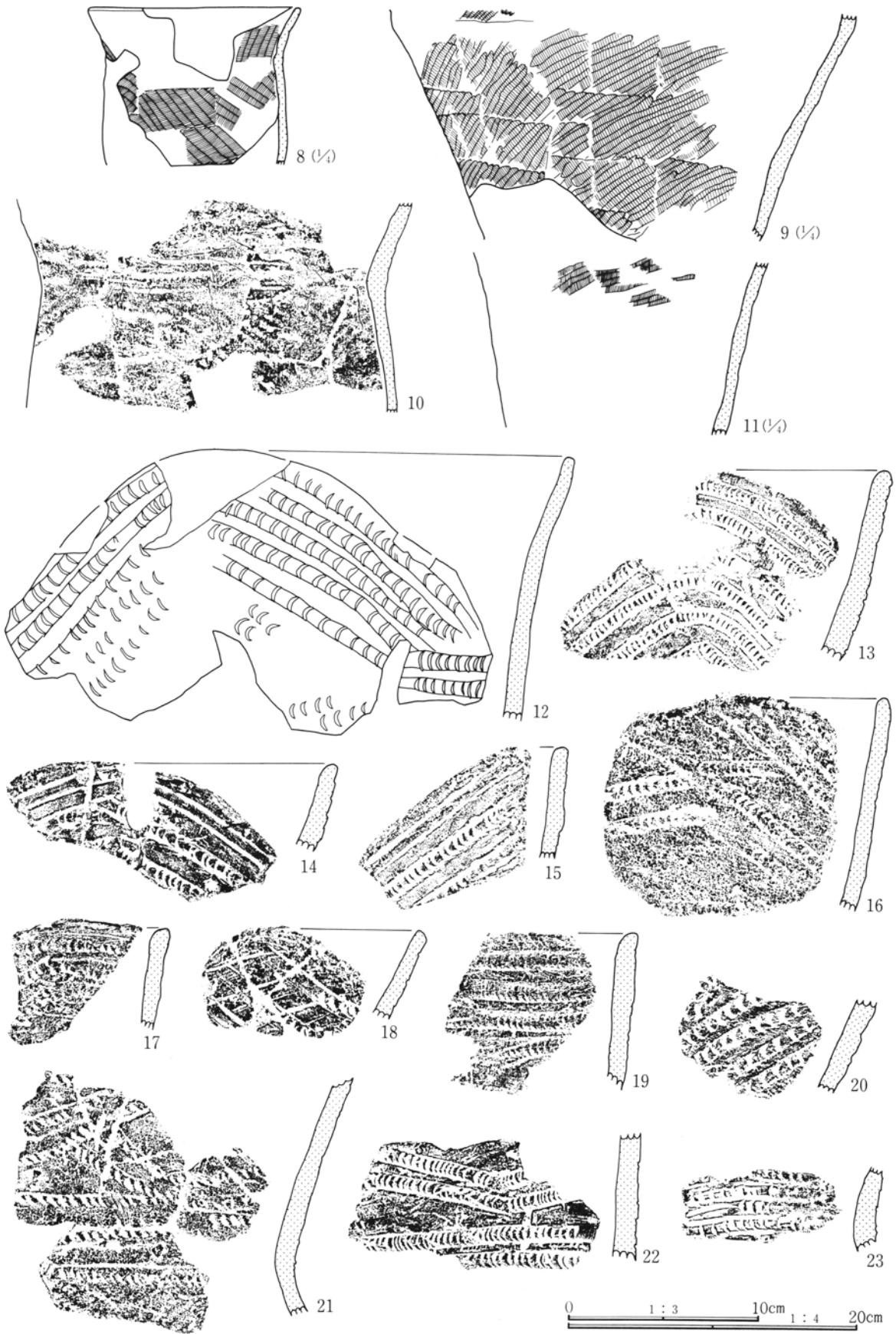
C30号住居跡出土遺物（第338～340図 PL. 96・97）

出土土器は総点数758点で第I群を主体とする。部位別点数は口縁部46点、胴部697点、底部15点である。土器は住居範囲と認定した範囲の北側部分に集中して出土した。かなり風化して脆弱なものが多く、図示し得たものは次に示す46点である。口縁部文様帯部分、器形の復元可能なもの、および底部片を抽出した。口縁部文様は連続爪形文による菱形文を描出したものが多く、器形も4単位の波状を呈すものが目立つ。出土遺物から本址の時期は前期中葉黒浜式期（いわゆる有尾系）である。

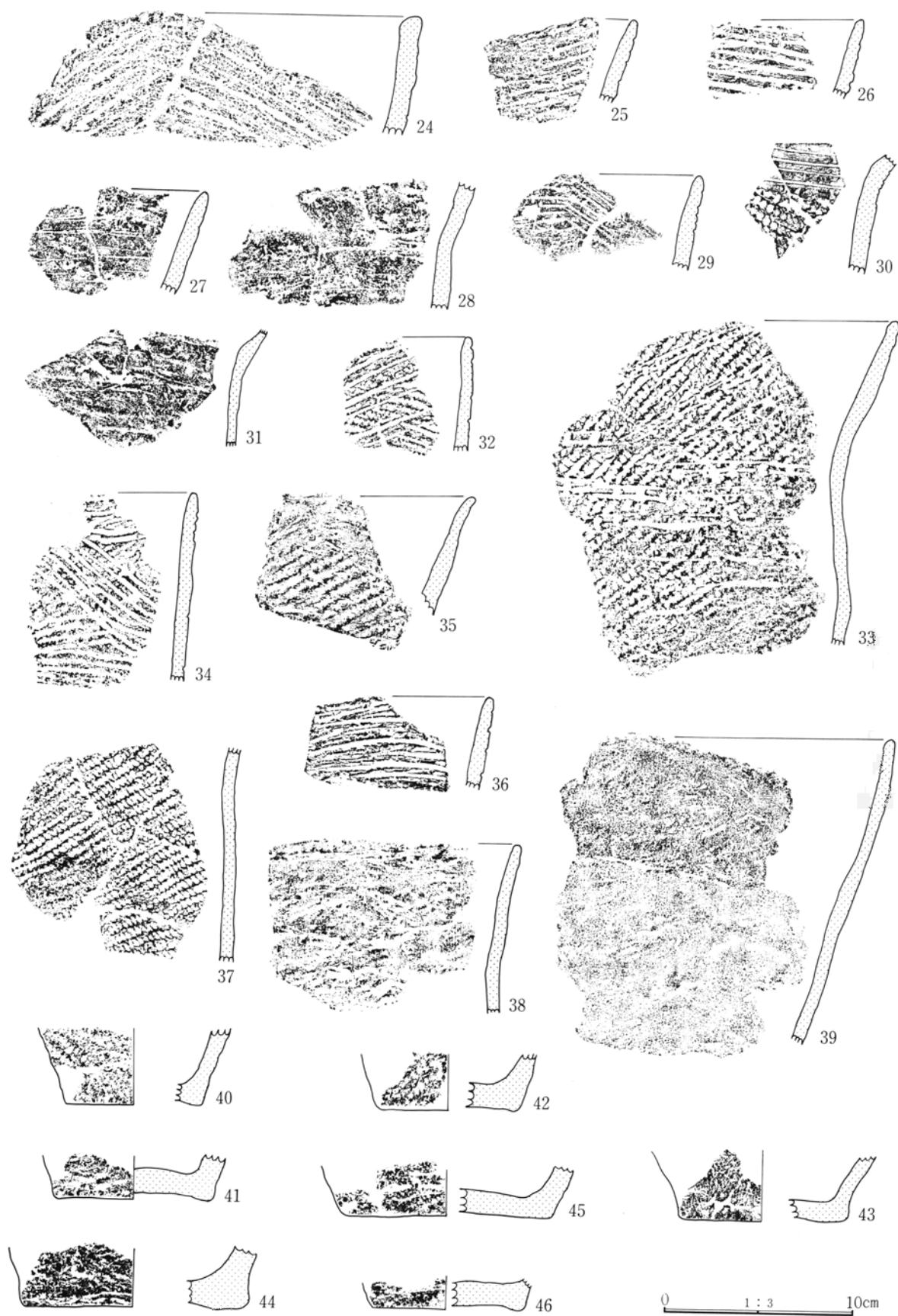
1は口径(61.5cm)。大形深鉢型土器の波状口縁部。連続爪形文で三角形を基調としたモチーフを描く。住居中央、南部分の破片7点が接合。2は深鉢型土器の波状口縁部。住居中央床面より約20cm程浮いた状態で出土。口径(43.0cm)。横位交互施文土器である。口縁部に沿って連続爪形文を6段施文、最も口縁部寄りものは、波頂部に沿ってやや盛り上がる。爪形文の間に櫛目状の施文がなされる。また焼成後の円孔が見られる。3は深鉢型土器の口縁部。住居の北側部分において2点が接合。床面より40cmとかなり高い位置で出土している。口径(30.8cm)、やや内傾する。口唇端部は押さえられて平坦である。文様は口唇部に半截竹管による連続爪形文を3段巡らし、さらに菱形文を描く。4は小形深鉢型土器、住居の北西部分で検出されている。口径8.8cm。ほぼ直に立ち上がる。器面は荒れて剝落部分が見られる。口縁部に半截竹管による連続爪形文を4段巡らす、爪形文は不明瞭な部分が多い。以下胴部にはLR・RLで羽状縄文を施文するが、RL部分は節が不明瞭。石英粒含む。5は深鉢型土器の上半部分、口径(30.8cm)。頸部で「く」の字に折れて口



第338图 C30号住居跡出土遺物(1)



第339図 C30号住居跡出土遺物(2)

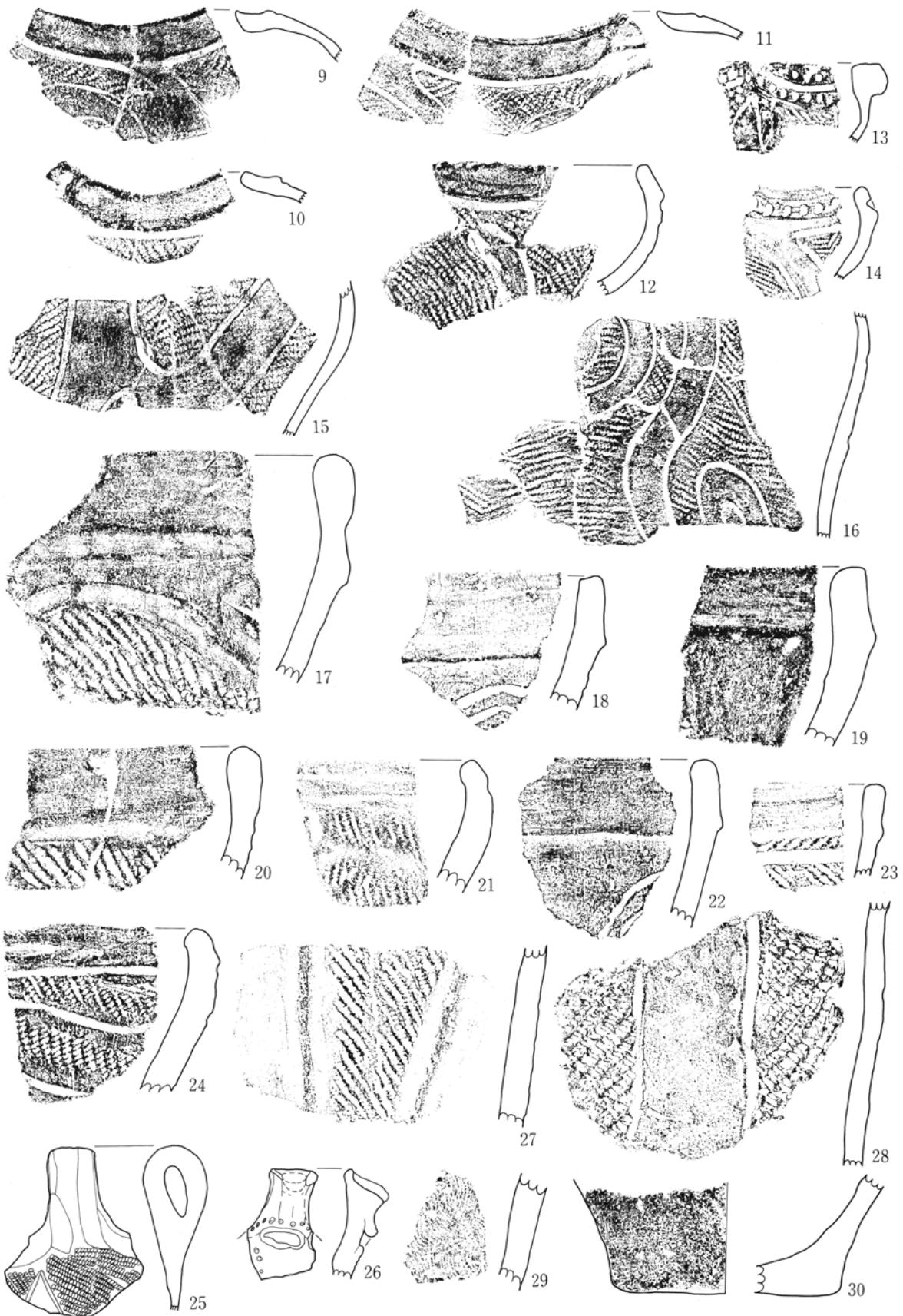


第340图 C30号住居跡出土遺物(3)

縁部は外傾する。平縁で、半截竹管による平行線文で幾何学的な文様を描出しているが、施文具の圧が弱く、器面も風化しているために、文様はきわめて不鮮明である。6は深鉢型土器、住居の北西部分において3点が接合、床面より約30cm程浮いて出土している。口径22.2cm、底径11.6cm。平底で胴部はやや外傾して立ち上がる円筒状を呈す。口縁部に沈線による斜格子目文を描く、以下胴部にはLR・RLで羽状縄文を全面施文する。7は深鉢型土器の口縁部片、口径(24.6cm)。平縁でやや内傾する。RL・LRで横位羽状縄文を構成する。西に40mほど離れたC104号住居跡(弥生時代)の覆土中より出土した破片が接合。8は小形の深鉢型土器、口径14.6cm。胴部わずかに膨らみ、口縁部は外反する。器面は風化が著しい。無節RおよびLを全面に施文、部分的に羽状をなす。9は深鉢型土器の胴下半部、無節Lを全面に施文する。10は深鉢型土器の頸部部分。住居ほぼ中央、床面直上より出土している。器面の風化が著しい、くびれ部分に半截竹管による連続爪型文が巡るが、上位の文様は不明瞭。胴部にはRL・LRの縄文が縦位の羽状構成を持つと思われる。11は深鉢型土器の胴部。住居南西部分において、床面直上で出土している。無節Lが施文されるが、かなり器面が風化しており不鮮明。12~23は連続爪形文で菱形を基調とした文様を持つものである。12は比較的大型の深鉢型土器の口縁部、丸味を持つ波頂部分。口縁に沿って半截竹管による連続爪形文を4条巡らし、下位に、やはり連続爪形文で菱形を描くと思われる。13は比較的大型の深鉢型土器の口縁部、丸味を持つ波頂部分。口縁に沿って半截竹管による連続爪形文が6条巡る、中央部は「へ」の字に折れて施文されており、菱形または三角形を表出しているものと思われる。施文はかなり施文具を立てた状態で行われている。口唇部端部はやや内そぎ状となる。14・15は同一個体と思われる。波状口縁の波頂部分片。半截竹管による平行沈線を口縁に沿って巡らし、2段目以下連続爪形文を施文する。16も深鉢型土器の口縁部片。半截竹管による連続爪形文で菱形を描出する。1と同一個体か。17は深鉢型土器、波状口縁の波頂部分片。連続爪形文により菱形を描くものと思われる。18は深鉢型土器の口縁部片。半截竹管による平行沈線で菱形を意匠している、一部に爪形文が見られる。19は深鉢型土器、波状口縁の波頂部分片。やや幅広の集合連続爪形文を密に連続施文。20は口縁施文部分片。集合連続爪形文で菱形を描くものと思われる。施文が深い。21は深鉢型土器の口縁から頸部。連続爪形文により菱形を描出する。胴部には無節の羽状縄文が施文されるものと思われる。22は深鉢型土器の口縁部文様帯部分片。2条の連続爪形文を巡らし、その上に菱形文を描く。23は深鉢型土器の頸部片。連続爪形文を多段に巡らす。24~29は平行沈線を持つものである。24は波状口縁の波頂部分片。半截竹管による平行線を複数、口縁に沿って施文する。29は口唇部がやや薄く仕上げられている。30は深鉢型土器の頸部片。浅い2条の平行沈線が巡り、以下胴部にはRLの縄文が施文される。31は10と同一個体。32は深鉢型土器の口縁部片。地文にRLの縄文を施文後、半截竹管による平行沈線で菱形を描出するものと思われる。33は深鉢型土器の口縁から胴上半部片。波状口縁、LRを地文に施文後、半截竹管により、三角形を基調としたモチーフを描き、やや間隔の広いC字形の連続刺突文を沈線に沿って施文する。34は3本単位の平行線で菱形を描くものと思われる。比較薄手である。35は深鉢型土器の口縁部片。口唇端部がわずかに外反。LRを全面施文。節が不明瞭。36は深鉢型土器の口縁部片。平行沈線を多段施文。37は深鉢型土器の胴部片。縄文LRを全面施文する。38は深鉢型土器の口縁部片。頸部緩く折れて口縁部は僅かに外傾する。無節Lが横位施文されているものと思われるがはっきりしない。繊維の混入顕著である。39は波状口縁を呈す無文土器である。40~46は底部。いずれも住居中央で、床面より約30cm浮いた状態で出土している。40は底径(7.0cm)。RLの縄文が施文される。41は底径(8.0cm)。僅かに上げ底を呈す。42は底径(7.2cm)。LRの縄文が施文される。43は底径(8.6cm)。無文。44は底径(11.6cm)。45は底径(10.6cm)。LRの縄文が施文される。46は底径(7.6cm)。僅かに上げ底を呈す。



第341図 C37号住居跡出土遺物(1)



第342図 C37号住居跡出土遺物(2)

0 1:3 10cm

第4章 出土遺物

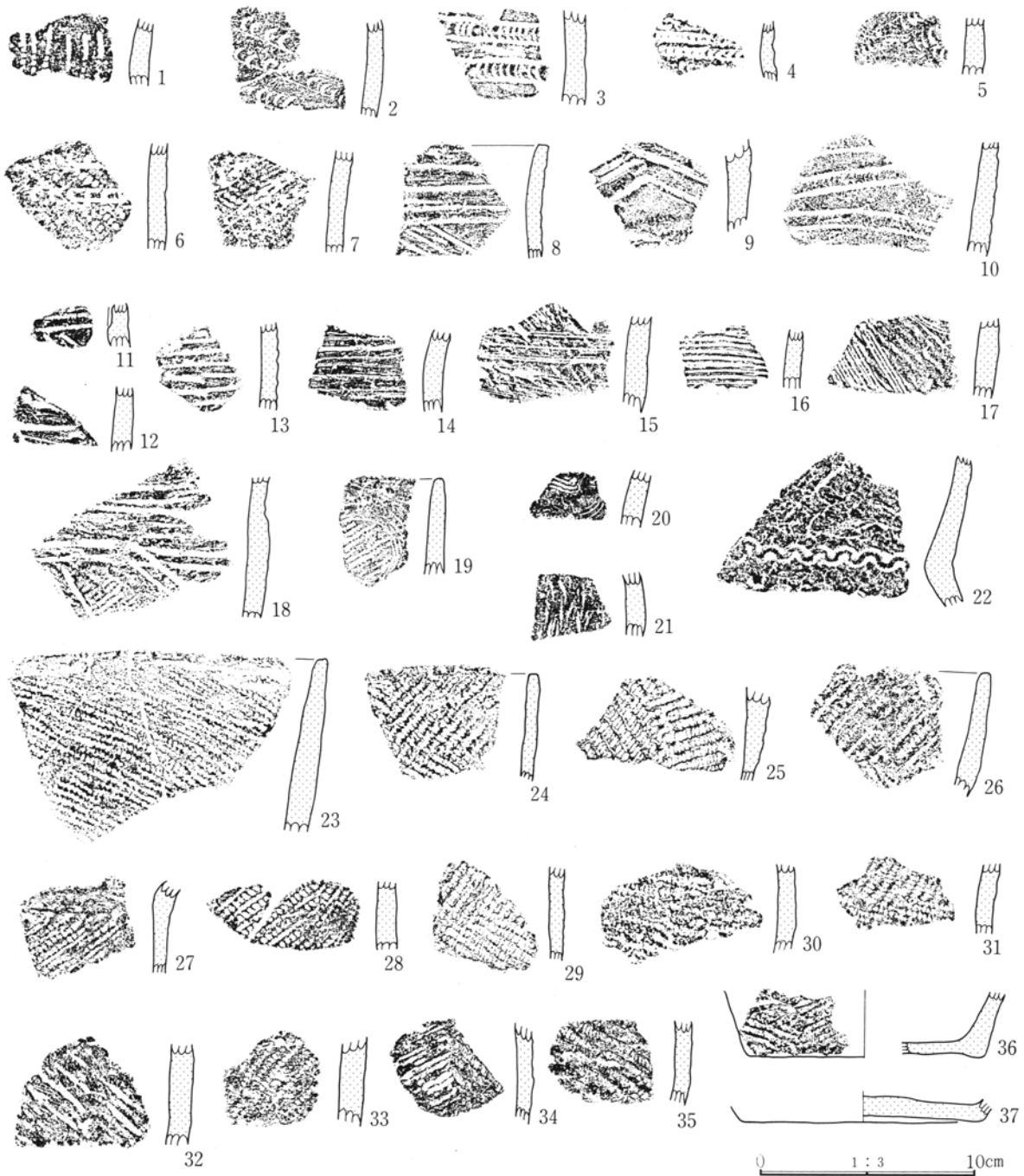
C37号住居跡出土遺物 (第341・342図 PL. 98・99)

出土土器は総点数329点で第IV群土器である。部位別の点数は口縁部19点、胴部307点、底部3点である。出土状態を見るとかなり集中した部分もあるが、土器は総じて床面よりやや浮いた状態で出土しているものが多く、北側方向から流れ込んだ様な状況も窺える。本址は遺構の説明にあるように、住居としてはやや疑問がのこる遺構である。時期は中期後半加曾利E III～IV式である。

1は深鉢型土器。住居のほぼ中央、床面より30cm程浮いた状態で出土している。口径(28.4cm)。一对の橋状把手を持つ。口縁部はほぼ直立し、幅広の無文帯、胴部には縦方向に区画された磨り消し縄文帯。原体はLR、また把手部分にも縄文が施文される。2は口径(27.0cm)深鉢型土器の胴上半部。中央出土のものと同北西部分で出土したものが接合した。緩い波状口縁を呈す、口縁部に沈線で画された無文帯、胴部地文にLRの縄文を施文後、蕨手状の文様を描く。3は口径(20.0cm)4単位の波状を呈す。口縁部は狭い無文帯、胴部は上下から縄文充填された舌状文が延びる。4は口径(19.0cm)。口縁部無文帯を持ち、地文にLRの縄文を施文後、渦巻状、 \cap 状の磨り消し文様帯。5は口径(43.6cm)深鉢型土器の口縁部片。口縁部に沈線で画された無文帯、以下、沈線で舌状文を描く、舌状文中には縄文LRを充填施文するが、口縁沈線直下部分には、LRが帯状に横位施文される。6は小型の深鉢型土器。口径(15.4cm)。口縁部に2段の連続刺突文、胴部には無節縄文が充填された舌状文が垂下する。7・8は底部。7は底部から胴中位部分。底径(8.7cm)。7単位の縦方向磨り消し縄文帯。8は底径(7.6cm)。胴部は大きく広がって立ち上がる。縄文LRが僅かに見られる。9・11は深鉢型土器のやや内傾する口縁部片。一部が山形に肥厚する、口縁部無文帯を持ち地文にRLの縄文、沈線による曲線文を描き、部分的に磨り消している。11と同一個体。10は深鉢型土器のやや内傾する口縁部片。一部が山形に肥厚する、口縁部無文帯を持ち、地文にLRの縄文、沈線による曲線文を描く。12は口縁部、やや内湾し沈線で区画した無文帯を持つ、地文にLRを充填施文後、沈線で曲線文を描く。13は口縁部無文帯に2段の連続刺突文。山形に肥厚した部分から2本の沈線が開きながら垂下し、他は無節Lを施文。14も口縁部に棒状工具による連続刺突文。沈線で画された磨り消し縄文。15は上下から延びた磨り消し縄文帯を持つ。9・10・11と同一個体か。16は深鉢型土器の胴部片。地文にLRの縄文を施文後、蕨状、 \cap 状の磨り消し文様帯を描く。17～24は深鉢型土器の口縁部片。17は口縁部無文帯、微隆起線による横S字状文を描く、以下縄文RLを施文。18・22は微隆起帯で無文帯を画す、以下沈線で曲線文を描く。19は微隆起線で口縁部無文帯、縦方向の無文帯を画す。20は沈線で口縁部無文帯を画し、縄文を施文する。21・24はやや内湾する。沈線で幅狭の口縁部無文帯、および曲線を描き、縄文LRを縦位施文する。23は胴部にLRの縄文を縦位施文。口縁部無文帯と沈線で画された細い帯状の部分にも縄文が施文される。25は深鉢型土器の橋状把手部分。口縁部に無文帯、地文に無節Lを施文、逆V字状の無文帯を画す。26も把手部分。外面に空いた横半月状の周辺部に刺突文が巡る。上に延びた部分は端部で広がり、端部が押さえられてくぼむ。27は縦方向の微隆起線で区画された無文帯を持つ。縄文はLRを縦位施文。28は縦方向の沈線で分割された縄文帯に節の粗いRLを縦位施文する。29は縦方向の櫛状工具による波状文。30は底部片、底径(10.7cm)。

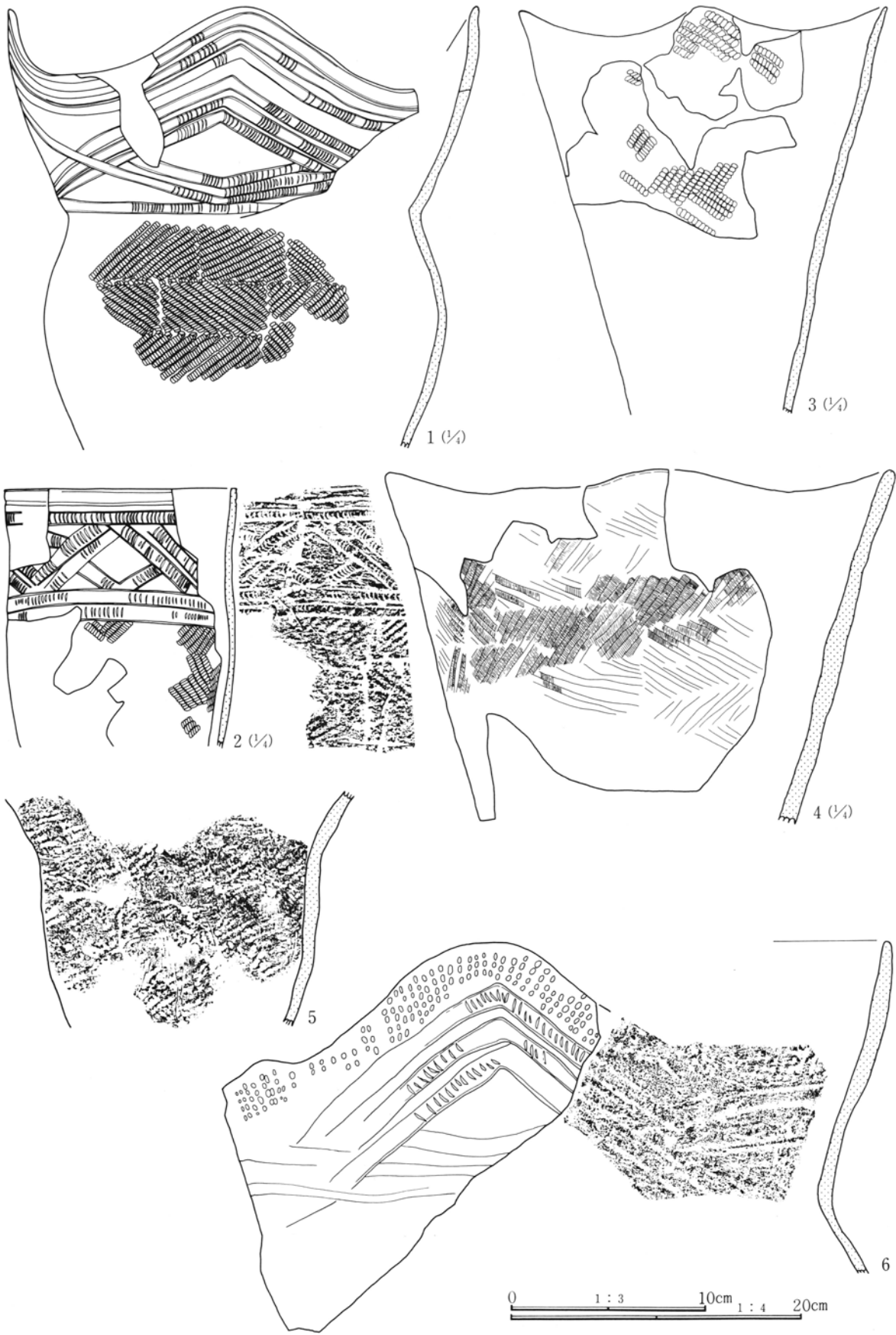
C77号住居跡出土遺物 (第343図 PL. 99)

住居の遺存状態は比較的良かったが、出土土器の総点数は196点であり多くはなかった。部位別の点数は口縁部2点、胴部190点、底部4点である。土器は第I群で、細片が多く器形を復元し得るものは見られなかったが、概して床面近くより出土している。文様は櫛歯による刺突文、半截竹管による連続爪形文、平行沈線文などである。時期は前期中葉黒浜式期(いわゆる有尾系)である。



第343図 C77号住居跡出土遺物

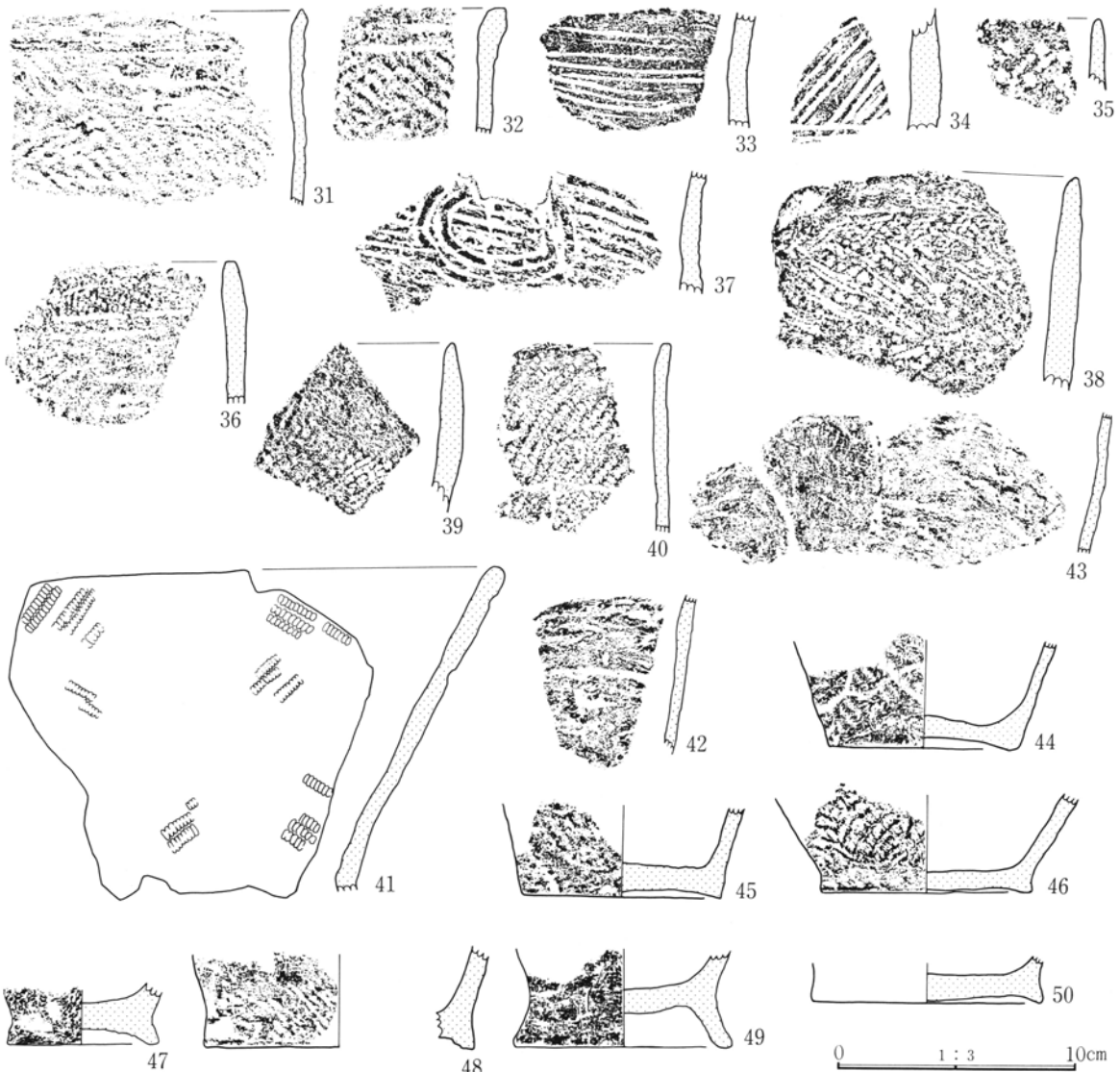
1は縦方向の櫛歯刺突文。2～7は横位、斜位方向の連続爪形文を持つ。6・7は地文に縄文を施文。8は口縁部片。横位・斜位の平行沈線文。9～14は半截竹管による平行沈線文。14～16は集合沈線。16は無繊維。(諸磯c) 17は地文に無節Rを施文後、櫛歯状工具による集合沈線。18は地文に無節Lを施文後、半截竹管による集合沈線および幾何学文を描く。19は深鉢型土器の口縁部片。地文に無節Lを施文後、沈線による円文様を描く。20は櫛状工具による波状文。21は縦方向の撚糸Rか。22は深鉢型土器の頸部片。竹管による連続コンパス文を巡らし、上位に半截竹管による平行沈線で幾何学文を描くが、風化が著しく極めて不明瞭。



第344图 C79号住居跡出土遺物(1)



第345図 C79号住居跡出土遺物(2)



第346図 C79号住居跡出土遺物(3)

胴部縄文も原体は不明である。23~36は縄文が施文される。23は深鉢型土器の口縁部片。平縁で口唇部やや内削ぎ状。RLの縄文を全面施文。24も口縁部片。0段多条のLR・RLで縦・横方向の羽状縄文。29と同一。25は縦方向の羽状縄文。26・31はLR・RLで羽状縄文を構成。27・28・33はLRの斜縄文。30はRLの斜縄文。32は0段多条RL施文。34は無節RとLで縦方向の羽状縄文。35は無節Rの斜縄文。36は底部片、底径(10.4cm)。無節R・Lで縦方向の羽状を構成。37は底部片、底径(10.7cm)。裏面平滑に磨かれている。

C79号住居跡出土遺物(第344~346図 PL. 100・101)

後世の遺構にかなりの部分を切られており、遺存状態の悪い住居である。特に南側は弥生時代の住居が載っており、出土遺物も少ない。土器は比較的点数は多く見られたが、その分布にはかなりのレベル差が見られた。土器の出土総点数は2,204点で総て第I群である。部位別点数は口縁部97点、胴部2,071点、底部36点である。かなり風化の進んだ状態のものが多く、全体的に脆弱で、施文の不鮮明なものが多かった。波状口縁を呈し、口縁部文様帯に連続爪形文による菱形文を描出するものが多い。時期は前期中葉黒浜式期(いわゆる有尾系)である。

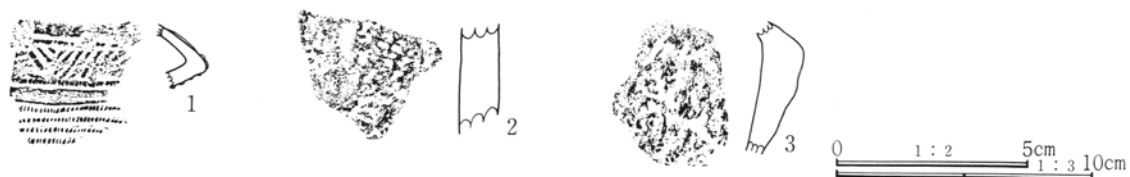
1は深鉢型土器。住居西側部分、床面直上より出土している。口径32.6cm。胴部は丸味を持ち、頸部でくびれ、口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。4単位の波状口縁。口縁部には3本単位の連続爪形文により、菱形文を描出する。胴部は、LR・RLの縄文により縦位、横位の羽状を構成する。2は深鉢型土器、北東部分において約15cm浮いた状態で出土している。平縁で口径16.2cm。2本単位の連続爪形文で文様帯の上下を画し、間には連続菱形文を描く。横位方向の施文には部分的に爪形文が施文されていない部分が見られる。胴部にはLR・RLの縄文で菱形羽状構成施文される。25は同一個体片。3は深鉢型土器、中央で出土した破片2点と南西部分で出土した1点が接合している。いずれも床面近くから検出されている。口径(25.6cm)。底部から口縁部に向かって直線的に開き4単位の波状口縁となる。LR・RLの縄文で羽状縄文を構成するが、整然としていない。全面に施文されているものと思われるが、下位の部分は器面の荒れが著しく、施文は不明瞭である。4は口径(35.3cm)深鉢型土器。緩い波状口縁。無節Lで横位、縦位に全面施文、縦および横羽状を構成する。5は深鉢型土器。住居の北東部分、床面よりやや浮いて出土している。縄文LRを全面施文。かなり脆弱な土器である。6は深鉢型土器の波状口縁部片。口縁に沿って縦方向の櫛歯による刺突文。下位に連続爪形文により菱形文を描く。器面の風化が著しい。7は口縁部片。頸部、口縁部に沿って連続爪形文を横位に施文。その間に菱形文を描く。器面はかなり風化。8・9は深鉢型土器の波頂部分。3本単位の連続爪形文を巡らし、菱形文を描く。9は器面荒れている。10~30は連続爪形文による幾何学文を施文する。10は波状口縁部片。口縁に沿って3条の連続爪形文、下位に幾何学文様を描くものと思われる。11は口縁に沿って複数の連続爪形文が施文される。12は連続爪形文を多段施文する。13は波状口縁部分。やや丸味を持った口縁に沿って3条の連続爪形文が間隔をおいて巡る。14は波頂部分、口縁に沿って2条、下位に横方向の連続爪形文が施文される。15は口縁部に縦方向の刻みが巡らされる。以下連続爪形文を多段施文する。16は波頂部分。山形に複数の連続爪形文が施文される。17は口縁部片。波底部に小突起が見られる。口縁に沿って連続爪形文が2条巡り、以下、連続爪形文で三角ないしは菱形文を描くものと思われる。18は波状口縁部片。口縁に沿って複数の平行沈線、下位に連続爪形文により菱形文を描出する。19・20は口縁部片。口縁に沿って複数条の連続爪形文。波状を呈するものと思われる。器面の風化が著しく、単なる平行沈線にも見える。21は口縁波状を呈す。口唇に沿って連続爪形文、さらに2条の連続爪形文で山形文を描き、連続爪形文を横に巡らす。以下無節RとLで縦方向の羽状構成をとる。22は口縁部片。複数の連続爪形文を横位施文した間に、やはり連続爪形文で山形文を描く。23は横位多段施文、上位に菱形文を描出する。24は口縁に沿って複数の平行沈線、下位に連続爪形文により菱形文を描出するものと思われる。25は口縁に沿って2条の平行沈線(部分的に爪形文が見られる)、以下RL・LRで羽状縄文を施文する。2と同一個体。26は口縁に沿って平行沈線、以下連続爪形文を施文。27は連続爪形文により菱形文を描出するものと思われる。28は頸部片。くびれ部に横方向の連続爪形文、上位に菱形文を描出する。29は小突起を持つ隆線上部に沿って連続爪形文。以下無節Lを施文。30は深鉢型土器の頸部片。連続爪形文を2条横位施文。上位に平行沈線による菱形文を描くものと思われる。31は深鉢型土器の口縁部片。口縁に沿って2条の平行沈線以下は羽状縄文を施文。器面の風化が著しい。32はLR・RLの羽状縄文を施文。器面の風化著しい。33は平行沈線を多段施文。34は半截竹管による集合斜位沈線。35は地文にLRの縄文を施文後、複数の円形刺突文。36は口縁部片。地文にRLの縄文を施文後、横位平行沈線を施文。37は半截竹管による平行沈線により横位多段施文後、2重円形文を描く。38は深鉢型土器。異条斜縄文、羽状を構成する。39は深鉢型土器の口縁部片。かなり鋭角な波頂部で口唇部左右に耳状の小突起が付く。横位の異条斜縄文。40はLRの縄文を全面施文。41は口縁部片。縄文LR・RLで菱形羽状を構成する。施文不鮮明瞭、部分的に節が見られず、無節に見える部分がある。石英粒含まれる。



第347图 C88号住居跡出土遺物(1)



第348図 C88号住居跡出土遺物(2)



第349図 C89号住居跡出土遺物

第4章 出土遺物

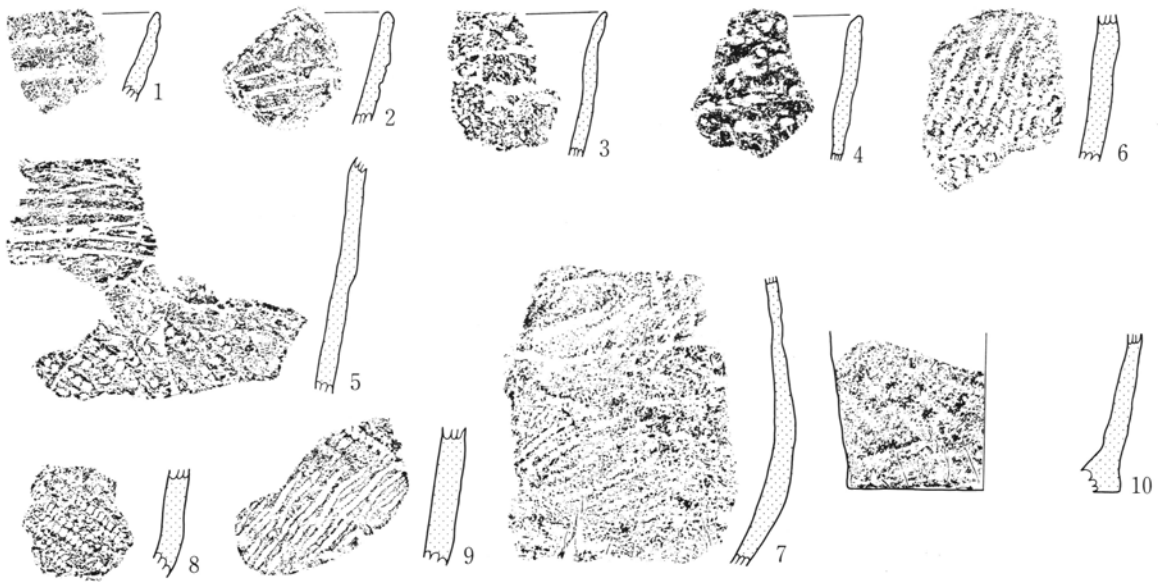
42・43は無文土器。やや薄手の作りである。44～50は深鉢型土器の底部片。44は底径7.8cm。LR・RLで縦方向の羽状縄文。やや上げ底である。45は底径8.4cm。RLか。46は底径8.8cm。無節R・Lで縦方向の羽状縄文。やや上げ底である。47は底径6.2cm。上げ底である。48は底径(11.0cm)無節R。49は底径8.8cm。やや外に開く高台状を呈す。石英粒目立つ。50は底径9.4cm。石英粒見られる。

C88号住居跡出土遺物 (第347・348図 PL. 102・103)

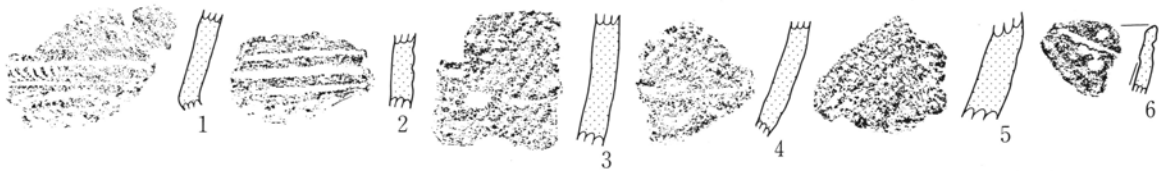
上部を削平されており、遺存状態はあまり良くなく、形状もはっきりしない部分がある。出土土器は総点数653点で第I群に分類される。部位別点数は口縁部77点、胴部571点、底部5点である。遺物は南側に集中して検出されている。土器の点数はかなり多かったが、ほとんどが破片で器形復元できたものはなかった。

文様は連続爪形文、平行線文で菱形文を描出するものが多い。また、穿孔された径3.5cm程の球状土製品1点が出土している。住居の時期は前期中葉黒浜式期(いわゆる有尾系)である。

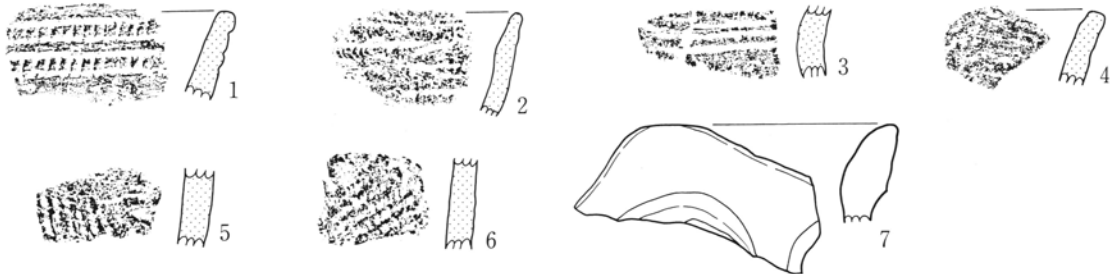
1～16は連続爪形文による幾何学文を描く。1は深鉢型土器の波状口縁部片。平行沈線で菱形文を描く。波頂部は内傾する。2は口唇部に沿って3条の平行沈線、下位に2条単位の連続爪形文で菱形文を連続させている。頸部にも横位連続爪形文。3・4は連続爪形文で菱形文を描く。5は波状口縁。連続爪形文により菱形文を描出。胴部縄文施文。6は口縁に沿って3条の平行沈線。菱形を描出か。7はやや幅広の連続爪形文を横位施文。8は地文にLRの縄文施文後、口縁に沿って3条の連続爪形文。9は菱形文を描出するものと思われる。10は幅広の連続爪形文。施文具を寝かせた状態で施文する。11は連続爪形文で菱形文を描出か。口唇端部押さえられ平坦。12は連続爪形文により菱形文を描くと思われる。13は頸部に横位連続爪形文、その上に菱形文を描出すると思われる。14は連続爪形文により、菱形文を描出。15は頸部に2条の横位連続爪形文、その上に菱形文を描出すると思われる。16は連続爪形文施文か。器面の風化著しく施文不明瞭。17は波状口縁部。波頂部やや内傾。平行沈線による菱形文を描出するものと思われる。器面荒れている。18は平行沈線を横位施文。菱形文を意匠か。19は口縁に沿って2条の平行沈線、以下RLの縄文を施文。20は平行沈線を横位施文。器面の風化が著しい。21は屈曲部に横位平行沈線、肩部以下無節Lを施文か。22は平行沈線で菱形文を描出するものと思われる。23は口縁部片。地文にLR・RLの羽状縄文、0段多条を施文後、平行沈線により菱形文を描出する。また焼成後の穿孔あり。24は口縁に沿って2条の平行沈線を施文、口唇直下にやはり平行沈線で連続山形文を描く。平行沈線下位には3本の斜位沈線が見られる。25～28は半截竹管文による平行沈線を横位多段施文。27は菱形文を描出するものと思われる。29は深鉢型土器の胴部片。LR・RLで縦位、横位の羽状縄文を構成。30は無節L・Rで羽状構成をとる。小砂礫若干混入。31は口縁部片。LR・RLで羽状縄文を構成。0段多条。32・34は横羽状縄文を構成。0段多条。33はLR(0段多条)を横位施文。35は口縁部片。LR・RLの縄文で羽状縄文を構成する。36は小型土器の口縁部。縄文が施文されているが原体は不明。37は口縁部片。無文と思われる。かなり薄手の土器である。38も無文。39は口唇部に貼付文、地文には縄文が施文されていると思われるが原体は不明。40～45は深鉢型土器の底部、40は底径9.8cm。縦位羽状縄文を構成。41は底径10.2cm。胴部はRL・LRで羽状縄文を構成。42は底径5.9cm。器面荒れており施文は不明瞭、LRか。やや方形を意識した作りで、底面形は隅丸方形に近い。43は底径10.4cm。44は底径(9.2cm)。ともに上げ底。45は底径(7.4cm)。高台状の上げ底。胴部無節縄文か。46は球状土製品。径約3.7cm、径0.3cmの穴が貫通している。用途は不明。



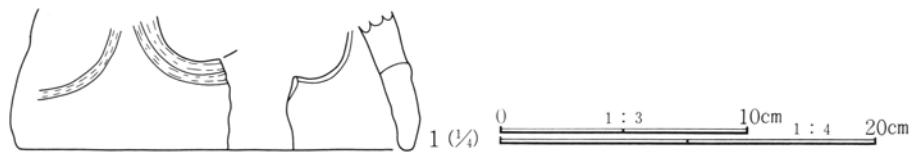
第350図 C96号住居跡出土遺物



第351図 C100号住居跡出土遺物



第352図 C101号住居跡出土遺物

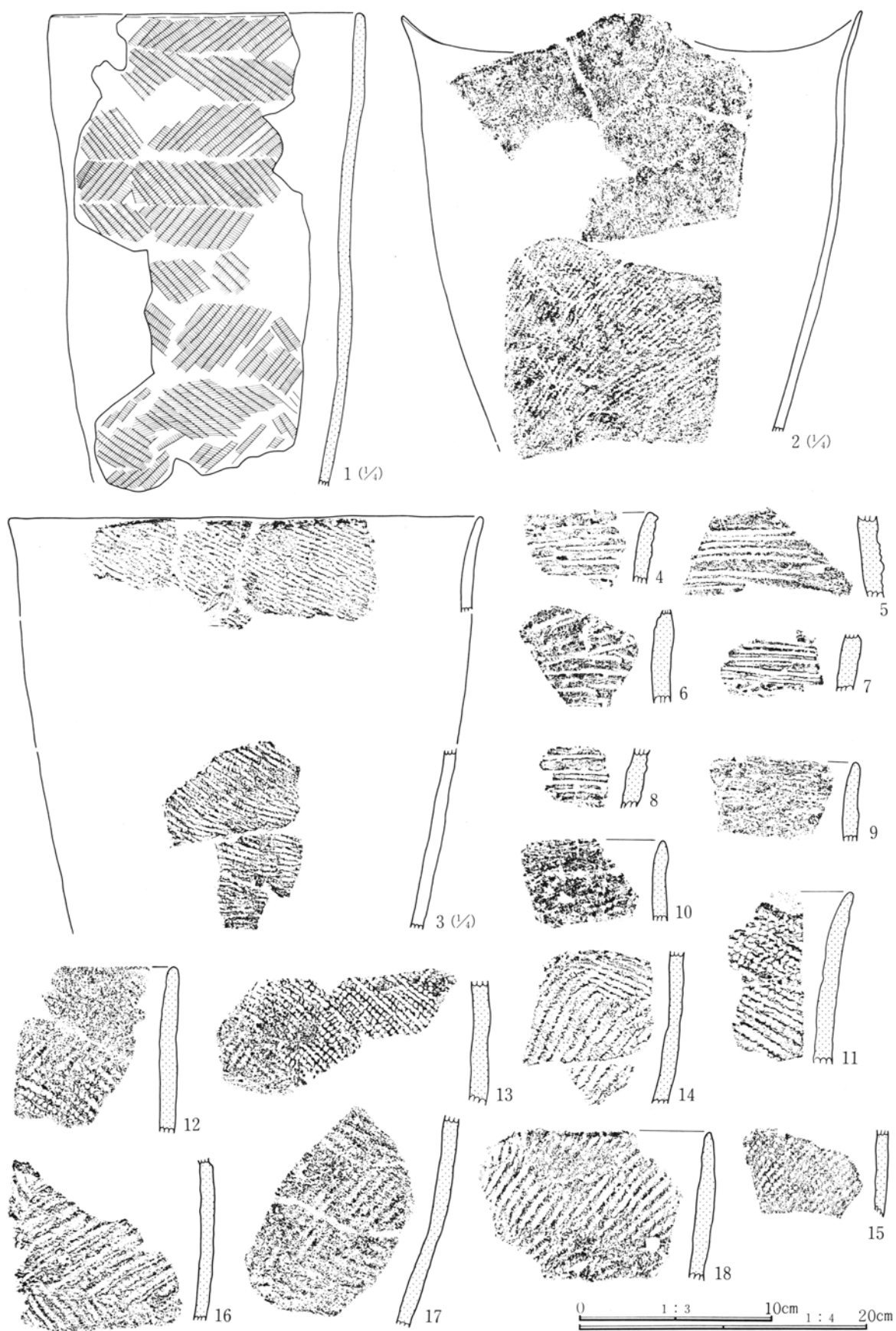


第353図 C115号住居跡出土遺物

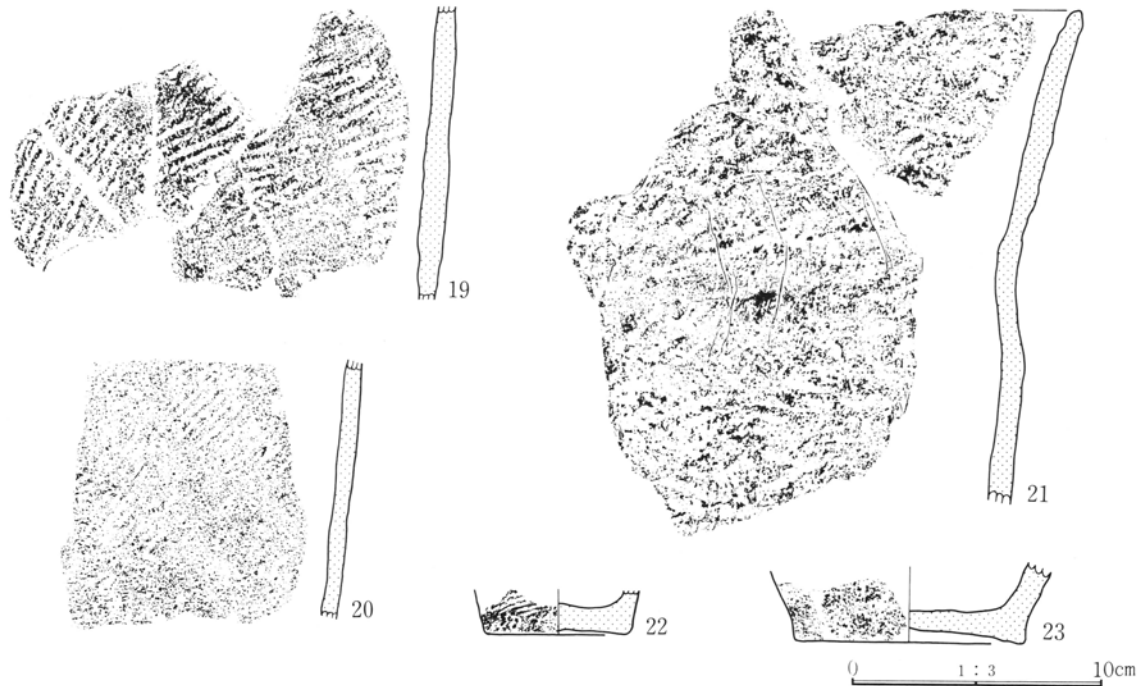
C89号住居跡出土遺物 (第349図 PL. 103)

きわめて状態が悪く、北側のわずかな部分を検出したに過ぎない。出土土器の総点数は3点のみである。第II群および第III群が出土している。

1は深鉢型土器の口縁部片。「く」の字に内側に屈曲している。口唇に沿って4条の結節浮線文、屈曲下部、結節浮線文に挟まれた部分に鋸歯文状に浮線を配す。地文にはLRの縄文が施文される。2は深鉢型土器の胴部片。縦方向の隆帯間にRLを縦位施文。3は深鉢型土器の底部片か。外面の剝落著しい。



第354図 C118号住居跡出土遺物(1)



第355図 C118号住居跡出土遺物(2)

C96号住居跡出土遺物 (第350図 PL. 103)

調査区の南端に検出され、西側を大きく切られている。かなり小型で上面を削られている。出土土器の点数は163点で第I群である。部位別点数は口縁部4点、胴部157点、底部6点である。ほとんどが小片である。時期は前期中葉黒浜式期である。

1は深鉢型土器の口縁部片。横位の連続爪形文を多段施文。器面荒れている。2は波状口縁部分片。横位平行沈線。3は口縁部片。口縁に沿って平行沈線、以下LRを施文するが、縄文は不鮮明。薄手の土器である。4は深鉢型土器の口縁部片。ループ文で菱形を意匠か。器面風化。5は横位平行沈線を多段施文、以下RLを横位施文。6はLR・RLで横位羽状縄文を構成。7は胴部片。LRの縄文を施文。器面の風化著しい。8はRL縄文を施文。9は無節LとRLで羽状縄文を構成。10は底部片、底径(10.7cm)。無節Rか。器面風化が著しい。

C100号住居跡出土遺物 (第351図 PL. 103)

範囲、規模ともに不明である。住居としたがその可能性は少ない。土器の出土も少なく総点数は20点である。土器は第I群を主体とする。

1は横方向の連続爪形文。2は横位平行沈線文。3～5はLR縄文を施文。6は沈線、刺突文が見られる。無繊維土器。

C101号住居跡出土遺物 (第352図 PL. 103)

範囲、規模ともに不明である。出土土器もきわめて少なく総点数は7点である。C1号埋甕がほぼ中央に位置している。土器は第I群を主体とする。

1・2は口縁部片。横位連続爪形文を多段施文。2は器面の風化が著しい。3は頸部片。2条の横位平行沈線。4は波状口縁の波頂部片。平行沈線。5は無節Rを施文。6は無節Lを施文。7は波頂部片厚手で太い

第4章 出土遺物

凹線が見られる。時期的に後出の土器である。

C115号住居跡出土遺物 (第353図 PL. 103)

住居としたが、遺存状態はきわめて悪く、住居とするには疑問も残る。出土土器もわずか1点のみである。時期は中期後半か。1は器台型土器の台部片。底径(20.8cm)。外側に僅かな膨らみを持って「ハ」の字に開く。周囲に凹線が巡る円形の透かし窓を複数持つと思われる。

C118号住居跡出土遺物 (第354・355図 PL. 104)

長方形で、壁の落ち込みは緩やかである。出土土器は住居の南西部分に集中して出土している。総点数は726点、部位別点数は口縁部7点、胴部709点、底部10点である。点数は多いものの器形を復元できるようなものは少なかった。全体にかなり風化の進んだものが多い。第I群を主体とするが無繊維土器も含まれる。

土器の文様を見ると連続爪形文を持つものはほとんど見られず、若干の平行沈線を有すものがわずかに見られるだけで、ほとんどが縄文のみである。また2・3は繊維の混入なく、薄手で砂粒多く含む特異な一群である。時期は前期中葉黒浜式期である。

1は深鉢型土器。住居のほぼ中央、床面より約10cm程浮いた状態で出土している。口径(22.0cm)。胴下半部から口縁部にかけて、僅かな屈曲が見られるが、ほぼ円筒状を呈す。無節L・Rの縄文で全面に菱形羽状縄文を構成。繊維の混入比較的少なく、砂粒やや含む。2は4単位の波状を呈す深鉢型土器である。住居の西側で出土した3点と南側に出土した1点が接合している。いずれもほぼ床面直上である。口径(32.0cm)LR縄文が施文されているが、器面の荒れが著しく、胴上半部は不明瞭。比較的薄手で繊維の混入はほとんど見られない。裏面に指頭痕残り、胎土中に砂粒、特に金雲母が目立つ。3は深鉢型土器の口縁部。中央および南東部分で出土したものが接合している。口径(33.0cm)無節Rの斜縄文を全面施文。砂粒の混入目立つ。繊維含まない。4～8は横位の平行沈線が見られる。6は横位、斜位方向の平行沈線が施文される。9は口縁部片。横位の集合沈線。器面荒れている。10は粗いLRが施文される。11は縄文RLが施文される。12は口縁部片。RL・LRで多段の羽状縄文を構成。13はRLを全面施文。14は口縁部片。LR・RLで羽状縄文を構成するが、RLの条が細く不規則な羽状。15・20はLRを横位全面施文。比較的薄手で繊維の混入はほとんど見られない。裏面に指頭痕残り、胎土中に砂粒、特に金雲母が目立つ。2と同一個体片。16・17はLR・RLで縦、横の羽状縄文を構成。18は口縁部片。無節Lを全面施文。19は無節Lを横位全面施文。21は胴部から口縁部にかけて。頸部のくびれは弱い。器面の風化が著しく施文は不明瞭。22は底部片。底径5.6cm。小型の土器で、比較的直に立ち上がる。胴部は無節Lが施文される。23は底径9.1cm。やや上げ底を呈す。胴部には無節Rが施文される。

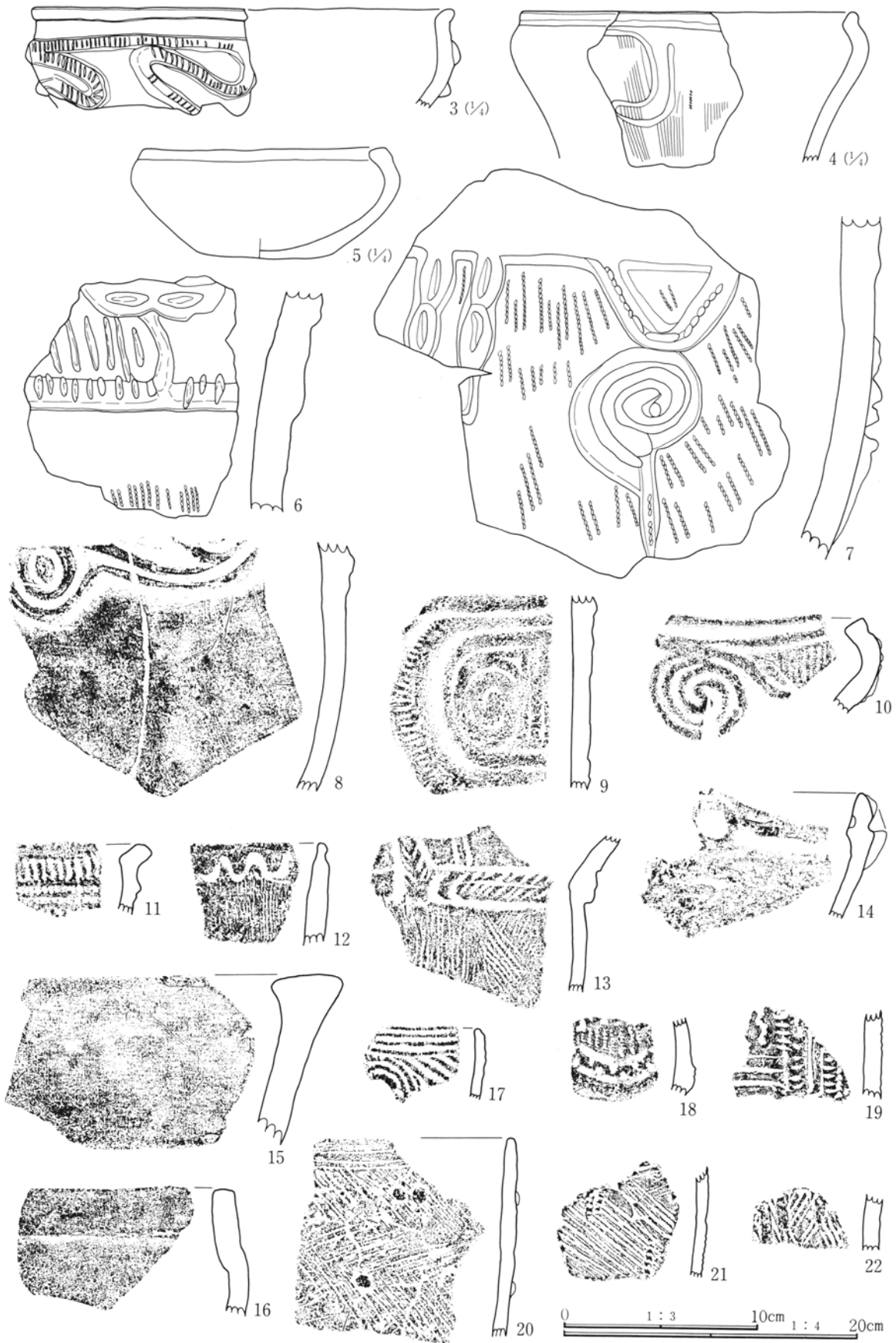
C152号住居跡出土遺物 (第356・357図 PL. 105～107)

住居の遺存状態は比較的良いである。出土総点数282点で第II群、第III群が見られる。部位別点数は口縁部68点、胴部205点、底部9点である。1はほぼ完形で床面直上から出土している。抽象文を持つやや小型の深鉢型土器である。時期は中期中葉勝坂式期後半である。

1は深鉢型土器。住居の北東部床面に横倒しの状態で出土している。口径16.0cm、器高25.6cm、底径8.2cm。口縁部、上下に接続する眼鏡状把手、端部は嘴状となり、口縁部上に突き出る。胴部には把手部分に正面観を求め、これを含め4単位の抽象文が隆帯により描出される。また隆帯文様の間隙に三叉文、沈線が配され



第356图 C152号住居跡出土遺物(1)



第357図 C152号住居跡出土遺物(2)

第4章 出土遺物

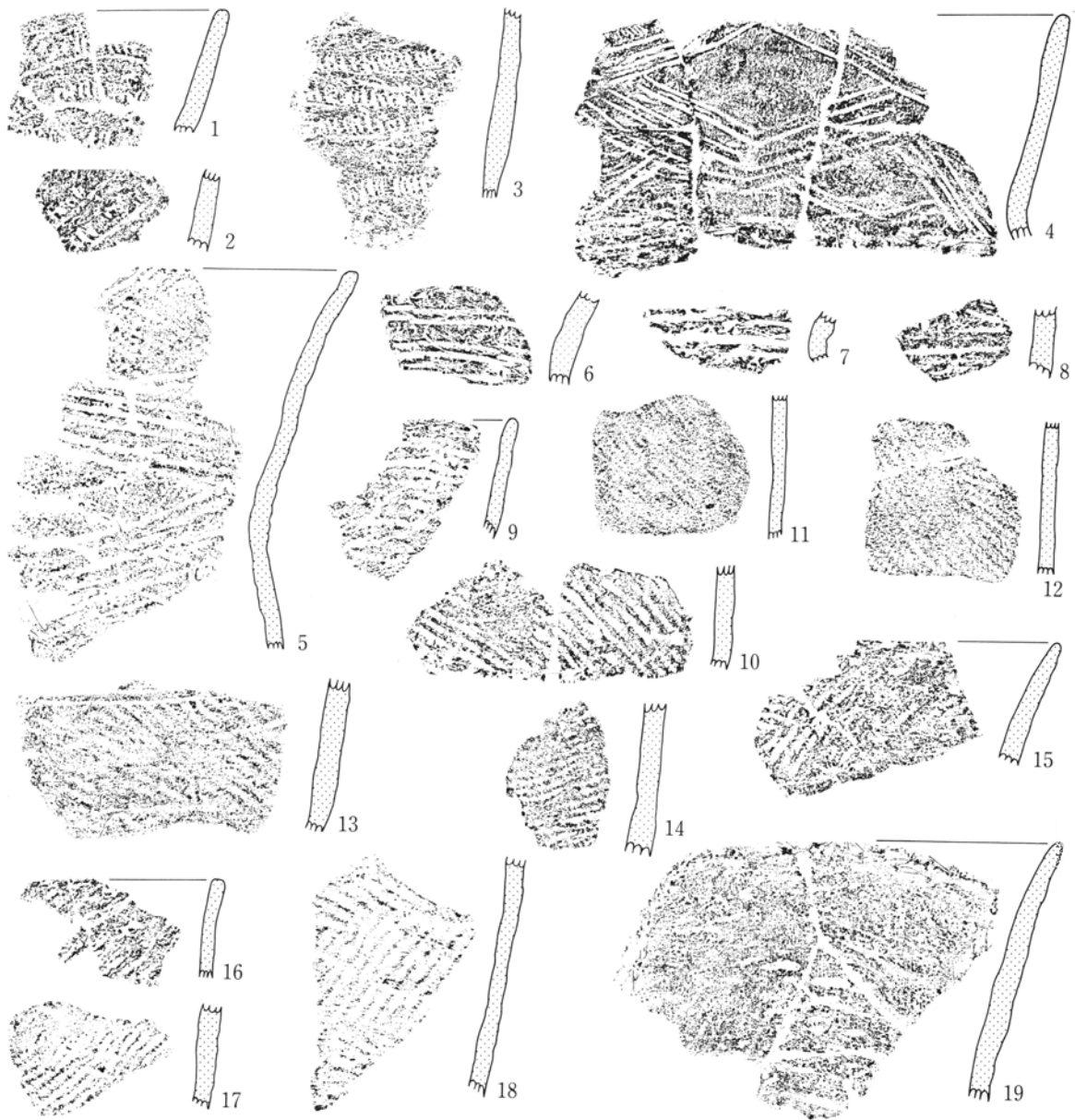
る。以下胴部は無文。ほぼ完形である。

2は深鉢型土器。炉に接して、ほぼ半分ほど埋められた状態で出土している。口径42.2cm。胴部は樽形を呈し、口縁部は「く」の字に折れて外に開く。口縁部は無文、文様は胴部中位から頸部屈曲部にかけて見られる。矢羽根状の刻みを付す隆帯でY字文、逆V字文を作り、その間に、中心部が隆起して中空になる渦巻き文と、中心部に刺突文を付した円形文を配す。またY字、V字の上端部に刻みを付した2段の膨らみを持つ。さらに棒状工具により三叉文、渦巻き文、垂下線文を隆帯文の間隙に配す。文様下位には矢羽根状の刻みを付す2本の隆帯が巡る。以下胴部には撚糸文Lが施文される。3は深鉢型土器の口縁部片。ほぼ中央部分で出土している。(口径29.0cm)。口唇端部外側に肥厚、無文帯を設け、以下刻みを付した隆線で横S字状文を描く。4は深鉢型土器の口縁部片。(口径23.2cm)。地文に撚糸文Rを施文後、外面口縁に沿って沈線、J字文を描く。5は鉢型土器。住居の中央、および南西部分で出土したものが接合している。いずれもかなり床面に近い出土状況である。ほぼ完形。口径16.6cm、器高7.5cm、底径8.0cm。比較的小形、厚手で口縁部内傾し口唇部は平坦をなし、外面に浅い凹線が巡る。部分的に赤色顔料痕が残る。6は胴部片。隆線により横方向の連鎖文、連続刻み目を持つ隆帯を、縦に隆線で結び、間に短沈線を配す。以下撚糸文Rが施文される。7は深鉢型土器の胴部片。地文に撚糸文Lを施文。隆線により2条の鎖状文、およびV字文、渦巻き文を縦に連結する。8は鉢型土器か。住居のほぼ中央で出土、床面より10cm程浮いた状態である。内外面平滑に研磨され、赤色塗彩されている。両端が円形文となる横S字状文が配される。文様の沈線部分に赤色顔料が明瞭に残る。9は横方向の楕円形区画帯の中に沈線により左右方向の渦巻き文を描く。区画横部分は外面に刻み目文を持つ隆帯となる。10は口縁部片。内湾し、口唇に沿って隆線、大きく渦を巻く横S字状文。地文には斜沈線。11は口縁部が「く」の字に外へ折れる。横方向のキャタピラ文、連続爪形文。12は口縁部片。縦方向の条線文、口縁には単沈線による波状文。13は胴部屈曲部分。刻みを持つ縦、横方向の隆帯を沈線で画し、下部に撚糸文Lが施文される。14は深鉢型土器の口縁部片。波状を呈し、一部分を欠失している。口縁は肥厚し、外面口縁に沿って沈線、波状部分、内外面に円孔文。15は口縁部片。口唇部強く肥厚し、上面は平坦となる。16は口縁部やや内傾し、口唇部平坦となる。赤色塗彩痕残る。17は口縁部片。口縁に沿って4本、以下斜め、円形文を結節浮線文で描く。18は隆帯に沿って交互刺突文、櫛歯状工具による刺突文を施文。19は刻みを持つ隆帯を垂下、これに沿って平行沈線を縦、横方向に配し連続刺突文が付される。20は口縁部片。口縁に沿って4本の沈線、以下矢羽根状の沈線文を配し、ボタン状貼付文が付される。21は斜位方向の集合沈線、その上にまばらに棒状の結節浮線文を付す。22は矢羽根状集合沈線の上に棒状の貼付文。

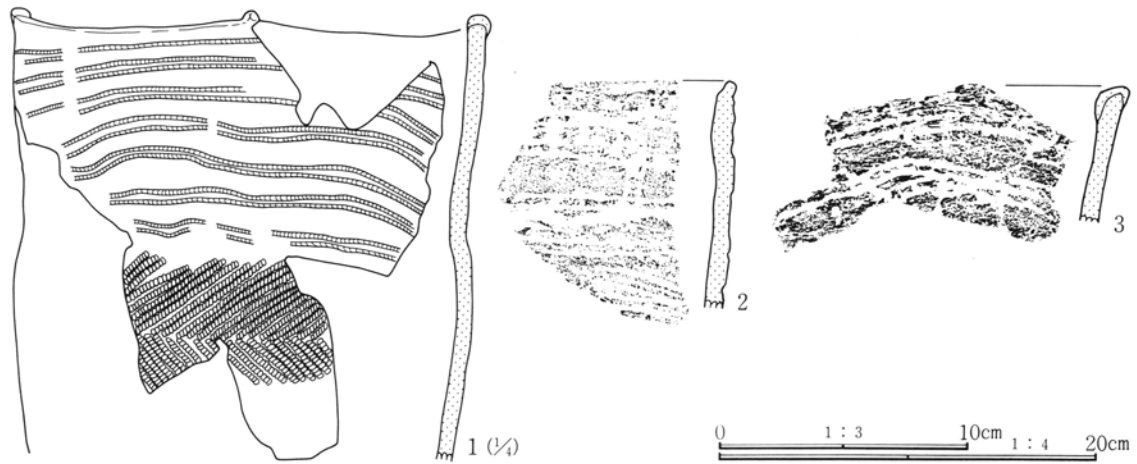
C165号住居跡出土遺物 (第358図 PL. 107・108)

出土総点数は194点、部位別点数は口縁部7点、胴部175点、底部12点である。土器のほとんどが破片で、器形を復元し得るようなものは見られない。連続爪形文、平行沈線で菱形文を意匠するものが見られる。第I群土器で、時期は前期中葉黒浜式期(有尾系)である。

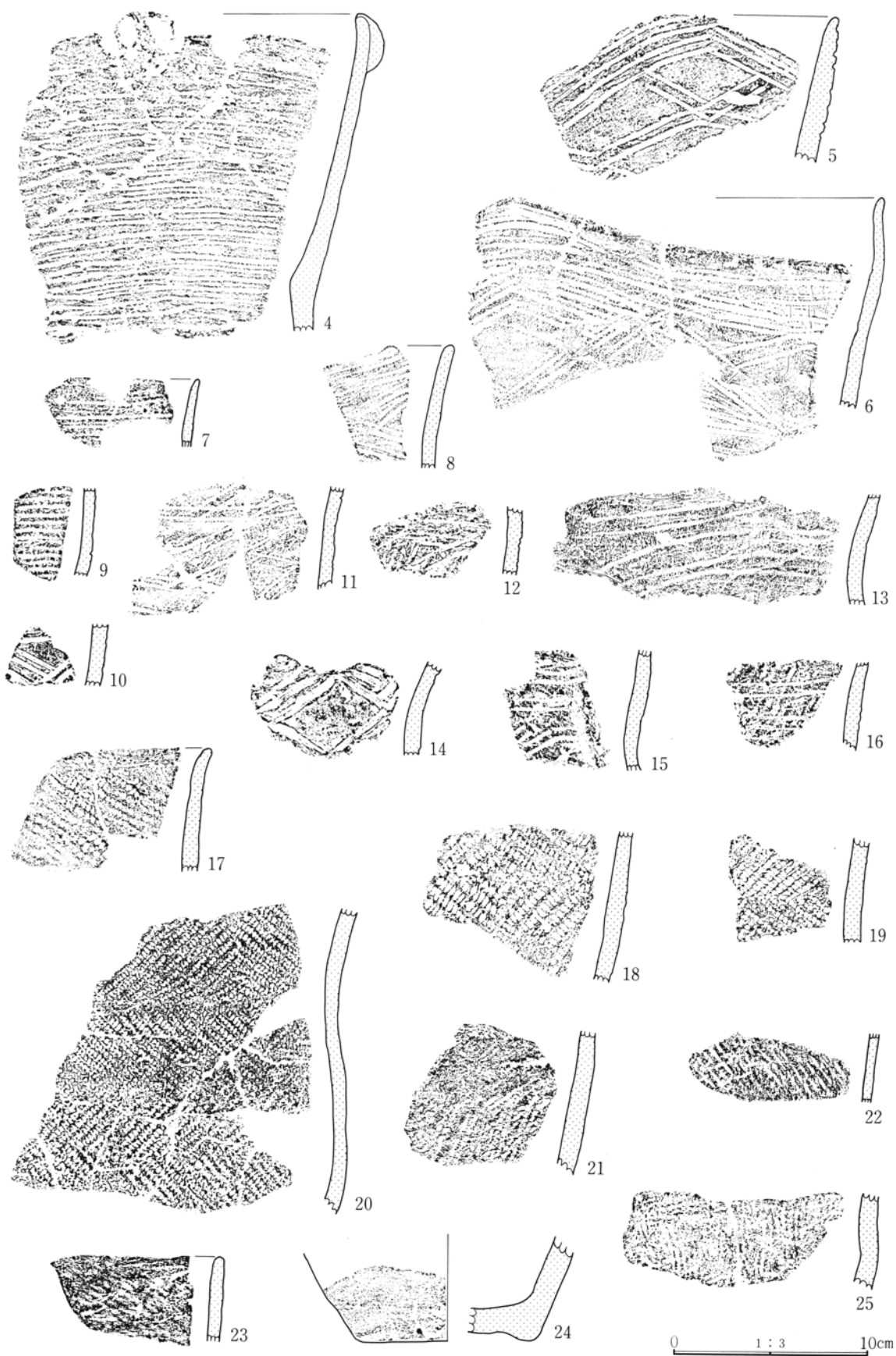
1・3は同一個体、1は深鉢型土器の口縁部片。口縁に沿って連続爪形文を多段施文。口唇部は丸みを持つ。2は連続爪形文が斜めに施文される。4は深鉢型土器の口縁部片。口唇部内削ぎ状、外面に刻み目、以下横位、斜位方向の平行沈線文、菱形文を描出か。5は深鉢型土器の波状口縁部片、平行沈線により菱形文を描く。胴部はRL・LRで羽状縄文を構成。6・7・8は平行沈線文を多段施文。9は口縁部片。口唇部内削ぎ状、外面に刻み目、以下横位、斜位方向の平行沈線文、菱形文を描出か。10は胴部片。RL縄文、0段多条を横位施文。11・12は深鉢型土器の胴部片。RLを横位施文。繊維ほとんど含まず、薄手で裏面に指頭圧痕見られる。



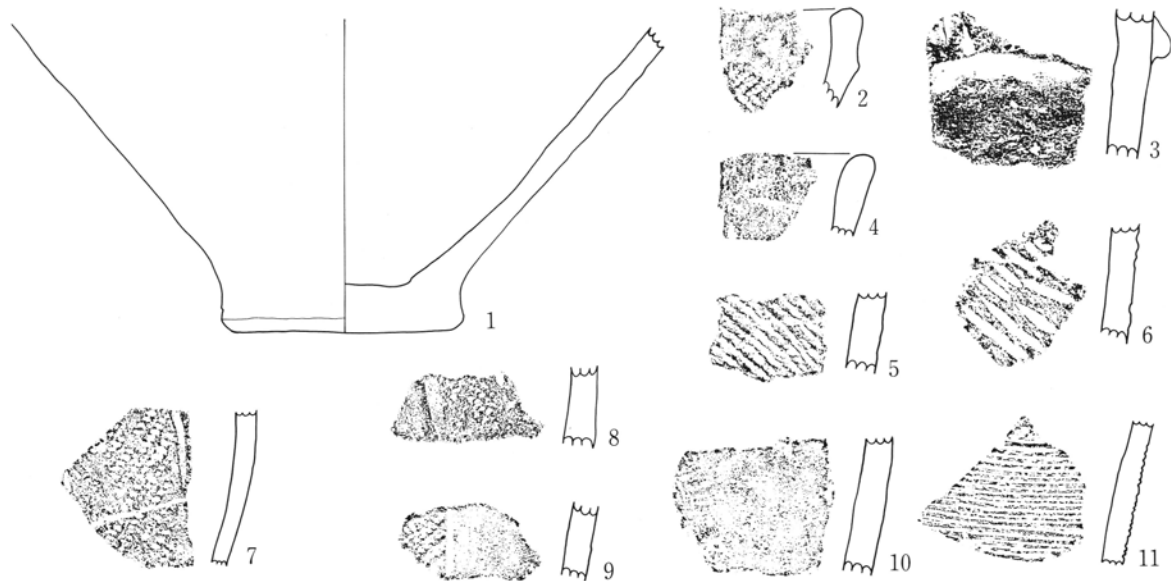
第358図 C165号住居跡出土遺物



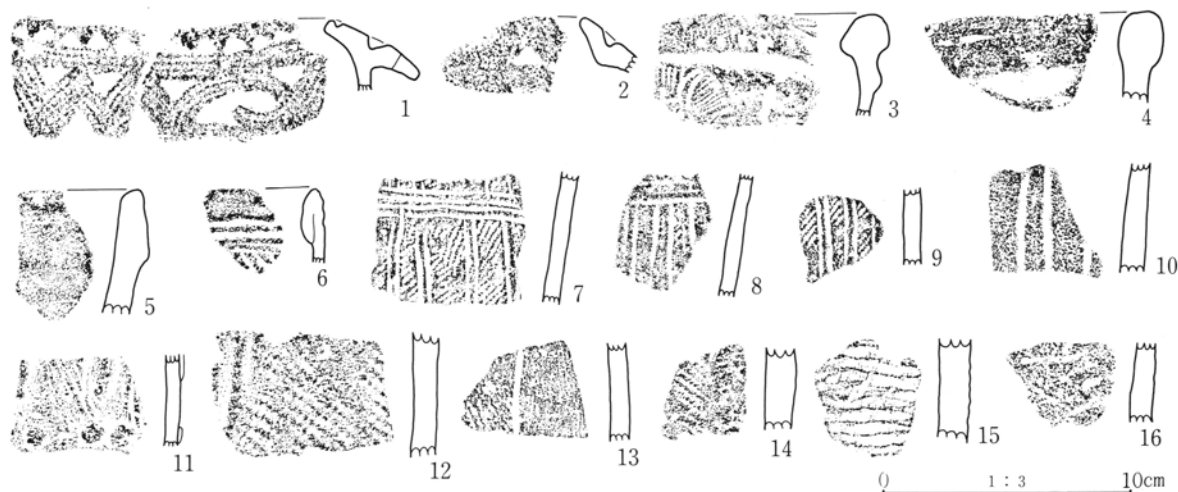
第359図 C169号住居跡出土遺物(1)



第360図 C169号住居跡出土遺物(2)



第361図 C170号住居跡出土遺物



第362図 C172号住居跡出土遺物

砂粒、金雲母が目立つ。13は胴部片。横位平行沈線、以下RL縄文を横位施文。14はLRを横位施文。片岩粒子含む。15は口縁部片。無節R・Lで横位羽状縄文を構成。16は無節Lを横位施文。施文は浅く、薄手の土器である。17は縄文RLを横位施文。18は無節R・Lで羽状縄文を構成。器面の風化著しい。19は口縁部片。不明瞭であるが、無節Lが横位施文される。

C169号住居跡出土遺物 (第359・360図 PL. 108・109)

遺存状態は良くなく、形状も判然としない。土器はかなりのレベル差を持って出土している。総点数は約200点、部位別の点数は口縁部3点、胴部190点、底部7点である。第I群に比定される。土器の文様は平行沈線により菱形文を意匠するものが見られる他、連続爪形文も見られるが、いわゆるC字形の爪形文とは趣をことにし、施文具を立てた状態で施文しており、刺突文的な施文効果を見せている。時期は前期中葉黒浜式期（いわゆる有尾系）である。

1は住居の南西部分でやや床面より浮いた状態ではあったが、破片がまとまって出土している。また隣接

第4章 出土遺物

する後世の住居内から出土した破片も接合している。深鉢型土器。口径(25.0cm)。口唇部に4単位の小突起が付される。口縁部文様帯には、2本1単位で7条の連続爪形文が横位施文(部分的に切れるところがある)される。胴部にはLR・RLで羽状縄文を構成。繊維の混入少ない。2・3は深鉢型土器の口縁部片。口縁に沿って2から3条の連続爪形文、下位に菱形文を描出するものと思われる。3は口唇部に肥厚する小突起を持つ。口縁に沿ってやや屈曲する連続爪形文が3条見られる。4は深鉢型土器の口縁部。口唇部に耳状貼付文、半截竹管による平行沈線を横位多段施文する。5は波状口縁部片。口縁に沿って3単位の平行沈線、以下菱形文を描出する。6は深鉢型土器の口縁部。4単位の波状を呈す。半截竹管による平行沈線で菱形文、三角文を描出する。7は平行沈線を横位多段施文。薄手である。8は平行沈線により菱形文を描出。6と同一個体。9は平行沈線を多段施文。砂粒が目立つ。10は平行沈線で三角形を描出。11は平行沈線でやや雑に菱形文を描く。12は地文にLを施文後、平行沈線により菱形文を描出。13は平行沈線が多段施文される。上部沈線は緩やかな弧状を呈す。14は胴部片。沈線で菱形文を描出。15は平行沈線で菱形文を描出するものと思われ、縦長の貼付文を付す。16は口縁部片。地文に無節Lを施文後、平行沈線を多段施文。17~22は単節縄文が施文される。17は口縁部片。口唇端部押さえられ、平坦をなす。RLを横位施文。18~20は胴部片。LR・RLで菱形羽状縄文を構成。21は無節Lが横位施文される。22はRLを横位施文。繊維ほとんど含まず、薄手で砂粒、金雲母目立つ。23は口縁部片。RLを施文か。器面の風化著しい。24は深鉢型土器の底部。底径(8.8cm)。無文、やや上げ底を呈す。25は施文不鮮明、直前段反撻か。

C170号住居跡出土遺物(第361図 PL. 109)

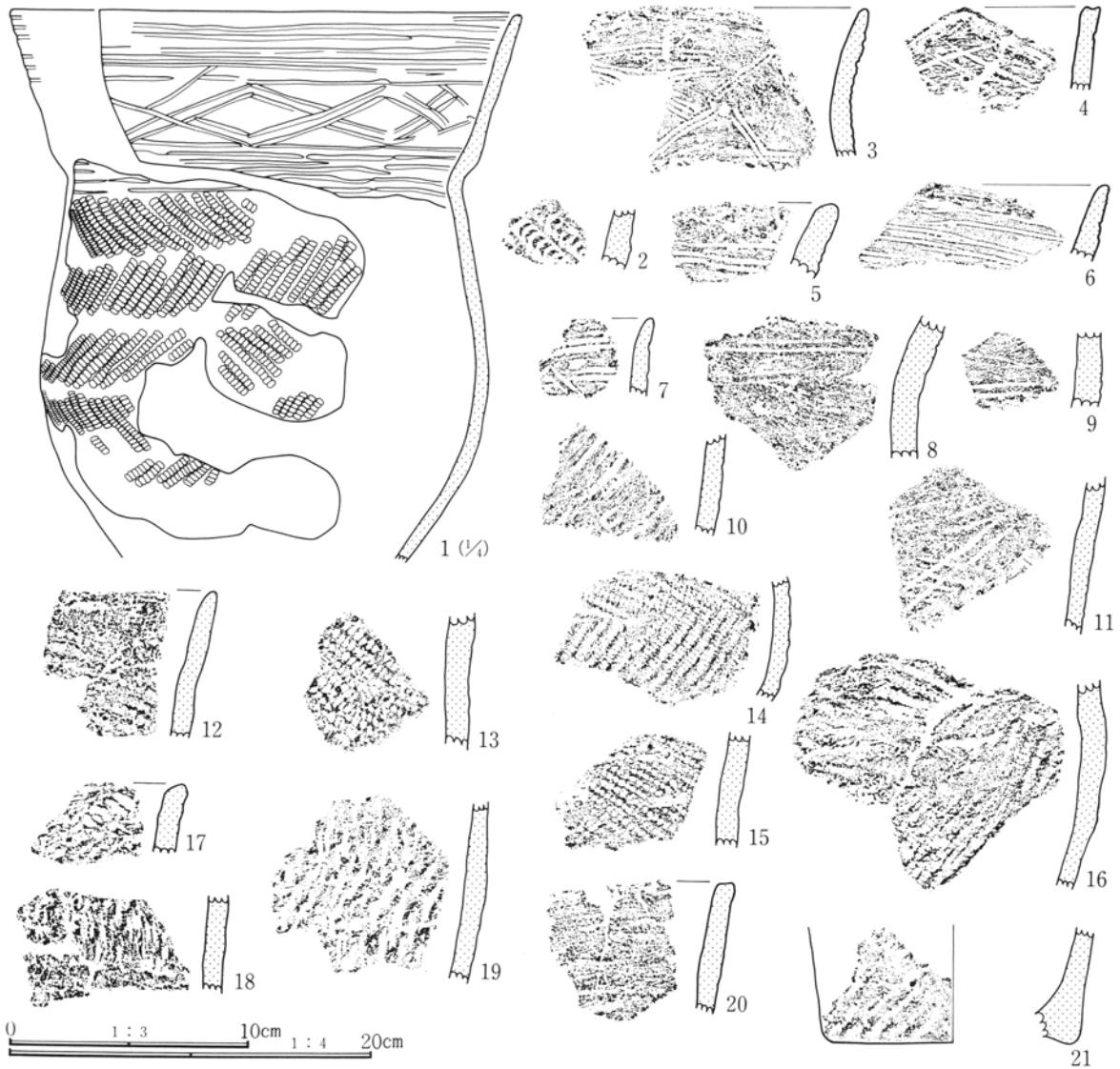
本址は敷石住居で、張り出し部分は失われているものの、主体部の遺存状態は良好である。出土土器は少なく敷石面に散在する程度である、土器は第IV群に比定される。総点数は18点で、部位別の点数は口縁部3点、胴部14点、底部1点である。埋設された状態で出土した1の他はいずれも小破片で、時間幅も見られる。時期は中期後半加曾利E III式と判断される。

1は埋設土器である。深鉢型土器の底部。底径9.6cm。無文。底端部やや張り出し、胴部は逆「ハ」の字に大きく開きながら直線的に立ち上がる。2は深鉢型土器の口縁部片。無文帯以下、縄文を横位、縦位に施文し羽状を構成。3は上位に横位隆帯を持ち、以下無文。4は口縁部片。浅い縦、横の沈線。5は無節Lを縦位施文。6は斜め方向に短沈線を多段に配す。7は沈線を垂下させ、その間にRLを縦位施文。8は縦方向の微隆帯。9は深鉢型土器の胴部片。縦方向の磨り消し縄文帯。10は無文、片岩粒目立つ。11は横方向の集合沈線。

C172号住居跡出土遺物(第362図 PL. 109)

調査区の西端で検出されている。住居としたが土坑の可能性もある。出土総点数は52点でいずれも覆土中より浮いた状態で検出されている。第II群、第III群、第IV群が見られる。部位別点数は口縁部10点、胴部41点、底部1点である。時期は土器に時間幅が見られるが中期後半か。

1は深鉢型土器の口縁部片。口縁部内傾し、端部が庇状に外側に張り出す。口縁に沿って小さめの三角陰刻文を巡らし、さらにやや大きな三角陰刻文、雲形文を間隔をおいて配す。端部に山形の刻みを付す。地文には連続爪形刺突文が充填されているが、摩滅が著しい。2は口縁部片。三角陰刻文が見られる。1と同一個体。3は深鉢型土器の口縁部片。口縁部肥厚し刻み目、刺突文を付す。以下沈線を巡らし、沈線文、隆帯が見られる。4は口縁部片。端部丸味を持って肥厚する。5は口縁部片。口唇部が折り返されて肥厚する無



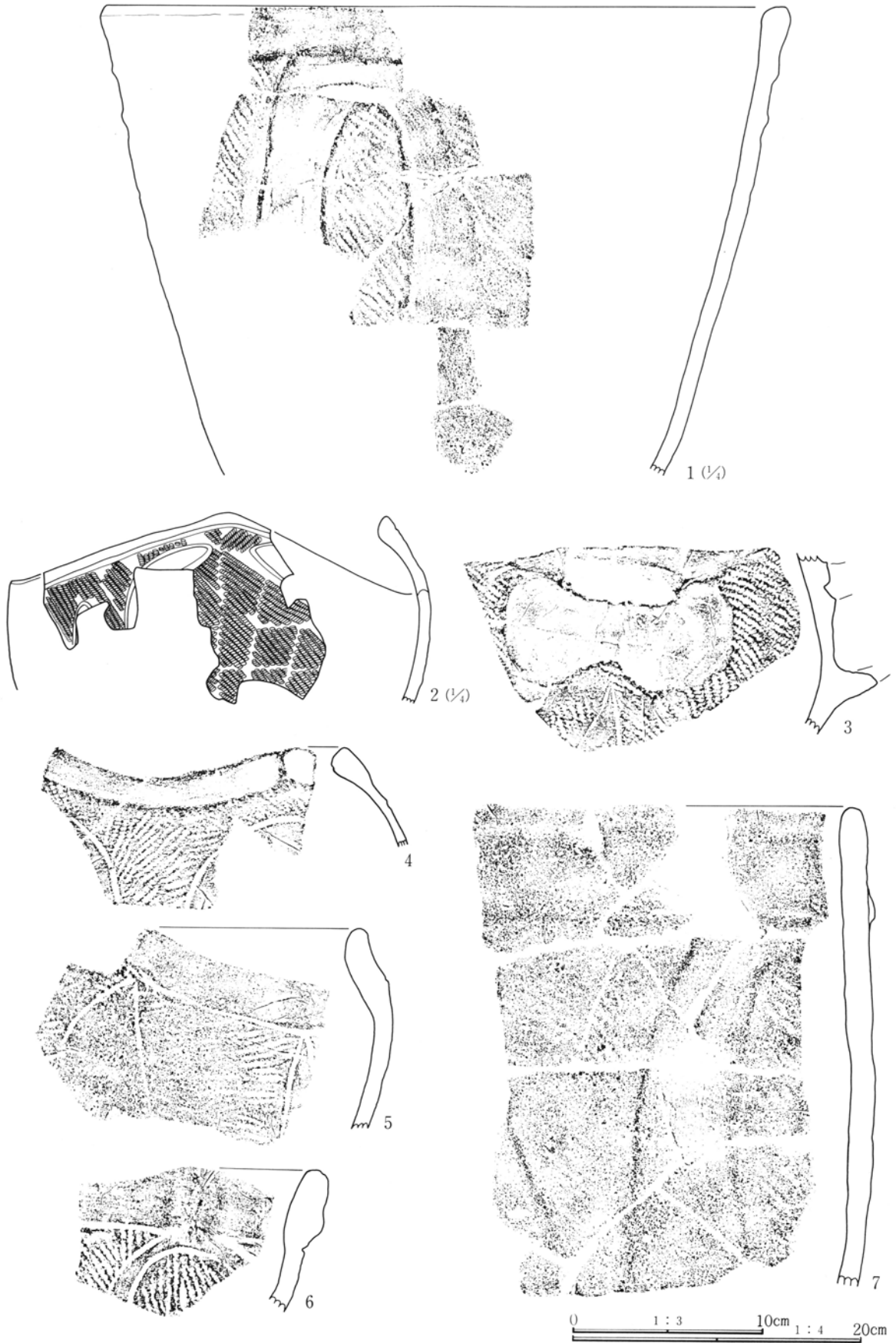
第363図 C174号住居跡出土遺物

文土器。6は口縁部片内側に折り返されて肥厚する。横位、斜位の平行沈線文。7～9は深鉢型土器の胴部片。RLを縦位施文後、半截竹管により横位、縦位に平行沈線を施文。10は縦方向の並行沈線。11は胴部片。縦位、斜位の集合沈線、ボタン状、耳状の貼付文。12は胴部片。縦方向の隆帯で区画された縄文帯。LRが縦位施文される。13は縦位の沈線、区画内にRLの縄文が施文される。14は縦方向の隆帯、LRを縦位施文。15は無節Lを縦位施文。16は施文不明。繊維を多量に含む。

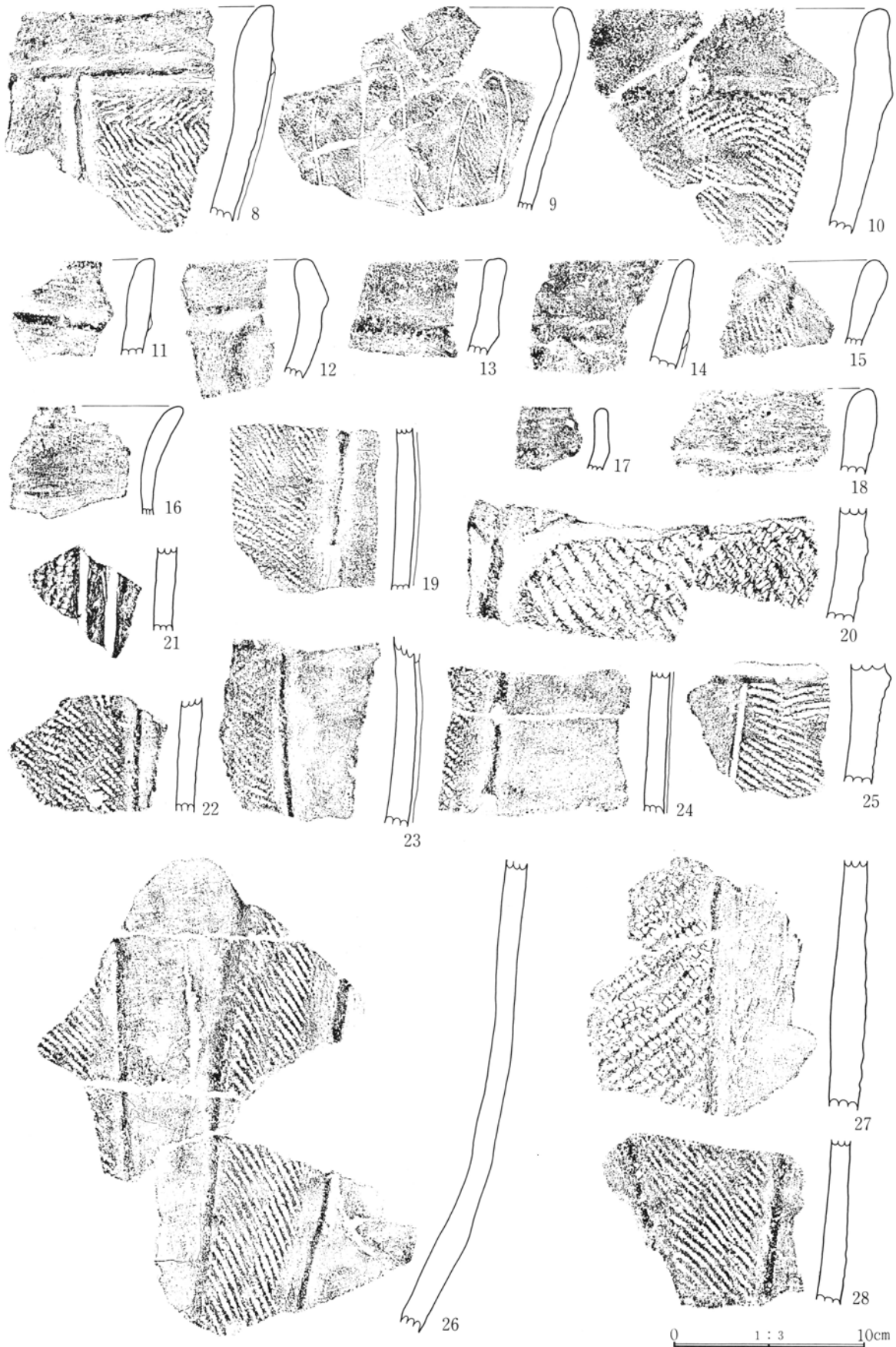
C174号住居跡出土遺物 (第363図 PL. 110)

出土土器の総点数は173点で、第I群を主体とする。部位別の点数は口縁部5点、胴部164点、底部4点である。器形を復元し得たのは1のみである。時期は前期中葉黒浜式期(有尾系)である。

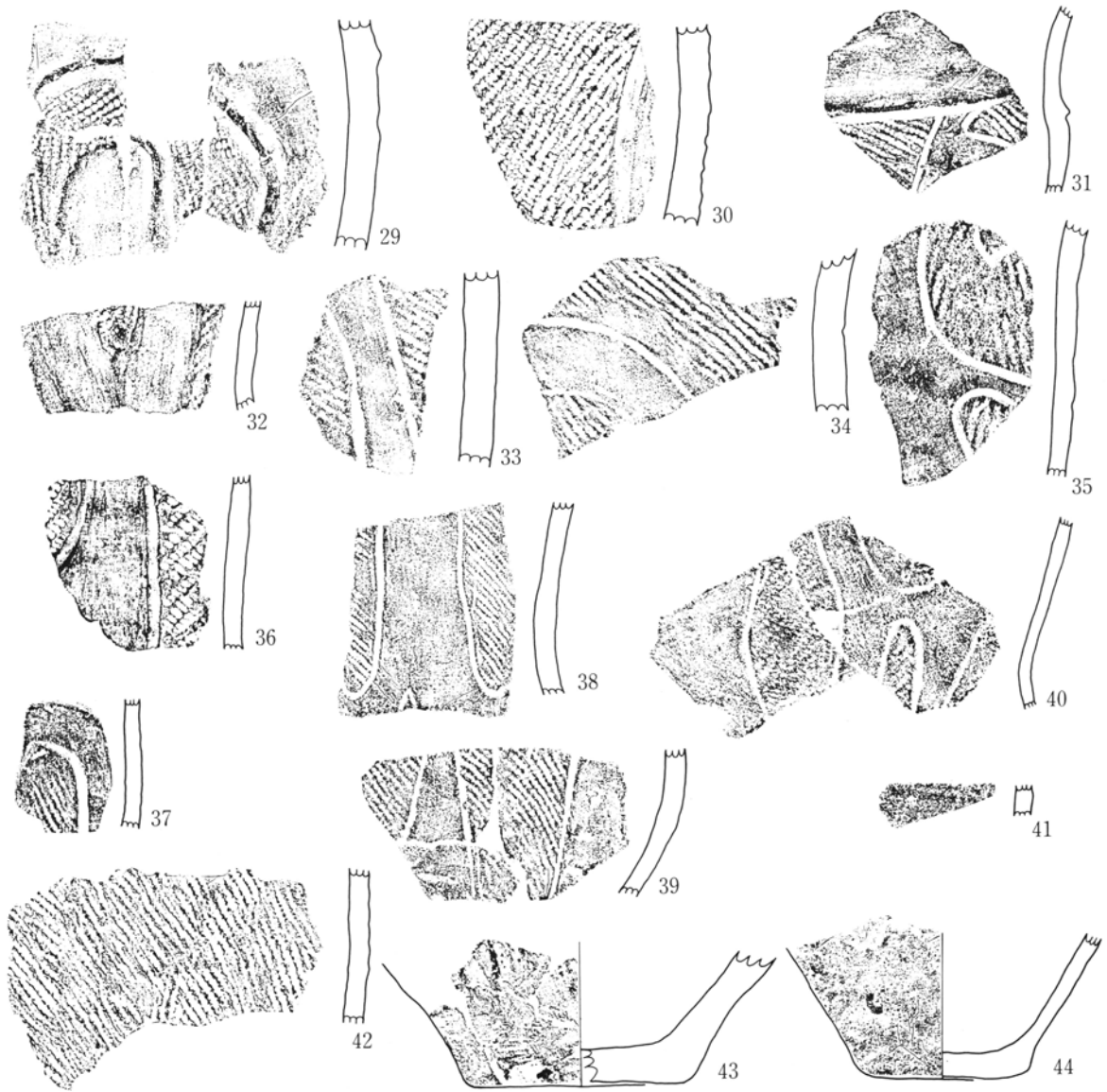
1は深鉢型土器。住居の東側部分床面直上で出土した破片が接合している。口径(28.4cm)。胴下半部でやや丸みを持ち、頸部で括れ、段を持って口縁部は直線的にやや外傾。口縁に沿って3単位の平行沈線、頸部にも3単位の平行沈線を巡らし、その間に、平行沈線による連続菱形文を描く。施文順位は下から上に行われている。胴部には横位羽状縄文をRL・LRで施文。2は連続爪形文を斜めに施文。3は口縁部片。平行沈



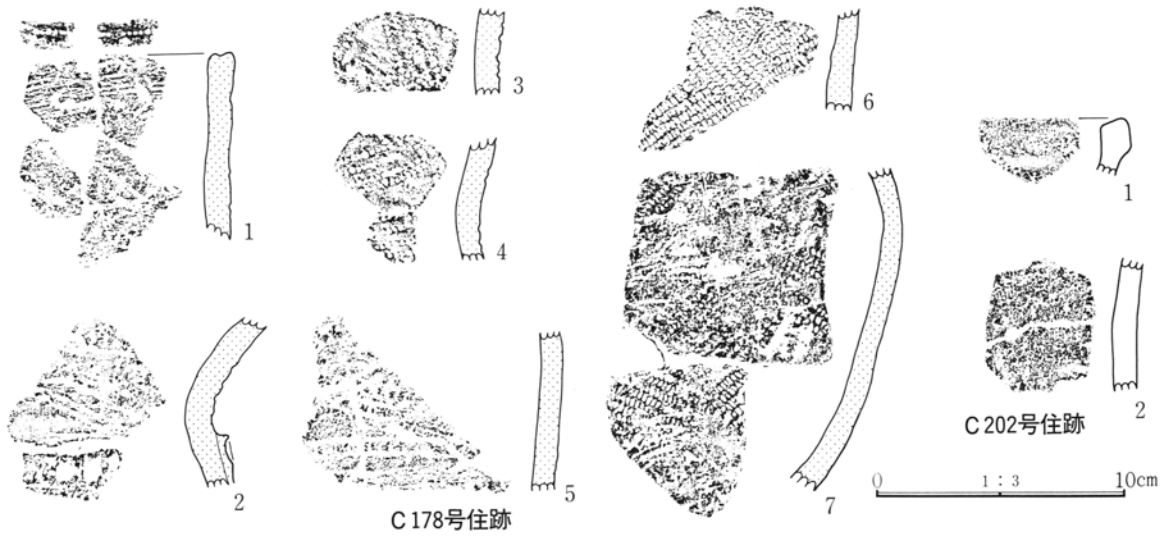
第364図 C176号住居跡出土遺物(1)



第365図 C176号住居跡出土遺物(2)



第366図 C176号住居跡出土遺物(3)



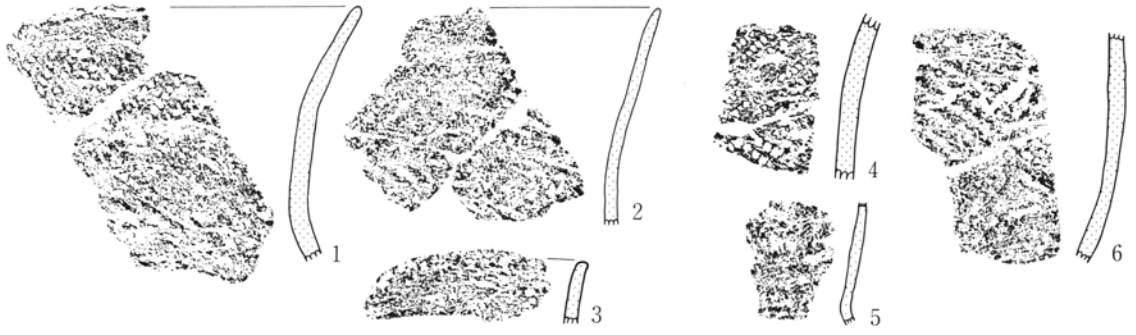
第367図 C178・202号住居跡出土遺物

線により、やや崩れた菱形文を描出。4は波状口縁部片。斜位の平行沈線が交差。5は口縁部片。横位平行沈線。6は口縁に沿って平行沈線を多段施文。口唇部はやや薄く仕上げられる。7は横位、斜位の平行沈線文。8は頸部片。横位平行沈線以下胴部に縄文施文。9は平行沈線により菱形文を描出か。10は斜位方向の平行沈線。11は平行沈線で菱形文を描出。12は口縁部片。RL縄文が横位施文される。13はRLを横位施文。14はLR・RLで横羽状縄文を構成。15はRLを横位施文。16はLR・RLで羽状縄文を構成。小礫混入。17は口縁部片。無節L・Rで羽状縄文を構成。18・19は胴部片。絡条体Rを施文か。20は深鉢型土器の口縁部片。無文。21は底部片。底径(10.0cm)。胴部はほぼ直に立ち上がる。縄文LR・RLで羽状縄文を構成か。

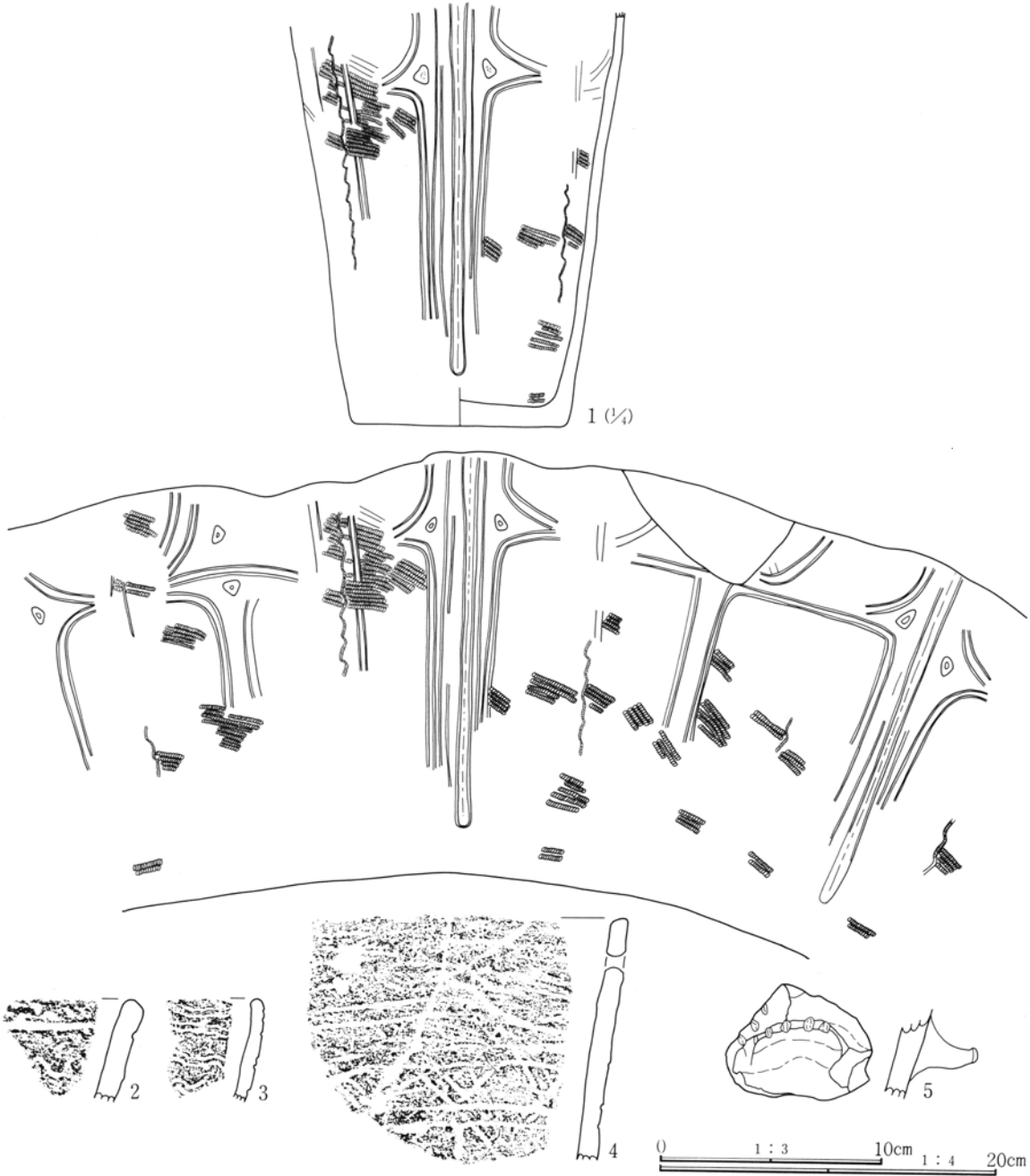
C176号住居跡出土遺物(第364~366図 PL.110~112)

住居としたが規模は小さく、不明な部分が多い。また土器については、遺構内とやや離れた部分の土器集中部も同一遺構の遺物として処理している。出土土器の総点数は238点で、第IV群である。部位別の点数は口縁部1点、胴部227点、底部1点である。時期は中期後半加曾利EⅢ式である。

1は大形深鉢型土器。口径(47.0cm)。微隆帯で口縁部無文帯を画し、逆U状文の磨り消し縄文。2は深鉢型土器の口縁部片。波状口縁を呈し1つの波頂部が高くなる。口縁に沿って幅狭の無文帯を沈線で画く、LRの縄文を縦位施文後、沈線で曲線文を描く。3は胴部片。地文にLRの縄文を縦位施文。橋状把手が付き、その下部より2本の沈線が開き内部を磨り消す。4は深鉢型土器の口縁部片。緩い波状口縁を呈す。口縁部には帯状の無文帯、波頂部は肥厚した橋状隆線。以下、RL縄文を縦位施文、沈線で画した磨り消し曲線文を描く。5は深鉢型土器の口縁部片。波状口縁を呈す。沈線で口縁部無文帯を画し、縄文LRを縦位施文後、八状文を沈線で描き、内部を磨り消す。6は口縁部片。口縁部波頂部が瘤状に隆起、沈線で下方に円弧文。地文はLRの縄文を充填している。7は深鉢型土器の口縁部片。微隆帯で口縁部無文帯、胴部文様を画し、以下磨り消し縄文。器面風化。8は口縁部片。隆帯で口縁部無文帯、縦位無文帯を画し、外は無節Lを充填施文。9は波状口縁部片。内側に屈曲する口縁部無文帯を有す。以下沈線で内部をLR縄文で充填した∩状文、縦位方向の沈線文を描く。10は口縁部無文帯、縦位区画を隆線で画し、縄文LRを施文するが施文方向を変えており、一部羽状となる。11~14は深鉢型土器の口縁部片。隆帯で画した無文帯を有す。15は波状口縁部片。波頂部肥厚し、口縁に沿って無文帯が見られる。以下LRの縄文を縦位施文。16は口縁部片。無文帯部分。17は口縁部片内側に折れる。無文。18は沈線で画した無文帯を持つ。砂粒含む。19はLRを縦位施文。垂下微隆帯で画された磨り消し縄文。20は隆線、沈線による垂下文、縄文LRを縦位施文。21~28は縦位区画の磨り消し縄文。22~24は深鉢型土器の胴部片。LRを縦位施文。垂下微隆帯で画した無文帯。25は横位隆帯、沈線で画された縦位の磨り消し縄文。26・28は縦位磨り消し縄文帯。縄文はLRを縦位施文。27はRLを縦位施文。垂下微隆帯で画した無文帯。29は隆線で逆J字文を描き、内部にLRの縄文を充填する。30は垂下沈線帯で区画、縄文RLを充填施文。31口縁部片。沈線でやや幅広の無文帯を画し、沈線で磨り消し文様を描く。32は微隆線による垂下文。縦位磨り消し縄文。33・34は縄文LRを施文後、曲線文を描き、内部を磨り消す。35は上下から曲線文様を描く磨り消し縄文。36~40は深鉢型土器の胴部片。沈線で磨り消し曲線文を垂下。36は縄文RLを縦位施文。40は上下から沈線で文様帯を描き、区画内をRLの縄文を充填施文。やや薄手の土器である。41は微隆線を持つ。42は縄文LRを縦位充填施文。43は底部片、底径(9.0cm)。上部に垂下隆帯がわずかに見られる。44は底径6.5cm。無文で砂粒多く含む。底面端部が丸く摩滅している。



第368図 C 203号住居跡出土遺物



第369図 C 206号住居跡出土遺物

C178号住居跡出土遺物（第367図 PL. 112）

掘り込みも確認できず、形状、範囲も明確にはつかむことができなかった。炉の存在から住居としたが、壁、掘り込みは確認されていない。出土土器の総点数は10点と少なく第I群である。時期は前期中葉黒浜式期（有尾系）である。

1～4は同一個体。1は深鉢型土器の口縁部片。櫛歯状工具による連続刺突文により、三角文、菱形文が描出されるものと思われる。また平らに押さえられた口唇部分に一条の刺突文が施文されている。2は深鉢型土器の頸部片。押圧痕のある籬状の隆帯が頸部に巡らされ、外反する口縁部には櫛歯状工具による連続刺突文が山形に配される。1と同一個体か。3・4は櫛歯状工具により、斜め方向に4本の刺突文。4は口縁部片。やや外反する。櫛歯状工具により斜位方向の刺突文を付す。5は深鉢型土器の口縁部片。連続爪形文により菱形文を描く。6はLR・RLの縄文で菱形羽状を構成。器面やや風化。7は深鉢型土器の胴部片。LR・RLの縄文で菱形羽状を構成。0段多条。

C202号住居跡出土遺物（第367図 PL. 112）

上部を削られ、南側半分も切られているために遺存状態は悪い。出土土器も少なく、総点数は3点のみである。時期は中期後半か。

1は深鉢型土器の口縁部片。口縁部肥厚する。2は深鉢型土器の胴部片。縦方向の沈線。

C203号住居跡出土遺物（第368図 PL. 112）

遺存状態は悪く、出土土器の総点数は9点と少ない。土器は小破片のみで、縄文施文のみである。第I群である。掲載した土器はいずれも風化しており脆弱である。時期は前期中葉黒浜式期である。

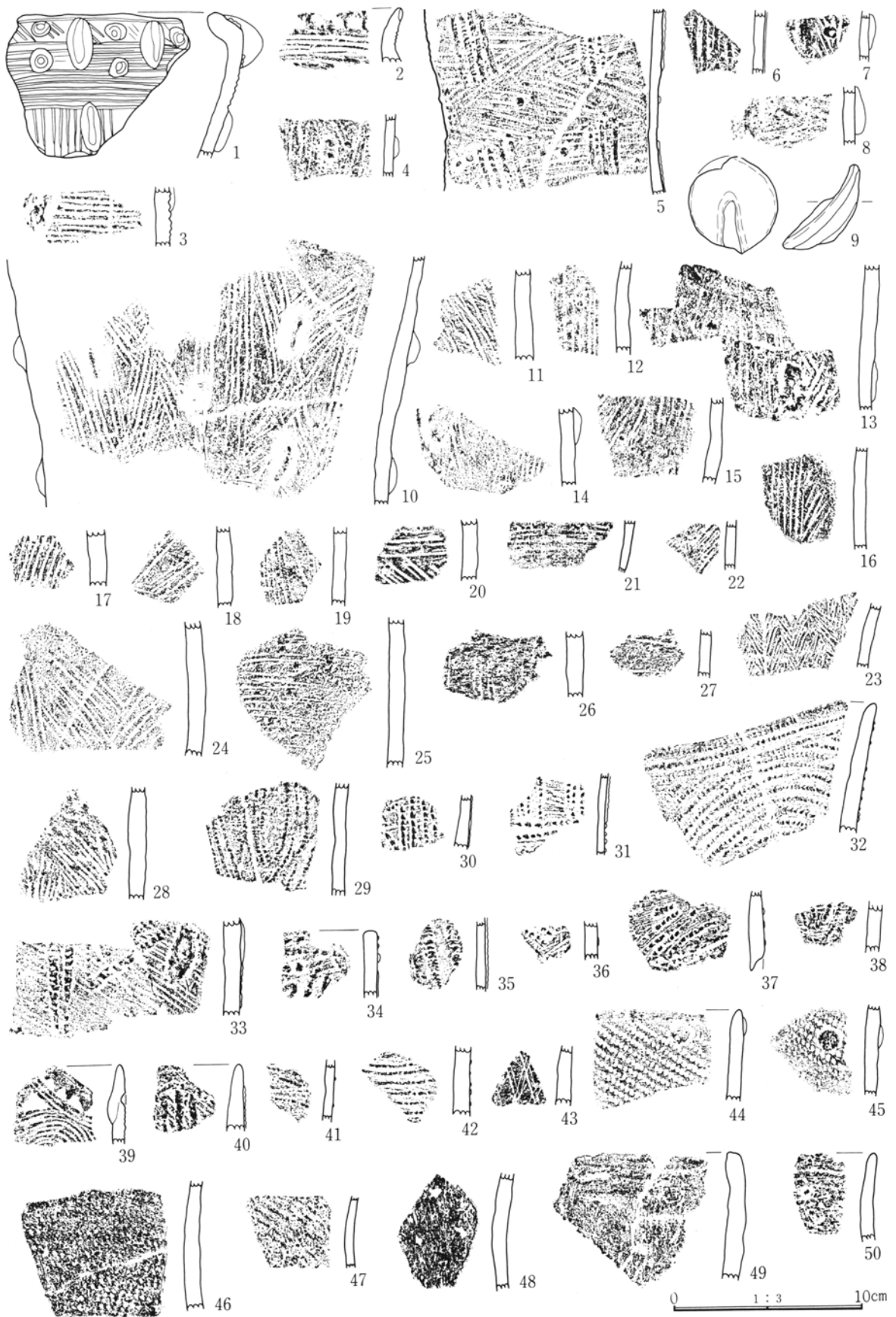
1は深鉢型土器の口縁部片。縄文LR・RLで羽状縄文を構成。器面の風化が著しい。2は深鉢型土器の口縁部片。縄文LR・RLを羽状施文。器面の風化が著しい。3は口縁部片。施文はLRの縄文か、ほとんど観察できない。4・6は胴部片。縄文LR・RLで羽状縄文。5は風化が著しく施文は不明。薄手の土器である。

C206号住居跡出土遺物（第369図 PL. 112）

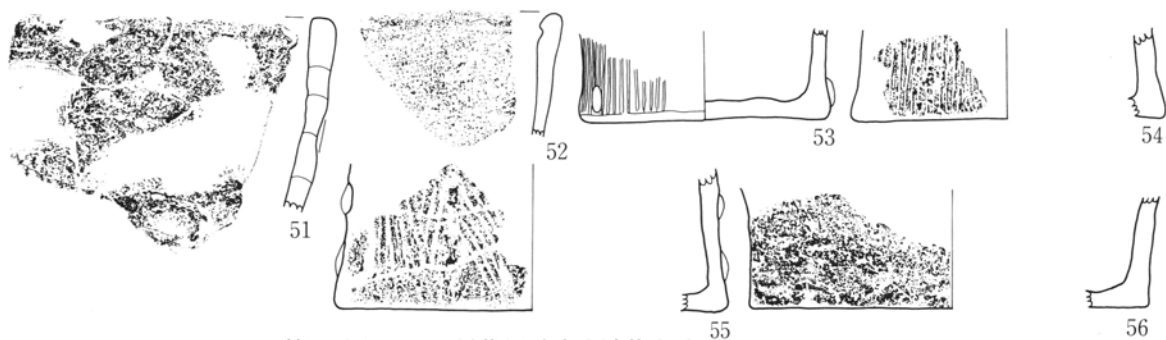
調査区の東端に掛かっていたために全掘はできなかったが、遺存状態はかなり良好であった。出土土器総点数は54点とそれ程多くはなかった。部位別の点数は口縁部3点、胴部47点、底部4点である。

1は埋設された状態で出土している。他は小破片のみで、直接本址に帰属するものではないと判断される。第I群から第III群まで見られるが、埋設土器から時期は中期初頭五領ケ台式期と思われる。

1は炉体土器で床面までほとんど埋められた状態で出土している。深鉢型土器の胴部から底部、底径12.6cm。口縁部分を欠く。胴部はやや外傾して直線的に立ち上がる。断面三角の隆帯が一对垂下し、その両側に半截竹管による平行沈線でト、逆ト字状のモチーフを描く。さらに同様のモチーフを隆帯の中間位置に一对描く。また、これらのモチーフの中央部に、対となる三角形を意識した陰刻文が見られる。地文にはS字状の結節文を持つLR縄文が縦位施文されるが、器面はかなり風化しており施文の不鮮明な部分がある。内面底部付近に煤付着。欠け口部分は摩滅しており、器面もかなり風化した状態で、手で触れた感触はざらついている。2は深鉢型土器の口縁部片。沈線、刺突文が見られる。3は口縁部片。半截竹管文による波状文を多段施文。4は口縁部片。平行沈線を斜位方向に施文後、横位にやや間隔をおいて施文。口縁近くに補修孔が見られる。繊維を含む。混入品5は深鉢型土器の胴部、耳状突起部分片。端部に刻みを持つ。金雲母含む。



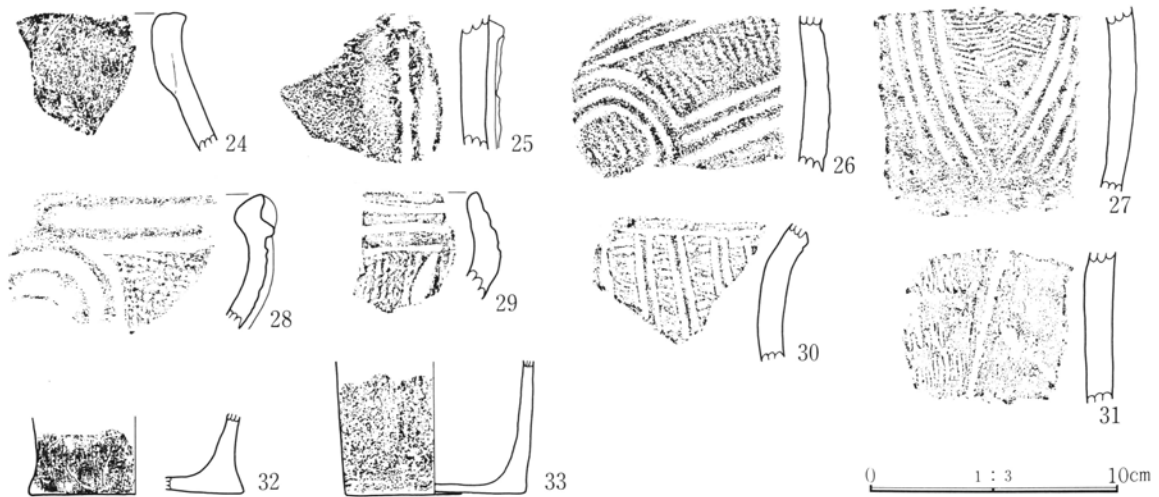
第370图 C362号住居跡出土遺物(1)



第371図 C362号住居跡出土遺物(2)



第372図 C363号住居跡出土遺物(1)



第373図 C363号住居跡出土遺物(2)

C362号住居跡出土遺物 (第370・371図 PL. 113)

隅丸正方形を呈すかなり遺存状態の良い住居である。出土土器の総点数は96点で、部位別の点数は口縁部8点、胴部83点、底部5点である。土器は小破片が多く第II群を主体とする。集合沈線、結節浮線文、耳状、ボタン状貼付文等が見られる。時期は前期後半諸磯C式期である。

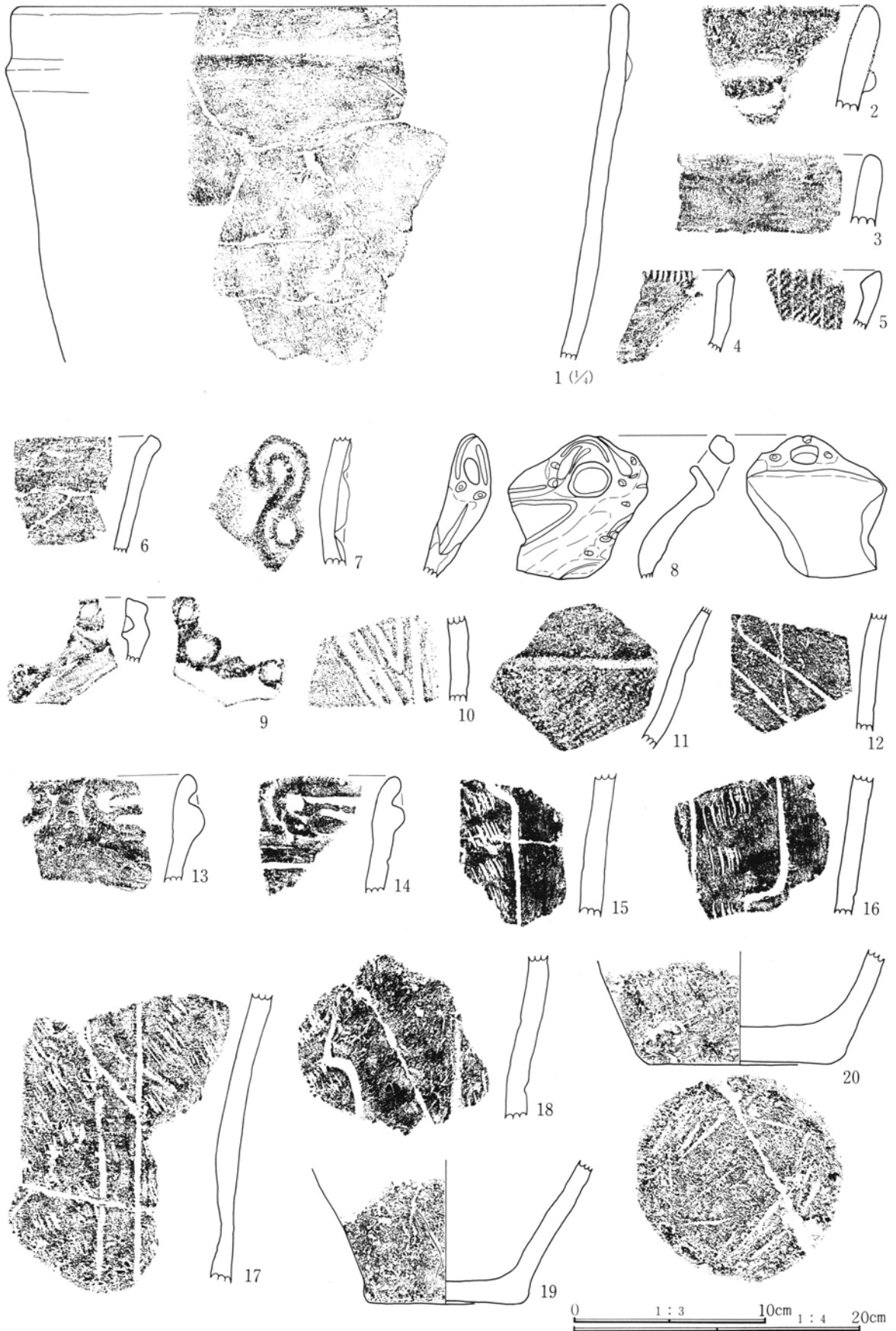
1は深鉢型土器の口縁部片。「く」の字に内屈する口縁部。口唇部以下、斜位、横位、縦位に集合沈線を施文後、口縁に沿って円形刺突を持つ上下1対の円形文、耳状貼付文を交互に付し、下位にも耳状貼付文が付される。2は口唇部薄くなり、押圧痕が見られる。2条の平行沈線が見られる。3は横位集合沈線、貼付文。4は縦方向の集合沈線、縦長の貼付文。砂粒目立つ。53と同一個体。5は深鉢型土器の胴部片。地に矢羽根状、横方向の沈線施文、縦方向に4および3単位の結節浮線文を断続して貼り付け、2つ単位のボタン状貼付文を付す。6は横位集合沈線施文後、縦に結節浮線文。5と同一個体。7は胴部片。集合沈線施文後、棒状、刺突を有す円形の貼付文。8は横位集合沈線、縦長の貼付文。9は口縁部に付けられた耳状文。スプーン状に内湾。10は深鉢型土器の胴部片。縦、X状に集合沈線を施文、さらに縦長の貼付文を付す。11は縦方向の集合沈線。10・14・28と同一個体。12は縦の集合沈線。13は縦位集合沈線、棒状貼付文。14は縦、X状に集合沈線を施文、さらに縦長の貼付文を付す。15は胴部片。縦位の集合沈線。16・17は縦位・斜位の集合沈線。18は斜位方向の平行沈線。19は縦位の集合沈線。20は横位、斜位の集合沈線。21は口縁部片。横位の集合沈線。22・23は矢羽根状の刺突文沈線。24は縦位・斜位の斜位沈線。25は横位集合沈線。26は集合曲線文。27は平行沈線を横位施文。28は縦、X状に集合沈線を施文。貼付文が付されていたものと思われる。10・14と同一個体。29は横位集合沈線施文後、縦位に結節浮線文。30は横位集合沈線、縦位、斜位に結節浮線文。31は横方向の集合沈線、横位、縦位の結節浮線文。32は結節浮線文で同心円文を描く。33は斜位集合沈線を地文施文後、2本単位の結節浮線文を縦位、斜位に付す。棒状貼付文見られる。34は節の粗い結節浮線文、貼付文を付す。35は2本の結節浮線文。36は集合沈線後に結節浮線文。37は結節浮線文で曲線文を描く。38は横位刺突文、沈線、結節浮線文で曲線文を描く。39は波状を呈す。口縁に沿って三角陰刻文、波頂下にもやや大きい三角陰刻文を付し、以下平行沈線で渦巻き文を描く。40は口縁部片。波状口縁の波頂部。斜位に集合沈線施文後、口縁に沿って2条の結節浮線文、波頂部から3本を垂下させる。41地文に集合沈線施文後、結節浮線文。42は地文に斜位の斜位沈線、複数の結節浮線文で曲線を描く。43は斜位方向に集合沈線。44は口縁

部片。縄文 RL を全面施文、口縁部にボタン状の貼付文。45は縄文 RL を全面施文、ボタン状の貼付文。44と同一個体。46は LR を施文。47は無節 R 施文か。器面の風化著しい。48・49は無文。49は口縁部片。50は口縁部片。器面荒れており施文は不明、無文か。51は口縁部片。無文。器面剥落が見られる。52は口縁部片。口唇部内側に沈線が巡る。無文土器。53～56は底部である。53は底径(9.6cm)。縦方向の集合沈線。内面煤付着。4と同一個体。54は底径(12.2cm)。縦方向の集合沈線。55は底径(15.6cm)。縦位の集合沈線、貼付文が付される。56は底径(15.5cm)。無文。

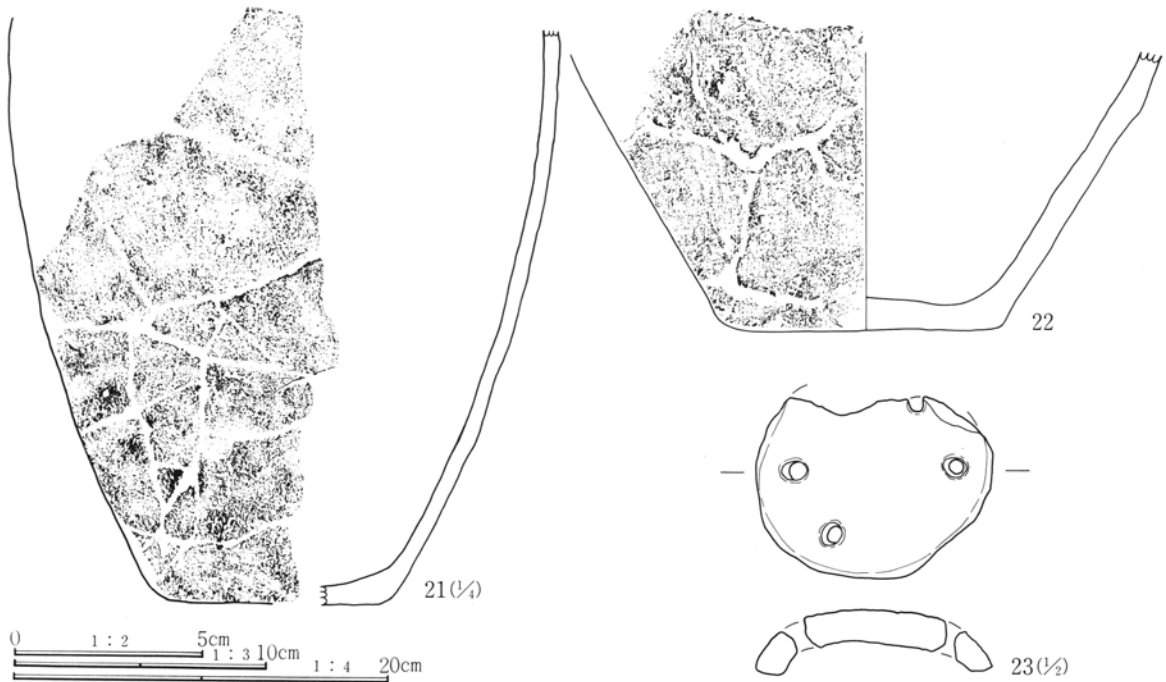
C363号住居跡出土遺物(第372・373図 PL. 114)

敷石住居である。東側半分を弥生時代の住居に切られてはいるものの、残存部分の状態はきわめて良好であった。出土土器の総点数は870点、第V群である。部位別の点数は口縁部95点、胴部762点、底部13点である。土器は主体部、張り出し部内より出土しており、やや浮いた状態のものも見られるが、敷石面上で出土しているものも多い。器形を復元し得るものは1点を除き、ほとんど見られなかった。器種は深鉢型土器の他、注口土器と思われる破片も複数認められる。時期は後期中葉堀之内1式期と判断される。

1は深鉢型土器。ほぼ住居中央の床面上に集中して出土した破片が接合している。口径(42.5cm)。胴部やや丸味を持ち、頸部くの字に折れて口縁部はやや外反する。口唇部はわずかにつまみ上げたように直立する。外面口縁に沿って沈線が巡る。口縁部以下無文である。2は深鉢型土器の口縁部片。波状口縁を呈す。波頂部に1対の円孔、隆線を垂下させ、頸部の橋状の8字文につながる。頸部分隆線で画された無文帯が巡り、胴部には沈線による曲線文。外面の一部分に漆かと思われる黒色の付着物あり。3・4は注口土器片。把手が付される。3は稜に沿って沈線、器面との接合部分に刺突文。器面は無文。4は把手が付される。下位に横方向の隆線が見られる。5は口縁部外反、口縁に沿って沈線。頸部に2本の横位微隆線。6は口縁部片。口縁に沿って沈線、頸部には沈線、刺突文が見られる。7は口縁部片。口縁に沿って沈線。頸部に横位微隆線。5と同一個体。8は頸部片。口縁部無文、屈曲部に8字状文、胴部は隆線で曲線文を描く。9・10は深鉢型土器の口縁部片。10は口唇部内側に肥厚、口縁の一部わずかに突起部分があり、外面に巡る沈線がここで切れ、円形刺突文。以下、無文部に隆線で曲線文を描くと思われる。11は口縁部片。無文。12は口縁部片。口縁に沿って沈線、以下無文。1と同一個体。13は深鉢型土器の口縁部片。押圧痕を有す隆帯が巡る。14は口唇内側にやや肥厚。口唇端部に丸棒状工具による連続の刻み、以下 RL の縄文帯を設け、下位方向から竹管による刺突を横に連続施文。15は刺突文を持つ隆線が垂下。16は口縁部片。口縁部に沈線による連弧文、中心部分は円孔が見られる。17は口縁に沿って沈線、以下無文。18は口縁部片。口縁に沿って隆線が巡る。以下、磨り消し縄文帯により三角、菱形文を描く。19は8字文を縦位に連結。沈線による曲線文を描く。地文に細縄文。20は口縁部片。口唇部突起し内面に円形刺突文、また直下にも円形文、沈線が口縁に沿って巡る。21・22は注口土器の把手部分。稜に沿って沈線が付される。23は胴部片。押圧の見られる隆線が垂下。24は深鉢型土器の口縁部片。やや外反、内側肥厚し口唇端部平らに押さえられている。25は隆帯上に付された円形文から、沈線が垂下。26は地文に LR の縄文施文。沈線による円形文、平行線文が描かれる。27は沈線で縦方向の重紡錘文を描き内部には、縄文 LR が充填施文される。28・29はやや内湾する深鉢型土器の口縁部片。28は口縁に沿って、沈線、隆帯を巡らし、一部肥厚する部分の下位に隆帯による渦巻き文、RL の縄文施文。29は口縁に沿って横位2本の沈線、以下沈線で区画文を描き、撚糸 L が縦位施文される。30は横位、縦位に平行沈線。31は縦位沈線、連続短沈線を多段施文。32・33は底部片。32は底径(8.4cm)。端部が外に張る、無文。33は底径7.0cm。胴部直立し、円筒状を呈す。無文。



第374図 C368号住居跡出土遺物(1)



第375図 C368号住居跡出土遺物(2)

C368号住居跡出土遺物(第374・375図 PL. 115)

C363号住居跡に大きく切られているために遺存状態はきわめて悪い。形状は南に張り出し部を持つ柄鏡形を呈すものと思われ、石が敷かれていた可能性がある。出土土器の総点数は257点で、部位別の点数は口縁部24点、胴部229点、底部4点である。第V群を主体とする。土器の他に蓋形土製品が1点出土している。時期は後期初頭称名寺～堀之内I式期と判断される。

1は大形の深鉢型土器の口縁部片である。住居北側に出土した破片と中央部分のものが接合している。口径(43.0cm)。口縁下に隆帯が巡り口縁部無文帯を画す。胴部は無文。2は口縁下に隆帯が巡り口縁部無文帯を画す。3は口縁部丸みを持つ、無文。4は口縁部片。口唇部内削ぎ状を呈し、端部に押圧刻み目が巡る。片岩粒含まれる。中期初頭に比定される。5は口縁部片。口唇部内側に肥厚、LR縄文が横位施文され、縦位方向の沈線が見られる。前期末に比定される。6は口縁部片。沈線に区画された無文帯を持つ。7は隆帯による縦8字状文。8は口縁部片。波頂部に橋状の把手が付され、口唇部、把手上縁部分に沈線、刺突文が付される。以下、沈線による曲線文が描かれる。9は口縁部片。眼鏡状の把手部分か。内面、折り返されて肥厚し、円孔文。また波頂部にも円孔文が見られる。10は胴部片。沈線による重三角文。11は横位沈線。以下、LRの縄文を施文か。12は胴部片。沈線による平行線文様が描かれる。13・14は口縁部片。肥厚した口唇の外側に沈線が巡り、一部瘤状に膨らむ。15～18は同一個体片。縦位の沈線文と連続短沈線が付される。19～22は深鉢型土器の底部。19は底径8.4cm。上端部にわずかに縄文が観察される。20は底径10.6cm。無文。底面に篋の当たり状の沈線が観察される。21は胴から底部片。炉の掘り方部分より出土している。底径(12.0cm)。胴部無文。器面風化。22は底径10.9cm。胴部はやや外傾して立ち上がる。無文。小礫の混入目立つ。内面に煤付着。23は蓋形土器である。長径6.2cm、短径(4.5cm)の楕円形を呈し、浅い碗状に膨らみ4カ所に穴を持つ。一部欠損。全体に黒色を呈す。

第4章 出土遺物

2. 集石・配石・埋甕

ここに報告する集石および配石としたものは、最終的には住居跡と判断されるものもあるが、便宜上調査時点での呼称を用いている。また、C1号集石は欠番であり、C2号配石は平安時代の遺構として南蛇井増光寺遺跡IVにおいて報告済みである。

C2号集石出土遺物（第376・377図 PL. 116）

調査区の西端に検出された。遺構は壊れた状態にあるが敷石住居跡である。僅かに主体部分の一部が残存するのみである。土器は集石（敷石）の南側でかなりの点数が出土しており、敷石面からも若干の破片が検出されている。また3は埋設土器である。時期は中期・加曽利EIV式期である。

1は石組炉内の下層部分より出土している。口縁部片である。口径(37.0cm)。波状となった口縁部分に4カ所の橋状把手が付くと思われる。微隆線によって区画された口縁部無文帯を有す。沈線で区画し、中を縄文LRで充填された紡錘状の磨り消し文様が把手部下位より垂下。砂粒目立つ。2は南端部分において埋設された状態で出土している。中位でややくびれる。上下からの沈線による文様帯。LRの縄文が充填されるが、下部文様帯は上端部分にのみ施文されている。21と同一個体。3は底径8.0cm。胴部はやや丸味を持って立ち上がる。上位部分に縄文LRがまばらに施文されている。4は口縁部内傾し無文帯を持つ。以下、縄文LRが施文される。5は深鉢型土器の胴部片。縄文LRを施文。6～7は同一個体。6は微隆線で口縁部無文帯、縦位無文帯を区画。LRを縦位施文。7は微隆帯による縦位文様帯。縄文LRを縦位施文。8は微隆帯による縦位文様帯。縄文LRを縦位施文。9は沈線による文様帯。内部を無節Lで充填。10は沈線による円形文、曲線文様。縄文RLを施文。11は沈線による上下からの文様体。無節Lが観察される。12は縦位の磨り消し縄文帯。RLが縦位施文される。13は沈線による磨り消し縄文帯。無節Lが縦位施文される。14～18は同一個体。14は縦位の磨り消し縄文帯。RLが縦位施文される。19は縄文LRが施文される。20は縦位隆帯が見られる。21は底部。底径8.4cm。胴部やや外反して立ち上がる。無文。2の底部か。

C1号配石出土遺物（第378図 PL. 117）

ほとんどが壊された状況で、全容は不明、敷石住居の一部が残存したものであると思われる。土器は1と2が埋設された状態で検出されている。時期は出土土器から、中期後半加曽利EIII式期である。

1は口縁部。口径(46.0cm)。隆線で口縁部無文帯を区画。胴部隆線で曲線文を描き、縄文RLを施文。2は微隆線で曲線文を描き、RLを施文。1と同一個体と思われるが接点がないために2点で報告。

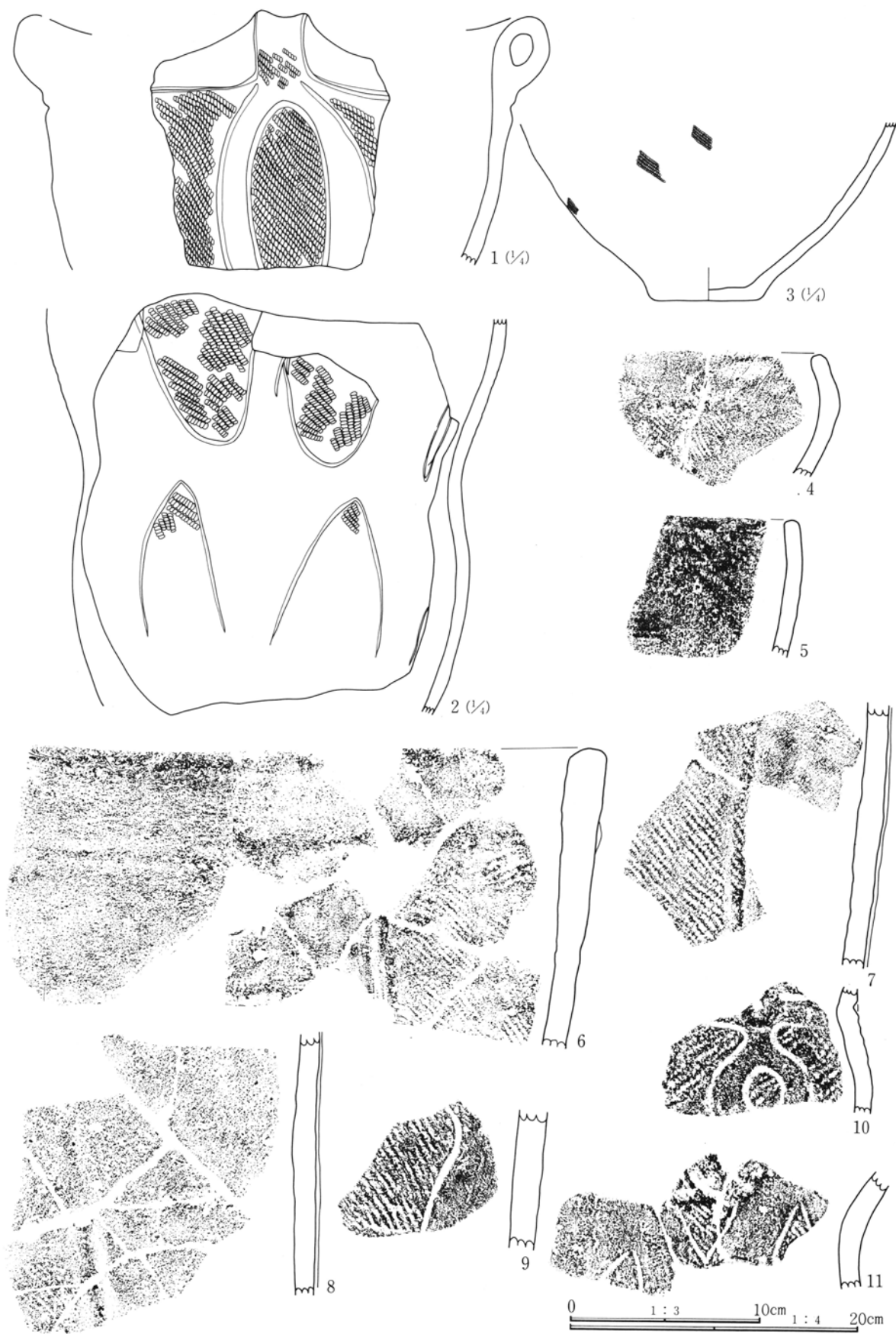
C3号配石出土遺物（第378図 PL. 117）

長円形に配された河原石とそれに伴う落ち込みが確認されている。土器は落ち込みの覆土中より検出されたものである。時期は後期中葉と思われる。

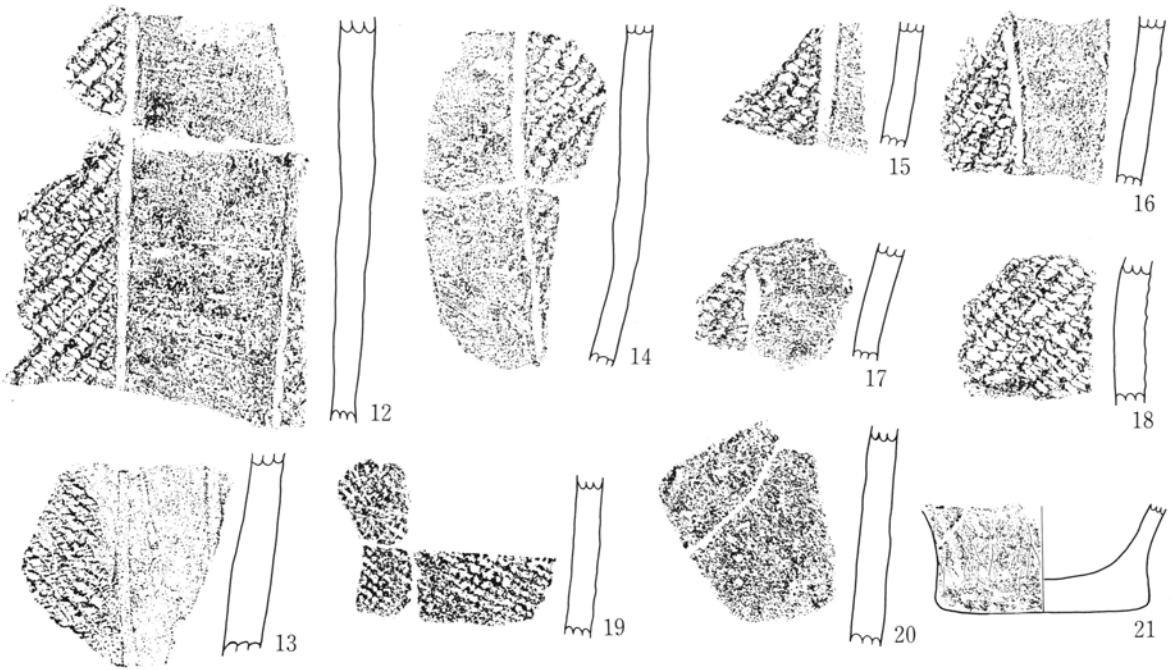
1は浅鉢型土器の口縁部片。口縁部内側に肥厚。沈線により曲線文、口縁部文様帯を区画、縄文RLを施文。2は深鉢型土器の胴部片。縄文LRを施文。沈線により斜め方向の無文帯。

C4号配石出土遺物（第379図 PL. 117・118）

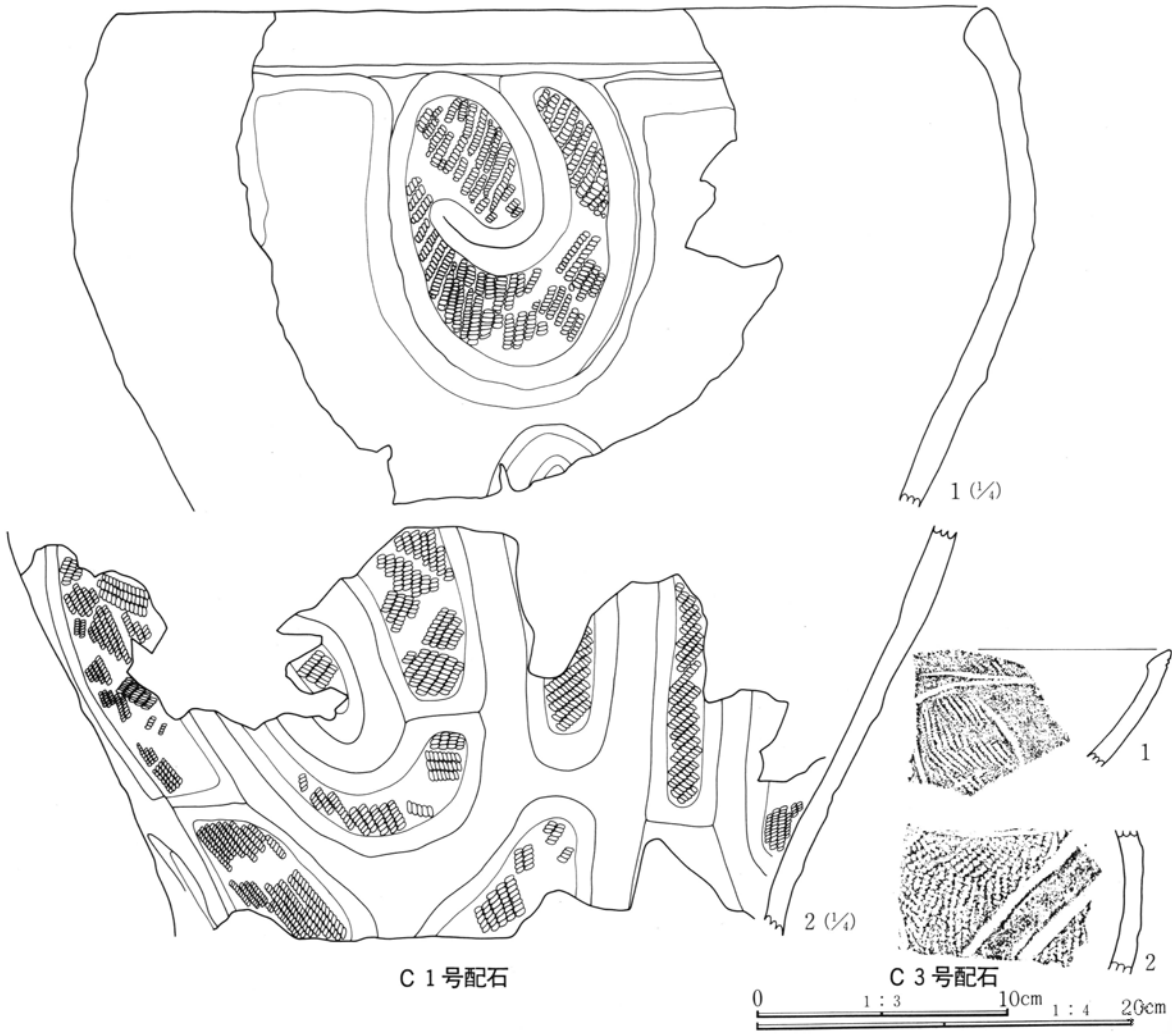
調査区北西部に検出されている。配石としたが住居の炉部分と考えられる。石が円形に配された炉の周辺部分を河原石が囲む。土器はこの石の上に点在して出土している。時期は後期後半（高井東式期）である。



第376図 C 2号集石出土遺物(1)



第377図 C 2号集石出土遺物(2)



第378図 C 1・3号配石出土遺物

1は敷石の上に乗った状態で出土している。深鉢型土器。口径34.8cm、器高37.4cm、底径6.8cm。胴部中位部分で折れ、口縁部に向かって外反する。4単位の波状を呈し、波頂部はやや扇状に開く。口唇部内側に肥厚。口縁部には3本の沈線が巡らされ、波底部には円形の隆起文が付される。胴部には横位矢羽根状の沈線を多段に充填施文。底面に網代痕。2は口縁部片。4単位の波状を呈す。口縁部2本の凹線が巡る。胴部には、ややだれた波状沈線が垂下。3は形、施文とも2に近似しているが、やや口径が大きい。4単位の波状を呈す。口縁部2本の凹線が巡る。胴部には、ややだれた波状沈線が垂下。4は深鉢型土器の口縁部片。口径(40.8cm)。口縁部に半円形の突起、下位に∩状の隆起文。口縁に沿って沈線により区画された縄文帯と無文帯。5は矢羽根状の沈線。6と同一個体。6は「く」の字に外反。矢羽根状の集合沈線文。7は口縁部内面に凹線。無文。内面平滑に研磨されており、わずかに赤色塗彩痕残る。8は口縁部片。口唇部肥厚する。無文。9は口縁部沈線で区画された縄文帯。以下無文。口唇端部は平らに押さえられている。10は口縁部、沈線で区画された縄文帯。以下無文。11は無文。12は注口土器の注口部。外面磨かれている。

C 5号配石出土遺物

出土土器は認められなかった。

C 1号埋甕出土遺物 (第380図 PL. 118)

調査区の南西部分で検出されている。1は正立した状態で埋められており、口縁部の一部は弥生時代の住居によって壊されている。2以下は破片で1の胴部側面に固定材として差し込まれたような状態で出土している。時期は加曽利E III式期である。

1は大形深鉢型土器。口縁部から胴中位。口径55.8cm。口縁部文様帯には、両端部が丸くなる横S字文と、円形文。胴部は縦位磨り消し縄文帯、縄文はLR多条を縦位施文。2～8は1と同一個体片。9はRL施文。横位微隆線、斜めの沈線。10はRLを縦位施文。11は縦位文様帯。器面風化。12は口縁部片。隆帯による文様帯。

3. 土 坑

本調査区内で検出した縄文時代の土坑は総数81基である。これらの時期別の数量は前期25基、中期33基、後期11基、不明11基である。時期の判断は基本的には出土土器によったが、重複関係、埋土の状況等に依って判断したものもある。

C 9号土坑出土遺物 (第381図 PL. 119)

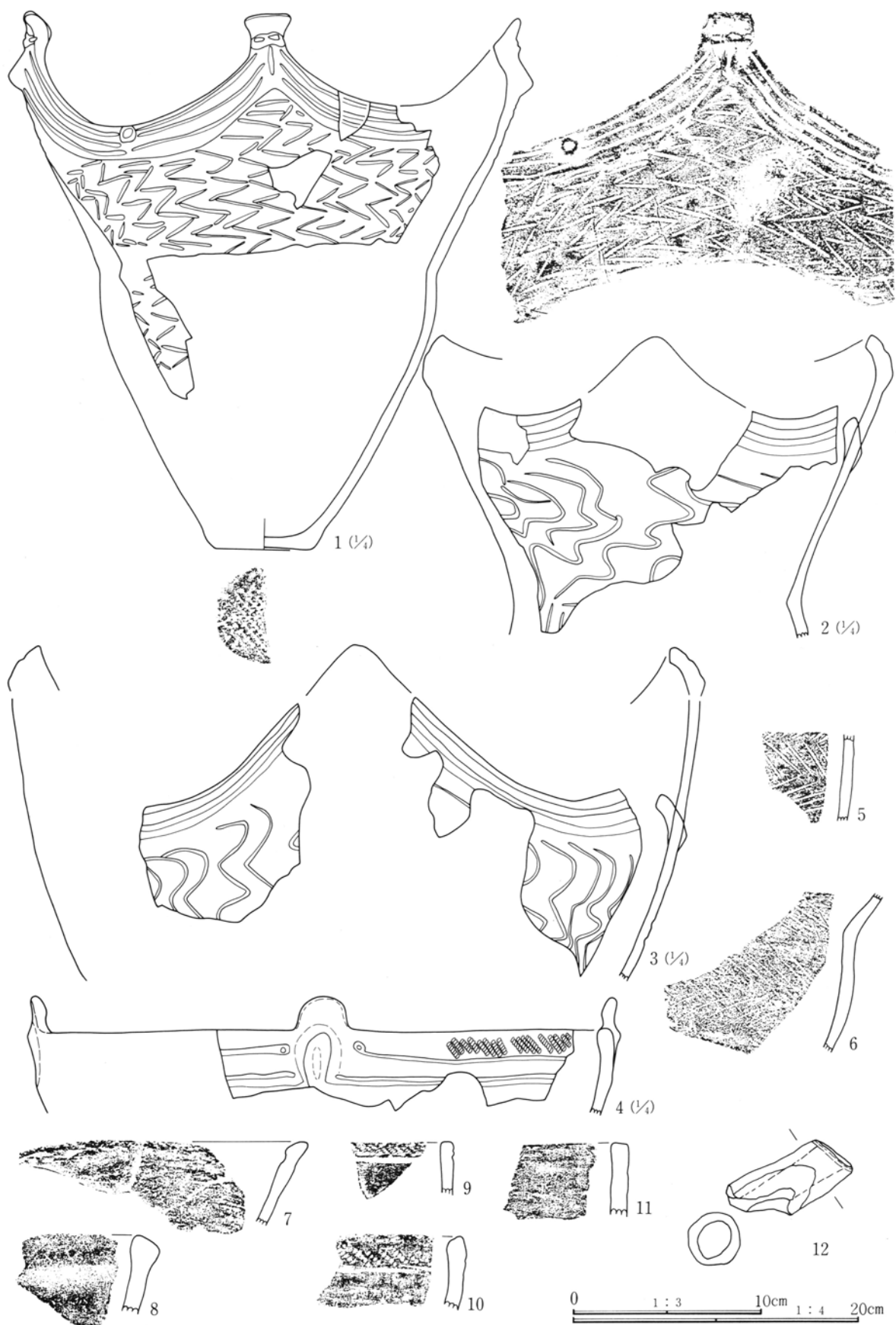
1は深鉢型土器の胴部片。LR、0段多条が横位施文される。

C 13号土坑出土遺物 (第381図 PL. 119)

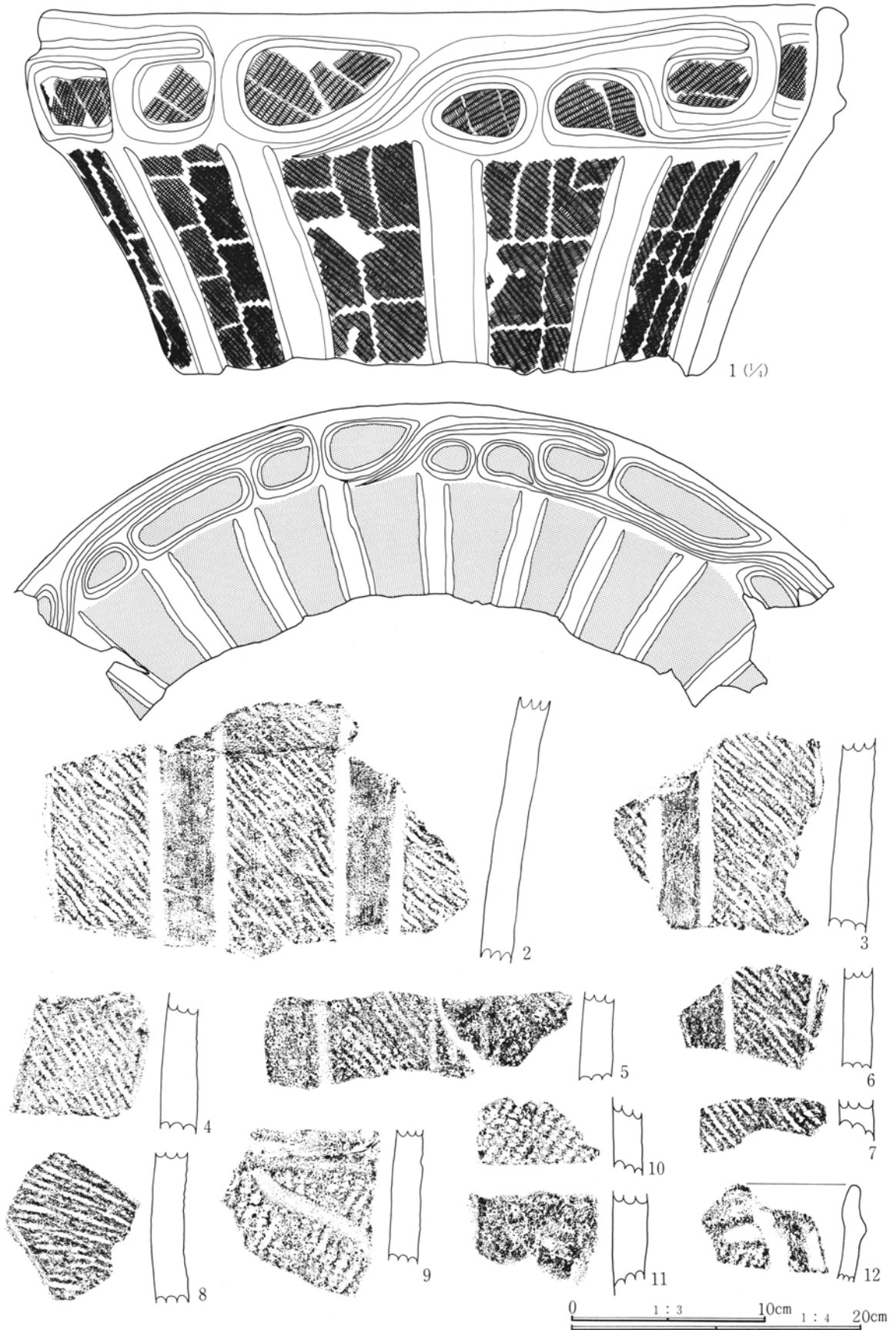
1は深鉢型土器の胴部片。磨り消し縄文。2は口縁部片。口唇端部を欠く。隆線で口縁部無文帯を画す。以下、縄文LRが隆帯部には横位、以下、縦位に施文される。

C 14号土坑出土遺物 (第381図 PL. 119)

1は深鉢型土器の口縁部片。縄文LRを施文後、半截竹管による沈線で三角形を描く。2は縄文LRがわずかに観察される。3は胴部片。LR施文か。繊維の混入少ない。4は無節Lを横位施文。5は縄文LRか。6は無節



第379図 C4号配石出土遺物



第380図 C 1号埋甕出土遺物

第4章 出土遺物

L施文か。器面剥落しており不明瞭。7は三角形の波頂部片、繊維含まず薄手。器面の風化著しく、施文本体は不明。8は横位隆帯。砂粒目立つ。9は胴部片、繊維含まず薄手で砂粒含む。LRが横位施文される。

C23号土坑出土遺物 (第381図 PL. 119)

1は縄文LRを施文後、沈線による渦巻き文、縦位沈線を施文。2は沈線による渦巻き文。3は沈線、三角陰刻文が見られる。4は縄文RL施文後、半截竹管による平行沈線を横位施文。5は底部片、底径(7.0cm)。無文。

C27号土坑出土遺物 (第381図 PL. 119)

1は深鉢型土器の口縁部片。隆帯で無文帯を区画。2はLR縄文を施文、一部羽状に施文。沈線で曲線文を描き、内部を磨り消す。3～6は同一個体片。沈線によるU字状文、内部を撚糸Rで充填。7は胴下半部片、無文。8・9は深鉢型土器の底部片。8は底径8.7cm。無文。9は底径7.8cm。無文。胴部開きながら立ち上がる。胴部外面、底面とも削り成形。砂礫の混入目立つ。

C29号土坑出土遺物 (第381・382図 PL. 119)

1は深鉢型土器の口縁部片。隆帯で口縁部文様帯を画す。沈線、羊歯状文が交互多段施文。下位隆帯部分には隆帯による楕円文。隆帯以下、縄文が施文されているが、不鮮明である。2は地文にLR施文後、半截竹管による横位、縦位の平行線文。3は屈曲部分に矢羽根状の刺突文が付された隆帯。小瘤が見られる。以下、撚糸文Rが縦位施文。4は緩い波状を呈す。口縁に沿って沈線、口唇端部は肥厚。5は口縁部に撚糸Lの側面圧痕により山形文が施文。胴部器面は荒れており施文かなり不鮮明だが、縄文LRが横位全面施文。横S字状結節文。器面に砂粒目立つ。6は縄文LRが施文。7は撚糸文Lが斜位方向に施文。8は無文である。

C30号土坑出土遺物 (第382図 PL. 120)

1は深鉢型土器の胴部片。横位・縦位の集合沈線を地文にし、ボタン状貼付文を付す。砂粒が目立つ。2は地文に横位集合沈線施文後、結節浮線文により重畳三角文を描き、中央にボタン状貼付文。3は深鉢型土器の底部片、底径(7.2cm)。斜位集合沈線、下位に横位沈線。棒状、円形貼付文を付す。4は底径(7.5cm)。無文。

C32号土坑出土遺物 (第382図 PL. 120)

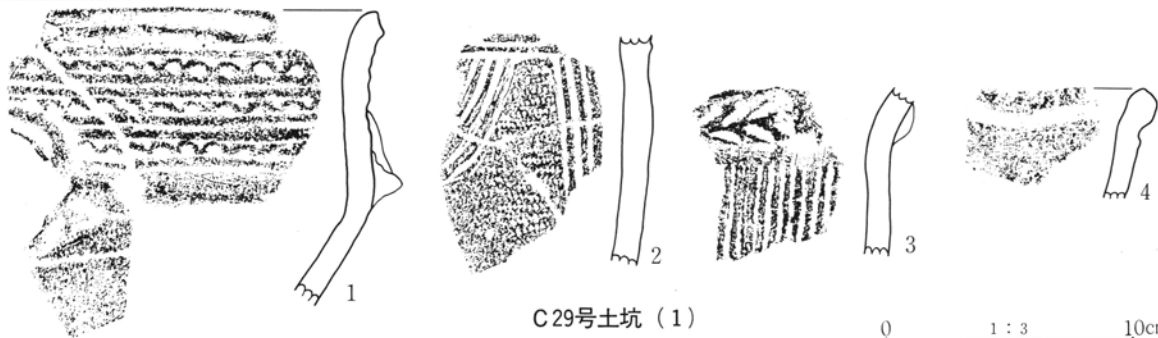
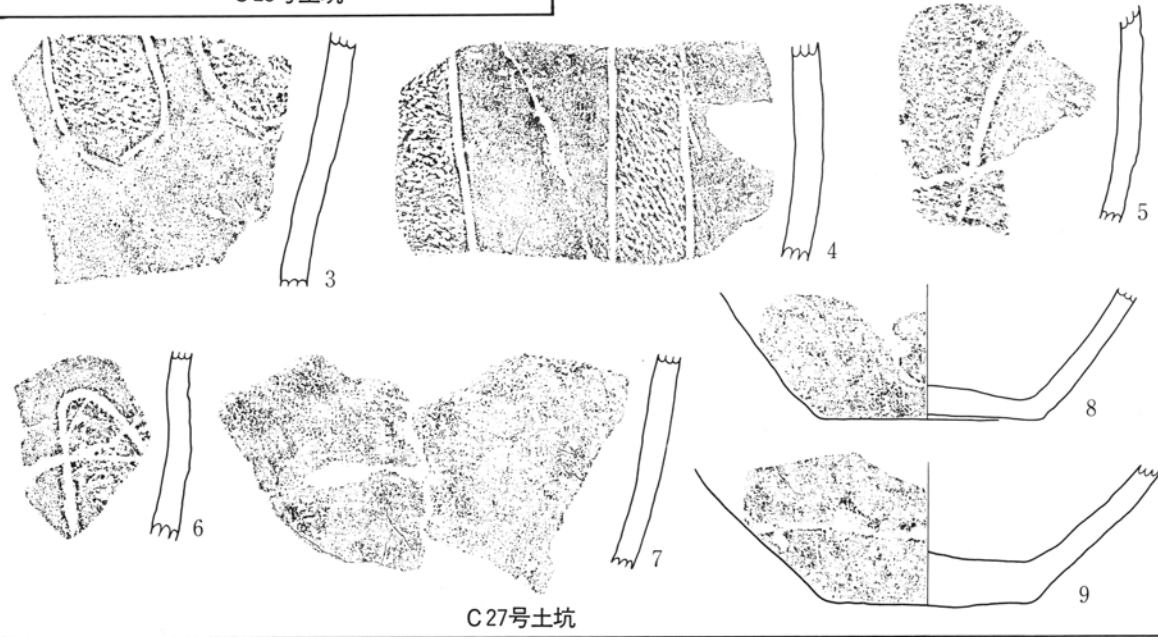
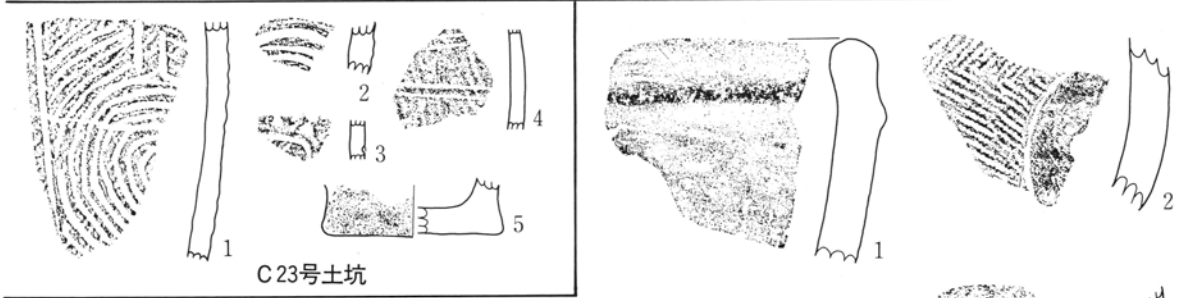
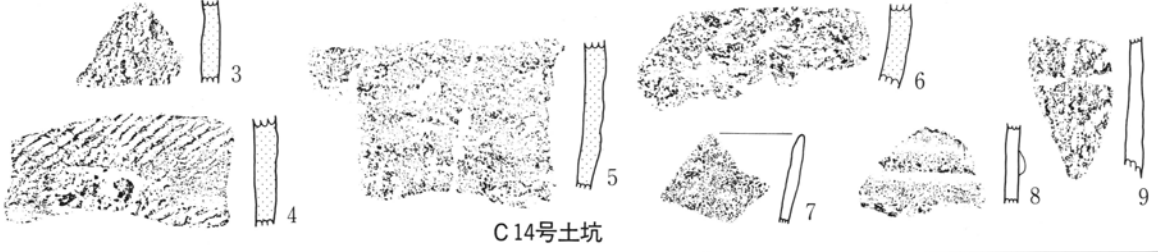
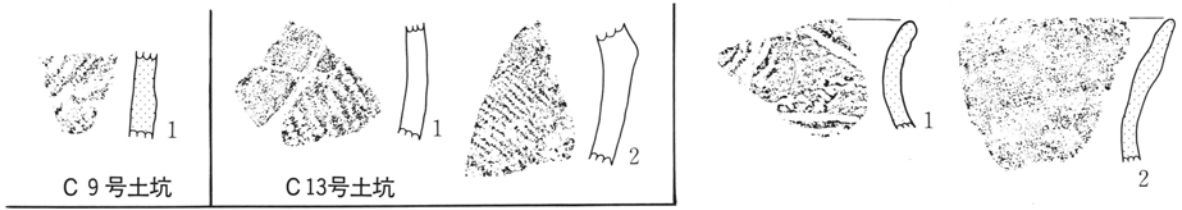
1は横位連続爪形文。2は横位平行沈線、以下無節Lか。3は縄文RL0段多条を横位施文。4は無節縄文で羽状を構成。5は器面風化、施文不明。

C33号土坑出土遺物 (第382図 PL. 120)

1は深鉢型土器の口縁部片。波頂部地文にRL施文後、半截竹管による平行沈線で多段山形文(菱形)を描く。2は口縁部片。無節L・Rで羽状構成。3は平行沈線が施文される。4は口縁部片。無節Lを横位施文。5は胴部片。RL・LRで横羽状縄文を構成。6は縄文LR・RLで羽状縄文を構成。7は縄文RLを横位施文。

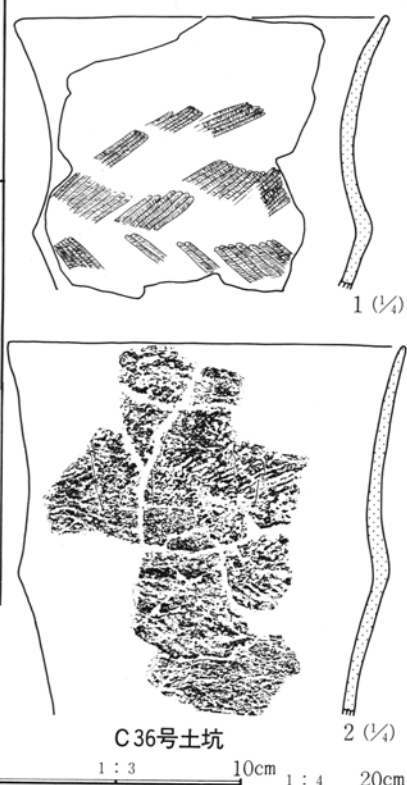
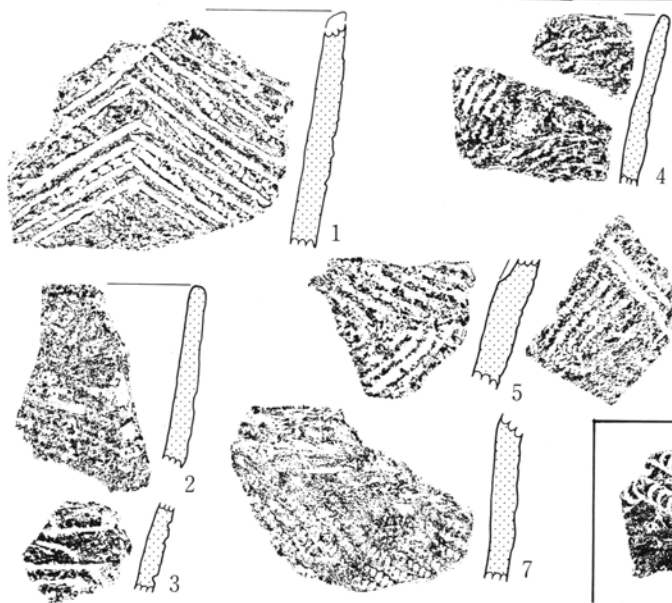
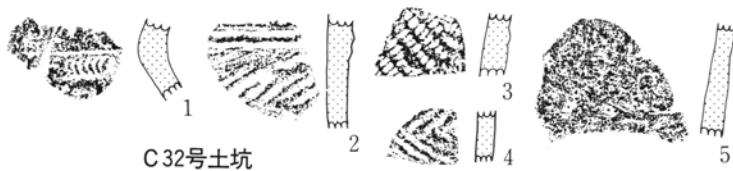
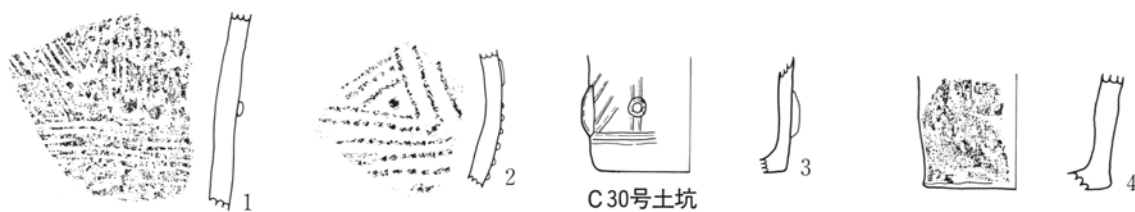
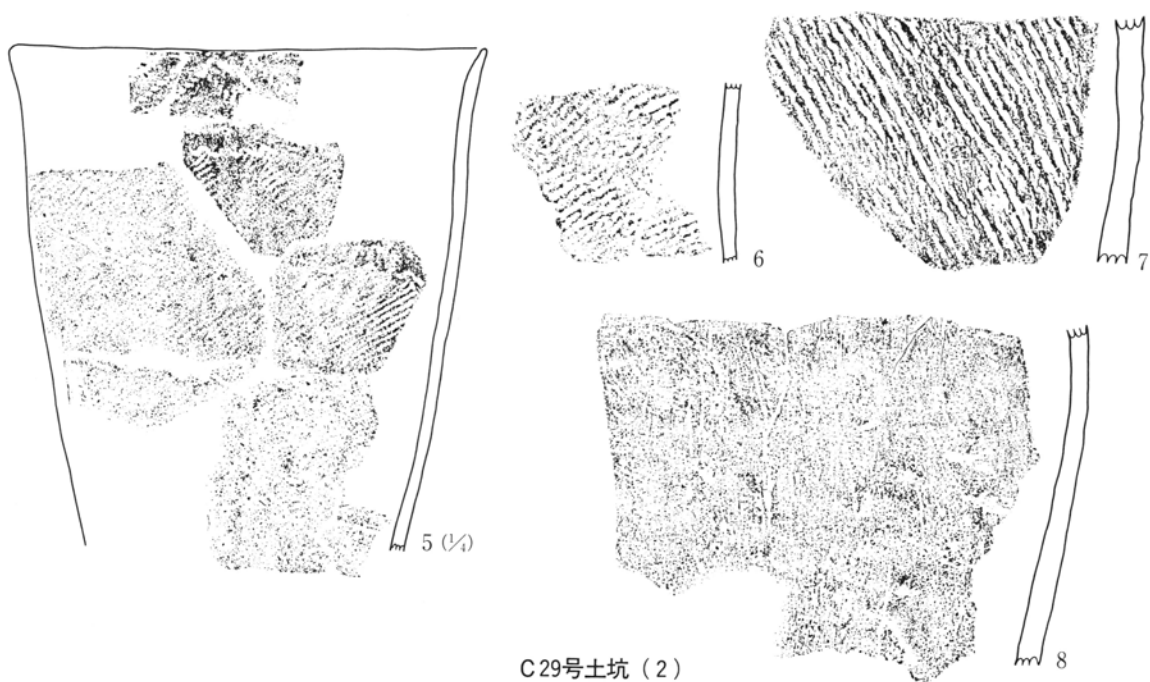
C36号土坑出土遺物 (第382図 PL. 120)

1は深鉢型土器。口径(20.0cm)胴部中位で「く」の字に折れる。屈曲部分上位には縄文LRが施文され、下位にはRL0段多条が施文。器面の風化が著しく薄手である。2は口径(21.2cm)。1と似るが別個体と思



0 1 : 3 10cm

第381图 土坑出土遺物(1)



第382图 土坑出土遺物(2)

われる。胴中位でやはり「く」の字に折れるが1よりも曲がりは弱い。地文には無節Lが施文されるが、極めて不鮮明。3は連続爪形文で菱形文を描くと思われる。

C39号土坑出土遺物（第383図 PL. 120）

1は深鉢型土器の口縁部片。連続爪形文を多段施文。口唇部角頭状。2は口縁部片。縄文施文。原体は不鮮明。3～6は深鉢型土器の胴部片。器面風化著しく施文不鮮明。無文か。

C40号土坑出土遺物（第383図 PL. 120）

1は胴部片。縄文LRが施文。

C65号土坑出土遺物（第383図 PL. 120）

1は胴部片。平行沈線。

C81号土坑出土遺物（第383図 PL. 120）

1は深鉢型土器の口縁部片。沈線で口縁部無文帯を画す。2は口唇部やや内傾する。無文。3は胴部片。縦位沈線文。4は縦位集合沈線。5・6は無文。6は胴部片、逆「ハ」の字に開く。無文で内面に煤付着。

C83号土坑出土遺物（第383図 PL. 120）

1は深鉢型土器の口縁部片。口縁に沿って押圧痕を持つ隆帯が巡る。2は無文の口縁部片。3は胴部片。縦位沈線文。4は縦位集合沈線。5はLRを縦位施文。6は横位平行沈線を境に、斜位、縦位の集合沈線が施される。7はミニチュア土器の底部片か、底径3.7cm。指による整形痕が見られる。

C84号土坑出土遺物（第383図 PL. 120）

1は深鉢型土器の口縁部片。口縁に沿って平行沈線が巡り、低い隆帯で口縁部文様帯を画す。文様帯中には斜格子文が描かれ、横位無文帯と横位平行沈線、斜格子文が描かれる。砂粒含む土器である。

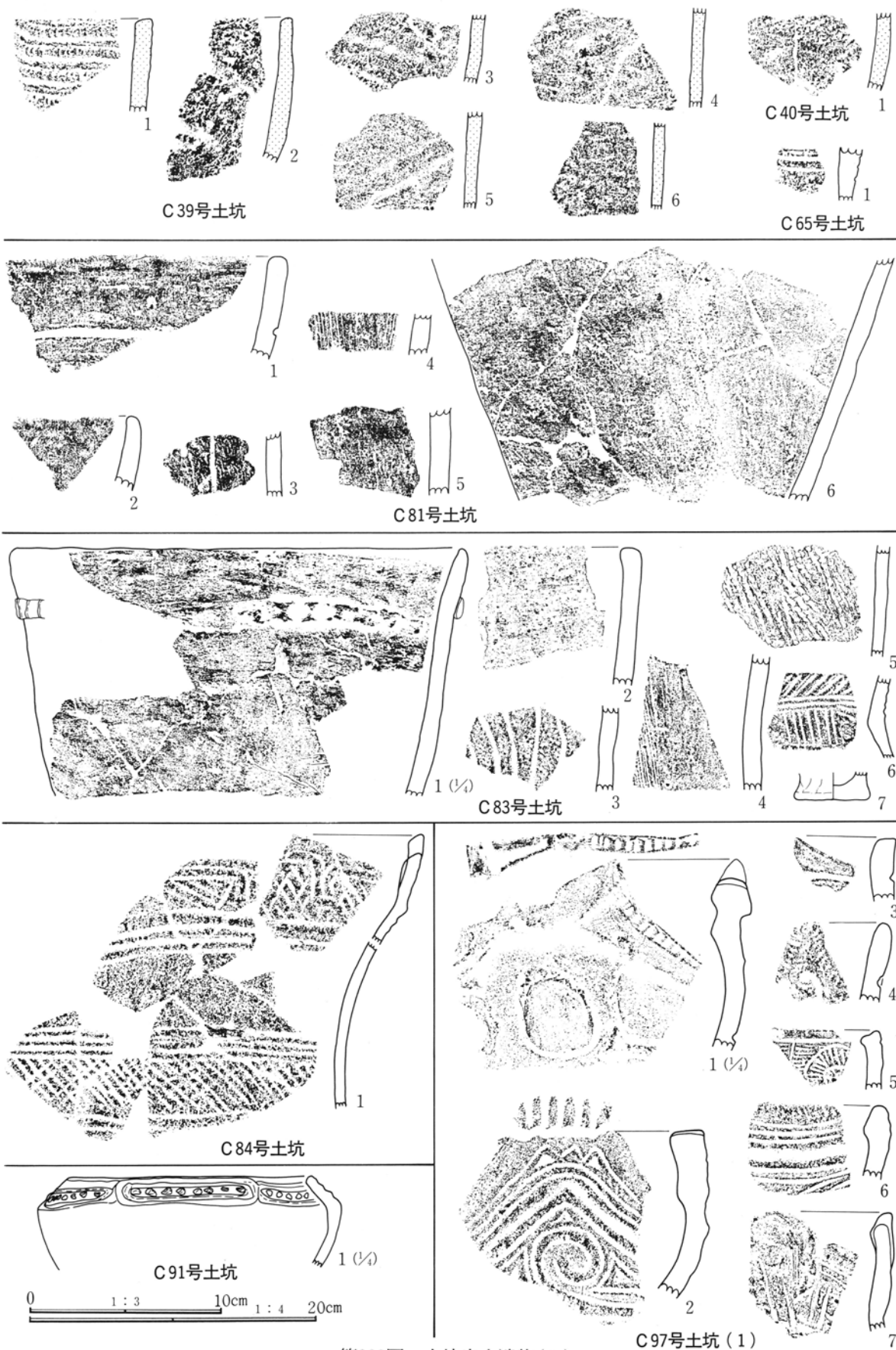
C91号土坑出土遺物（第383図 PL. 121）

1は浅鉢型土器。口径16.6cm。口縁部やや内傾する、口縁部文様帯に6単位の楕円文を描き、中に刺突文を横一列に配す。以下、胴部は無文。

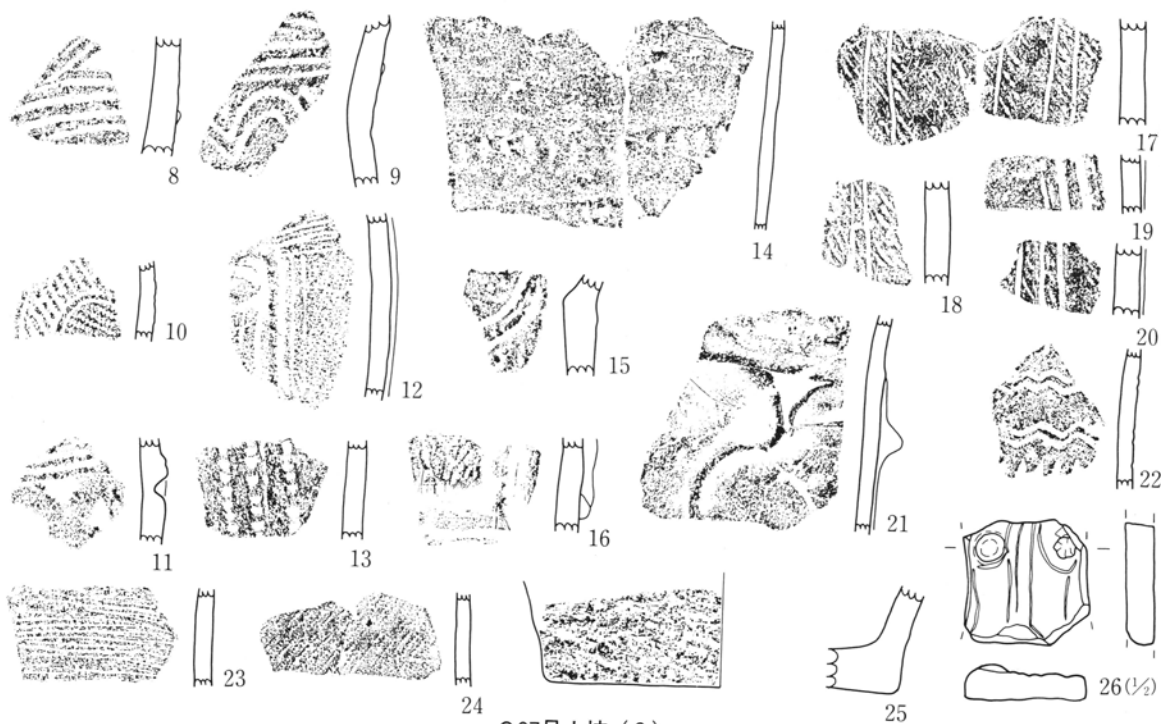
C97号土坑出土遺物（第383・384図 PL. 121）

1は口縁部片。波頂部には中央を棒状工具で押さえた、2本の沈線を持つ角状の突起。口唇部肥厚。連続角押文で楕円文、円形文を描く、周囲の隆帯が剥落。金雲母混入。2は波状口縁、波頂部は平らで、棒状工具による波状押圧がなされる。口縁に沿って複数の沈線、波頂下には三角陰刻文。以下隆線による渦巻き文、沈線による三角文。6・8・9・22は同一個体。3は口唇端部平らに押さえられている。15と同一個体。4は波頂部片。三角形に尖り、周縁部には縄文Lの圧痕文。円形刺突文から「の」字状に沈線が垂下。5は口唇部上端に沈線。口唇に沿って横位沈線、以下集合沈線、円形文。6は口唇部肥厚し、3本の沈線を付し、以下凹線、隆線。7は口唇部に耳状の突起。口縁部には沈線で横位、縦位の沈線文。8は隆線および沈線文。9

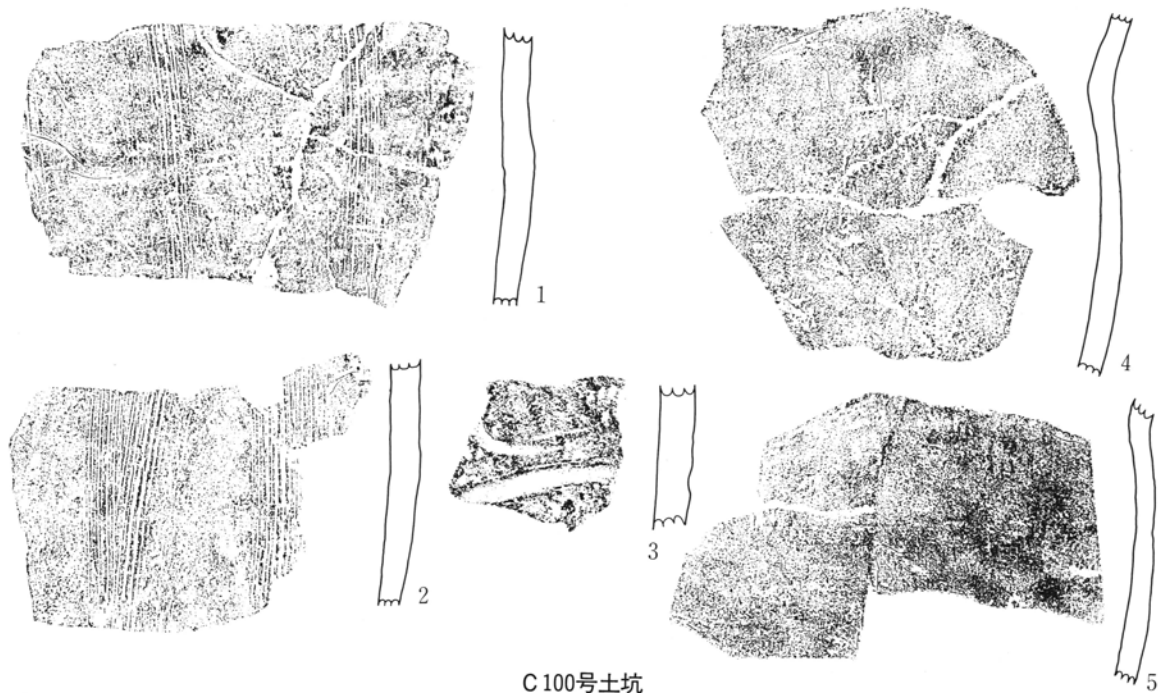
第4章 出土遺物



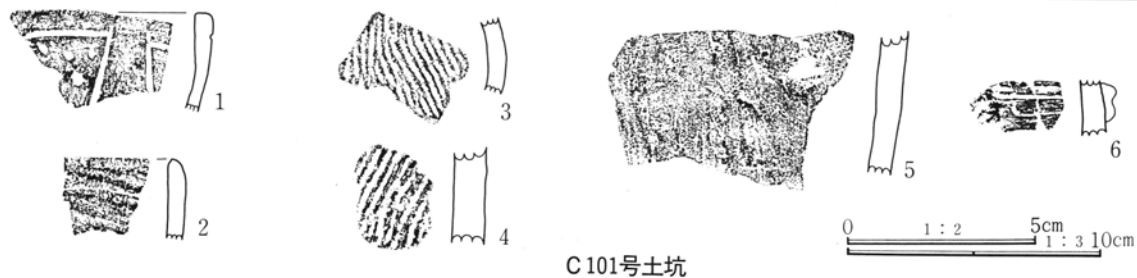
第383图 土坑出土遺物(3)



C97号土坑 (2)



C100号土坑



C101号土坑

第384图 土坑出土遺物(4)

第4章 出土遺物

は横位、波状の沈線。10は地文にLR縄文、沈線で曲線文、集合並行文を描く。11は横位連続結節文、三角陰刻文。12は縦位の隆線とこれに沿って平行沈線を施文。13は縦位隆線および複数の連続爪形文。14は無文、横位ひだ状文。金雲母含み内面に煤付着。15は隆線文。16はT字状の貼り付け隆帯、器面に無節縄文を施文。17～20は同一個体。20は縦位隆帯、沈線。地文には無節Lが施文。21は横位および、縦S字状の隆線文。22は並行沈線による連続山形文、短沈線文。23は横位集合沈線。24は縄文RLを縦位施文。25は底部片、底径(13.6cm)。無文で器面荒れている。26は土偶である。板状を呈し上下部分を欠く。両側がやや内に入る。表面中央に3本、両端に1本ずつ細沈線が縦に走る。円形の添付文で乳房を表現しているが、右側は剥落し、その部分が削られたようにわずかに窪む。大きさは縦(3.3cm)、横(3.3cm)、厚さ0.9cmである。

C100号土坑出土遺物 (第384図 PL. 121)

1・2は2本1単位の縦位集合沈線。3は沈線による区画文、縄文施文。4・5は無文。頸部緩く折れる。

C101号土坑出土遺物 (第384図 PL. 121)

1は深鉢型土器の口縁部片。沈線による区画文(J字状文か)内に刺突文。2は口縁部片。無文。3は縄文RLが横位施文。4は撚糸文Lが縦位施文される。5は無文の胴部片。6は貼付文、横位沈線文。

C107号土坑出土遺物 (第385図 PL. 121)

1は口縁部片。内側に折り返されて肥厚し、凹線が巡る。2本の斜方向の沈線がわずかに見える。

C108号土坑出土遺物 (第385図 PL. 122)

1は深鉢型土器。口径27.4cm。胴部は樽型を呈し、口縁部は内湾する。口縁部内側に肥厚、また3単位の小突起が見られる。縄文LRを全面施文。口縁部には横位、縦位に格子状文。頸部隆帯が巡り、4単位の突起文が付され隆帯と沈線が垂下するものと、沈線のみが垂下する部分がある。隆帯下位には8本の沈線が横位に巡る。胴部にはLRが縦位施文。2は口縁部片。折り返されて肥厚。3は胴部片。縦位隆帯、および平行沈線。

C109号土坑出土遺物 (第385図 PL. 122)

1は胴部片。刻みを持つ隆帯、以下縄文LRが施文される。2はLRが施文される。3は無節Lが施文される。

C114号土坑出土遺物 (第385図 PL. 122)

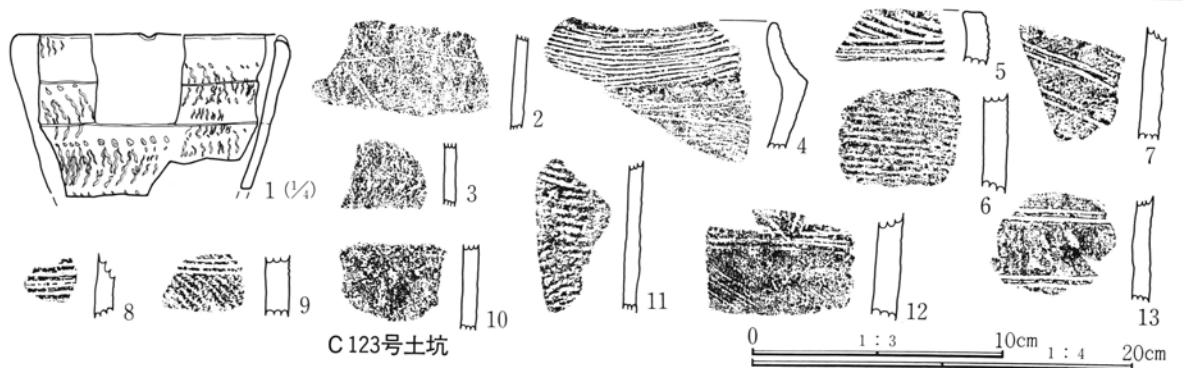
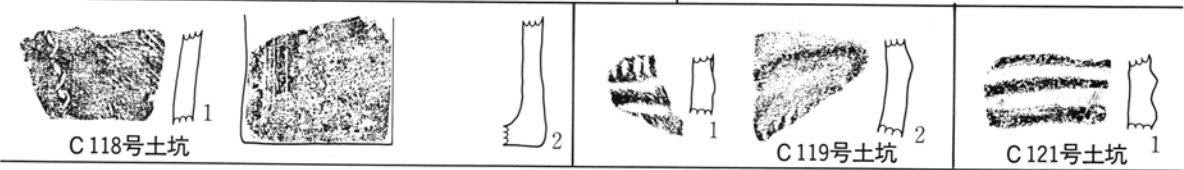
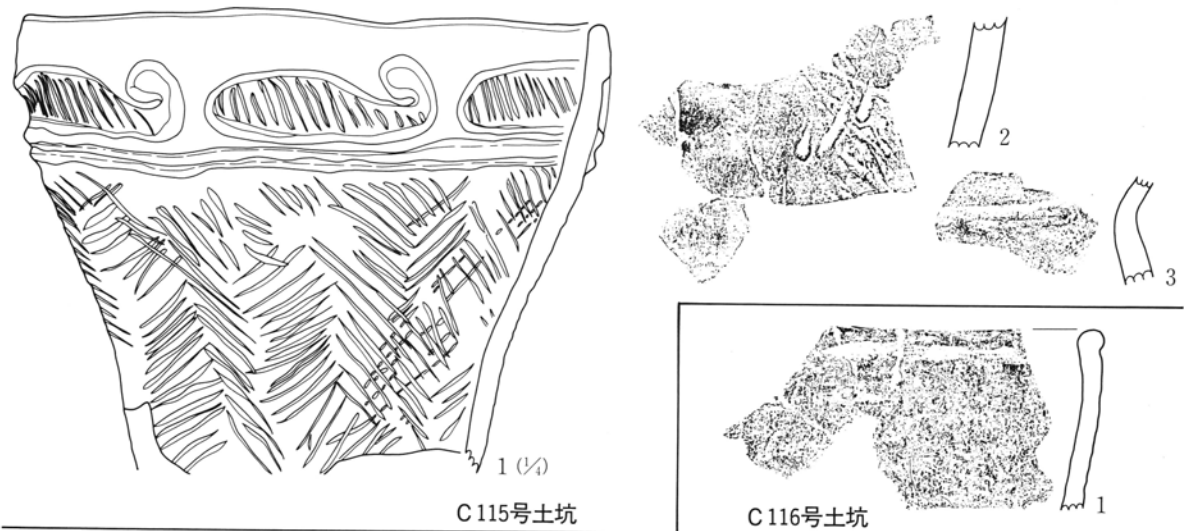
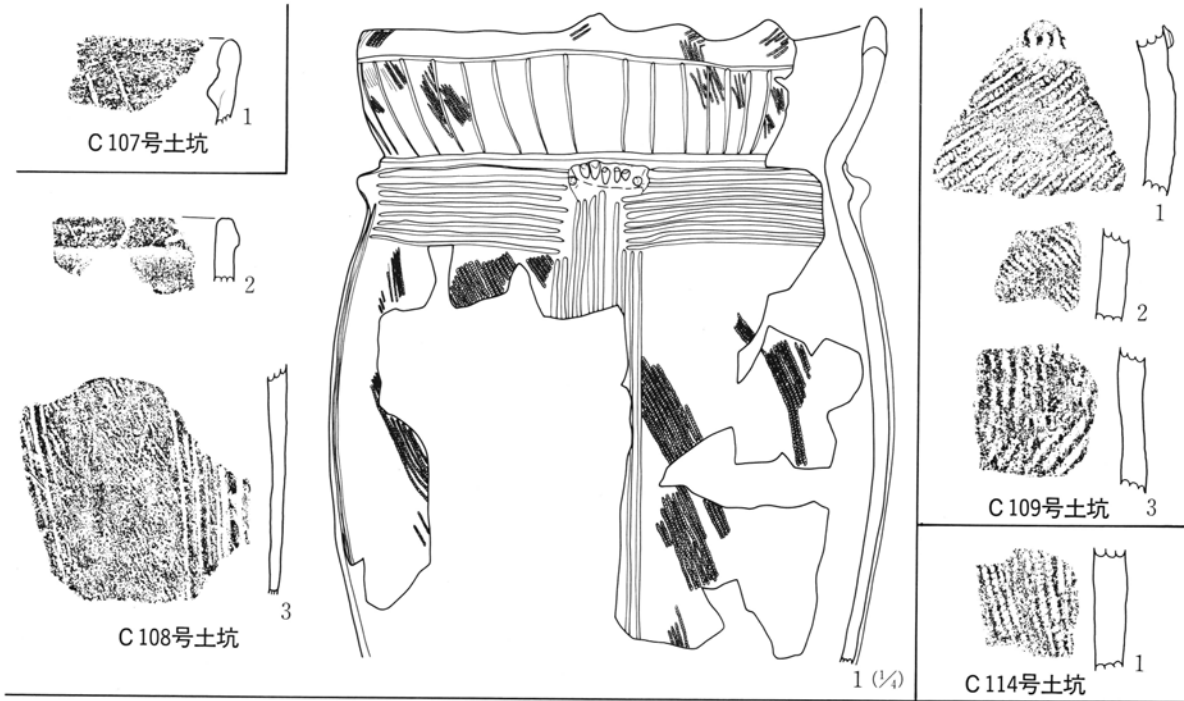
1はLRが縦位施文される。

C115号土坑出土遺物 (第385図 PL. 122)

1は外傾して立ち上がり、口縁部ほぼ直立する。口径(30.8cm)。口縁部文様帯には端部の両端、または一端が蕨手状となる楕円区画文、中は斜位の沈線文。以下凹線、隆帯で胴部と画す。胴部には縦綾杉状の集合沈線文。2縄文無節Rを施文か、結節の圧痕が見られる。3は頸部片。一部凹線見える。

C116号土坑出土遺物 (第385図 PL. 122)

1は深鉢型土器の口縁部片。口唇部丸みを持って肥厚し凹線が巡らされる。無文。



第385图 土坑出土遺物(5)

第4章 出土遺物

C118号土坑 (第385図 PL. 122)

1は深鉢型土器の胴部片。縦位S字状結節文。2は底部片、底径(11.8cm)。縦位隆帯、平行沈線。

C119号土坑出土遺物 (第385図 PL. 122)

1は沈線、連続爪形文。2は微隆線、LRの縄文が施文。

C121号土坑出土遺物 (第385図 PL. 122)

1は横位隆帯文。

C123号土坑出土遺物 (第385図 PL. 122)

1は深鉢型土器。口径(14.3cm)。逆「ハ」の字に開き口唇部はやや内屈する。施文は沈線による横位区画帯を画し、貝殻腹縁文を連続横位施文。口唇部に丸棒状工具による押さえが、複数箇所見られる。2・3は貝殻腹縁文。1と同一個体。4は「く」の字に内屈する口縁部に横位集合沈線、以下横位沈線。5は横位、斜位の集合沈線。6は横位集合沈線。7は地文にRL縄文を横位施文後、横位平行沈線。8は横位集合沈線。9は横位平行沈線、RLが施文。10は縄文が施文されているが不明瞭。11は無節Lが施文される。12は平行沈線で三角文を描き、さらに内部に半肉彫で区画文を描く。13は横位平行沈線が間隔を置いて施文される。

C124号土坑出土遺物 (第386図 PL. 122)

1は横位、斜位の集合沈線を交互に施文。2は縦位集合沈線。

C125号土坑出土遺物 (第386図 PL. 122)

1は平行沈線で矩形を画し、内部に細条線文。

C126号土坑出土遺物 (第386図 PL. 122)

1は胴部片。無文。

C127号土坑出土遺物 (第386図 PL. 123)

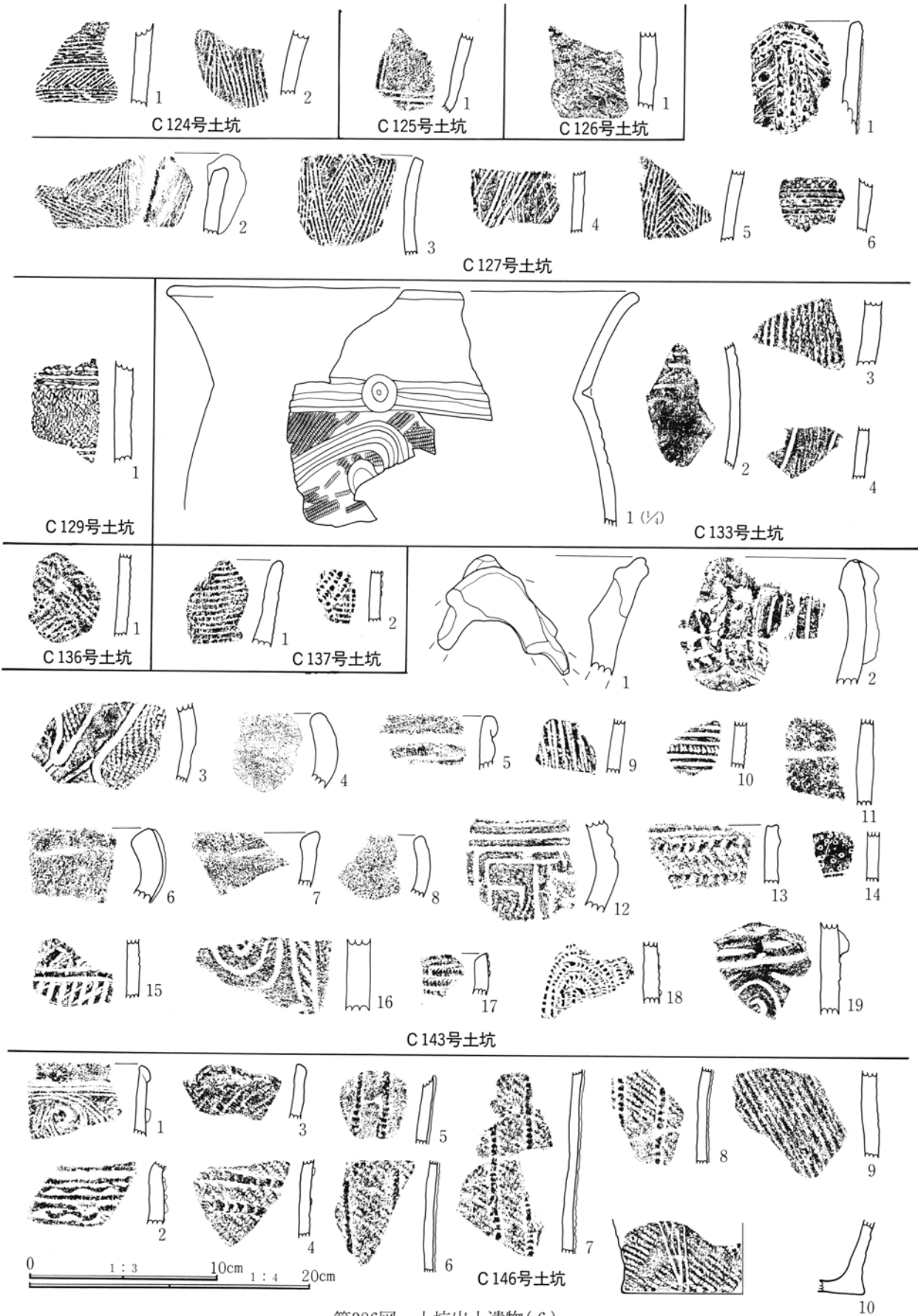
1は口縁部片。波状口縁の波頂部。口縁に沿って結節浮線文、波頂部からも3本の結節浮線文が垂下し、左右に円形の貼付文。地文には斜位の沈線が見られる。2は口縁部に耳状突起、両側に縦位集合沈線。矢羽根状の集合沈線が施文される。3は口唇部角頭状を呈す、縦位の集合沈線文。4は斜格子状の集合沈線文。5は縦位、綾杉状の集合沈線文。6は地文にRL施文後、横位集合沈線。

C129号土坑出土遺物 (第386図 PL. 123)

1は深鉢型土器の胴部片。地文にRLを施文後、横位連続刺突文。

C133号土坑出土遺物 (第386図 PL. 123)

1は深鉢型土器の口縁部片。頸部は「く」の字に折れる。口径(34.0cm)。口縁部は無文帯を画す。頸部には円形文を有す3本の沈線。胴部分には縄文RLを施文後、沈線により曲線文を描く。2は胴部片。横位沈



第386图 土坑出土遺物(6)

第4章 出土遺物

線で区画した縄文帯。LR が施文される。3 は縦位方向に撚糸文 L を施文。4 は縦位沈線。沈線間に縄文。

C136号土坑出土遺物 (第386図 PL. 123)

1 は胴部片。LR・RL で羽状縄文を構成。砂粒を多量に含む。

C137号土坑出土遺物 (第386図 PL. 123)

1 は口縁部片。集合沈線を横位施文。2 は横位集合沈線施文後、結節浮線文で曲線文。

C143号土坑出土遺物 (第386図 PL. 123)

1 は三角形を呈す橋状把手部分。2 は隆帯で口縁部文様帯、刺突文、縦位沈線を配す。突起部を欠く。3 は沈線による曲線文、区画内は RL の縄文が充填される。4 は口縁部、内屈し無文。5 は口唇部外側に折り返されて肥厚し、以下横位沈線。6 は内湾する口縁部片。無文、縦位隆帯が付される。7 は口唇部肥厚。無文。8 は内湾し無文。9 は縦位集合沈線。10 は連続爪形文を伴う横位沈線。11 は器面風化し施文は不明。12 は地文に RL が施文される。沈線による矩形文。13 は刻みを付す横位隆線、地文に縄文が見られる。器面風化。14 は沈線、円形竹管文を付す。15 は横位、斜位沈線が付される。16 は並行沈線間に刻み目文、沈線による渦巻き文。17 は複数の横位結節浮線文が付される。18 は同心円状に結節浮線文。19 は沈線を伴う横位隆帯。一部突出する。以下沈線による曲線文を描く。

C146号土坑出土遺物 (第386図 PL. 123)

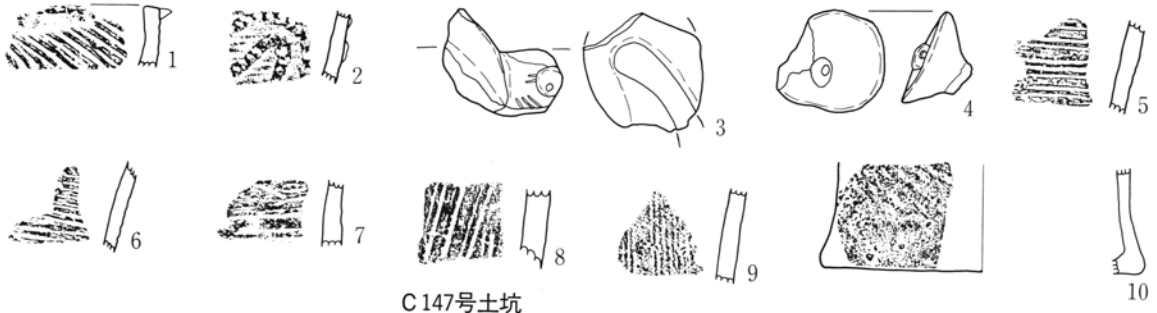
1 は口縁部外側に肥厚、以下横位、平行沈線、曲線文を描き、円形の貼付文が付される。2 は地文に RL を施文後、横位結節浮線文、波状浮線文。3 は RL 縄文を横位施文。4 は縄文 RL を施文後、横位に結節浮線文。5～8 は縦位結節浮線文。地文は不明。器面の風化著しい。9 は斜位集合沈線。器面の風化著しい。10 は底部片端部が張り出す。底径(12.8cm)。RL 縄文施文後、縦位平行沈線文。

C147号土坑出土遺物 (第387図 PL. 123)

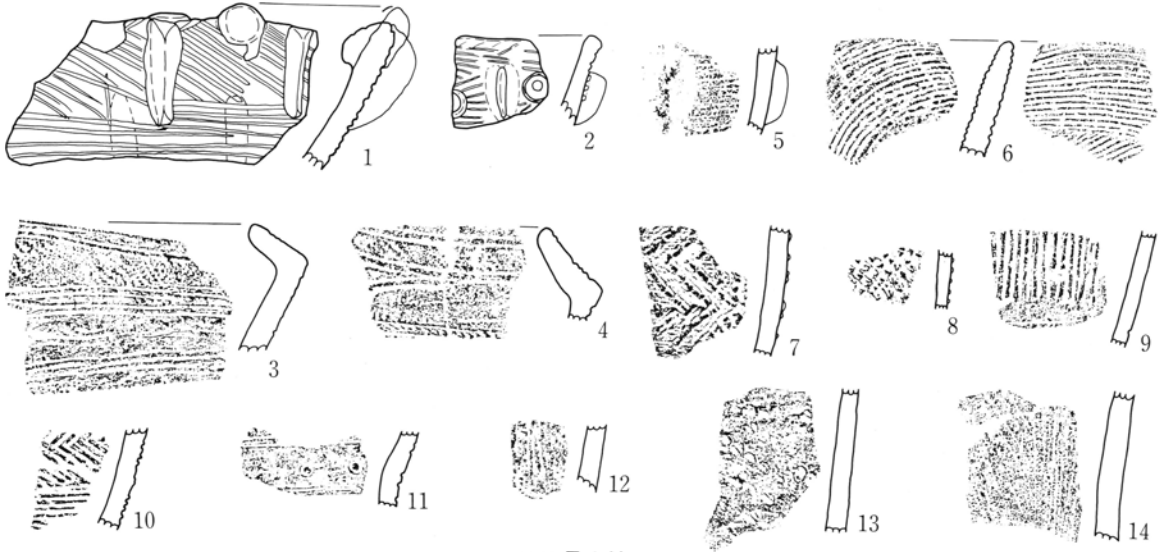
1 は口縁部片。口縁部平らに押さえられる。口唇部横方向に棒状貼付文が付される。以下斜位集合沈線。2 は地文に横位集合沈線施文後、半截竹管の刺突を持つ浮線文で曲線文。3・4 は耳状突起部分。口縁部集合沈線、刺突文を有す円形貼付文。5～7 は横位集合沈線。8・9 は縦位集合沈線。10 は底部片。RL の縄文施文。底径(12.6cm)。端部が張る。

C148号土坑出土遺物 (第387図 PL. 123・124)

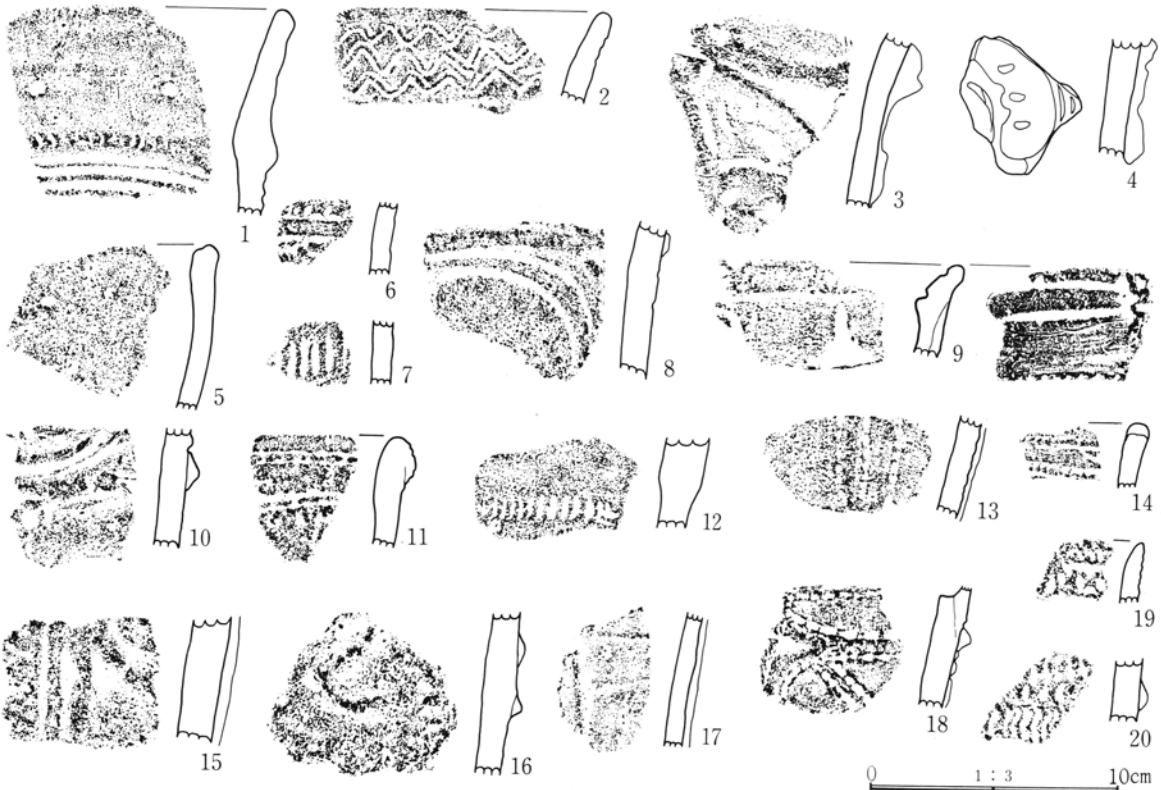
1 は口縁部内側に折り返され肥厚する。以下、斜位、横位の集合沈線を地文施文。ボタン状、棒状の貼付文。2 は横位、斜位の集合沈線。円形、棒状の貼付文。3 は「く」の字に折れる。地文に縄文 LR を施文。横位平行沈線。4 は口縁部片。「く」の字に内屈する。半截竹管による連続刺突文を横位施文。5 は横位集合沈線。縦に棒状貼付文。6 は内外面に集合沈線で横位、斜位、曲線文を描く。7 は横位集合沈線、結節浮線文を矢羽状に配す。8 は集合結節浮線文で曲線文を描く。9 は縦位、横位の集合沈線。10 は横位、斜位の集合沈線。11 は横位沈線、円形刺突文。12 は縦位集合沈線。13 は粗く縄文 LR 施文か。14 は縦位、斜位の集合沈線。



C147号土坑



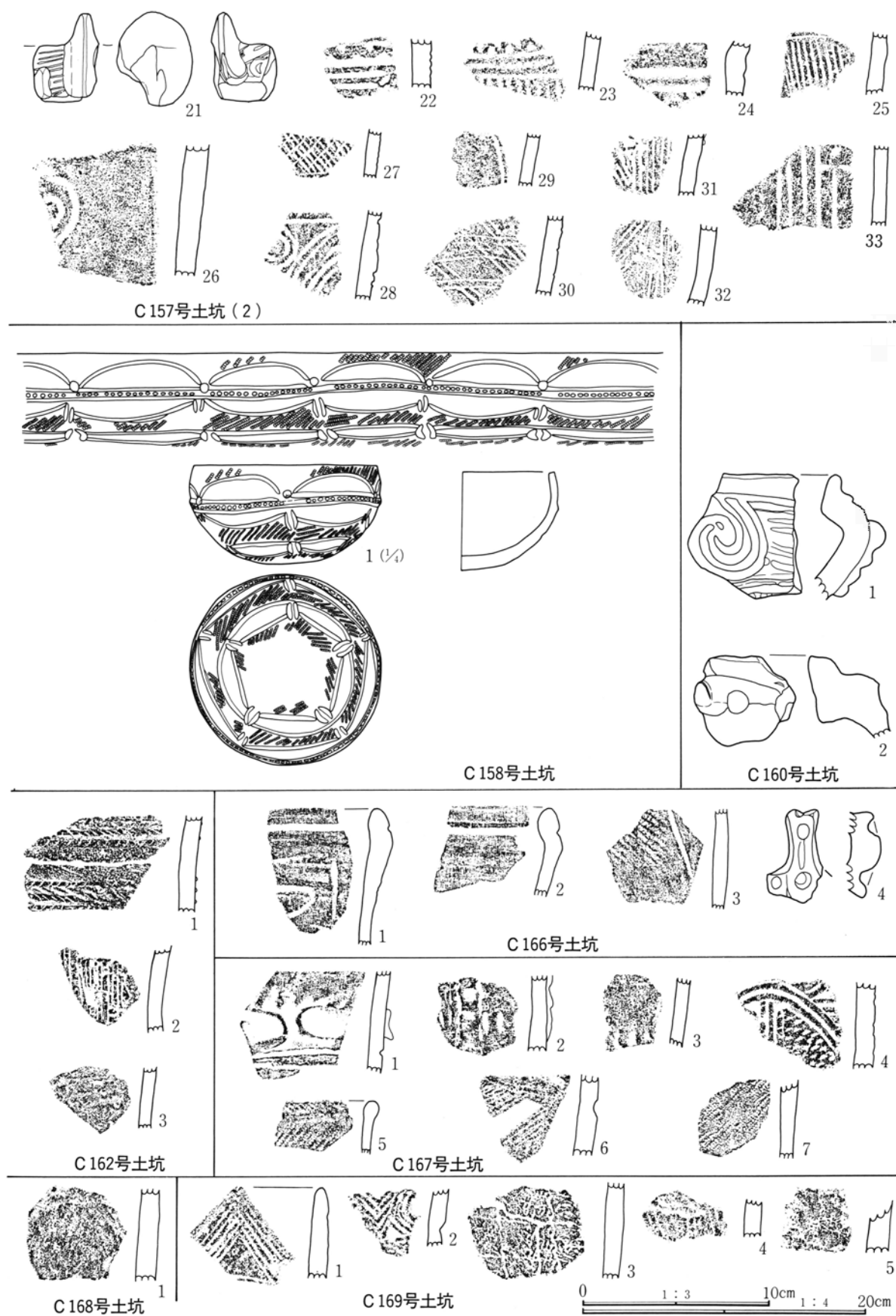
C148号土坑



C157号土坑 (1)

第387图 土坑出土遺物(7)

第4章 出土遺物



第388图 土坑出土遺物(8)

C157号土坑出土遺物（第387・388図 PL. 124）

1は口縁部片。連続爪形文を有す隆線で口縁部無文帯を画す。以下、横位平行沈線。片岩含む。2は口縁部片。平行沈線による波状文を横位多段施文。3は貼り付け隆帯、短沈線文。4は半月形の貼り付け文、爪形文。5は口唇部やや肥厚。無文、器面の風化著しい。6は横位沈線、連続爪形文。7は短沈線横位連続施文。8は連続爪形文を有す隆帯、以下、沈線で曲線文を描く。器面に石英粒目立つ。9は口縁部片。内面連続刺突文を巡らす扇状突起が付く。外面に沈線による三叉文。10は隆帯で曲線文。11は口唇部肥厚し、下位に横位連続刺突文。12は横位連続爪形文。13は隆帯文で縦位楕円文、両脇に連続刺突文。14は口唇部瘤状の突起。以下、連続爪形文を多段施文。15～17は隆帯文。18は隆線による区画文、これに沿って連続刺突文。19は口縁部片。横位沈線、刺突文。20は連続刻み目を有す隆帯、下位にキャタピラ文。21は口縁部片。耳状突起、口縁部横位集合沈線、棒状貼付文。22は横位沈線、三角陰刻文を交互施文。23は横位、縦位の沈線文、交互刺突文。24は横位平行沈線。25は縦位集合沈線。26は沈線による渦巻文。27は斜格子文。28は隆線、沈線で曲線文を描く。29は縦位沈線。30は沈線で斜格子文。31は縦位集合沈線。円形貼付文。32は横位、斜位の集合沈線。33は縦位並行沈線、連続爪形文、および棒状工具による刺突文を配す。砂粒含む。

C158号土坑出土遺物（第388図 PL. 124）

1は鉢型土器。ほぼ完形である。口径13.0cm、器高7.0cm、丸底の底部から球形状に立ち上がり、口縁部は直立気味で口唇端部は角張る。LR 縄文を地文に施文。横位紐線文で口縁部と体部を区画、これに沿って沈線が巡り、口縁部には5単位の連弧文が円形刺突文をともなって描かれ、体部にも5単位の連弧文が配され、交点部分には対弧文が見られる。同様のモチーフが縄文帯を挟み、底面部にも描出されている。連弧の内側は縄文が磨り消される。器内面には赤色塗彩痕が観察される。

C160号土坑出土遺物（第388図 PL. 124）

1は口縁部片。内屈し、横位隆帯で画された文様帯には沈線を伴う渦巻き隆帯文。2は肥厚した口縁部片。隆帯文。器面荒れている。

C162号土坑出土遺物（第388図 PL. 124）

1は胴部片。矢羽根状の交互刻みを持つ浮線文。2は縦位集合沈線、円形貼付文の剝落痕あり。3は無文。

C166号土坑出土遺物（第388図 PL. 124）

1は口縁部片。沈線を巡らし、以下沈線で文様を描く。2は口縁部に横位沈線。器面平滑に研磨。3は沈線による縦位文様帯、LRを縦位施文。4は円形刺突文を持つ橋状把手。注口土器。

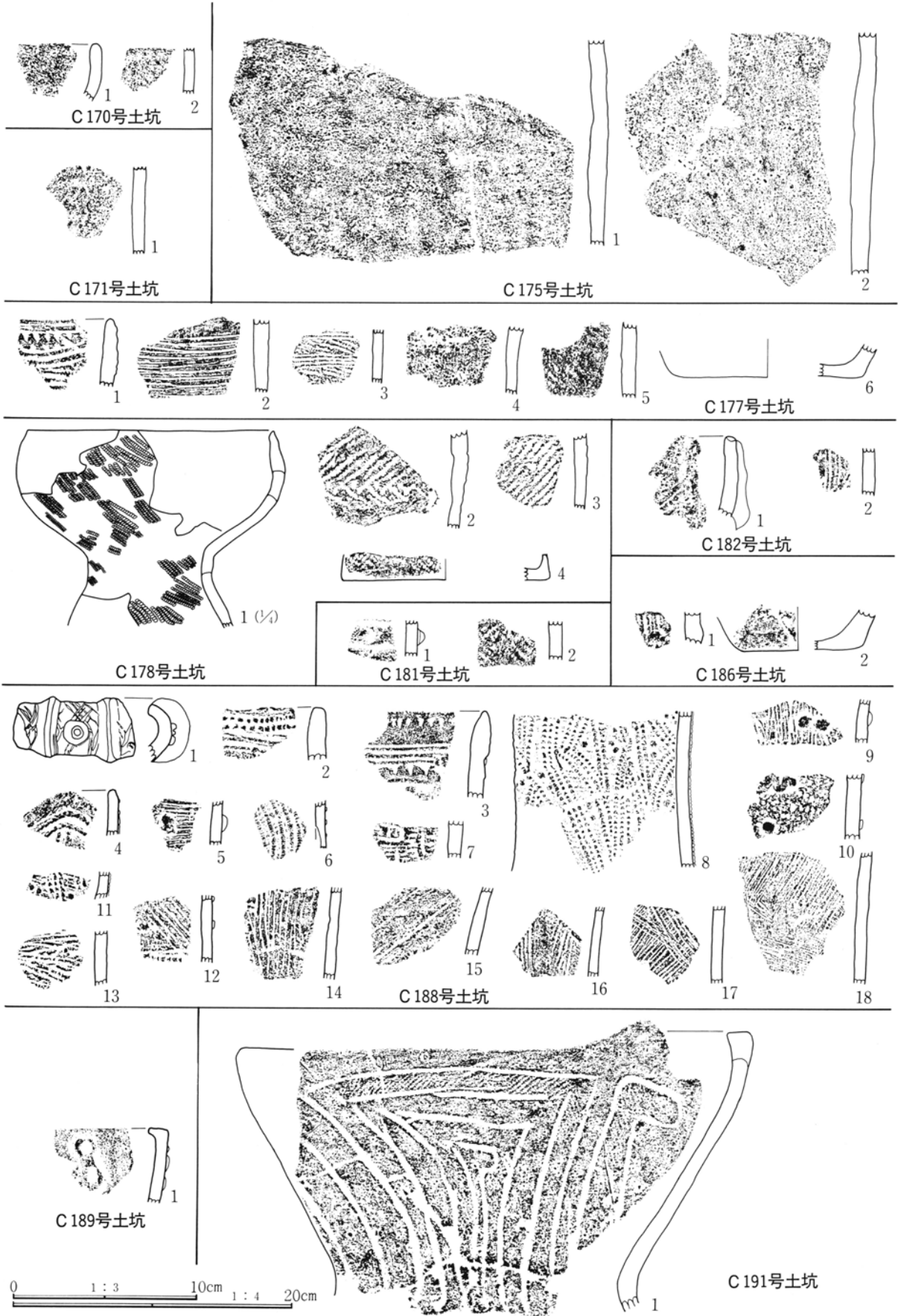
C167号土坑出土遺物（第388図 PL. 124）

1は横位連続刺突文。楕円貼付文。2は押圧文を持つ隆帯が垂下。3は連続爪形文。4は曲線文、鱗状に爪形文を施文。5は口縁部丸く肥厚。LRを横位施文。6は集合沈線。半肉彫の幅広凹線。7はLRを横位施文。

C168号土坑出土遺物（第388図 PL. 125）

1は胴部片、無文。

第1節 繩文土器



第389図 土坑出土遺物(9)

C 169号土坑出土遺物 (第388図 PL. 125)

1は波頂部片。口縁に沿って沈線で三角文を描く。2は連続結節文で三角形文、円形文を描き三角、円形の半肉彫。3は縦位S字状結節文。4は縦位連続爪形文。5は無文。

C 170号土坑出土遺物 (第389図 PL. 125)

1・2はともに無文。1は口縁部片。

C 171号土坑出土遺物 (第389図 PL. 125)

1は無文、内面煤付着。

C 175号土坑出土遺物 (第389図 PL. 125)

1は胴部片。無文。2は無文で器面に砂粒目立つ。

C 177号土坑出土遺物 (第389図 PL. 125)

1は深鉢型土器の口縁部片。口縁に沿って平行沈線、沈線で画された部分に2段の横位刺突文。2は横位集合沈線。3は地文にRLの縄文施文後、横位沈線。4は無文。5は縄文RL施文。6は底部片、底径(9.6cm)。

C 178号土坑出土遺物 (第389図 PL. 125)

1は深鉢型土器。口径(17.6cm)胴下半部でくびれ、上半部大きくひろがり、口縁部やや内湾する。縄文RLを横位全面施文。底部を欠く。2は無節L・Rで羽状縄文を構成。3は無節Lを横位施文。4は底部片、底径(10.9cm)。RLが施文される。比較的薄手の土器である。

C 181号土坑出土遺物 (第389図 PL. 125)

1は押圧痕を持つ横位隆帯。2はLR・RLで羽状縄文を構成。

C 182号土坑出土遺物 (第389図 PL. 125)

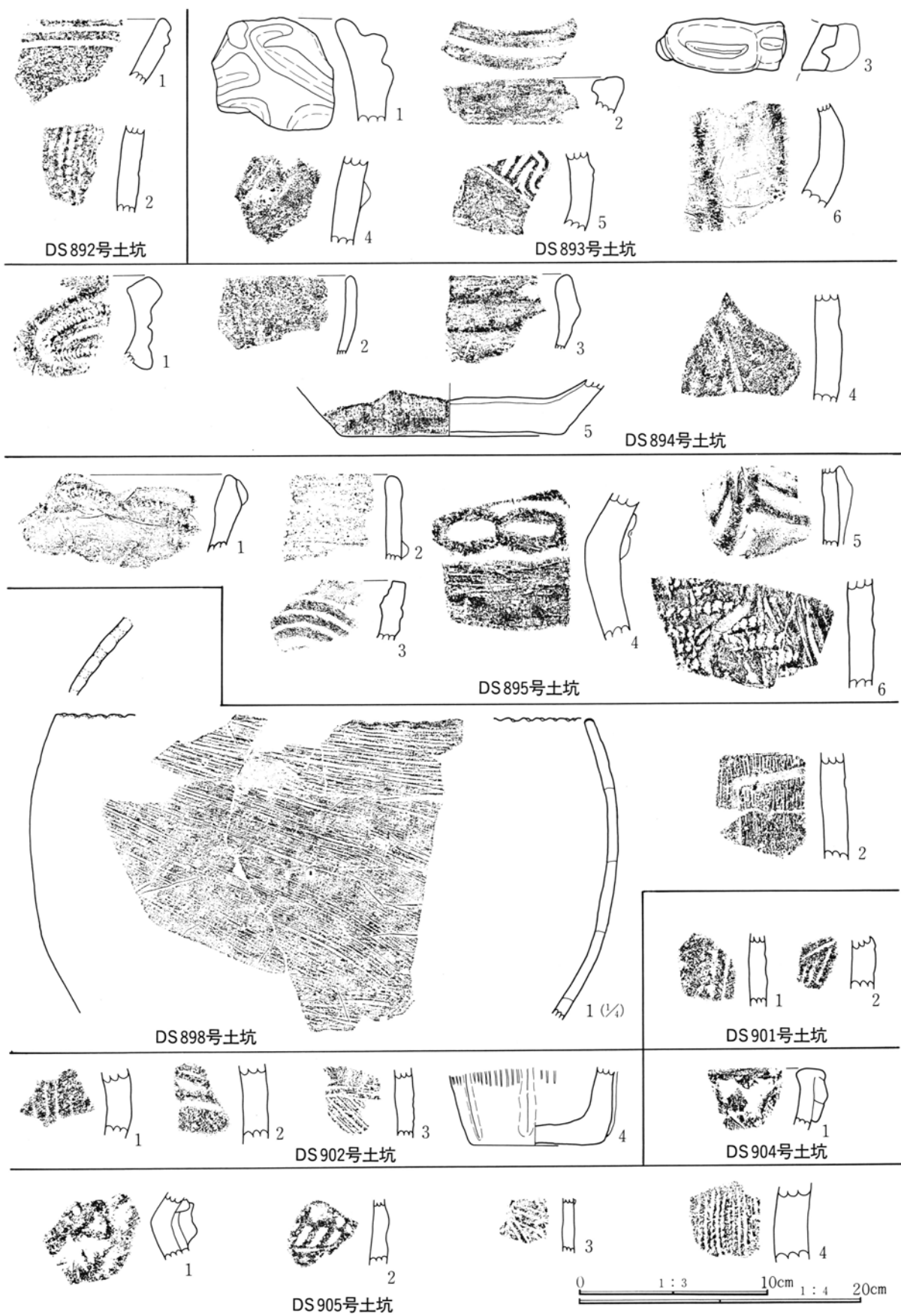
1は横位矢羽根状の沈線、棒状貼付文が付される。2は縦位集合沈線。

C 186号土坑出土遺物 (第389図 PL. 125)

1は隆帯上下に短沈線。2は底径(6.3cm)。無文。

C 188号土坑出土遺物 (第389図 PL. 125)

1は地に沈線による斜格子文、耳状突起、円形貼付文を付す。2は平行沈線施文後、口縁に沿って2本の結節浮線文。3は口唇部尖る。横位刺突文、平行沈線と三角刺突文。4は口縁波頂部片。口縁に2条の浮線文、さらに2本を垂下。5は横位集合沈線、貼付文。6は結節浮線文。7は横位沈線、上に沈線で文様。8・11は地文に横位集合沈線、3本単位の結節浮線文を縦位方向に×状、「く」の字状施文。間隙に2個1単位で円形貼付文を付す。9は縦位集合沈線、円形貼付文。10は地文に縄文。波状貼付文、円形貼付文。12は横位結節浮線文、以下、斜位平行沈線。円形貼付文。13は縦位集合沈線。14~18は縦位、斜位の集合沈線。



第390图 土坑出土遺物(10)

第1節 繩文土器



第391図 土坑出土遺物(11)

第4章 出土遺物

C 189号土坑出土遺物 (第389図 PL. 125)

1 は深鉢型土器の口縁部片。口縁端部わずかに内屈、縦8字状文。

C 191号土坑出土遺物 (第389図 PL. 125)

1 は深鉢型土器。口径(27.1cm)口縁部の一部が波状となる。縄文充填されたJ字状の磨り消し文様。

DS 892号土坑出土遺物 (第390図 PL. 126)

1 は深鉢型土器の口縁部片。口縁部に2条の沈線、以下無文。2 は LR 施文。

DS 893号土坑出土遺物 (第390図 PL. 126)

1 は隆帯文。2 は口唇部に沈線、内面隆帯状に肥厚。3 は口縁部隆帯文片。4 は隆帯が付される。5 は波状沈線文。6 は橋状把手片。

DS 894号土坑出土遺物 (第390図 PL. 126)

1 は口縁部片。連続爪形文を伴う、楕円隆帯文。2 は無文口縁部片。3 は隆帯から八状に沈線が垂下。4 は縦位沈線。5 は無文の底部片。底径11.6cm。

DS 895号土坑出土遺物 (第390図 PL. 126)

1 は口唇部波状を呈し、外縁に連続爪形文。以下無文。2 は横方向の棒状貼付文。3 は口唇部平坦で肥厚、沈線による円形文。4 は8字状の横位隆帯文。5 は凹線を伴う山形隆線文。6 は不規則な縄文施文後沈線文。

DS 898号土坑出土遺物 (第390図 PL. 126)

1 は甕型土器。口径(38.0cm)。胴部内湾し、平口縁となる。口唇部指頭による押圧で小波状を呈す。胴部条痕文。外面にタール状の付着物。2 は縦位条線文、L字形に沈線文。

DS 901号土坑出土遺物 (第390図 PL. 126)

1 は沈線および縦位方向の三角刺突文を持つ。2 は1と同一個体か、縦位、斜位の沈線文。

DS 902号土坑出土遺物 (第390図 PL. 126)

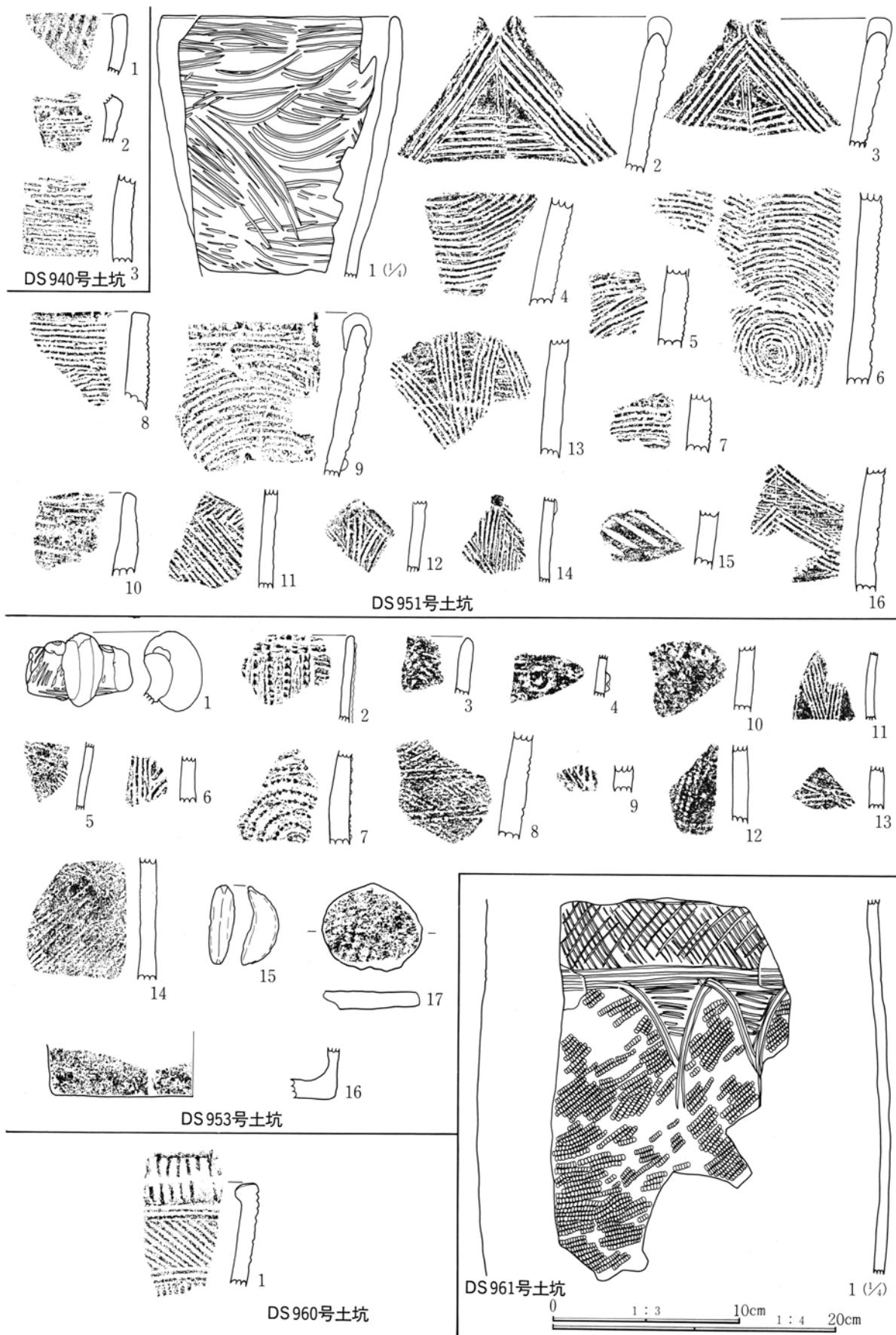
1 は並行沈線。器面風化。2 は沈線文。縄文が見られる。3 は矢羽根状の平行沈線。4 は底部。底径7.0cm。5本の隆帯垂下、隆帯間には縦位条線文。

DS 904号土坑出土遺物 (第390図 PL. 126)

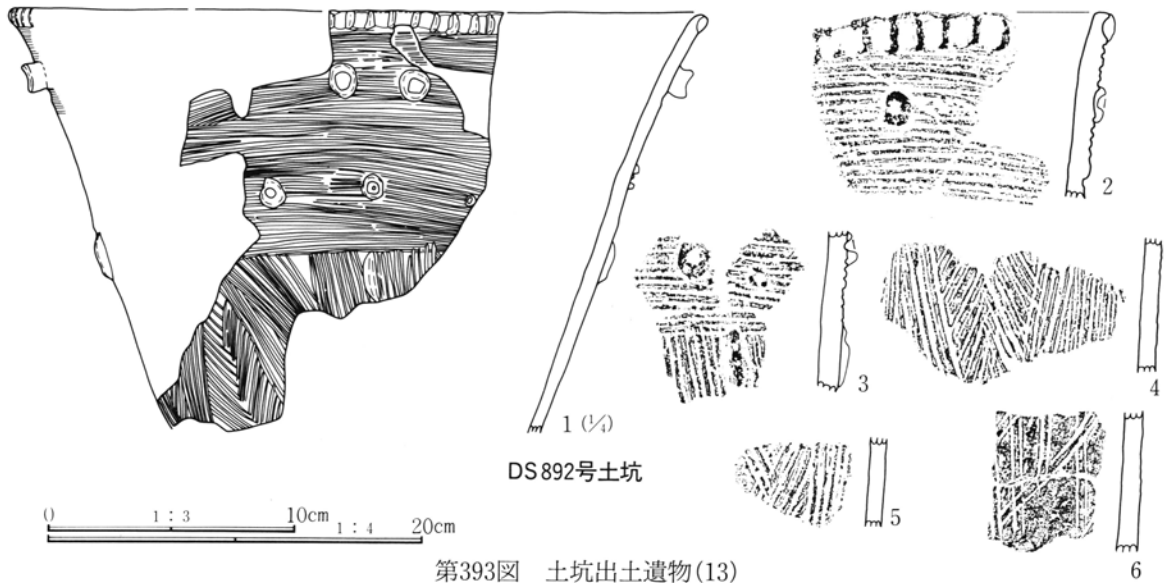
1 は深鉢型土器の口縁部片。口唇部平坦、隆帯文が付される。

DS 905号土坑出土遺物 (第390図 PL. 126)

1 は口縁部片。三角形の隆帯文、短沈線が付される。2 は隆線に沿って斜めの短沈線。3 は集合沈線文、刺突文を持つ浮線文が付される。4 は縦位撚糸文Lが施文される。



第392図 土坑出土遺物(12)



DS908号土坑出土遺物 (第391図 PL. 126)

1は口縁部肥厚し無文。2は横位、斜位の平行沈線。3はLR縄文。4は円形隆帯文。5は横位沈線および隆帯。6は横方向の刻みを持つ瘤状文、沈線が横位に巡る。7は沈線文。8は縦位の捺糸文L。9は無文か。

DS911号土坑出土遺物 (第391図 PL. 126)

1は深鉢型土器の胴部片。RLが横位施文される。

DS925号土坑出土遺物 (第391図 PL. 126)

1・2は横位連続爪形文。3は隆帯文、渦巻き文。4は沈線文。縦位捺糸文L。5は集合沈線文。6は無文。7は縄文LRが施文。

DS927号土坑出土遺物 (第391図 PL. 126)

1は縄文LRが施文される。

DS929号土坑出土遺物 (第391図 PL. 126)

1は無文の口縁部。2は刻みを伴う隆帯、沈線文。

DS930号土坑出土遺物 (第391図 PL. 127)

1は口径(28.0cm)。口縁に沿って横位平行沈線。縦位平行沈線。横位矢羽根状沈線。口縁に耳状貼付文、胴部には棒状貼付文。胴部は集合沈線による曲線文。内部に幅広の無文部。2は口縁に沿って横位平行沈線。以下、横位矢羽根状沈線を施文。一部菱形文を描く。3は横位、斜位に平行沈線。4は波頂口縁部片。無文。5は器面の大部分が剥落、一部に平行沈線が見られ、径0.7cmの補修孔を持つ。6は無文。7は横位集合沈線。8は地文に横位集合沈線、結節浮線文で眼鏡状に渦巻き文、横位並行線。9は地文にRL縄文施文後、浮線文、円形貼付文を付す。10はやや大きめの円形貼付文。11は連続刺突文を多段施文。12は横位、矢羽根状の集合沈線。13は横位平行沈線を多段施文。14は施文不明瞭。15は縦位平行沈線、刺突文。16・17は斜位の集合沈線。

18は縦位並行沈線。19は底部片。径(10.5cm)。縁辺に横位沈線が見られる。20は不明土製品。縦5.2cm、横(4.0cm)、厚さ2.0cm。中央が厚く、ほぼ円盤状を呈すが、一部欠損している。指による成形痕が見られる。

DS933号土坑出土遺物 (第391図 PL. 127)

1は口縁部片。縄文LRが口縁に沿って横位施文。2は口縁波頂部片、斜位集合沈線施文後、口縁に沿って結節浮線文を付す。3は横位平行沈線。4は斜位、横位の平行沈線。5はRL施文後、横位沈線を多段施文。6は縄文施文、器面風化。7～10は縄文RL施文。11はY字状の隆線、周囲は沈線による円形文。

DS940号土坑出土遺物 (第392図 PL. 127)

1は口縁部片。無節Lが横位施文される。2は横位集合沈線。3は地文にRLを施文後、横位平行沈線。

DS951号土坑出土遺物 (第392図 PL. 127)

1は深鉢型土器。口径(16.8cm)。胴下半からやや開きながら立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。口縁部に横位平行沈線が巡り、以下、連弧文、斜位、横位の沈線文が施文されるが、雑な施文構成である。2・3は口縁部。波頂部片、先端部分は双頭を呈す。複数の平行沈線で三角形を意匠する。4～7は平行沈線による同心円文。8は口縁部片。口唇端部平坦をなす。横位集合沈線。9は口縁部に耳状貼付文。平行沈線文による同心円文。10は口縁部片。横位平行沈線。11～14は縦位、横位矢羽根状の集合沈線。14は円形貼付文。15は斜位沈線文。16は横位集合沈線を地文施文、山形の集合沈線を複数段施文。

DS953号土坑出土遺物 (第392図 PL. 128)

1は口縁部片。地文に斜位、横位の集合沈線。耳状突起、円形貼付文が付される。2は口縁部片。地文に横位集合沈線、口縁に沿って2条の結節浮線文、以下縦位に結節浮線文。3は口縁部片。LR・RLで羽状縄文。4は横位集合沈線、刺突文を持つ円形貼付文。5は斜位沈線文。薄手の土器。6・9・11は縦位集合沈線。7は結節浮線文による渦巻き文を描く。8は横位、斜位の平行沈線に沿って、連続刺突文。地文には斜め方向に捺糸文Lが施文される。10はLR施文か。12はLRが横位施文。13は横位矢羽根状の集合沈線。14は無節Lが横位施文、横S字状結節文。15は耳状貼付文。16は底部片。底径(14.5cm)。無文。17はRLが施文。

DS960号土坑出土遺物 (第392図 PL. 128)

1は口縁部片。口唇部内側に丸く肥厚し、浮線文が配される。以下、横位、斜位、縦位沈線文。

DS961号土坑出土遺物 (第392図 PL. 128)

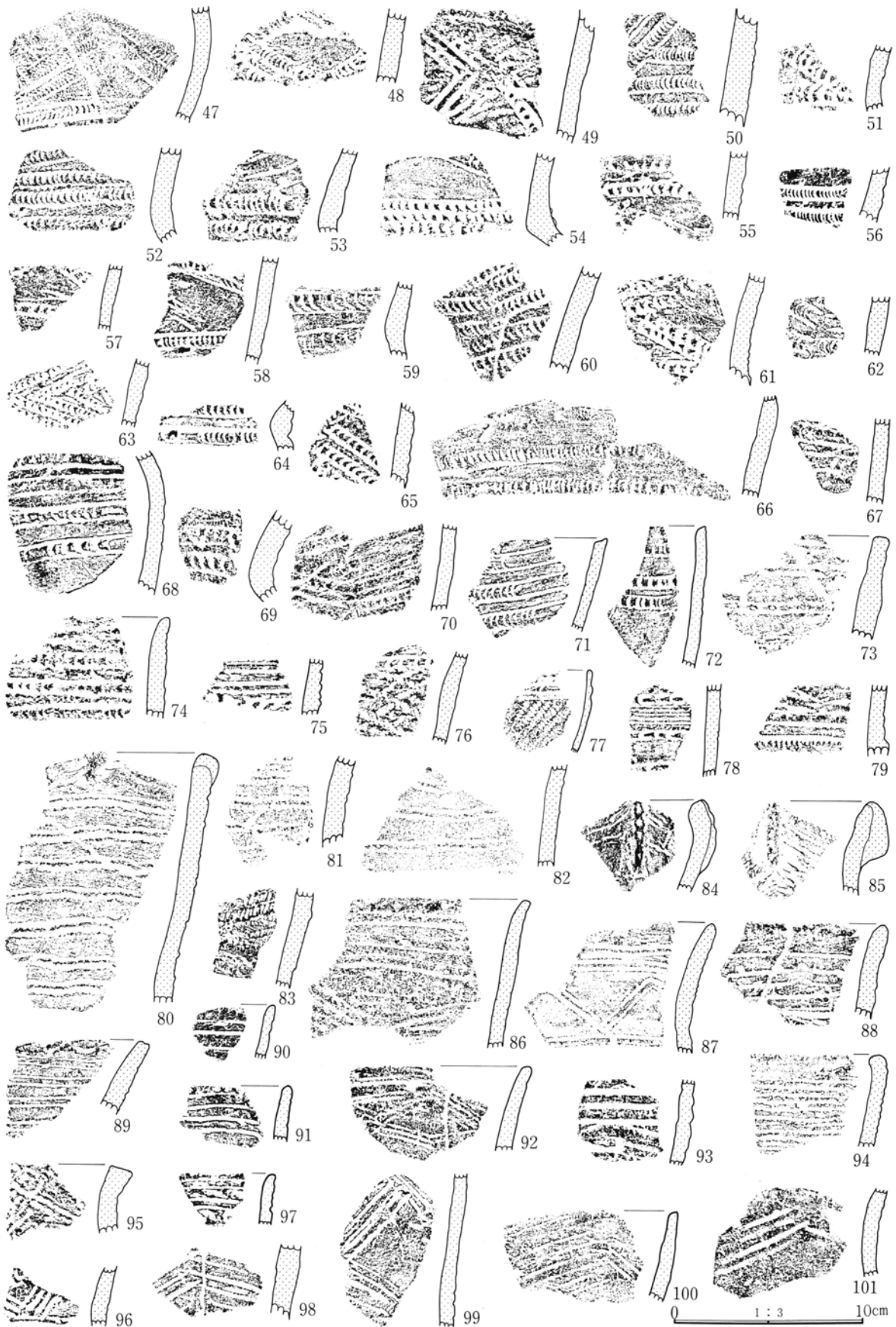
1は深鉢型土器。口縁端部を欠く。口縁部沈線による文様帯、中を斜格子文で埋める。胴部縄文LR施文後、連続アーチ状文、横位沈線との間にできた三角形部分には横位沈線を充填。

DS963号土坑出土遺物 (第393図 PL. 128)

1は逆「ハ」の字に開く深鉢型土器。口径(36.0cm)。口縁部外側につまみ出して、耳状貼付文様を呈す。以下横位集合沈線。口縁部近くに1対の突起状の円形貼付文、中位には刺突文を持つ円形、棒状貼付文が付される。2は1の口縁部片。3は横位、縦位集合沈線、円形、棒状の貼付文。4～6は矢羽根状の集合沈線。



第394図 遺構外出土遺物(1)



第395図 遺構外出土遺物(2)

第4章 出土遺物

4. 遺構外

本遺跡において、縄文時代の遺構（住居跡、土坑、集石、配石、埋甕）に伴わないすべての遺物を遺構外出土遺物として取り上げた。遺構外出土の縄文土器の点数は約8,000点で、このうちここに図示したのは約1,000点である。出土土器の時期は前期から後期にわたっている。以下、これらの土器を分類しその概略を述べることとする。

分類は第Ⅰ～Ⅶ群に大別後、型式毎に類別し、さらに施文具や文様別に種別分類し記述を行った。また土器以外のものについては、その他として各群の最後に記載した。

第Ⅰ群 前期の繊維を含む土器群。（花積下層、関山、黒浜（有尾）式に相当する）

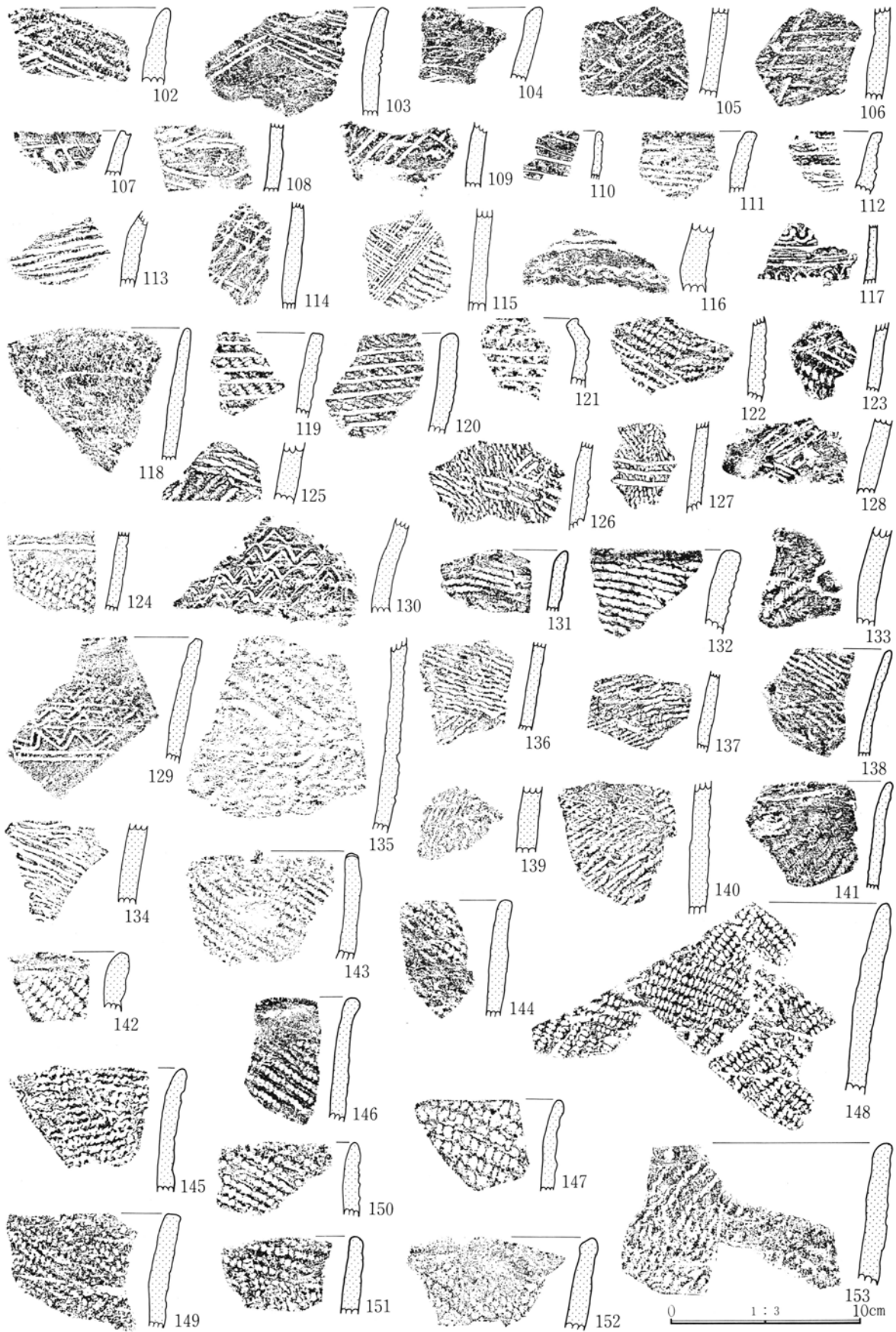
- 第1類 花積下層式である a種 縄文が施文されるもの b種 撚糸側面圧痕文をもつもの
第2類 関山式である a種 沈線文、貼付文をもつもの（関山Ⅰ） b種 竹管による平行沈線で文様を描くもの c種 縄文が施文されるもの
第3類 黒浜（有尾系）式である a種 櫛歯状工具による刺突文をもつもの b種 連続爪形文をもつもの c種 半截竹管による平行沈線文をもつもの d種 縄文施文されるもの e種 無文 f種 その他の施文をもつもの g種 底部片

第Ⅱ群 前期後半から末の土器群。（諸磯a・b・c、十三菩提式に相当する）

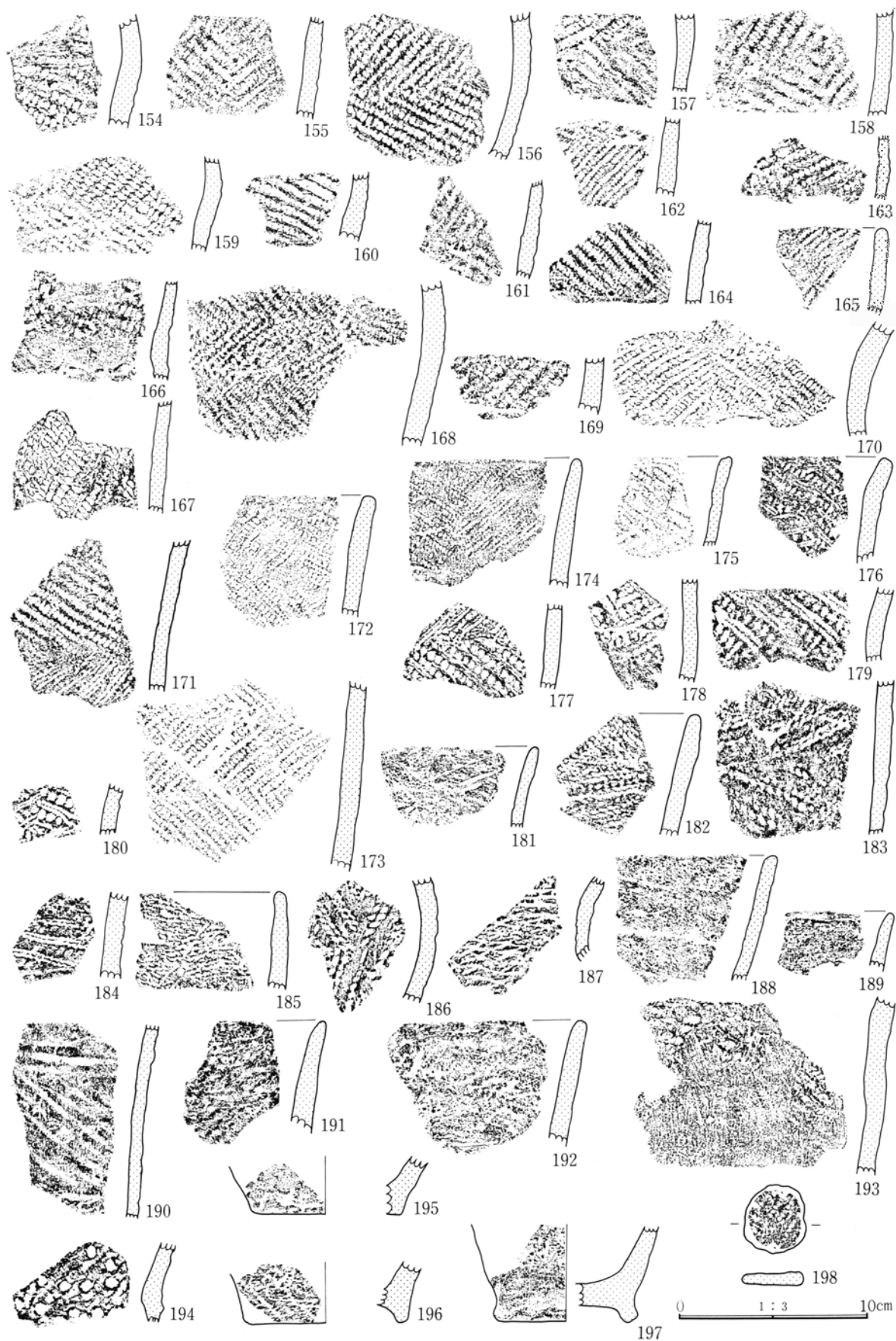
- 第1類 諸磯a式である
第2類 諸磯b式である a種 沈線による渦巻文、平行線文をもつもの b種 口縁部突起文 c種 隆起部に刺突文
第3類 諸磯c式である a種 集合沈線を施文後、耳状、円形の貼付文 b種 集合沈線を施文後結節浮線文による文様
第4類 浮島式である
第5類 十三菩提式である a種 縄文施文後、結節浮線文が付されるもの b種 地文を持たず、結節浮線文が付される c種 集合結節文、陰刻文をもつもの d種 貼付文、刺突文、横位沈線文をもつもの e種 ソーメン状の細い浮線で文様が描かれるもの f種 連続爪形文で文様が描かれるもの g種 集合沈線で文様が描かれるもの h種 縄文が施文されるもの

第Ⅲ群 中期初頭から前半の土器群。（五領ケ台、阿玉台、勝坂式に相当する）

- 第1類 五領ケ台式である a種 集合沈線による横位、縦位、斜位の施文がなされるもの b種 沈線による並行線、渦巻文、三角陰刻文、刺突文等が施文されるもの c種 地文に縄文をもち、直線、曲線文が描かれるもの d種 S字状の結節縄文をもつもの e種 縄文が施文されるもの f種 無文のもの
第2類 阿玉台式 a種 口縁、隆帯に沿って角押し文が連続施文されるもの b種 口縁、隆帯に沿って沈線施文されるもの c種 口縁部内側に施文されるもの、鉢型土器 d種 沈線により縦、横、波状文が描かれるもの e種 把手部分
第3類 勝坂式 a種 隆帯、沈線で文様を描き、隆帯上、または沿ってキャタピラ文、刻みが施さ



第396図 遺構外出土遺物(3)



第397図 遺構外出土遺物(4)

れるもの b種 沈線によりY字状文、山形文、渦巻文が描かれるもの c種 隆帯上に縄文が施文されるもの d種 隆起線、半隆起線で曲線文様が描かれるもの 焼町式
e種 無文のもの f種 連続結節文による集合渦巻文 g種 鉢型土器 h種 縄文のみ施文されるもの

第IV群 中期後半の土器群。(加曾利E式に相当する)

- 第1類 加曾利E式 I・II式に比定される a種 隆線で口縁部文様帯を作るもの b種 把手、突起部分である
- 第2類 加曾利E III・IV式に比定される a種 微隆線で口縁部文様を描くもの b種 口縁部無文帯を隆線で画すもの c種 口縁部に連続の刺突文をもつもの d種 口縁部無文帯を沈線で画すもの e種 沈線、または隆線による縦位縄文帯をもつもの
f種 隆線による曲線文をもつもの g種 幅広の沈線でU状、∩状、蕨手状の文様を描く
h種 無文帯を沈線で画し、胴部には渦巻文、舌縄文を描く磨り消し縄文 i種 縄文施文のもの j種 縄文以外の文様 k種 曾利式に比定されるもの

第V群 後期初頭から中葉の土器群。(称名寺、堀之内、加曾利B式に相当する)

- 第1類 称名寺式 a種 渦巻文、J字文様が描かれ縄文充填されるもの b種 沈線のみにより銚状、J字状文が描かれるもの c種 銚状、J字状文中に刺突文が見られるもの d種 把手部分 e種 底部片
- 第2類 堀之内I式 a種 口縁部に隆線、8字状文、刺突文、円孔をもつもの b種 口縁部に沈線をもつもの c種 把手部分 d種 無文 e種 口縁部に隆帯による無文帯を画すもの f種 沈線、隆線で各種文様を描く g種 隆線による8字文を描く
h種 口縁部に隆線による文様が描かれるもの i種 把手片 j種 注口部分
- 第3類 堀之内II式に比定されるもの a種 口縁部に連続押圧文をもつ隆帯が見られるもの b種 沈線で三角や渦巻文を描き縄文が充填されるもの c種 並行沈線で幾何学文を描くが、縄文の見られないもの d種 無文
- 第4類 加曾利B式に比定されるもの a種 口縁部に横位区画の縄文帯をもつもの
b種 波状口縁部、口唇部内面肥厚し沈線が巡るもの c種 横位沈線帯部分に沈線による刻みをもつもの d種 横位綾杉状の沈線文をもつもの e種 縦位の綾杉状の沈線文をもつもの f種 横位沈線が多段施文されるもの g種 口縁部に押圧文をもつ隆帯が巡るもの h種 無文 i種 把手部分片
j種 底部

第VI群 後期後半の土器群(曾谷(高井東)式に相当する)

- 第1類 曾谷式 a種 沈線、凹線をもつ波状口縁部片 b種 斜位、連弧状の沈線で画された縄文帯をもつもの c種 「く」の字に内屈する口縁部に1ないし2本の沈線が巡るもの
d種 綾杉状の沈線をもつもの e種 入り組み縄文をもつもの f種 横位沈線文様をもつもの g種 底部片

第4章 出土遺物

第VII群 その他の土製品

第1群土器(第394~397図 PL. 129~131)

前期の繊維土器をまとめた。調査区内ほぼ全域より出土が認められるが、当然のことながら、住居の集中する調査区の南東部において出土量は多い。南蛇井増光寺遺跡全体を見ると、国道南側のB区において前期中葉の黒浜期(有尾系)の住居跡が9軒検出されており、C区の13軒と併せて一集落を形成していたものと考えられる。

第1類(1~4) 花積下層式土器である。この時期の遺構は皆無である。点数は4点と少なく出土位置もばらつく。

a種 縄文施文のもの。

1・2は深鉢型土器で同一個体と思われる。口縁部外側に折り返されて肥厚、口唇端部は薄くなる。口縁部に縄文 LR・RL で鋸歯状施文。以下横位羽状縄文施文。

b種 3・4は撚糸の側面圧痕文が付されるもの。

3は口縁部片でやや内傾する。斜めに付された隆帯を持ち、口縁に沿って、RとLの2本1単位で撚糸の側面圧痕文。以下、LRが施文される。4は胴部片。LとRの撚糸側面圧痕文が斜めに施文される。

第2類(5~13) 関山式土器である。

a種 5は深鉢型土器の口縁部片。波状を呈す、口唇部に5本の棒状貼付文。半截竹管により、逆向きの蕨手文を施文後、円形貼付文を付す。6刻み目文と貼付文。関山I式に比定される。

b種 7・8は沈線文による渦巻文、三角文が描かれる。縄文地文。関山II式に比定される。

c種 9~13は縄文施文された一群である。

9~12は組紐文が施文される、同一個体片と思われる。13はRLループ文が多段施文される。

第3類(14~198) 黒浜式(有尾系)土器である。

a種 14~19は櫛歯状施文具による刺突文が施されたもの。

14~16は口縁部縦方向に沿って施文される。17~19は三角ないしは菱形文を描く。17は口唇に沿って刺突が見られる。

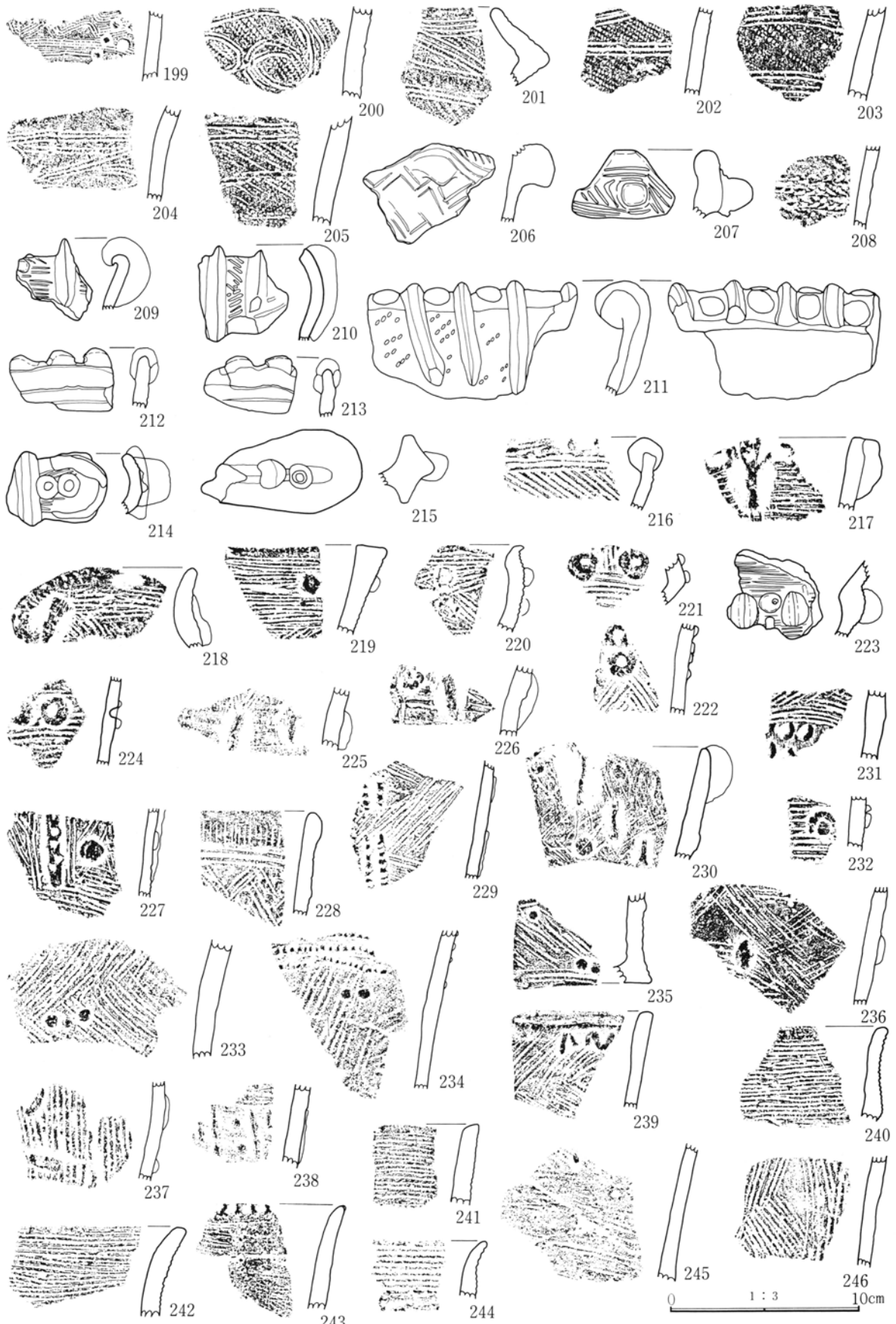
b種 20~83は半截竹管による連続爪形文が施されたもの。

口縁部文様帯に半截竹管による連続爪形文で、菱形文を基調としたモチーフを描くもの。口縁部に沿って2~4条の連続爪形文を巡らし、下位に菱形文様を描出。爪形文はC字形が主で、D字形は少ない。口縁部文様帯、菱形文を意匠し波状口縁となるものが多い。21・23・41・71・72は口唇部内削ぎ状を呈す。また43は瘤状の突起が付される。25は施文具を器面に対して直に当てている。28・36・68は爪形文の間隔が一定しない。29・47・50・56は間隔が狭い。33・35・51は幅広の爪形文。

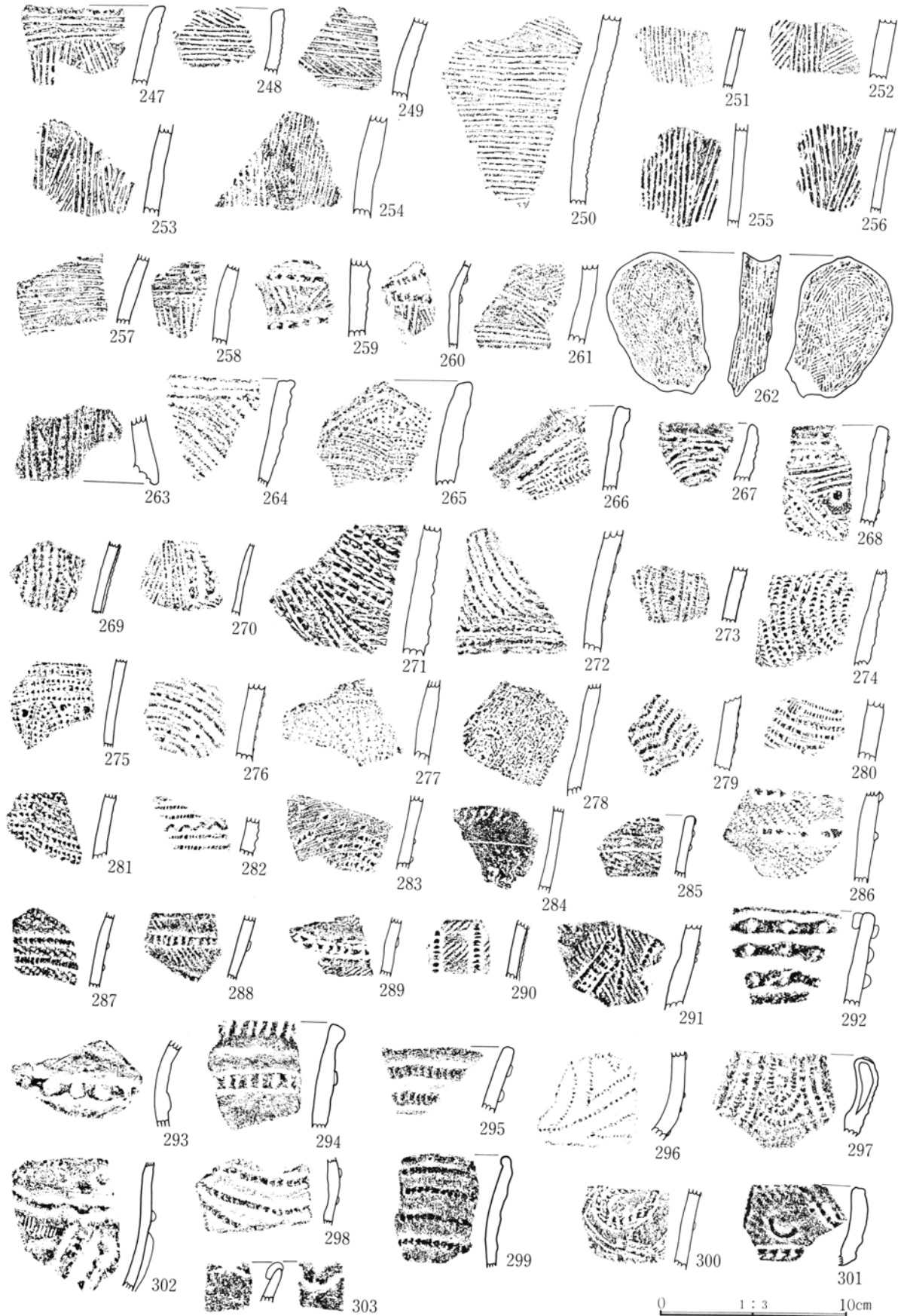
49・63・64は施文が深く、文様外が浮き出す感じを与える。34・71は口縁部片。口唇部内削ぎ状を呈す。横位連続爪形文を多段施文。途中爪形文が途切れる。62・67も同一個体と思われる。80~82は同一個体片。かなり鋭角に処理された半截竹管による連続押し引き文が多段施文される。80は口縁部に瘤状の突起が付く。他の爪形文と趣を異にする。C169号住居跡1と同一個体片。

c種 84~124・126~130・181は平行沈線により、平行線、連弧文、山形文が描かれたもの。

84・85は波頂部に紡錘状の貼付文が下がる。86~114・128は口縁部文様帯、横位、斜位の平行沈線で、山形、菱形文を意匠するものが見られる。96は注口土器か、第2類b種の可能性もある。106は極めて施文が浅い。



第398図 遺構外出土遺物(5)



第399図 遺構外出土遺物(6)

115は集合細線で地文に縄文。116・117は平行線、コンパス文をもつもの。118は口縁部に沿って横位斜位の細沈線文。119～124は縄文 RL を地文に持つ。126・127・185は地文に燃糸Lを施文後、沈線施文。126は3本単位の短沈線を連続施文。129・130は連続山形文を持つ。181は不鮮明であるが、平行線が交差する。

d種 125・131～180・182～187・190・191・193・198は縄文が施文されたものであるが、口縁部に文様帯を持つ土器の胴部片も多く存在するものと思われる。

125・131～133・135～141・190は無節縄文が施文される一群である。125は羽状を構成する。136は繊維の混入ほとんど見られず、器肉は薄く指頭痕も見られ、他の一群と様相を異にする土器である。140は端部を縛った条の圧痕が見られる。190は摩滅している。142～175は単節縄文が施文されるもの。148・155・158・168は羽状縄文で菱形構成をとる。176・177は付加条、178～180は異条縄文が施文されるもの。134・182・183～187は絡条体が施文されるもの。190・191・193は施文が不鮮明。198は土製円盤である。土器の破片を再利用している。径約3.5cm、厚さ約0.7cm。縄文 RL が施文される。

e種 188・189・192は無文土器である。

いずれも口縁部片。192は有文か。

f種 194その他の施文を持つもの。棒状工具による刺突文が見られる。

g種 195～197底部片をまとめた。

195・197は無文。195は底径(7.8cm)。196は RL 施文か。底径(8.2cm)。196・197は上げ底を呈す。

第II群土器(第398～400図 PL. 131～133)

前期後半～終末期の一群である。諸磯式、十三菩提式である。調査区の北側に分布の中心が見られる。遺構は若干の土坑と住居跡が1軒である。

第1類(199) 諸磯a式である。1点のみの出土である。

199は集合沈線による横位、波状文を施文。竹管端部の円形文を付す。

第2類(200～208) 諸磯b式である。

a種 200～205は地文に縄文施文後、沈線による渦巻文、平行線文を描くもの。

200は RL を地文に施文、沈線による曲線文を描く。201は口縁部片、「く」の字に内屈する。202～205は平行沈線による横位、斜位の沈線文が付される。205は平行沈線に沿って刺突文が見られる。

b種 206・207は口縁部突起文、沈線による施文で周囲を充填。

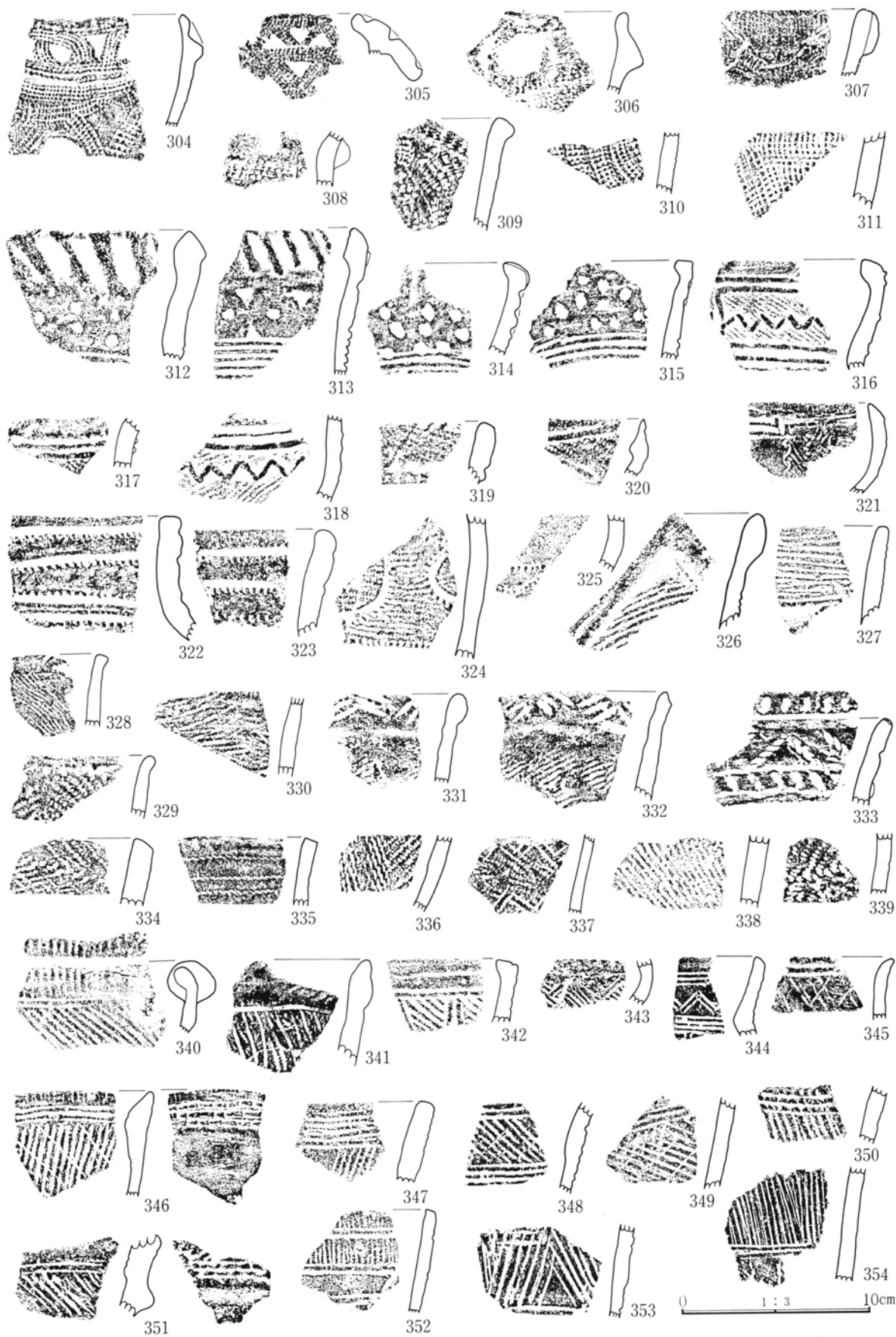
206は口唇部にも刻みが付される。207は台形状の突起部分である。共に獣面意匠文のくずれたものか。

c種 208は横位浮線状にやや隆起させた部分に、刺突様の刻みを矢羽状に付す。

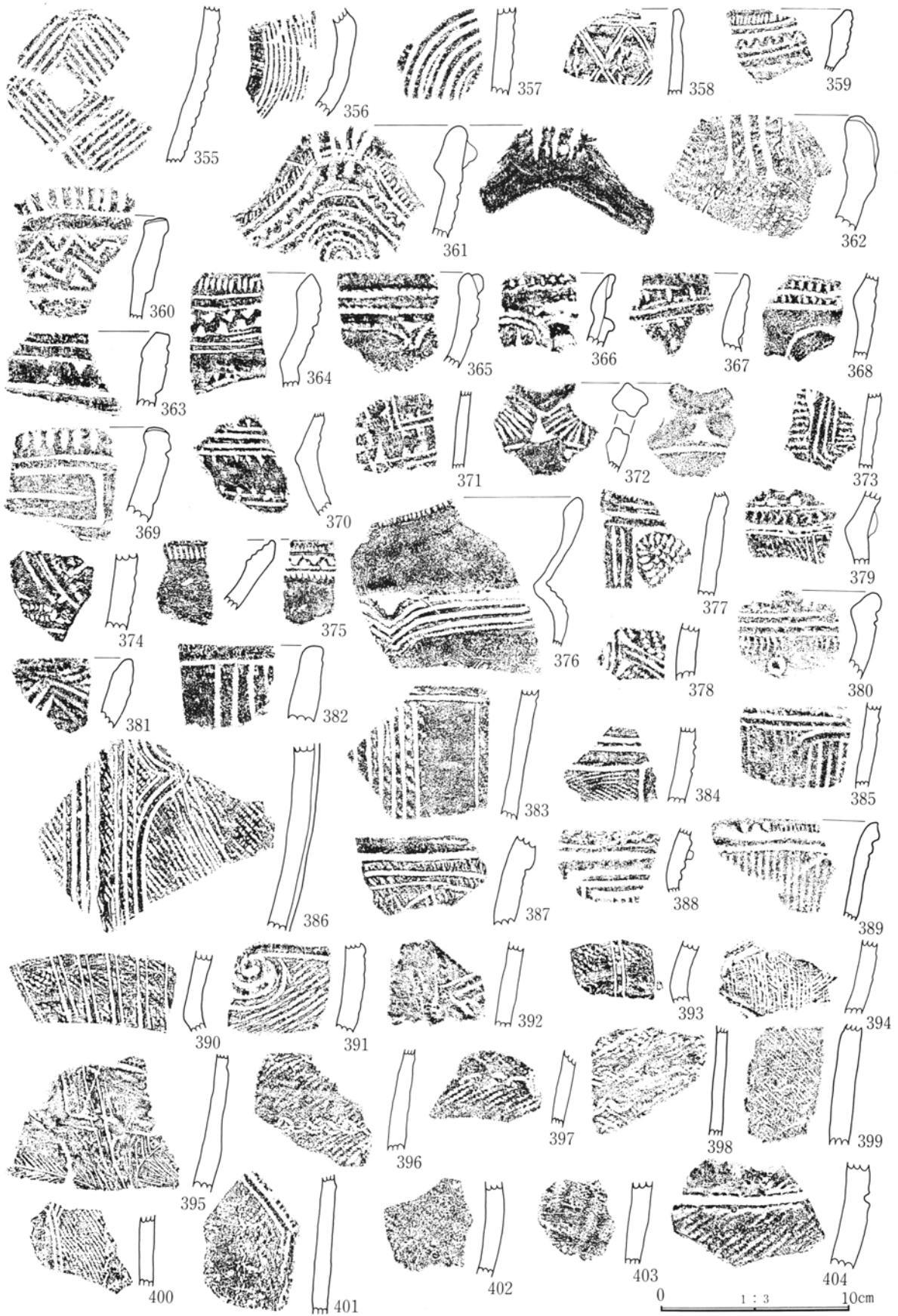
第3類(209～281・283) 諸磯c式である。

a種 209～258・261・262は地文に横位、縦位の集合沈線を有す土器、口縁部及び胴部に耳状突起、円形貼付文が付されるもの。209～220・230は口縁部片である。いわゆる耳状貼付文、円形貼付文が付される。口縁部が209～216のようにやや内屈するもの、217・219の様に平らに押さえられたもの、218・220のようにやや外半気味に終わるものが見られる。221～222・232～238は円形、棒状の貼付文が付される。227・229は結節を持つ棒状貼付文。239は口縁部に波状の貼付文。240～258・261・262は貼付文無く横位、縦位の集合沈線文が施される。243は口唇部につまみ上げた連続刻み。262は大形の耳状把手部分である。全面に集合沈線による施文がなされている。

b種 259・260・263～281・283は地文に集合沈線施文後、線結節浮線文で文様が描かれるもの。



第400図 遺構外出土遺物(7)



第401図 遺構外出土遺物(8)

第4章 出土遺物

259・260は地文の様子、浮線の状況などやや異質の感がある。260は薄手である。264・265・267～281・283は結節浮線文による弧状、円形文が描かれる。266は結節文が密接しており、異系等の可能性がある。265・268・273・275は円形小貼付文を有す。

第4類(284) 横位の細沈線、貝殻の腹縁文が多段施文される。浮島式である。器肉は比較的薄手で、胎土は精製された感じである。C123号土坑の1と同一個体である。

第5類(282・285～339) 十三菩提式である。

a種 282・285～291は結節浮線文が付されるもの、横位、縦位にやや間隔を持って付される。基本的に地文に縄文が施文されている。

282は細い浮線文が付されている。288は浮線上に篋状工具による連続刻みが付される。

b種 292～303・325は結節文が付されるが地文を持たない。曲線文様を描くものも見られる。

292は口縁部片、太めの連続押圧を持つ横位浮線文が複数付される。293も浮線の状況は292に似る。294は浮線上に連続の刻みを付す。296・325は繊細な感じを持つ、器面ざらついており砂粒が目立つ。297は内側に折り返された口縁部波頂部分。302は作りが雑である。299・301は口縁部片、器面の摩滅が進んでいる。300は沈線に沿って浮線が貼り付けられているが、雑に作られている。303は口縁部片。本種に含めたが、口唇内面に結節を持たないソーメン状の貼付文。

c種 304～311は印刻文、集合結節文をもつもの。

304・305は口縁部である。連続の集合結節文を施文し、文様を浮き出させる効果を与えるように円形、三角の印刻文。306は隆線による曲線文を配し、集合結節文を付す。307は折り返されて肥厚させた口縁部の下部に三角の切り込みを付け、集合結節文を充填している。308はやはり口縁部肥厚させ、深い刻みを付ける。以下集合結節文。309は口縁部肥厚させ、集合結節文。胎土に金雲母片混入。Db-43グリッドP1内より出土している。310も集合結節文。311は細かな縦、横の沈線により同様な施文効果を上げている。

d種 312～315は口縁部に棒状の貼付文を持ち、棒状工具による刺突文と、横位沈線が施文される。

312・313は口縁部内側に肥厚、斜めに連続棒状の貼付文が付され、刺突文、横位沈線が見られる。313の刺突文は三角形を意匠する。314・315は口縁部内屈する、棒状の貼付文、棒状工具の先端による刺突文が配されているが、314は下方向から、315は上方向より施文されている。

e種 316～321はソーメン状の細い浮線文で、文様が描かれる。地文には縄文が施文される。浮線上には刻み等の施文は見られない。

316は口縁部片、口唇部内屈する。細いソーメン状の貼りつけで平行線、連続山形文を描く。地文にはRLが施文される。317・318は同一個体片と思われる。319は口縁部片、斜めに浮線が走る。320は口唇部が尖り、浮線が配される。321は口縁に沿って3本の浮線文、これを切るように2本の短い浮線が付けられここからS字状の結節縄文が下がる。

f種 322・323・324口縁部は横位の沈線に沿って連続爪形文を配し、胴部は曲線文を同じ手法で描く。同一個体片。322・323は口縁部で、口縁に沿って凹線と、この凹線に沿って連続の爪形文が付される。胴部片324は沈線で描いた曲線文に沿ってやはり連続の爪形文が付される。地文にはLRの縄文が施文される。土器はざらついており砂粒の混入が目立つ。

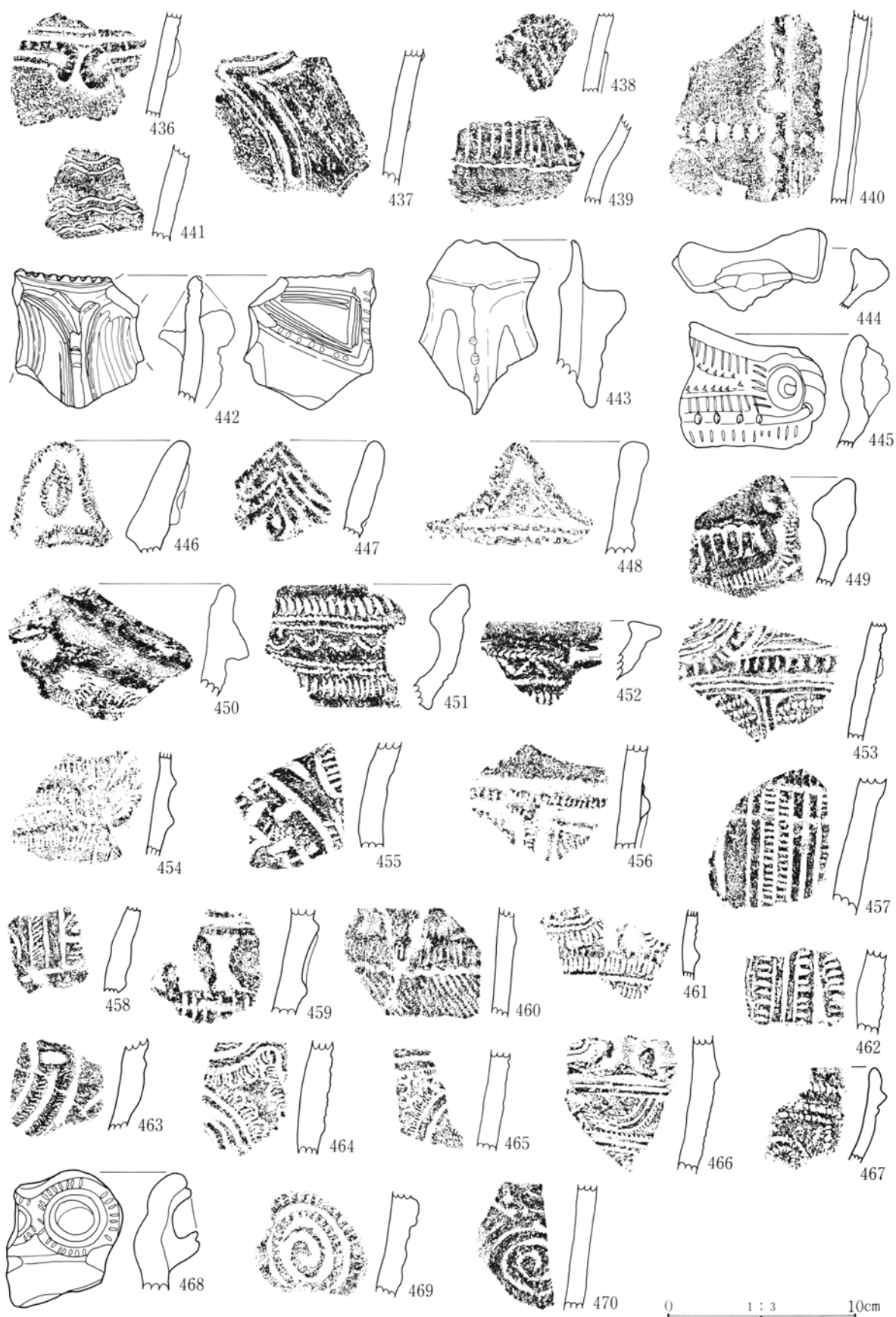
g種 326・327は集合沈線で文様を描く。

326は三角に尖った波頂部片。口縁部は肥厚し、横位の集合沈線が見られる。327は口縁部片、外側に折り返されて肥厚した幅広の集合沈線帯を持つ。



第402図 遺構外出土遺物(9)

第4章 出土遺物



第403図 遺構外出土遺物(10)

h種 328～339は縄文が施文されるもの。時期的に確定できないものも含まれる。333・335は撚糸の側面圧痕文が見られる。328は口唇端部は押さえられて平らである。無節Rが施文される。329はRL・LRで縦方向の羽状縄文。330は無節L。331・332は口縁部肥厚した部分に鋸歯状の沈線文、以下無節Lが施文される。色調がかなり違うが、同一個体と考えられる。333は横位貼りつけ文を持つ。太めの撚糸Lの側面圧痕が口縁部、口唇端部、貼りつけ文上に施文される。砂粒の目立つ土器である。334は口縁部、外削ぎ状を呈す。横羽状縄文。335は撚糸Lが横位多段施文される。336はRLと絡条体Lが施文される。337は地文にRL、鋸歯条の沈線文。第2類に含まれるか。338は縄文RLが施文される。339は羽状縄文。

第III群土器 (第400～406図 PL. 133～136)

中期初頭～前半の土器群である。五領ケ台、阿玉台、勝坂式に相当する。調査区の北側に多く出土している。遺構の住居は2軒と少ないが、土坑が比較的検出されている。

第1類(340～404) 五領ケ台式土器である。

a種 340～358は集合沈線による横位、縦位、斜位の文様が描かれるもの。

340は口縁部に耳状の貼りつけ文が付される。また口唇部には不明瞭であるが、撚糸の圧痕文が、施文されている。以下斜位の集合沈線文。341は一部が突起した口縁部片、口縁に沿って沈線、斜位沈線。342は口唇部内屈、横位、斜位、縦位方向の沈線。343・344は鋸歯文が施文される。345は斜格子文。346は口縁部片、口唇内面が肥厚し集合結節文が施文されている。口唇部には細い撚糸Rの側面圧痕文が、施文される。外面は横の沈線、以下斜めの集合沈線であるが、右斜線は細く、篋状の工具による施文。347～351・353は横位、斜位の集合沈線。351は瘤状の突起を持ち、内面にも施文が見られる。352は縦の集合沈線を切って横方向に沈線。353は集合沈線と結節縄文がわずかに見られる。355は重畳の菱形文の中央がくぼむ。356・357は同心円文。358は薄手の土器である。平行沈線による菱形文とS字状の結節文。

b種 359～382・385・388・389・394・395口縁部分に沈線による平行線、渦巻文、三角印刻文、刺突文等が施文される。基本的に地文を持たない。

359～362・364・369は口縁部片、口唇部に刻み、または3～4本の沈線を付す。平行線、山形文、渦巻文を描き、359・361・364・375は平行沈線間に交互刺突文を配す。366はやや薄手で口縁部に刻み、連続刺突文を有す隆帯が付される。367・368・370は沈線、刺突文。371は縦、横の沈線に三角を意匠した刺突文。372は先が二股になる突起部分で三角形の透かし窓を持つ。連続沈線が付される。373・374・377・378は沈線で文様を描き竹管による刺突文で充填。376は口縁部片。頸部で強く「く」の字に折れて口縁部はやや内湾する。口唇部に刻みを有し、頸部に廻された4本の沈線が一部V字状に下がる。また下位にはペン先状の連続爪形文が巡る。薄手で焼きの良い土器である。379は沈線、結節を持つ隆線文、刺突文。380は口唇部が内側に肥厚し横位平行沈線、爪形文、円形刺突文を有す。381は斜めに沈線文。382・383・385・388・389は横位、縦位方向の沈線文。394・395は集合線により文様を描く。395は沈線は細く、胎土も異質であることから、IV群に比定される可能性もある。

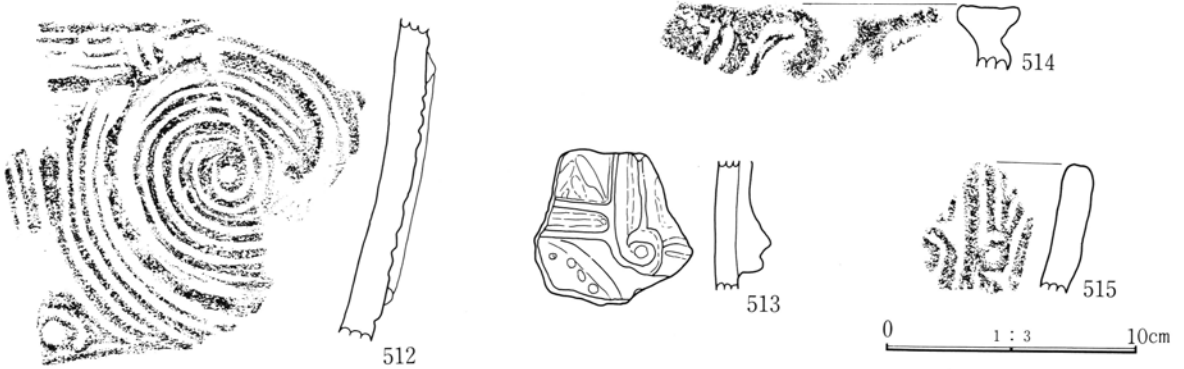
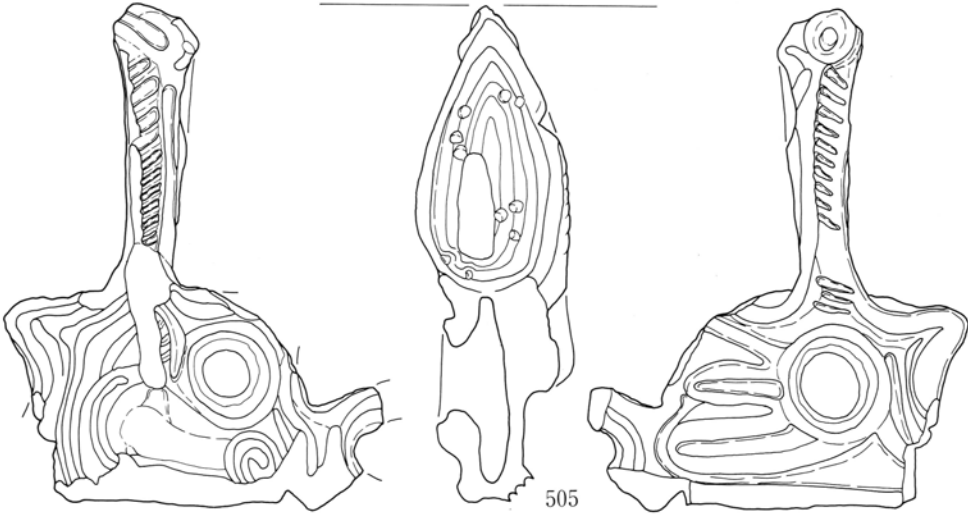
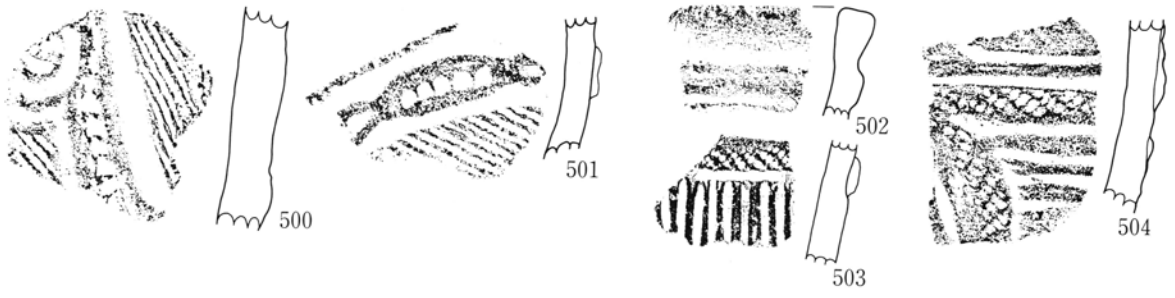
c種 383・384・386・387・390～393・404は沈線により直線文、曲線文を描くもので、地文に縄文を持つもの。

383は縦沈線文の下に縄文が見られる。384・386・387は地文にRLの縄文を施文。横位、縦位の沈線文を描く。389は口縁部片、口唇部肥厚し刻みを有す、口縁部には1対の円形文。横に平行沈線、以下不鮮明であるが条が縦に走る縄文が施文される。390・393は縦位の平行沈線。地文はRL。391は渦巻文。404はLR施文、深くしっかりした沈線が横に走る。沈線上部の無文部分にソーメン状の貼りつけ文の一部が見られることか



第404図 遺構外出土遺物(11)

第1節 繩文土器



第405図 遺構外出土遺物(12)

第4章 出土遺物

ら第II群に分類される可能性もある。

d種 396～398・400・401はS字状結節縄文をもつもの。

396～398は横位施文。400・401は同一個体と思われる。縦位に施文される。

e種 399・402は縄文のみの施文である。

399は細い無節縄文が施文され、弱い篋の当たり痕の様なものが見られる。402は施文がほとんど不明である。

f種 403は無文土器である。

指頭による整形痕が見られる。

第2類(405～444) 阿玉台式土器である。いずれも砂粒の混入が目立ち、金雲母を含むものが多い。

a種 405～430・432は口縁、隆帯に沿って角押文が施文されているもの。

405は角状突起を有す口縁部片。口唇部に刻み、角押文を持つ扁平楕円文が左右に配され、中央に三角形を意図した刺突文。406は刻みを持つ突起文が垂下し、口縁に沿って連続角押し文さらに縦位の短沈線。407は刻みを有す小波状口縁部片。408は外面に隆起文、内面に角押し文による施文がなされる。409～413・415～417・419・420は口縁部に文様帯を画し、内側に沿って1～3条の連続角押し文を施文。414は把手部分、立体的に飾られた楕円形文、垂下文。内面は円孔を持つ円形文。いずれも連続角押し文、爪形文が施文されている。420は押圧文を持つ横位隆帯を持つ。418・421～430は隆起線文に沿って連続の角押し文が施されている。430は隆起線上に押圧気味の刻み、間隔をもった刺突文。432は断面三角の隆起線に押圧による刻み。

b種 431・436・437・438・440は口縁、隆帯に沿って沈線が巡る。

431は口縁部片である。口縁部やや外側に屈曲する。Y字上に隆起線文とこれに沿って沈線が見られる。436は左右からの「の」の字状隆起線に沿って沈線。437・438は「く」の字に折れた垂下隆起線に沿って沈線が配される。440は押圧を持つ垂下隆起線と、横方向の爪形刺突文。

c種 433～435は口縁部内側に有節沈線が多段施文される。鉢型土器である。

433・434は外面無文で、内面口縁に沿って連続結節文が433は5段、434は3段施文される。435は口唇部に刻みを持ち、内面にやはり5段の連続結節文。

d種 439・441は沈線による横位、縦位、波状文。

439は刺突風の横位沈線と縦位の連続短沈線文。441は波状平行沈線が施文される。441は胎土、施文の様子から時期的に下る可能性もある。

e種 442～444は把手部分である。

442・443は扇状把手部分である。442はY字状に隆起線文。内面にも刻みを持つ隆起線が付される。これらの隆起線に沿って3～4条の沈線が付されている。443は大きく盛り上がった隆起線文に押圧文。444は耳状の把手部分。

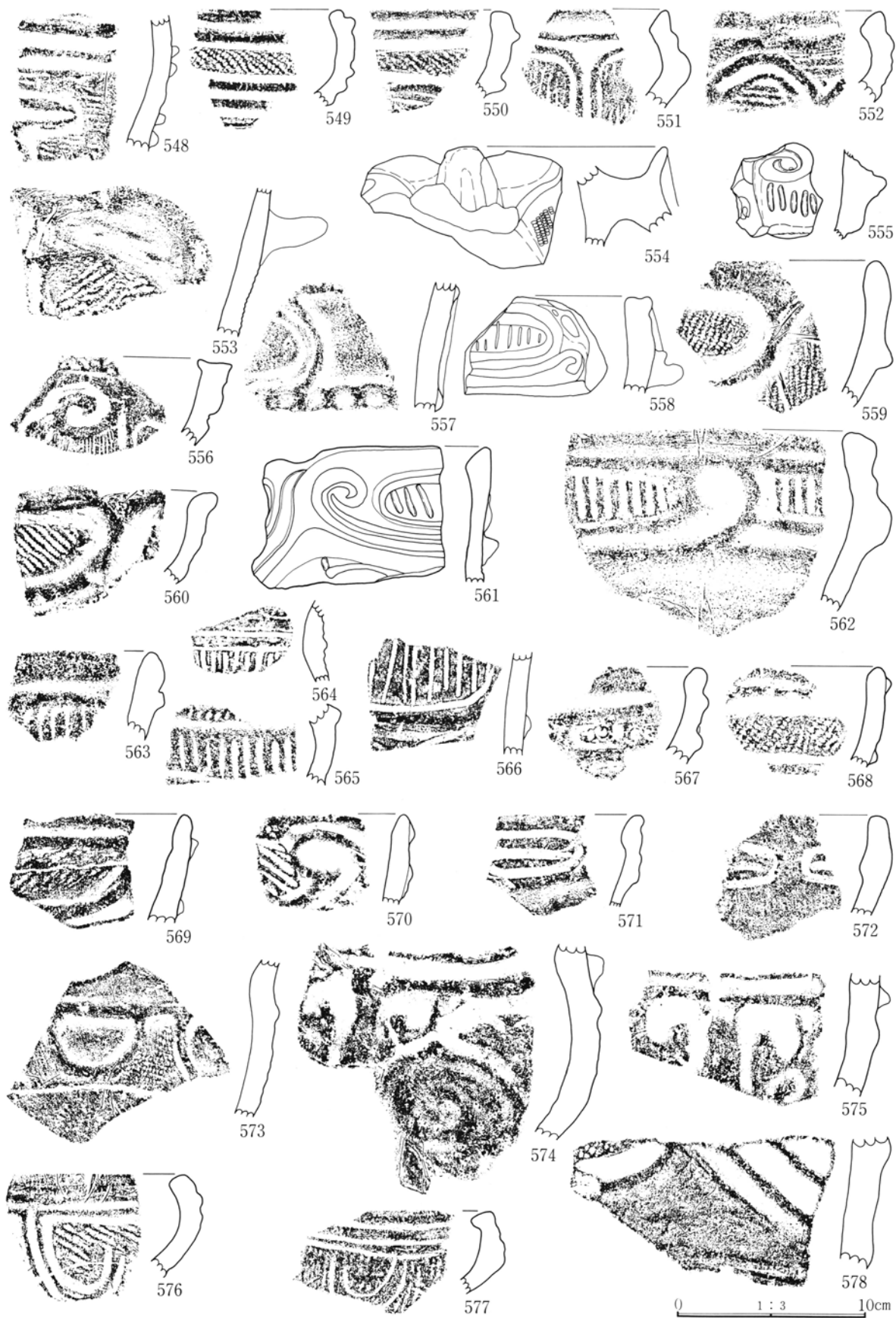
第3類(445～536) 勝坂式土器である。

a種 445～469・471～485・500・501は隆帯と沈線で文様を描き、隆帯上または沿ってキャタピラ文、刻み目が施文されるもの。

446～448は口縁部三角形の突起部分、446は先端部は丸みを持ち、中に隆起線による楕円文、刻みが付される。447は三角形に沈線、中央に刺突文。448は三角形に区画された無文部とその下には刺突文が横に付される。445・449は隆起線による円形文、渦巻文を持つ口縁部の区画文帯。キャタピラ文が配される。450～452は口縁部片。隆起線による区画文の内側にキャタピラ文ペン先状の押し引き文で平行線文、波状、山形文。453は刻



第406図 遺構外出土遺物(13)



第407図 遺構外出土遺物(14)

みを持つ隆帯、沈線による区画文と押し引き文を有す。454・456・461は隆帯上、または隆帯に沿ってキャタピラ文が施文される。455・457・458・462は沈線文と、連続の刻み文。459は貼りつけ隆帯文に刻み文。460は横位隆帯状にキャタピラ文、以下縄文が施文される。463・468・469は円形文上に刻み。464・465は沈線文にいわゆる蓮華文を伴う。466は隆帯文、沈線文、連続押し引き文が見られる。467は口縁部に隆帯、押し引き文による施文。471～484は隆帯による文様を描き、隆帯上に刻み（矢羽状）が付されるもの。471・472は同一個体。口縁部に刻みを持つ隆帯により曲線文を描く。473は突起部分に刻み。474～477・480は隆帯、沈線により文様を描き、隆帯上には矢羽状の刻み。478は口縁部からの垂下隆帯に押圧刻みと横位、斜位の沈線文が見られる。479は隆帯と沈線により文様を描く。482は幅広の隆帯による曲線文を描き、周囲、内部を刺突文、撚糸文で埋める。483～485は頸部屈曲部分。483・484は刻みのある隆帯で、485は沈線が横位に巡り、沈線が施文される。500・501は幅広の隆帯で曲線文を描き、隆帯上には連続刺突文。周囲には縄文が施文される。

b種 470・486～499は沈線によるY字状文、山形文、渦巻文が施文される。

470は沈線による渦巻文。486は隆帯、沈線による「Y」字状文。487は波状口縁に沿って沈線。488・489は沈線文、「Y」字状文。490は隆帯と沈線文。491は沈線文。492は直線文、渦巻文を描く。493は隆線による区画と刻みを配し、内側に「Y」字文。494・495は曲線文。496は口縁部片。沈線に沿って刺突文。497は波状沈線が見られる。498は横位隆帯上に刻み。499は渦巻文、縦位短沈線文。縄文が施文される。

c種 502～504は隆帯上に縄文が施文される。

502は口縁部片。凹線が巡り、縄文施文された隆線が見られるが摩滅が著しい。503はRLの縄文が施文された隆帯と縦位沈線。504は幅広の隆帯上に縄文が施文され、沈線文が付される。

d種 505～515・530は隆起線、半隆起線で曲線文様を描く。いわゆる焼町式に比定されよう。

505は口縁部の装飾把手部分である。大きく紡錘状に立ち上がった把手部は外縁沈線で刻み、内部は両面に楕円文が描かれ、所々に刺突文が見られる。基部の口縁部分は立体的な隆起線で形作られ、両側からずれて円窓が空けられ、中空となっている。Cs-42グリッドP3の上層でまとまって出土している。506は505と同一個体である。隆線による曲線文と刻み、刺突文が見られる。507～510は口縁部分片である。立体的な隆線文で描出された眼鏡状把手を持つものである。510は環状となる。511・513・515・530は渦巻文、横位、縦位の隆線文。512は横位の隆線に区画された中に大きめの渦巻文が隆線によって描かれている。514は口縁部片。隆線による曲線文を持つ。515は隆線による曲線文、沈線文が見られる。

e種 516～526・528は無文。

いずれも口縁部片である。516～523は内屈する。523は強く「く」の字に折れる。516・518・521のように口唇部が肥厚するものが見られる。528は外反し、横位の沈線が巡らされる。

f種 529は連続結節文による集合渦巻文。1点のみである。

g種 531は鉢型土器である。横8の字文が浮き彫り状にされている。

h種 527・532～536は縄文のみ施文。

527は「く」の字に内屈した口縁部片である。532は凹線を持つ突起文が見られる。RL縄文が施文されている。533～536は縦位の撚糸文が施文されている。いずれもLである。536は底部である。

第IV群土器（第406～413図 PL. 136～140）

中期後半から後期初頭の一群である。加曾利E～称名寺式に相当する。

第1類(537～555) 加曾利E I・II式に比定される。



第408図 遺構外出土遺物(15)



第409図 遺構外出土遺物(16)

第4章 出土遺物

a種 537～552は隆起線で口縁部文様帯を作る。

537～540は口縁部片である。口縁部無文帯部分は外反する。537は口縁部に隆帯を巡らし、その下に交互刺突文。隆線による楕円文が描かれる。538・539は沈線による渦巻文。540は文様帯部分を欠いている。541～552は口縁部片。口縁部に横位隆線文。渦巻、弧状文を配す。549・550は口縁部に横位縄文帯を持つ。

b種 553～555は突起部分、把手部分である。553は半円状の突起部分。554は張りだした突起の端部が楕円状に押さえられている。555は渦巻状を呈す突起部分である。短沈線が施文される。

第2類(556～736) 加曾利E III・IV式に比定される。

a種 556～601は微隆線で口縁部文様を描く。

558・561～566は隆線の区画文内を縦位沈線で充填する。559・560・568・569・573・576～579・581・582・585・588～597は区画文内に縄文が施文される。571・572は横位沈線が付された楕円文が付される。574・575は同一個体、蕨手状の沈線が垂下。587は微隆線文と2つの穴が見られる。600・601は沈線による曲線文。

b種 602～624は口縁部無文帯を隆線で画す。

605・606は横位隆帯から隆線が垂下し、縦区画の磨り消し縄文帯を作る。607は舌状の磨り消し縄文。614・615は隆線下の縄文が羽状を呈す。609～618は隆線以下に縄文が施文される。618は薄手で焼きが良い。縄文は無節。

c種 626～638は口縁部に連続の刺突文を持つもの。

626は弧状の無文帯に沿って円形刺突文が配される。627～630は2段の連続刺突文。628は間に沈線。631・632は沈線下位に下方向からの連続刺突文。633は連続の円形文。634・635はやや薄手で、焼きの良い土器である。636～638は刺突文の状況等から時期的に本種に含まれない可能性もある。636は上下に間隔をもって施文されている。637は交互刺突文。以下条線文。638は矢羽状に刺突文。

d種 625・639～650は口縁部無文帯を沈線で画す。

639・646は弧状の無文帯。縄文は羽状を呈す。641は口唇部が薄くなる。弧状の沈線。644・645は以下縄文が施文される。642は幅広の無文帯。643は幅狭で以下無文。647～650は無文帯以下縦位の沈線文が施文されている。

e種 651～678は沈線または隆線による胴部、縦区画の縄文帯をもつもの。

651～656・658～665は沈線による縦位磨り消し縄文帯。654は節が大きく粗い。651・655は同一個体。659は粗い繊維によって燃られたものと思われ節が整っていない。657・668～678は隆線による縦区画の磨り消し縄文帯。668・672は縄が細い。672は撫で消しのラインが複数観察される。674は垂下した隆線が途中でとぎれており本類に含まれないかもしれない。677は隆線が2本平行しており、f種に含まれるか。675は曲線の隆帯が見られる。

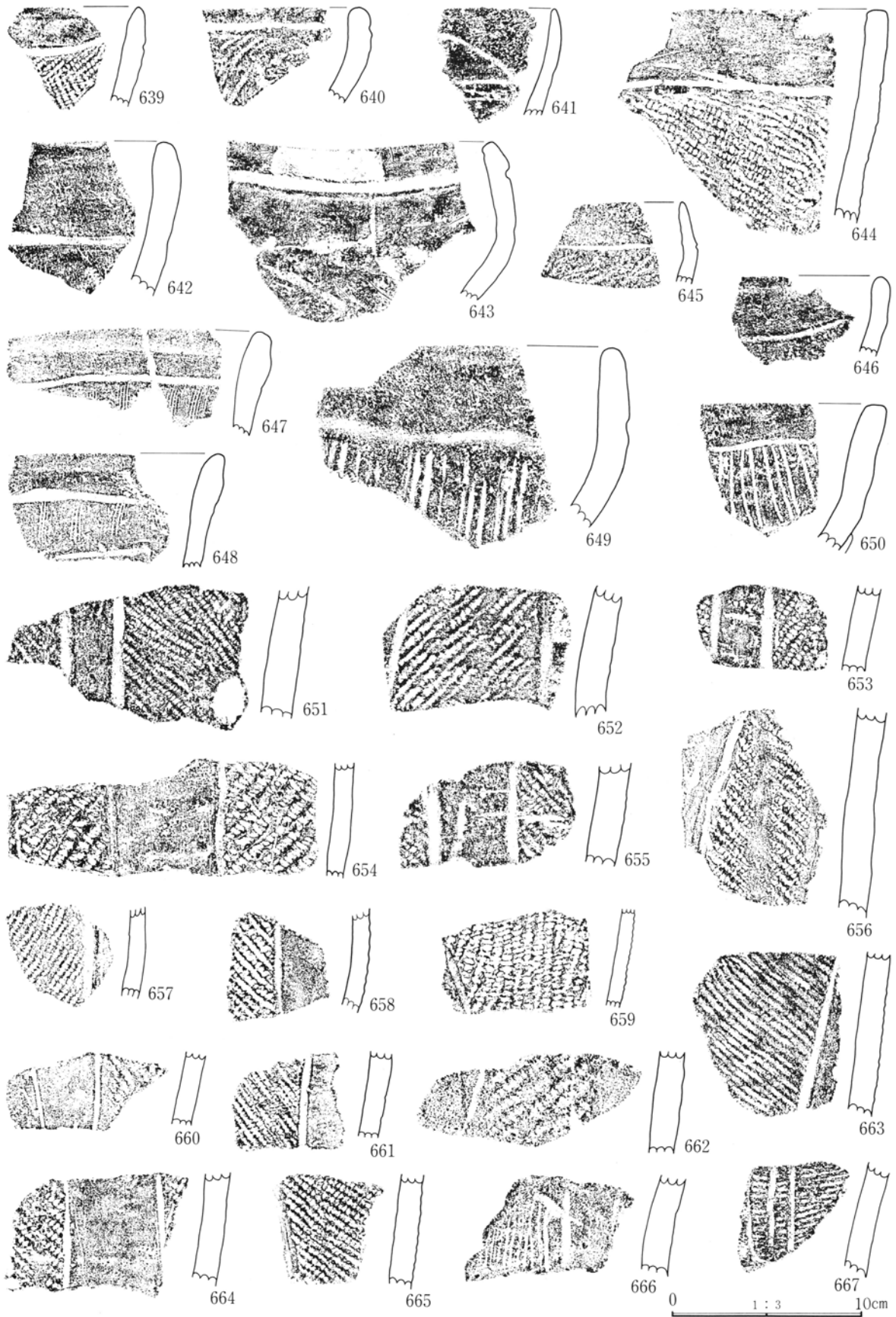
f種 679～683は隆線による曲線文。

679はやや丸みをもった隆線で連弧状を呈す。680・681・683は隆線で曲線文を描く。680・683は区画内縄文が充填される。682は直線的な隆線である。

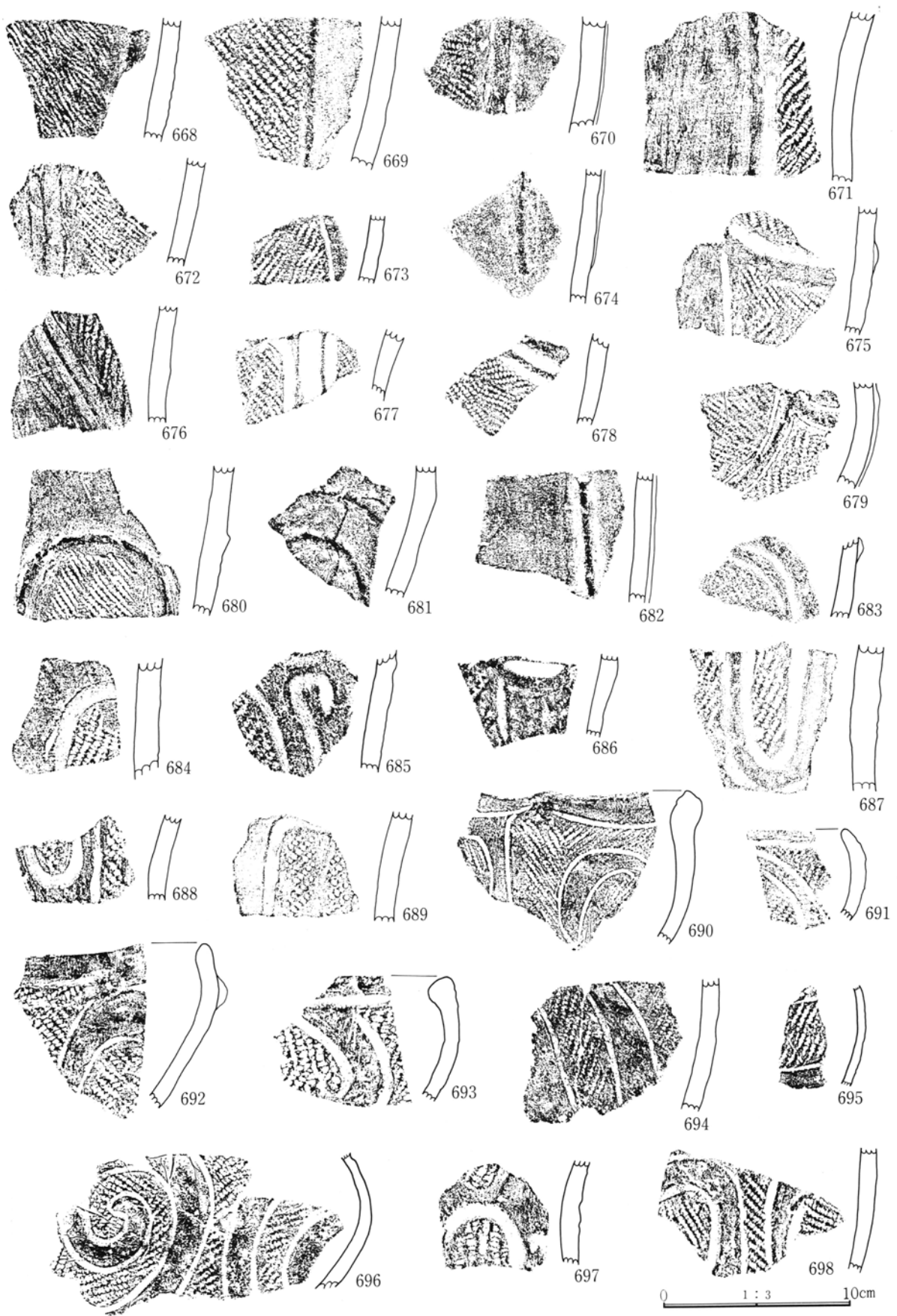
g種 666・667・684～689は胴部片。やや幅広の沈線でU状、∩状、蕨手状の曲線文を描く。地文は縄文であるが、666は縦位の条線が見られる。

h種 690～725口縁部の無文帯を沈線で画し、胴部は沈線による渦巻文、舌状文を描出する磨り消し縄文。加曾利E IVに比定される。

口縁部は緩い波状を呈すものが見られ、ほとんどが内湾する。比較的薄手で焼きも全体的にしっかりとし



第410図 遺構外出土遺物(17)



第411図 遺構外出土遺物(18)

ている。充填縄文は転がす方向を変えている様子が観察される。721～725は沈線文様が横位である。地文にも条線が見られる。

i 種 726・727は縄文のみのもの。

ともに RL が施文される。

j 種 728～734は縄文以外の文様をもつもの。

728は弱い縦の集合波状文。729～734は縦の集合条線。732・733は縦位、斜位の沈線文。

k 種 735・736は曾利式に比定される。

735は隆線による重弧文、内面にも縦位の隆線。736は底部片縦位隆帯とその間には矢羽状の沈線文。

第V群土器（第413～419図 PL. 140～145）

後期初頭から中葉の土器群、称名寺式から加曾利B式に相当する。

第1類(737～761・763～768・980) 称名寺式に比定される。

a 種 737～740・742は口縁部より垂下した渦巻文、J字状文内に縄文が充填される。

737・738は薄手の作りである。737は口縁部が内屈する。740は押圧を持つ縦位隆線を持つ。742は波状口縁部地文に縄文が施文されている。

b 種 741・743～747・749～751は沈線のみによる銚状、J字状文を描く。

741は口縁部に横位沈線。743は口縁部無文帯を隆線で画し、縦位沈線が垂下か。744～747・749は口縁部片、J字状文が描かれる。747は波頂部、環状把手部分。750・751は胴部片。

c 種 748・752～756は沈線文による文様の中に刺突文が見られる。

748は強く内屈する口縁部片。沈線文間に横位刺突文。752は縦位沈線文様の中に列点文。753は口縁部片。横位沈線間に刺突文。754～756は沈線文中に列点文が付される。

d 種 757～761・763は把手部分。

757は環状把手。758は波頂部に突き出た幅広の環状把手。無節縄文が観察される。759は扇状を呈す。縄文が施文されている。760は波頂部が扁平に膨らむ。口唇部内面に刻み目。761は大形の環状把手か。763は幅広の環状把手片。円形の押圧文が見られる。

e 種 764～768は底部片である。

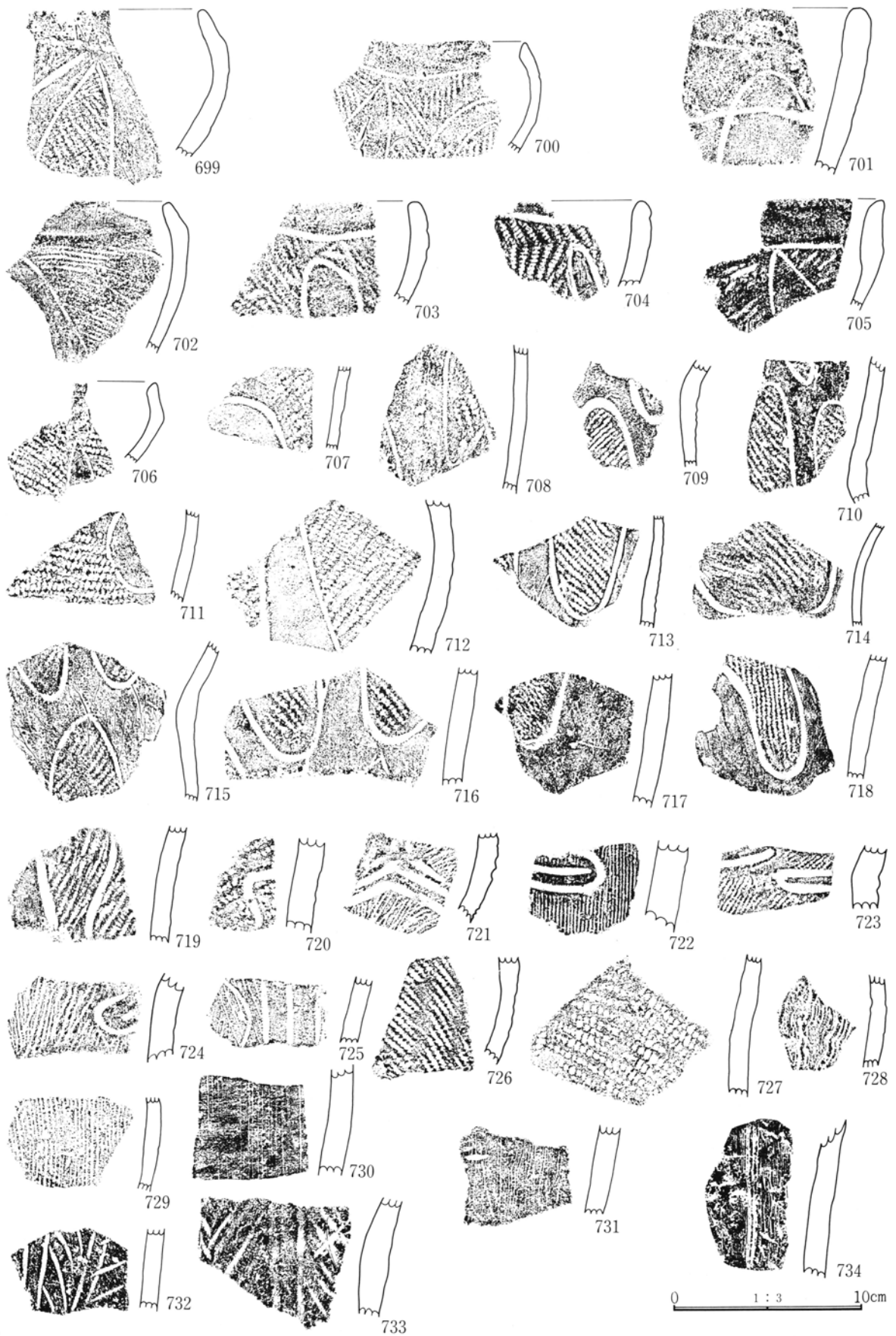
764は鉢型土器か。底径6.0cm。沈線による楕円文、底面に環状文の磨り消し縄文文様。765は底径9.0cm。端部が張りだす無文土器。766は底径9.0cm。無文である。767は器肉の厚い土器である。高台状を呈し無文。底径9.0cm。768は器台型土器である。底径10.2cm。上部が剥落しており、剥離面に網代痕が見られる。側面に5カ所の円孔を持つ。

第2類(762・769～825・828～838) 堀之内1式

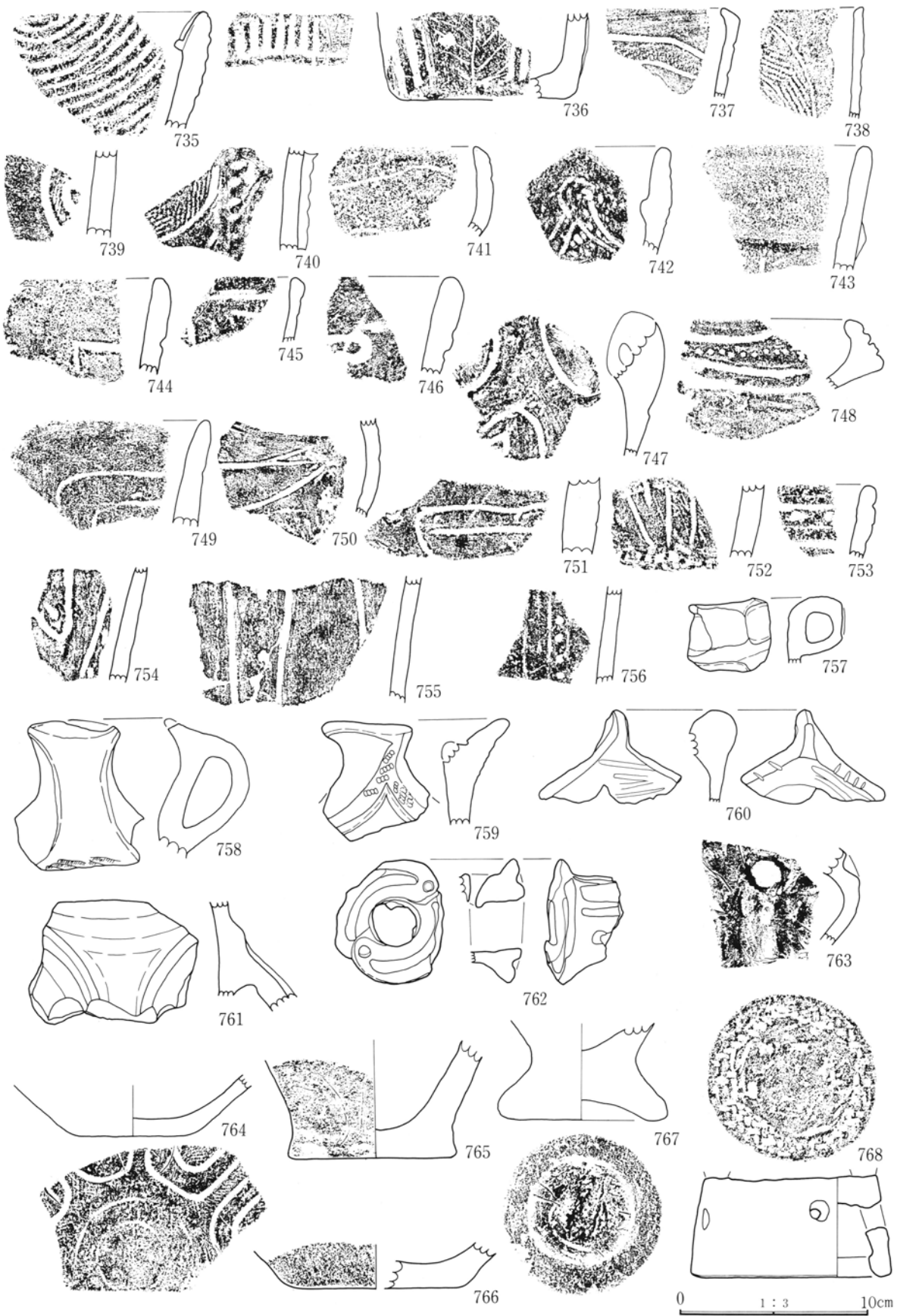
a 種 769～779・781～783・800は口縁部に隆線文、8字文、刺突文、円孔を持つもの。

769は凹線を持つ隆帯の端に円形文。770は口唇部肥厚し、上端に沈線、円形文。771～775は隆線による8字文を付す。776は刺突文を持つ垂下隆帯。777は口縁部が段を持って薄くなり、円孔、縦位凹線が見られる。778は肥厚した隆帯に円形文。779は口縁部に沈線、刻みを有す隆帯。781は隆帯に刺突文、縦位沈線文。782は口縁部横位沈線を付すが、下位の沈線はとぎれる。783は沈線文、円孔文。800は肥厚した口縁部に大きめの円形文が横に配され、焼成後と思われる円孔が見られる。

b 種 784～780・793は口縁部に沈線を持つもの。



第412図 遺構外出土遺物(19)



第413図 遺構外出土遺物(20)

第4章 出土遺物

784は2本の横位沈線、沈線文が垂下。785～789は口唇部がやや内屈する。780は円形刺突文。793は横位沈線、円形刺突文を持つ。口縁部には縄文が横位施文されている。

c種 762・790～792は口縁部把手部分。

762は環状の突起部分。円形文を持つ組合わせ沈線文。側面に円孔を持つ。790は円形の突起文。791は隆帯が肥厚し円孔を持つ。792は細長い突起部分。両端に円形文を持つ沈線によるS字状組文。

d種 794・795は基本的に施文を持たないものである。本類に含めたが時期の確定は難しい。

794は口縁部内面に凹線。縦の沈線が1条観察できる。795は注口土器である。

e種 796～799・801～808は口縁部に隆帯による無文帯を画すもの。

796は隆帯が口縁部と平行しない、波状口縁か。隆帯上に施文は見られない。797～798は同一個体片か、大形で口縁部はほぼ直立する。隆帯の断面三角形で連続の押圧痕。801も同様。802は隆帯上の押圧は浅い。803～805・808は押圧を持つ隆帯。806・807は条線文が見られる。

f種 809～819・821～824は沈線、隆線で各種文様を描く。

809～813は並行沈線による渦巻文。814は粗く斜行沈線が施文される。第3類に帰属するものか。815は横位沈線、蕨手状文を描く。一对の円形文が見られる。816は横位隆線、並行沈線文、地文に縄文が施文されている。817は刻みを持つ隆線による文様と沈線文。818は薄手の土器である。沈線、隆線で施文。821は円形の貼りつけ文、沈線による平行沈線が見られる。地文に縄文が施文される。822は隆線、沈線で施文する。823は隆線の連結部に円形文。かなり摩滅している。824は地文縄文で沈線文。

g種 820・825・828は隆線による8字文を持つもの。

縦8字文が隆線によって描出される。

h種 829～831は口縁部に隆線で曲線文様が描かれている。

829は「く」の字に折れた屈曲部に刻み、上端に隆線による円形の貼付文。鉢型土器か。830は内屈する口縁部、隆線によるY状文が見られる。831は口縁部片。内屈した口縁部に隆線による円形文、沈線文、円形刺突文が配される。

i種 832～834は口縁部の把手部分。

832は渦巻状把手部分、凹線、円形文で加飾されている。833は凹線を持つ環状把手。隆線、円形文で加飾される。834は隆帯文を縦位、横位貼り付けている。

j種 835～838は注口部分。

835は丸みを持つ体部から、先がやや細くなる無文の注口が付く。下位に沈線による渦巻文が描かれている。836は比較的短い注口が付く。下位に浅い円形文。沈線文が放射状に施文される。837は基部と先端部近くに2重の沈線を巡らし、これに沿って細かい刻みが付される。上部に小貼付文が付される。表面平滑で赤色の塗彩痕が見られる。838は無文の注口片。器面荒れている。

第3類(826・827・839～858) 堀之内2式に比定される。

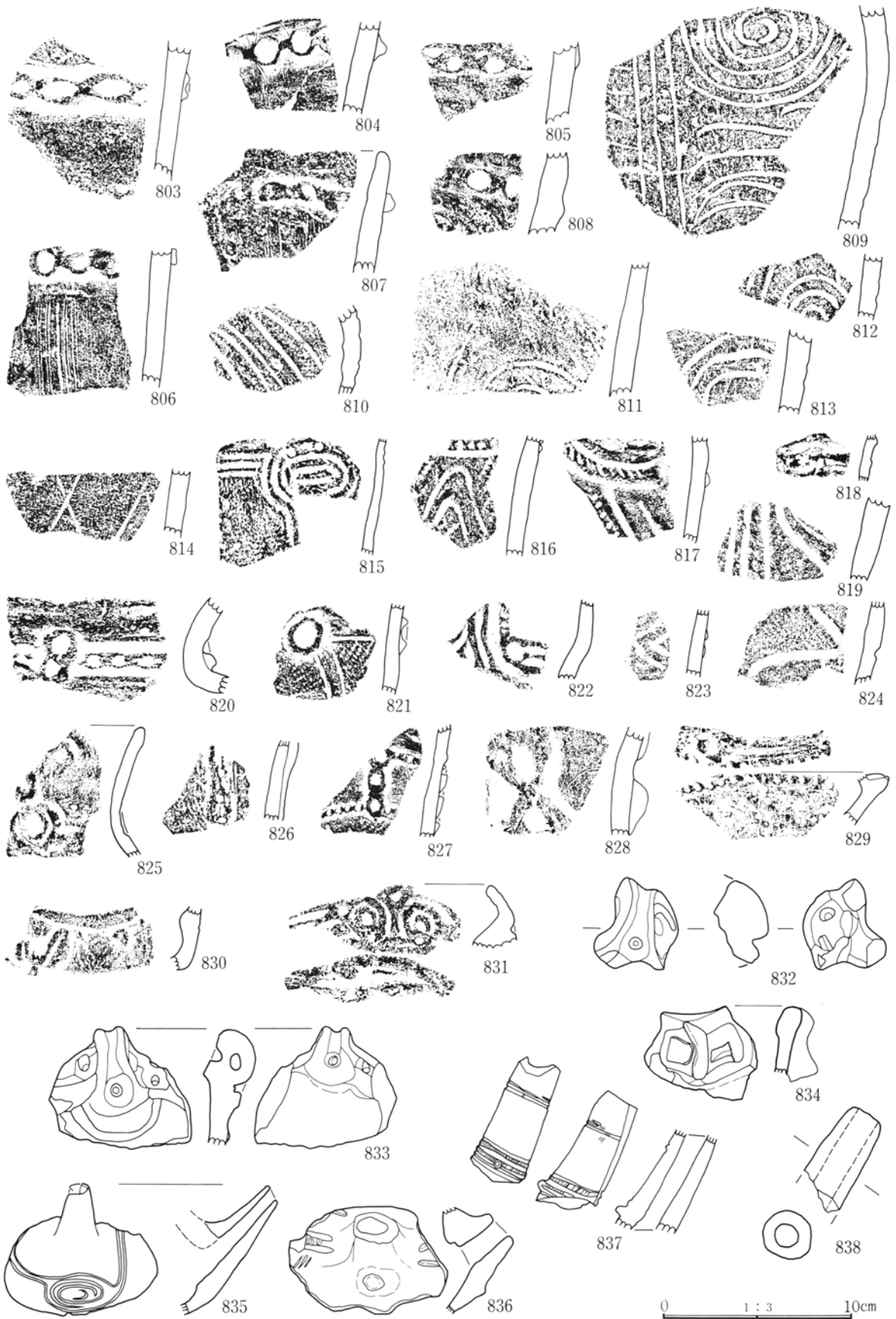
a種 826・827・839～842は口縁部下に連続押圧を持つ隆帯が巡る。

826は押圧を持つ縦位隆帯。827は横位隆帯を連結する。839は押圧文が大きい。840は口縁部に凹圧刻みを付した隆線を巡らし、横位沈線で画し縄文帯を持つ。841は無文部に横位隆線文。842は口縁部横位沈線、円形押圧文を持つ隆線、沈線で画し横位の縄文帯。いずれも器肉が薄く焼成は良い、口縁部内屈し横線が見られる。

b種 843～850は沈線で三角や渦巻を基調とした文様を描き、充填縄文を施すもの。



第414図 遺構外出土遺物(21)



第415図 遺構外出土遺物(22)

843～850は並行沈線で描かれた幾何学文が細い縄文で充填されている。843・844は口縁部片で口唇部はやや内屈する。

c種 並行沈線で幾何学文を描くが、縄文施文の見られないもの。

851・852は斜めの並行沈線。縄文は見られない。

d種 853～858は無文の口縁部片。

853・854は口唇内面に沈線、口縁部に刻みを施す鉢型土器である。同一個体片であろう。855・856は無文で口唇内面に沈線を巡らす。856はかなり風化の進んだ土器である。857は口唇部は棒状工具により小波状を呈し、口唇内面に沈線を巡らす。858は口唇部に細かい刻みを持ち、内面に4段の沈線を巡らす。

第4類(859・860～959・963・980) 加曾利B式に比定されるもの。

a種 860・861～878・885・887・963は口縁部に横位区画の縄文帯をもつもの。

860は深鉢型土器。口径28.0cm、器高36.0cm、底径8.5cm。底部から胴部はやや膨らみながら立ち上がり、上半部でやや締め、口縁部は外反、口唇部は内屈する。口縁部以下、無文帯、縄文帯を交互に3帯を構成。胴部は無文。861・862口縁部に沈線で縄文帯を画す。862は口唇端部が角頭状となる。863は口唇端部がつまみ出されたように尖り、縄文が転がされている。865は「く」の字に折れる。866は口縁部に瘤状文を持つ。867・868は沈線で画された細い縄文帯。869は沈線で画された幅広の無文帯。870は浅鉢と思われる。口縁部内湾し、無文。沈線で画された縄文帯を持つ。871・873は内屈した口縁部分で、横位縄文帯、873は沈線で画された三角文。963は算盤玉状に屈曲する深鉢型土器である。上向きの連弧状文に縦の沈線が付され、縄文が充填されている。872は口縁部分に半円状の隆起文。874は口縁部に横位沈線。以下細縄文が施文され、瘤状文が付される。黒色で内外面研磨されている。875～878は胴部片で沈線による横位縄文帯。885は「く」の字に内屈する口縁部片。屈曲部に刻み(縄の押捺か)を持つ隆帯以下、縄文(無節)が施文される。887は「く」の字に内屈する口縁部片内面に2条の凹線が巡らされる。沈線で画された横位縄文帯は施文が不鮮明。縦位弧状文が施文されている。

b種 879・880は波状口縁部片、ともに口唇内面が肥厚し、沈線が巡る。

878は口縁部に沿って沈線、縦位の弧状沈線文。880は口縁に沿って並行沈線、中央に波状沈線が垂下する。

c種 881・886は横位沈線帯部分に沈線による刻みが施されるもの。

d種 859・882～884・888～895・897～911・935は横位綾杉状の沈線文を特徴とするもの。

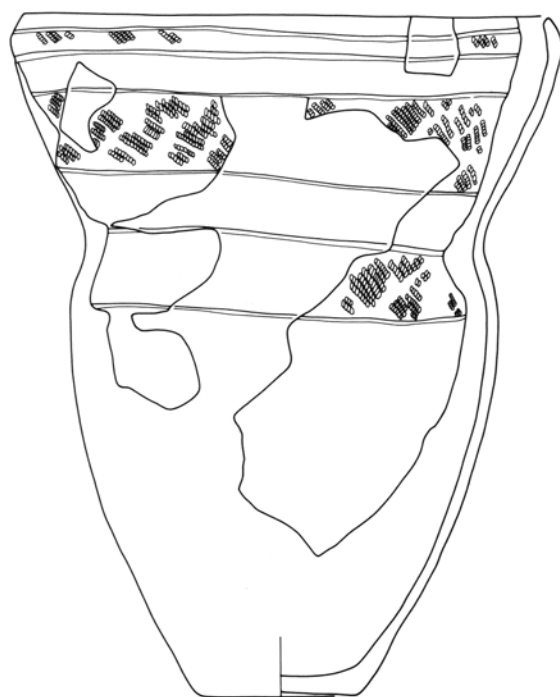
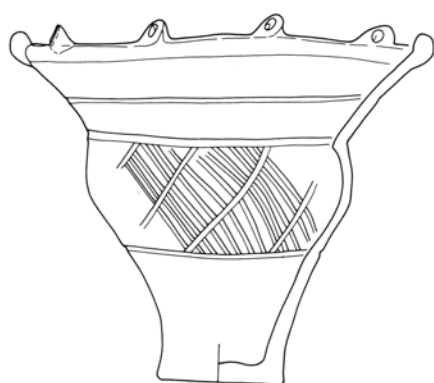
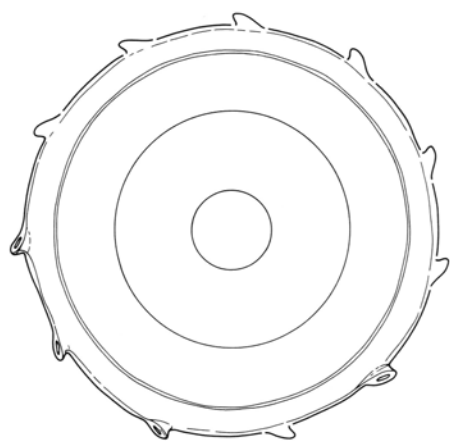
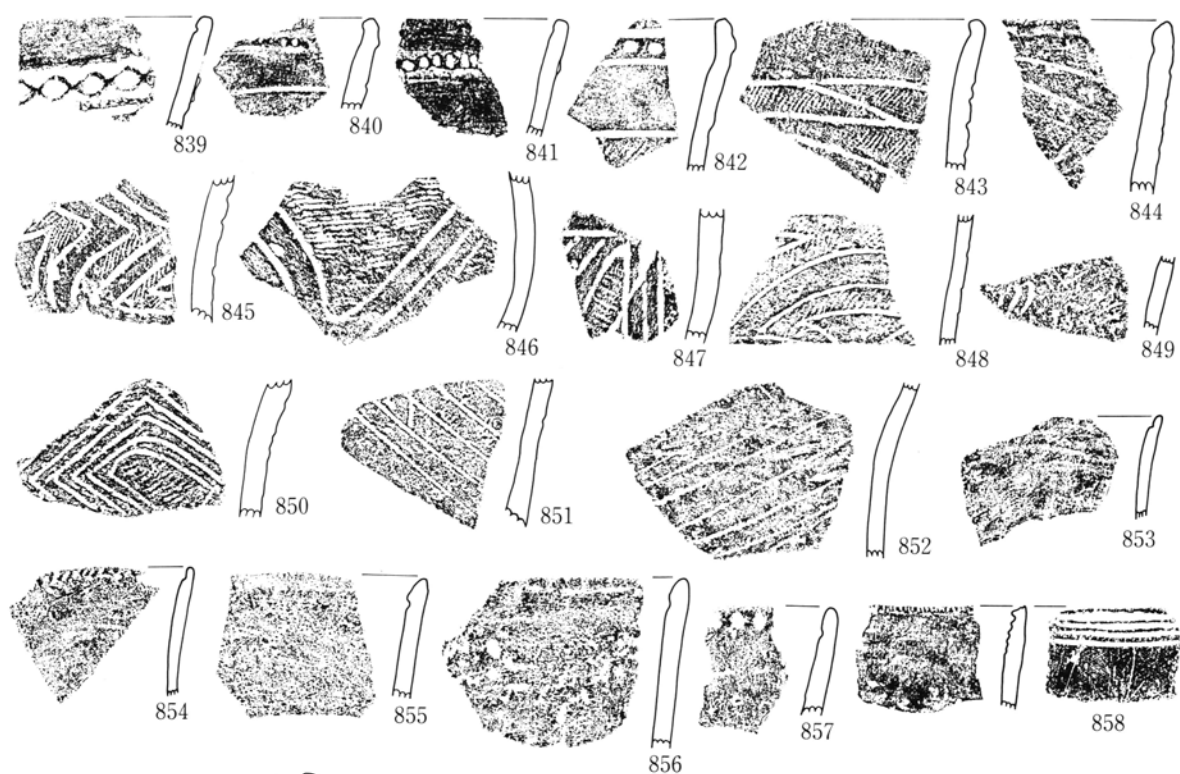
859は口径22.4cm、器高19.4cm、底径6.8cm。C361号住居跡(弥生時代)の覆土中より出土し、器形復元されたものである。底部から外反しながら立ち上がり、胴部は丸味をもって内湾、頸部「く」の字に折れて口縁部はほぼ直に外反する。口縁部には(11個)の円孔を持つ突起が付される。施文は口縁部中位、頸部および胴中位に沈線が巡り、胴部に右下がりの斜沈線を施文後、左方向の斜沈線を粗く施文する。胴下半部は丁寧な磨きが施される。内面は口唇部下位に沈線が巡る。また底部には網代痕が見られる。

882・883は口縁部に横位縄文帯を持つもの。884・897は口縁部無文帯を横位刺突文で画し、以下沈線文様を配す。888・893は口唇部直下より斜沈線が付される。889～891・893・894は比較的粗い綾杉状文が見られる。892・895・935・902は線が細く、密に施文されている。898～901は横位の沈線が見られる。935は横位の沈線文帯に細かい刺突文が充填され、以下不規則な綾杉状の沈線が施されている。

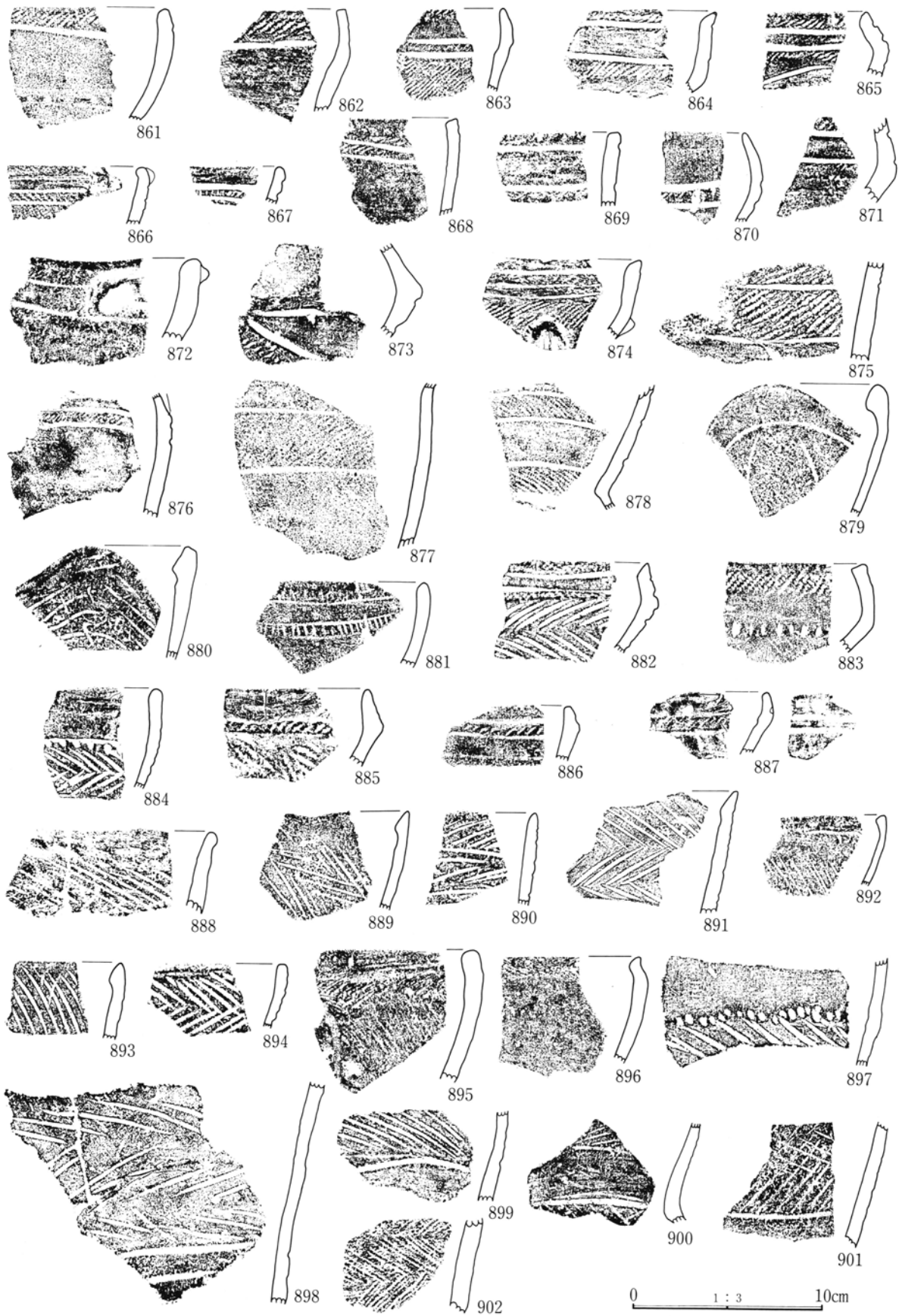
e種 912～914は縦位の綾杉状文を持つもの。

914は横位沈線を持つ。

f種 横位沈線が多段施文されるもの。



第416図 遺構外出土遺物(23)



第417図 遺構外出土遺物(24)

第4章 出土遺物

915は上下2段の括れをもつ。円形文が見られる。

g種 916～934は口縁部に押圧持つ隆帯が巡らされたもの。

916～927は隆帯以下無文。919は斜め方向の押圧。928～932は斜格子、斜位の沈線文が見られるもの。933・934は隆帯が2条巡るもの。933は隆帯下に横位沈線が見られる。

h種 896・936～943は無文土器をまとめた。該期のものとして分類したが、明確な基準は無く、他群のものも含まれている可能性もある。

896は口唇部にわずかに細縄文が見られる。936は口唇部丸みを持つ。937は内削ぎ状を呈す。938はやや厚手で口唇部丸みを持つ。939は薄手で砂粒が目立つ。941は口唇部丸みをもって肥厚する。942はかなり風化の進んだ土器である。943は口唇部内側に肥厚する。

i種 944～959は把手部分である。

944は波状突起部分、先端部分を欠く。口縁部に沿って走る隆線は口唇部は内側に丸み込まれる。沈線文が配され、外面小突起は環状となる。945～954は加曾利B1式に特徴的な把手部分である。945～947は頭頂部は眼鏡状を呈す。外面に弧状の短沈線文。内面に円形文。948は刻み、頭頂部は円形状となる。楕円、円文を持つ。949は頭頂部が漏斗状に広がり円形文を持ち、内面、外面にも円形文が見られる。950もほぼ同様の施文が見られる。951～953は円形文、短沈線が付される。953は沈線による渦巻文が見られる。954・956は頭頂部分に貫通する円孔を持つ。955は内屈する口縁部片。隆線による横8字文が付され、下位に斜沈線が見られる。956は円孔を持ち、上部が突起する。円孔下位に縦の凹線。957は人面を意匠した把手部分。楕円形把手部分に眼鏡状の隆線、円形文を付す。下位にも隆帯による円形文を配し、眼鏡文および隆帯文外に刺突文を充填する。958は耳状を呈す、吊り手土器の装飾把手か。一部が瘤状に膨らみ刺突を持つ。わずかに赤色塗彩痕が見られる。959は橋状把手に円形の突起文。突起文の側面に両側から1対の円孔。吊り手土器の吊り手部分と思われる。

j種 980は底部片。上下からの集合沈線文が組み合わされる。器面平滑な土器である。

第VI群土器 (第419・420図 PL. 145)

第1類(960～962・964～979) 曾谷(高井東式)に比定される。

a種 960・961・969・970は波状口縁部片。

960は口縁部に沿って隆線、凹線が見られ、両側に短い貼りつけ隆線文。961は肥厚して耳状を呈す波状突起部分。刻みを有す沈線文が見られる。969は口縁部に凹線を持ち、器面には斜行沈線が描かれる。970は沈線で画された縄文帯を持つ。胴部には綾杉状沈線文。

b種 962は斜位、連弧状の沈線文で文様を描き、連結部、屈折部に小瘤が見られる。964は壺形土器か、横位沈線が多段に施され小瘤が付される。新地式か。

c種 965～971は「く」の字に内屈する口縁部に沿って1ないし2本の沈線を持ち、以下無文。

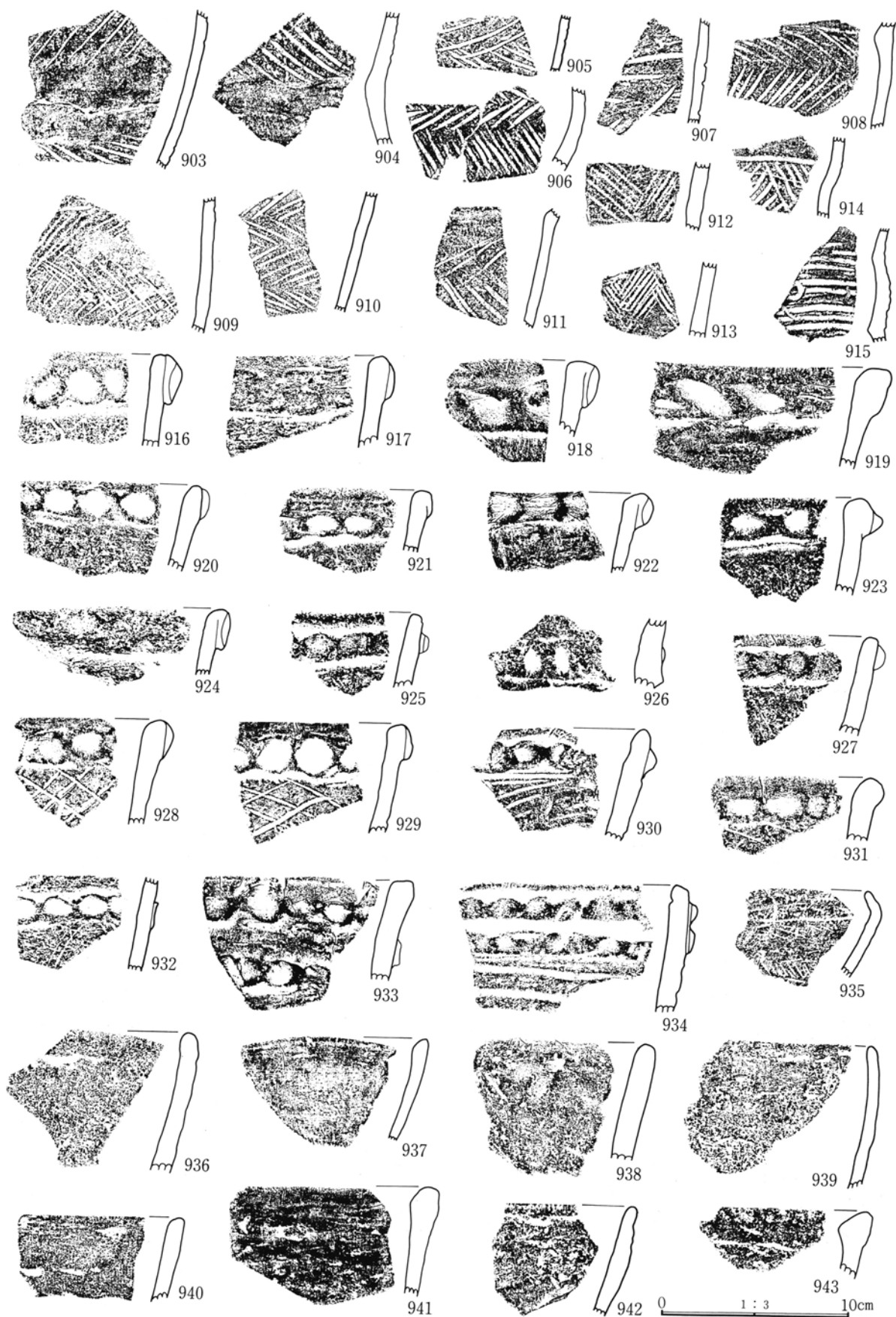
d種 972・973は綾杉状の沈線文をもつもの。

972は「く」の字に内屈する口縁部に沈線で画された縄文帯を持つ。綾杉文はややくずれた施文。973は口縁部に瘤状文を持つ。

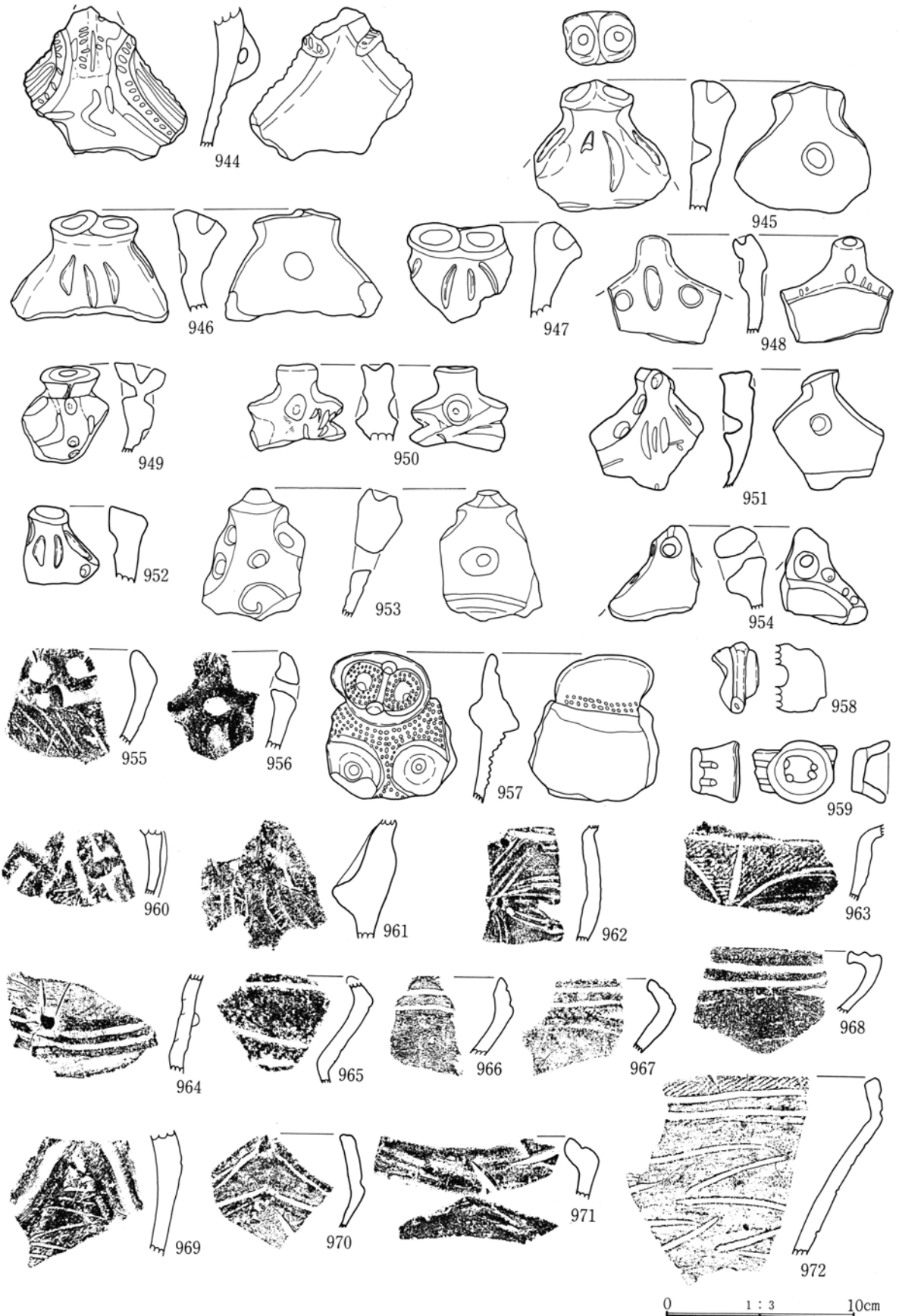
e種 974・975は入り組み帯縄文をもつもの。

974は沈線で横位区画施文。975は口縁部片。細縄文施文。太い横位沈線。

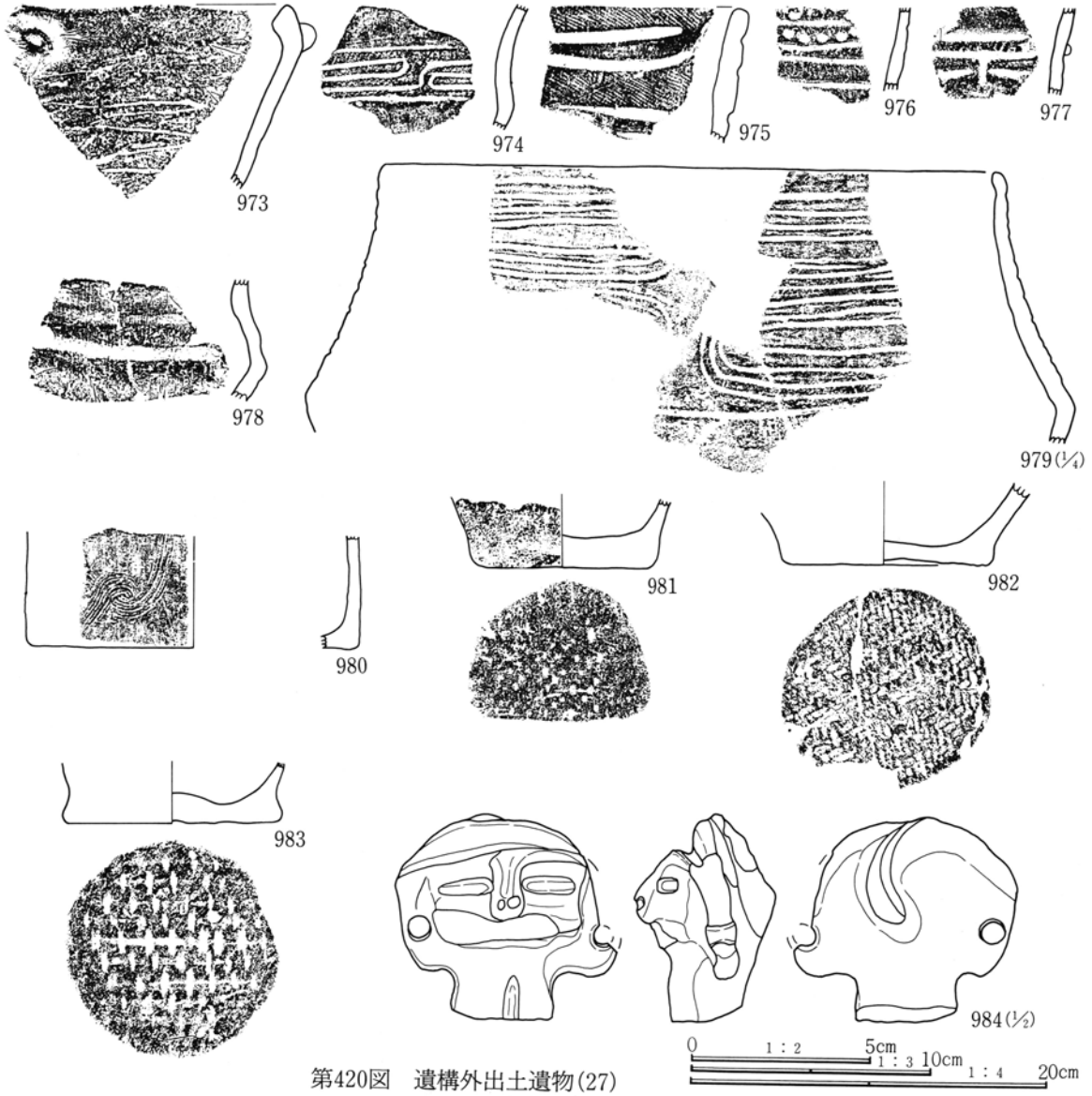
f種 976～979 横位沈線文様をもつもの。



第418図 遺構外出土遺物(25)



第419図 遺構外出土遺物(26)



第420図 遺構外出土遺物(27)

977は刻みを持つ隆帯、下位には縦位、横位の沈線文。978は円形のくぼみを持つ凹線。時期は不明である。
 979は口径約(35cm)。「く」の字に折れた胴部からやや外反気味に立ち上がる。施文は何単位かの重棹円文が沈線により描かれている。時期的に下る可能性がある。

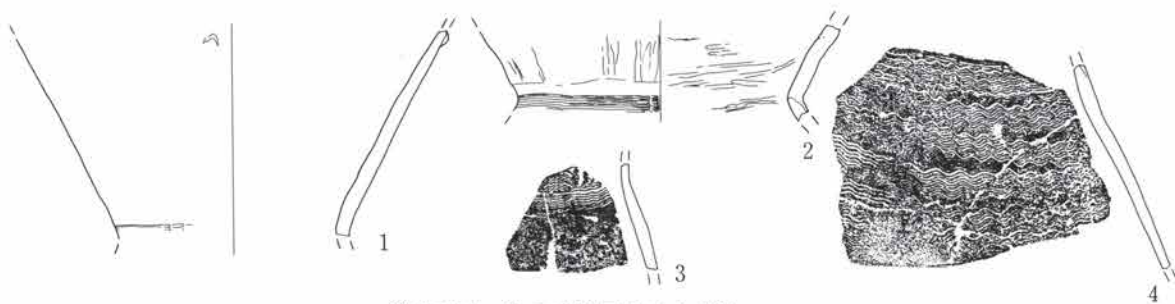
8種 底部片をまとめた。

981~983は底部片。981は厚手で器面荒れている。982は薄手で焼成の良い土器である。983は内面中央部はやや盛り上がり、端部が外に張る。底面には網代痕。

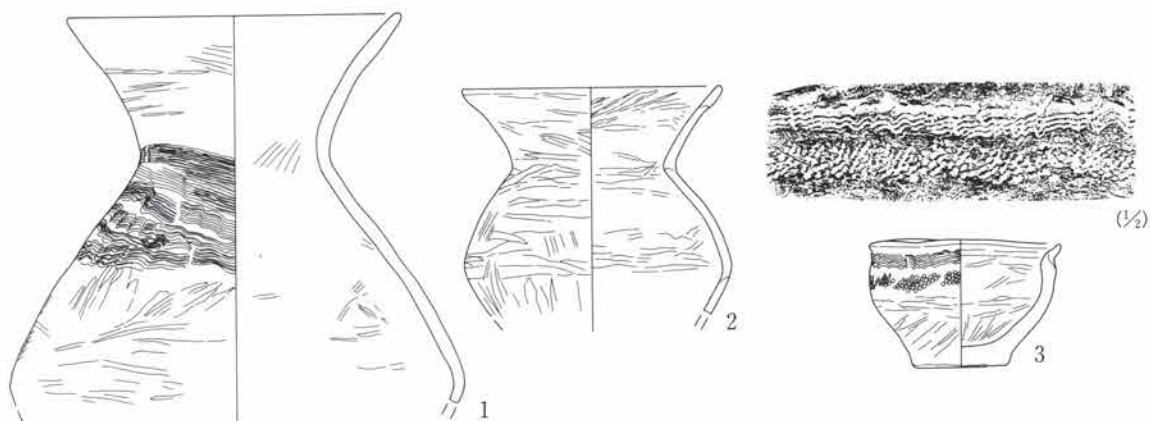
第VII群 (第420図 PL. 145) その他の土製品。1点のみの出土である。

984は土偶である。後期の所産と思われるが、C148号住居跡(弥生時代)から出土。頭部片である。縦5.7cm、横6.2cm、厚さ4.0cm。顔はやや横長で、口および左顎部分を欠損している。鼻は高く盛り上がり、両眉部分へとつながり、鼻孔も表現されている。目は棒状の工具で横長に表現されている。耳は左側が一部欠損しているが、耳朶が大きく表現され、穴があげられている。頭部上端は隆帯状に薄くなり、後頭部に渦巻き状の隆線が続く。首には縦方向の沈線が見られる。また、前面頭部にわずかに赤彩痕が見られる。

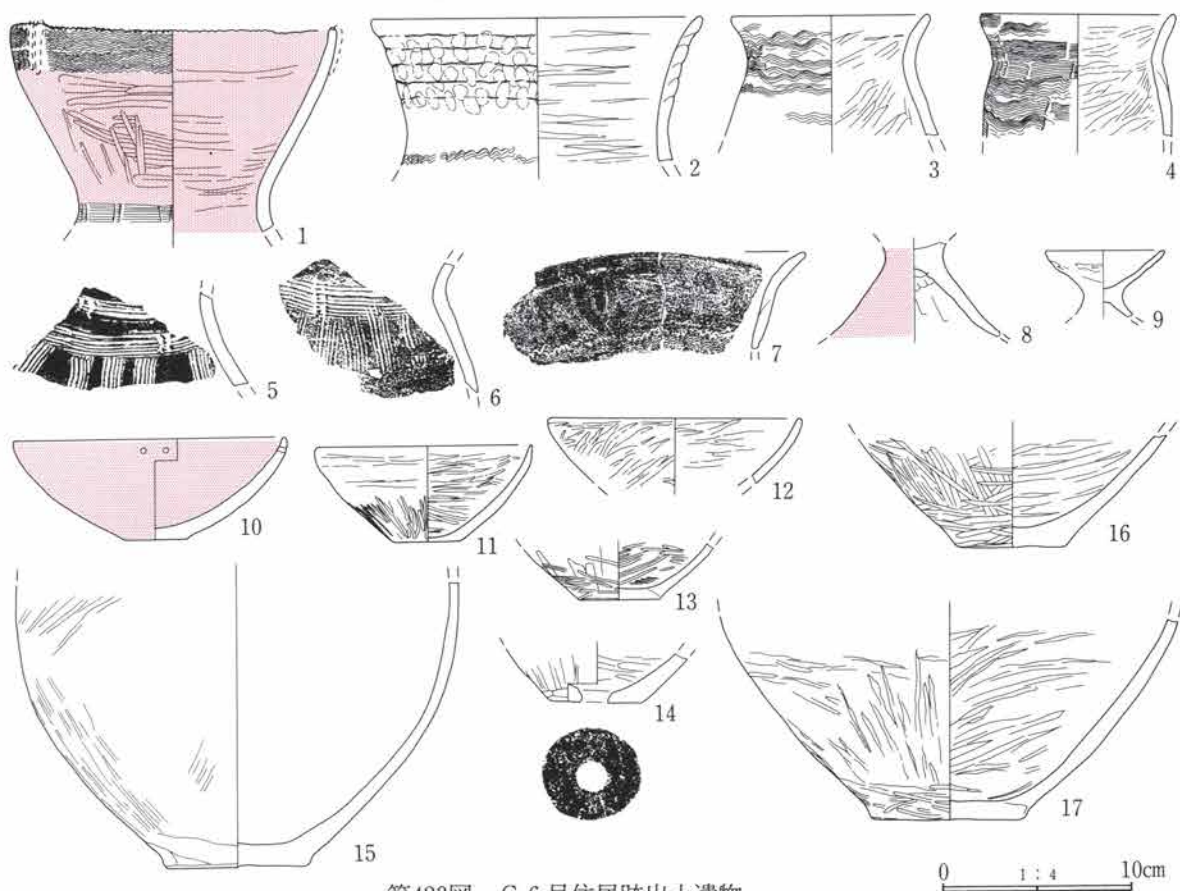
第2節 弥生土器



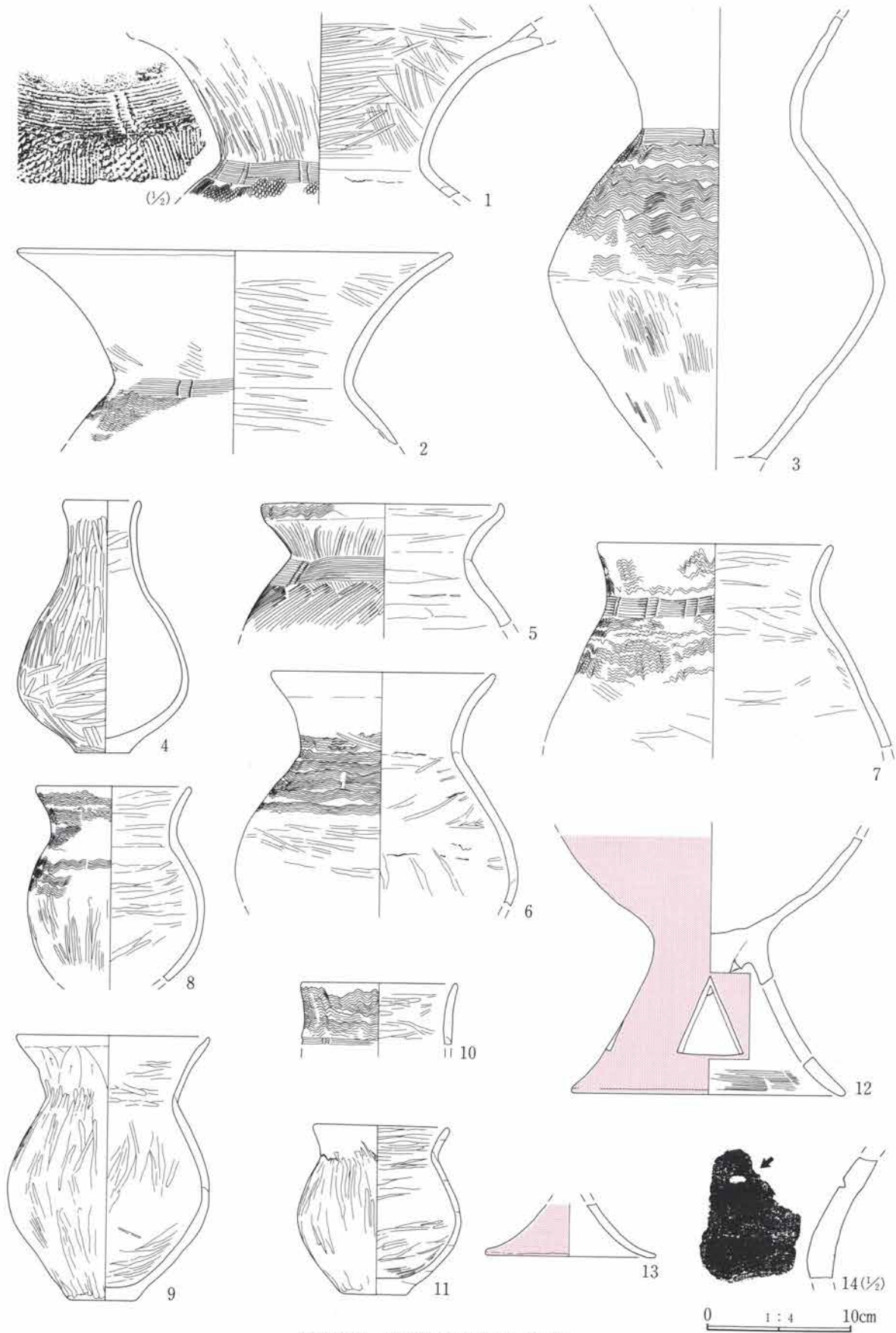
第421図 C 2号住居跡出土遺物



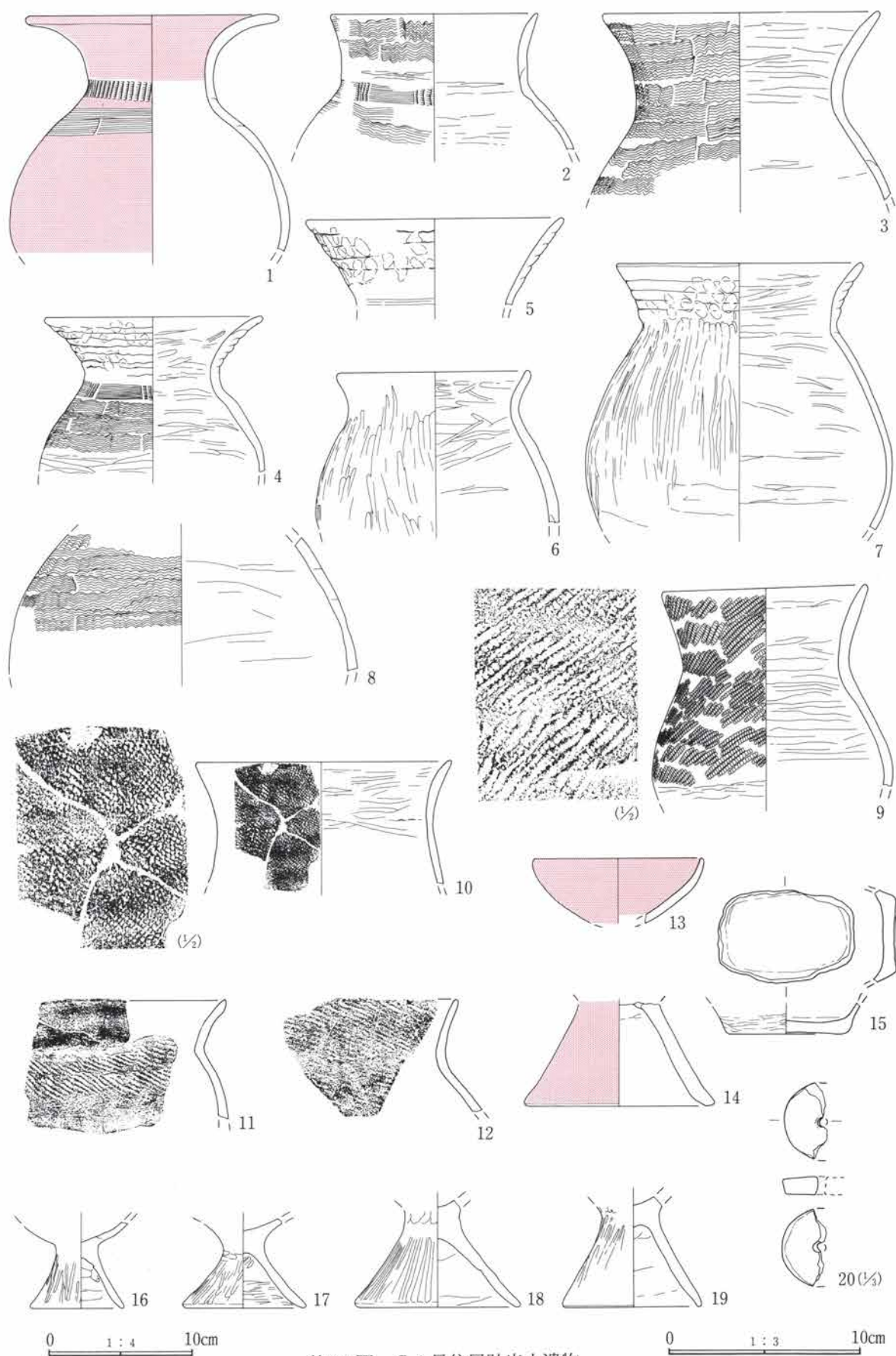
第422図 C 3号住居跡出土遺物



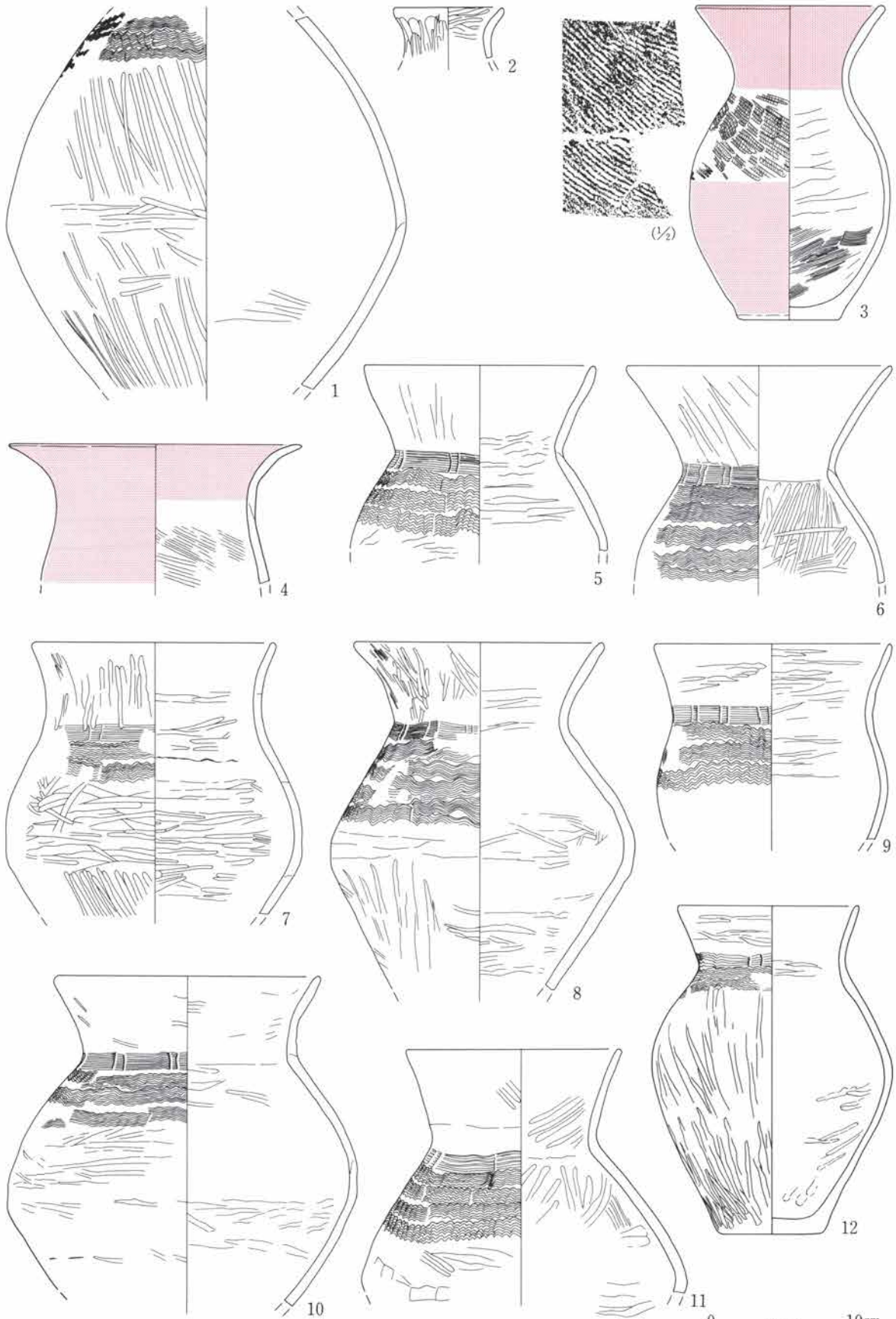
第423図 C 6号住居跡出土遺物



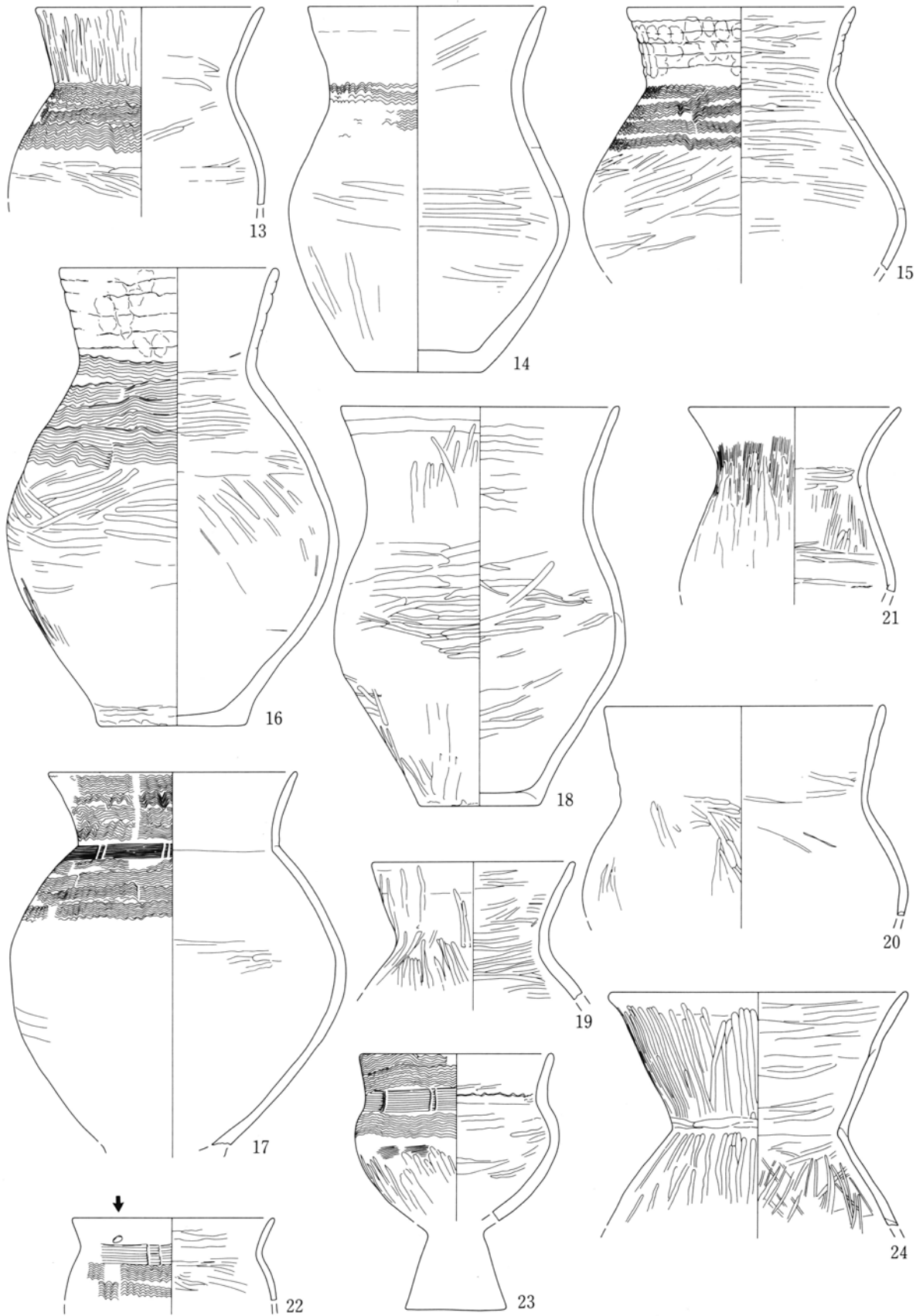
第424図 C 8号住居跡出土遺物



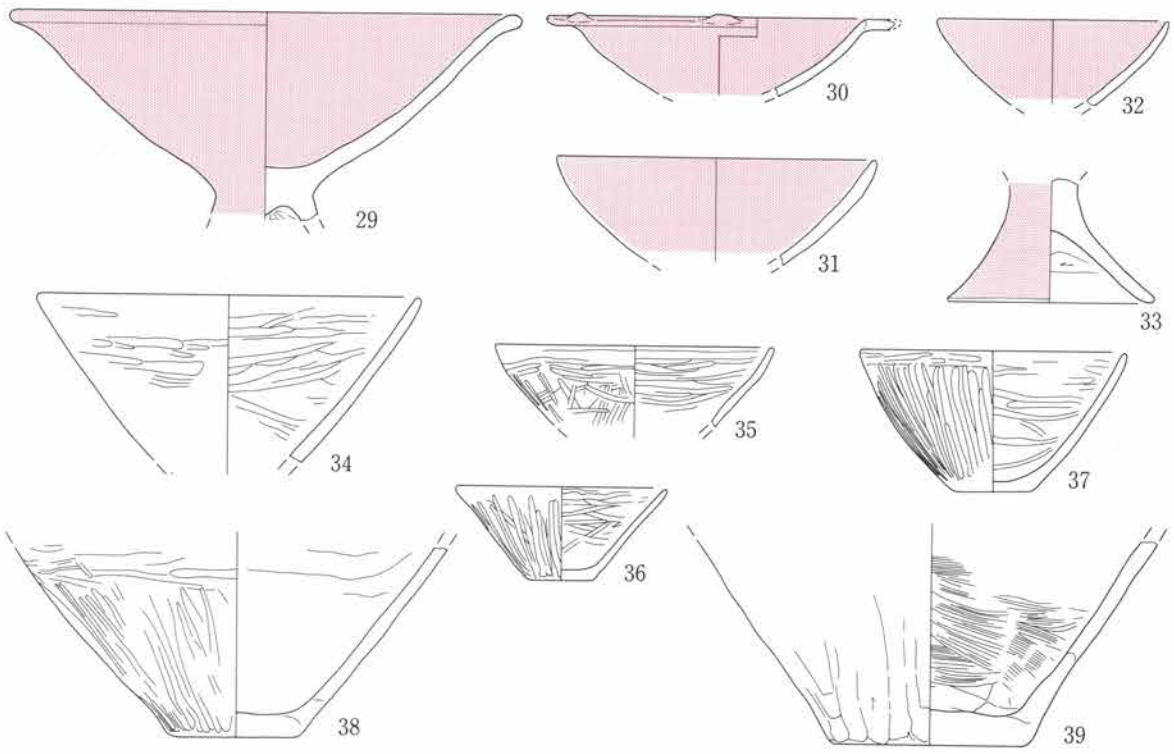
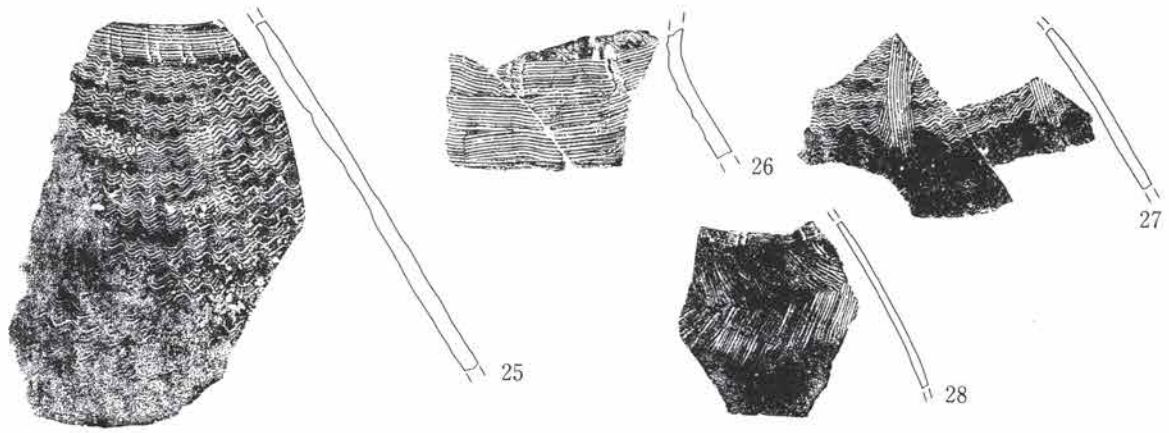
第425図 C 9号住居跡出土遺物



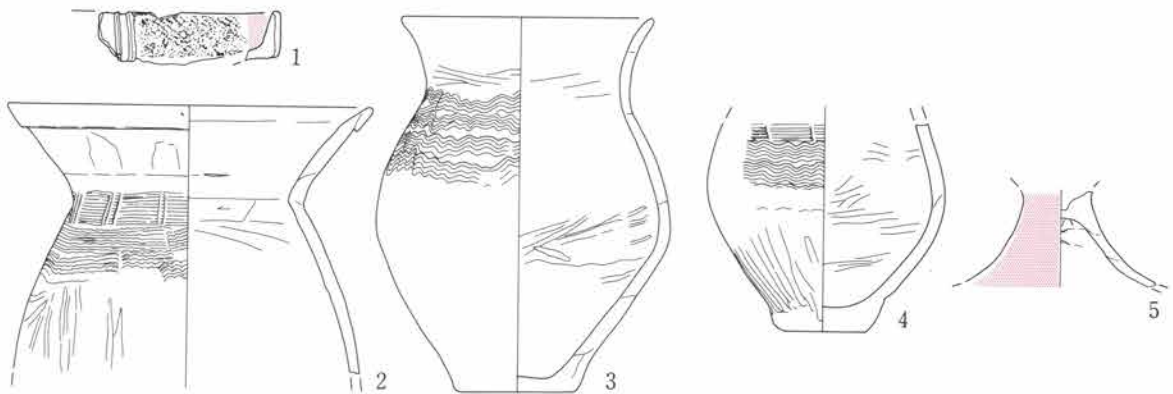
第426図 C10号住居跡出土遺物(1)



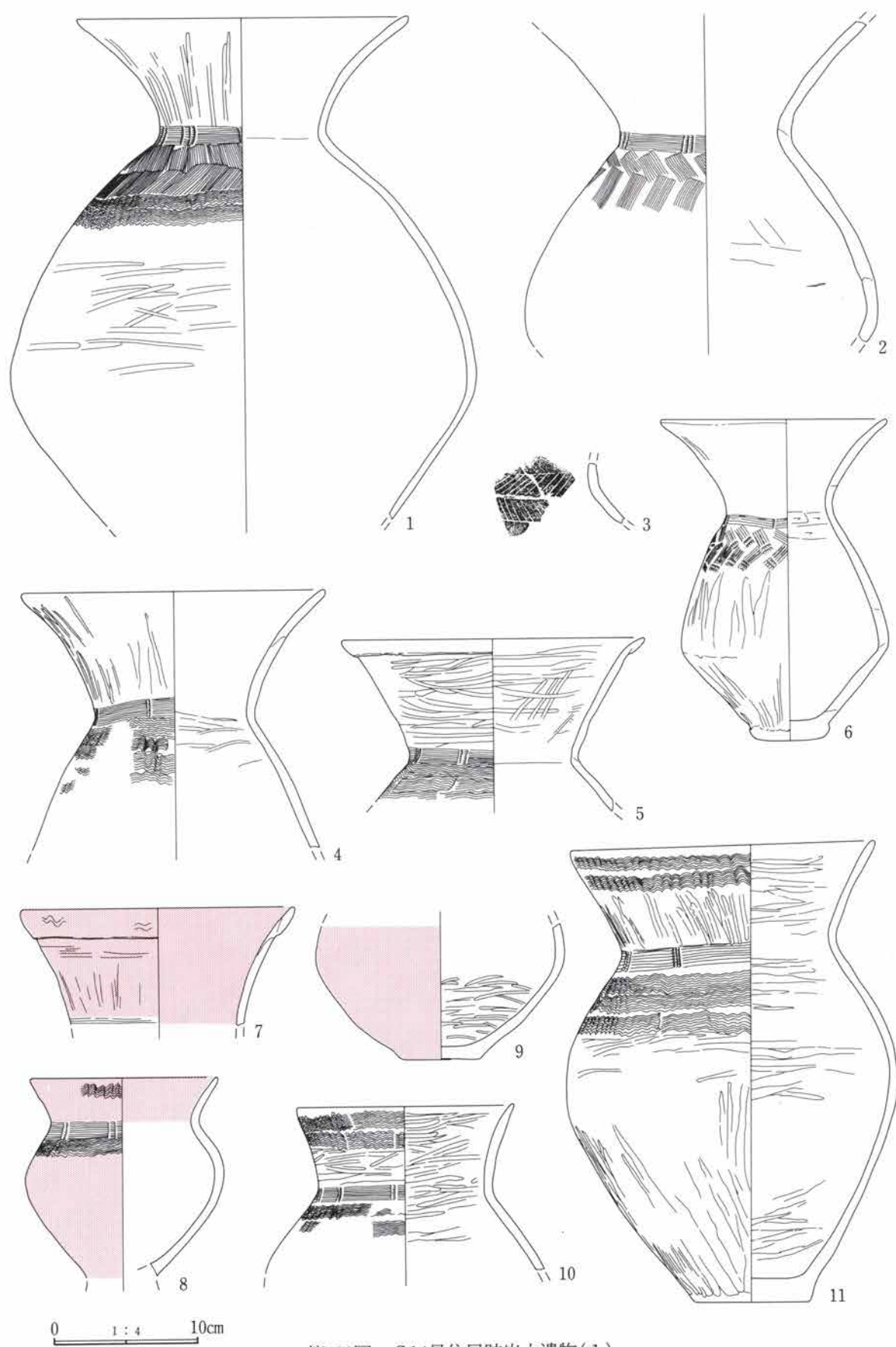
第427図 C10号住居跡出土遺物(2)



第428図 C10号住居跡出土遺物(3)

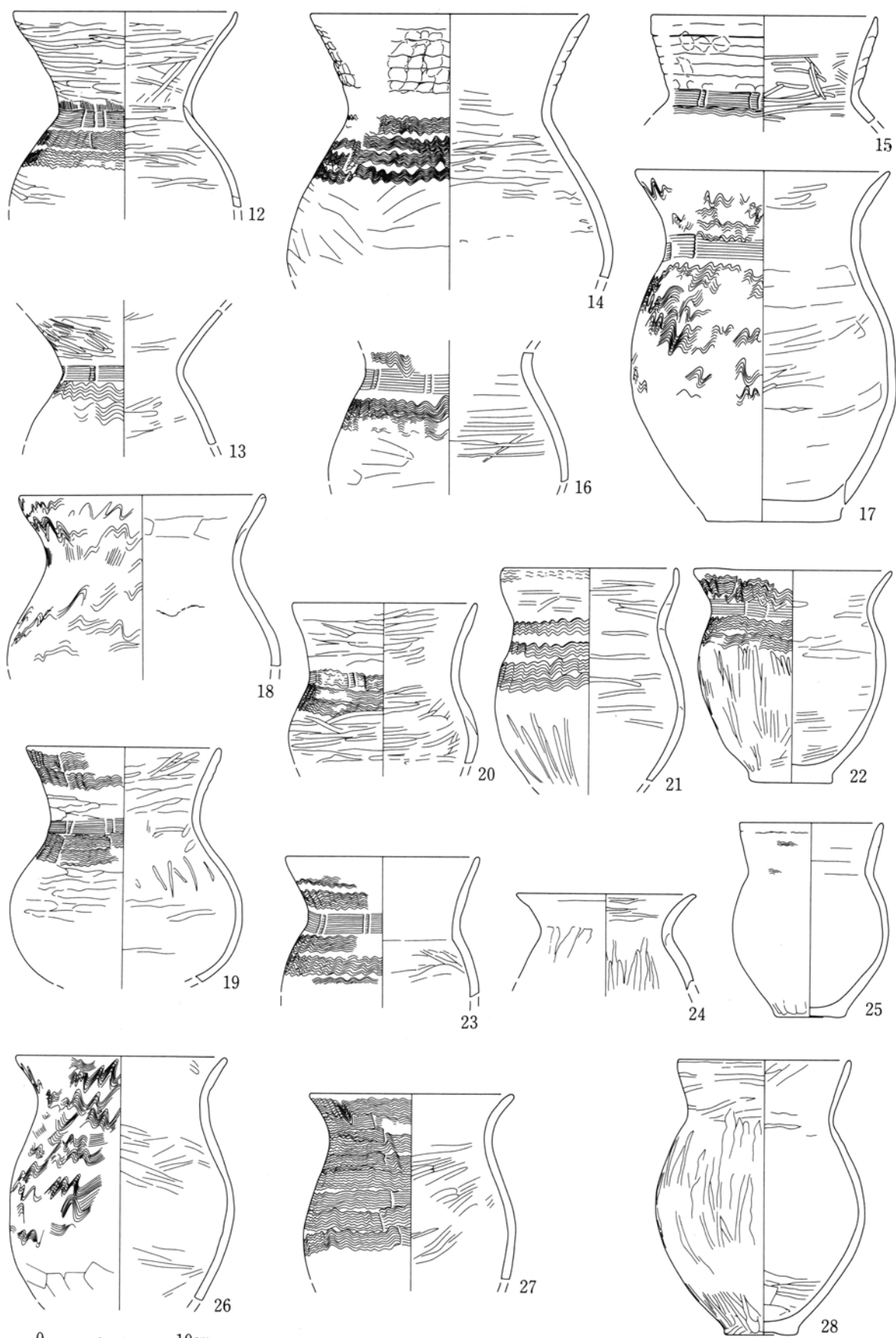


第429図 C13号住居跡出土遺物

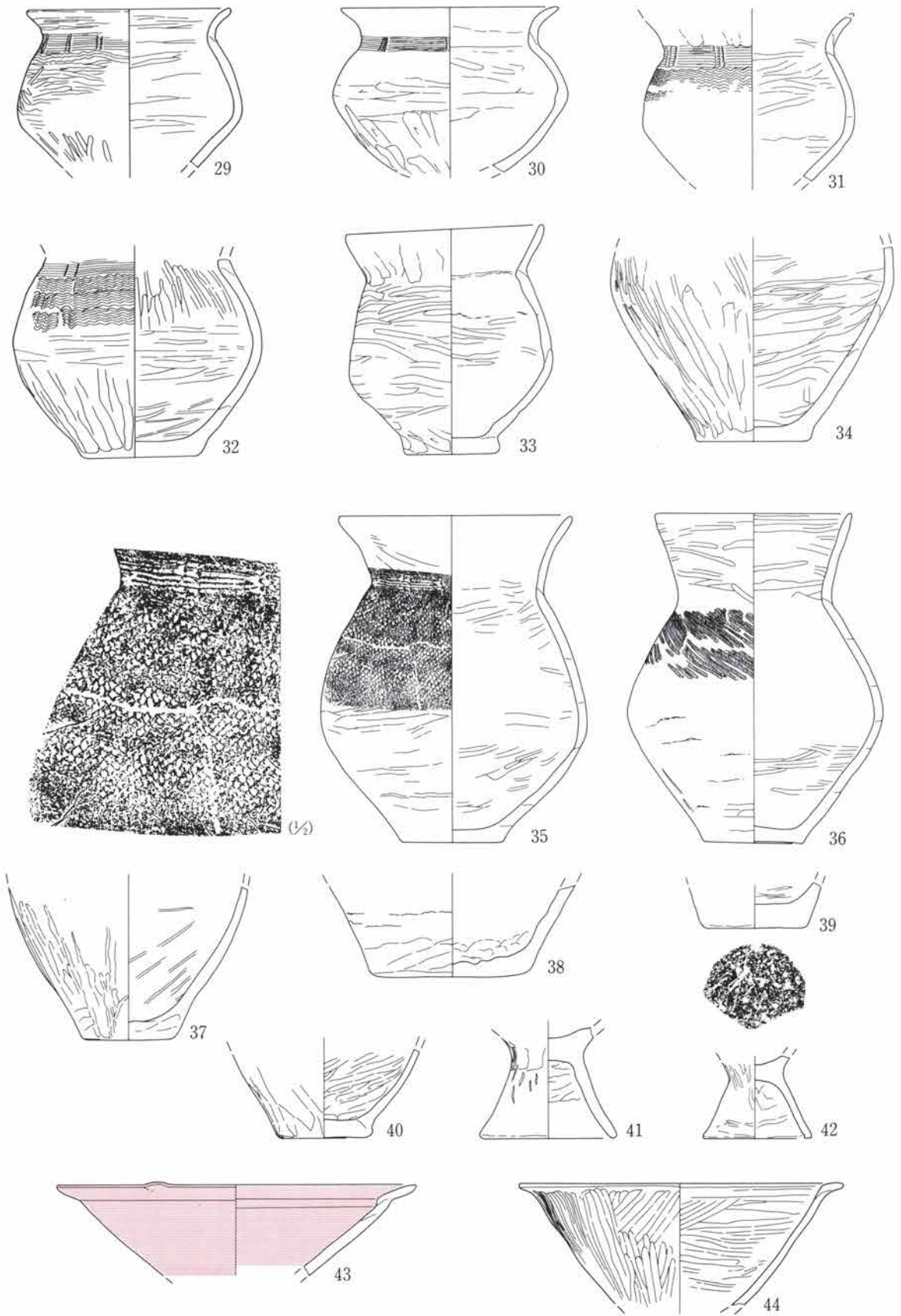


第430図 C14号住居跡出土遺物(1)

第2節 弥生土器

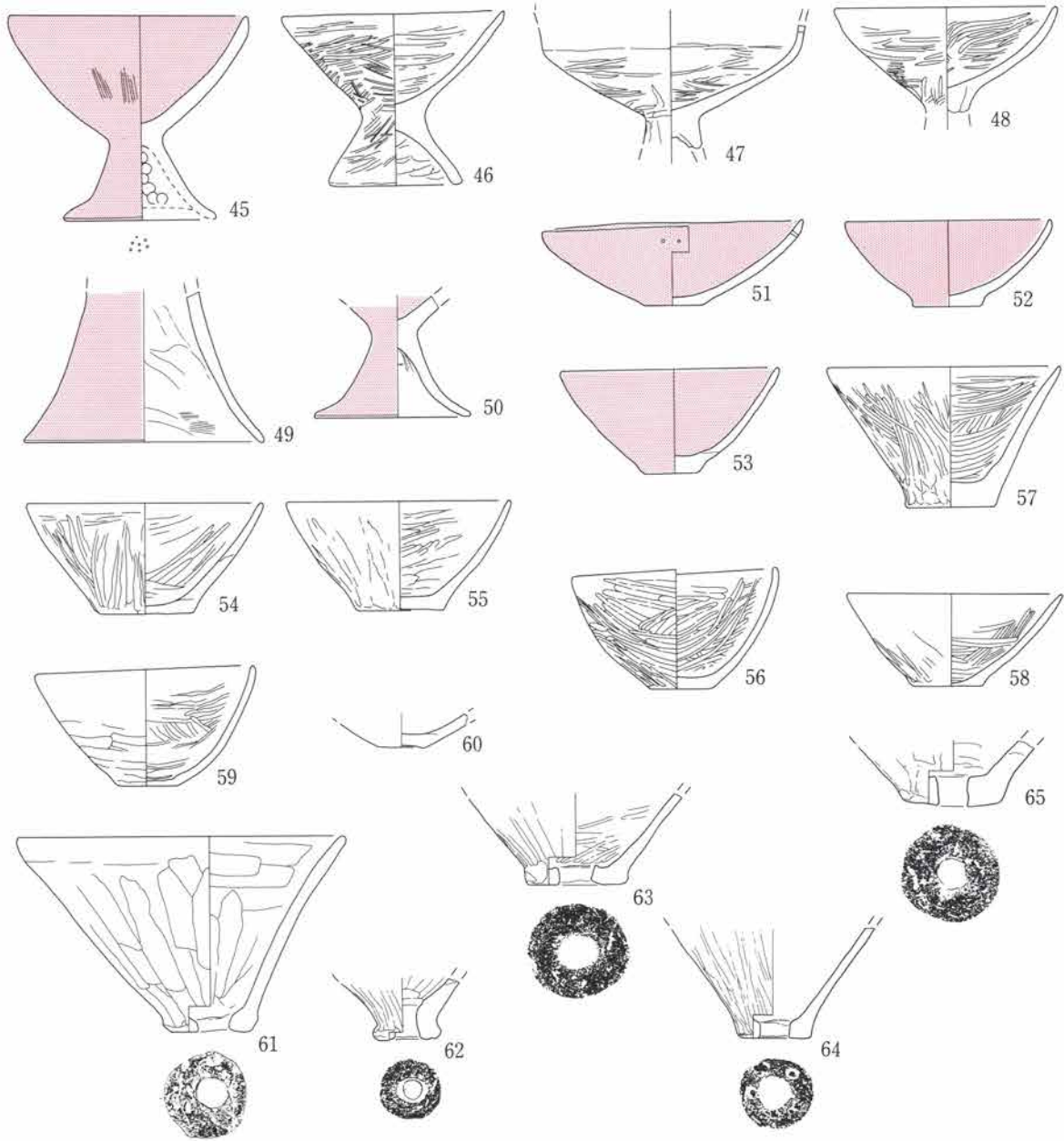


第431图 C14号住居跡出土遺物(2)

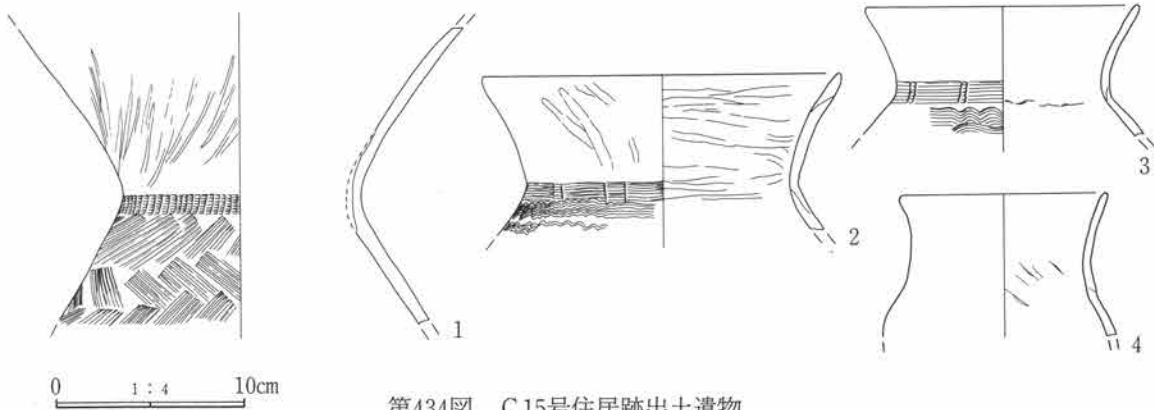


第432図 C14号住居跡出土遺物(3)

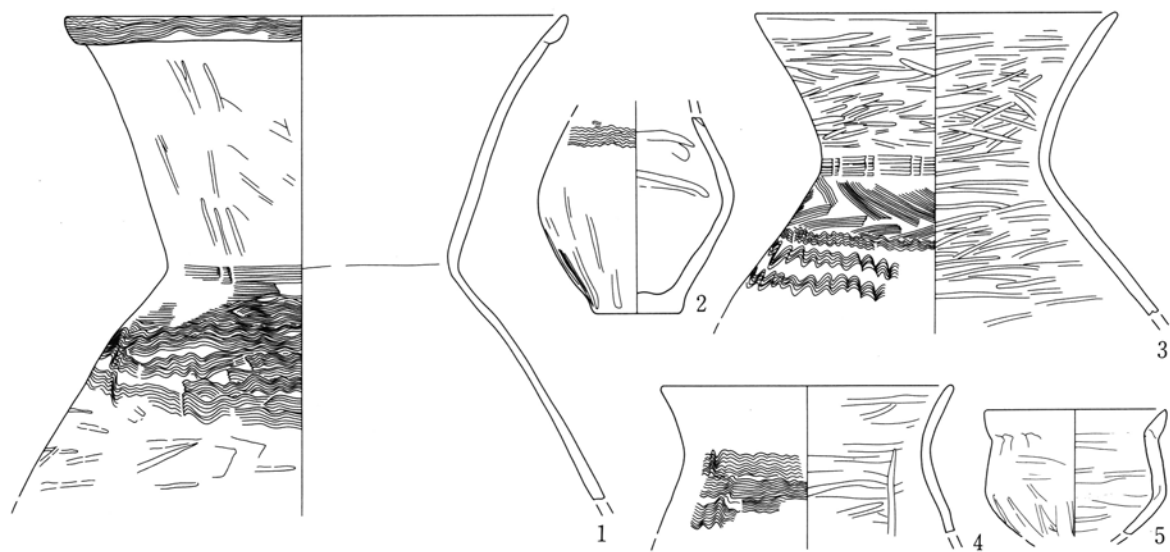
第2節 弥生土器



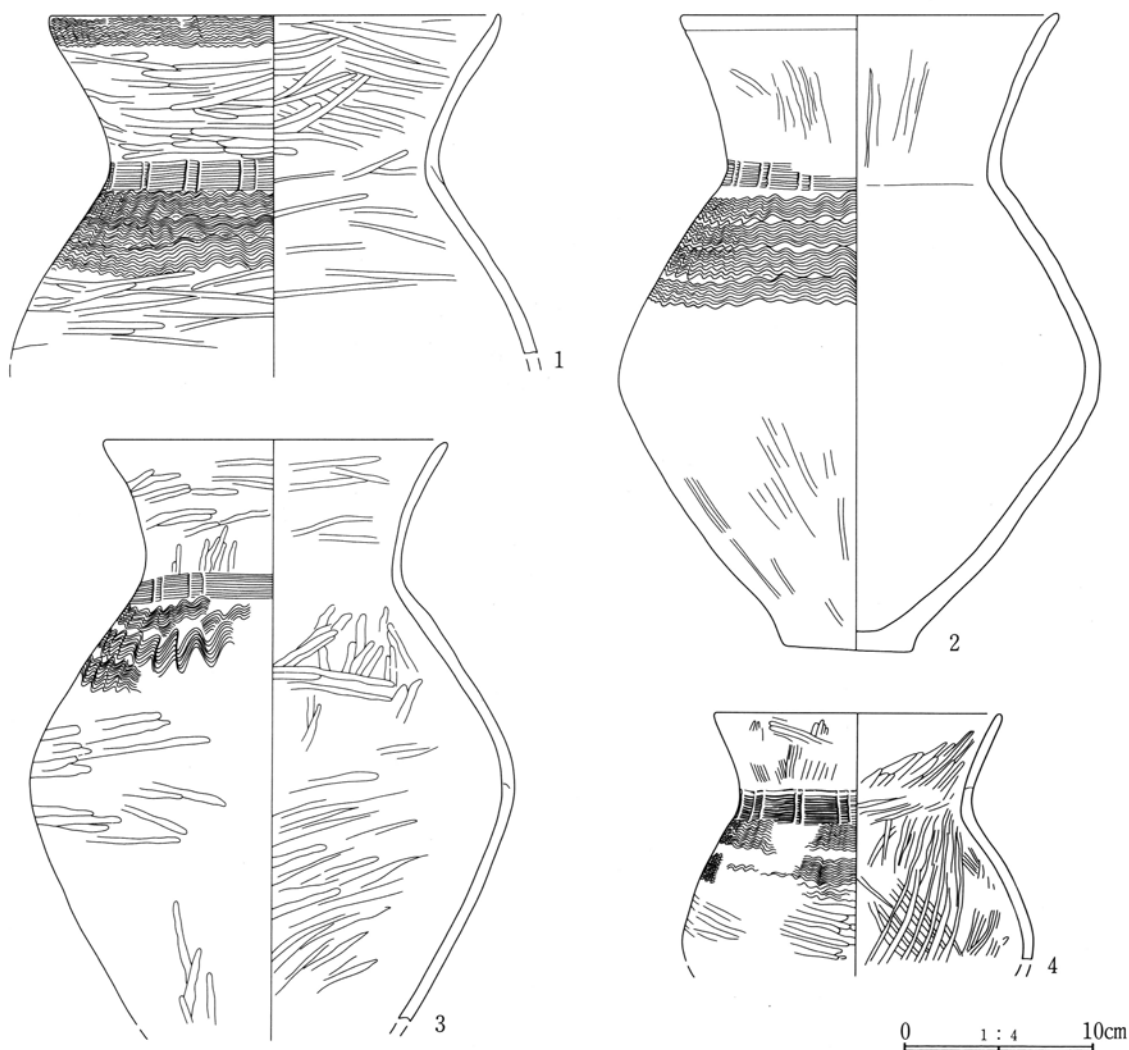
第433图 C14号住居跡出土遺物(4)



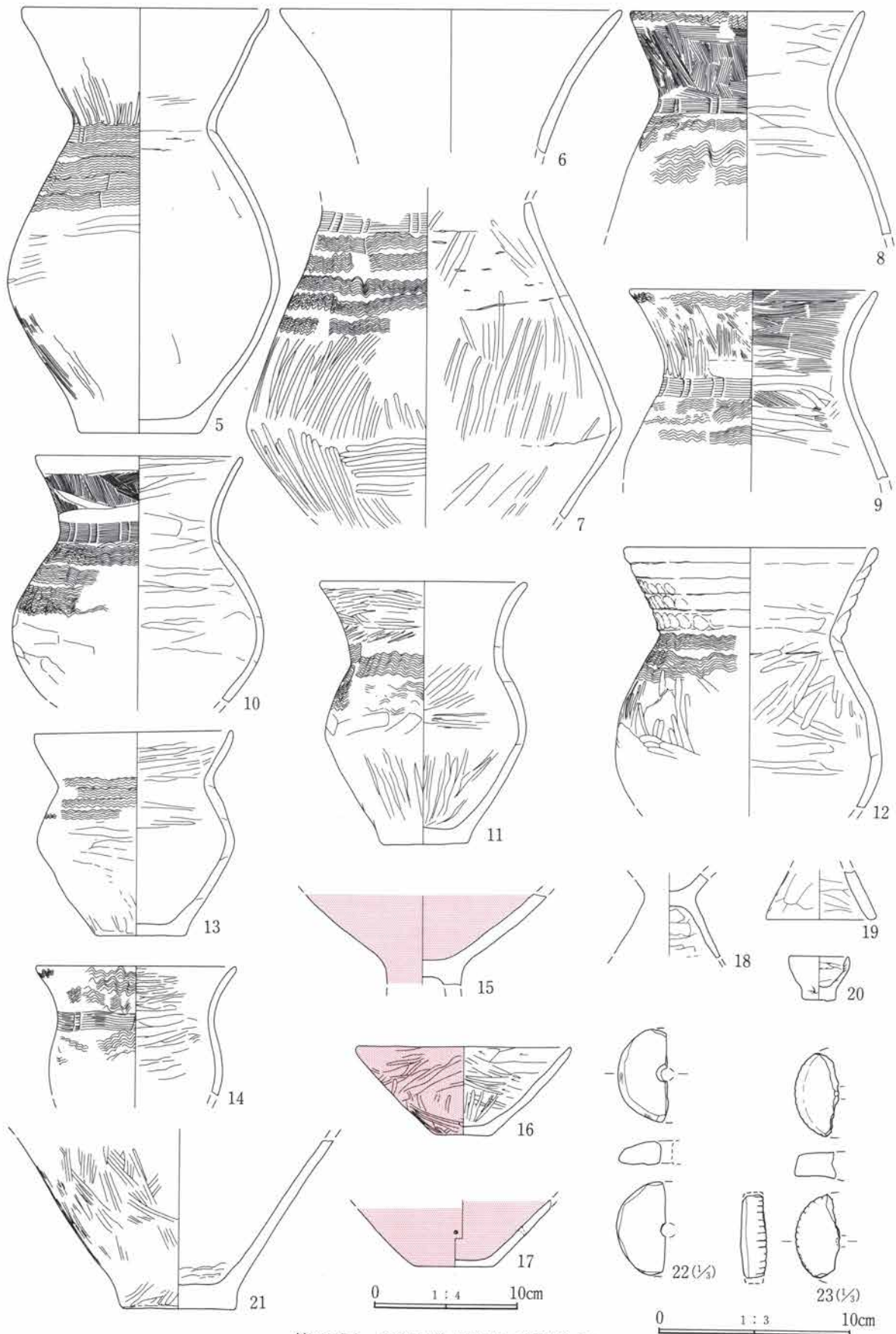
第434图 C15号住居跡出土遺物



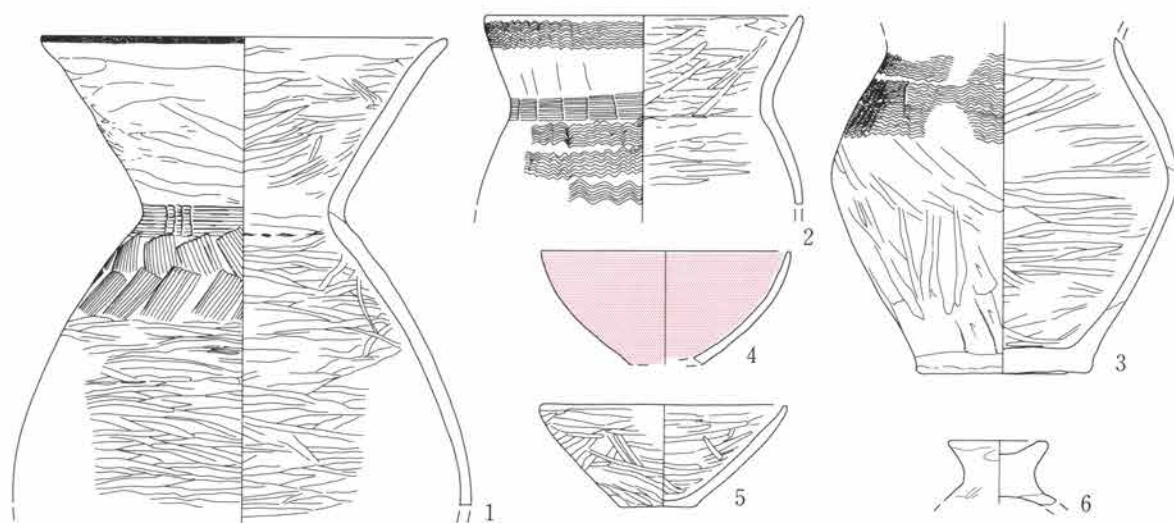
第435図 C18号住居跡出土遺物



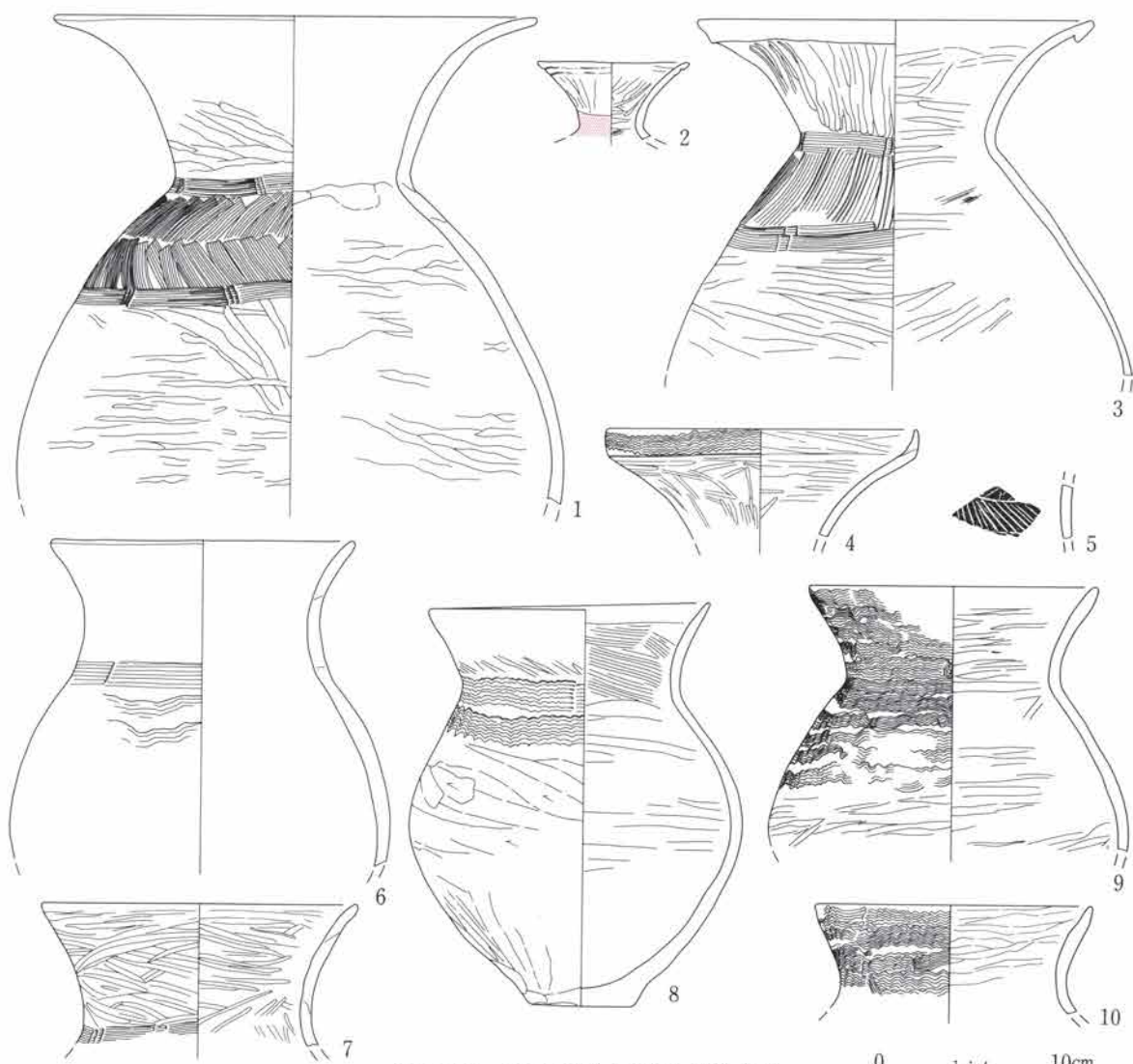
第436図 C20号住居跡出土遺物(1)



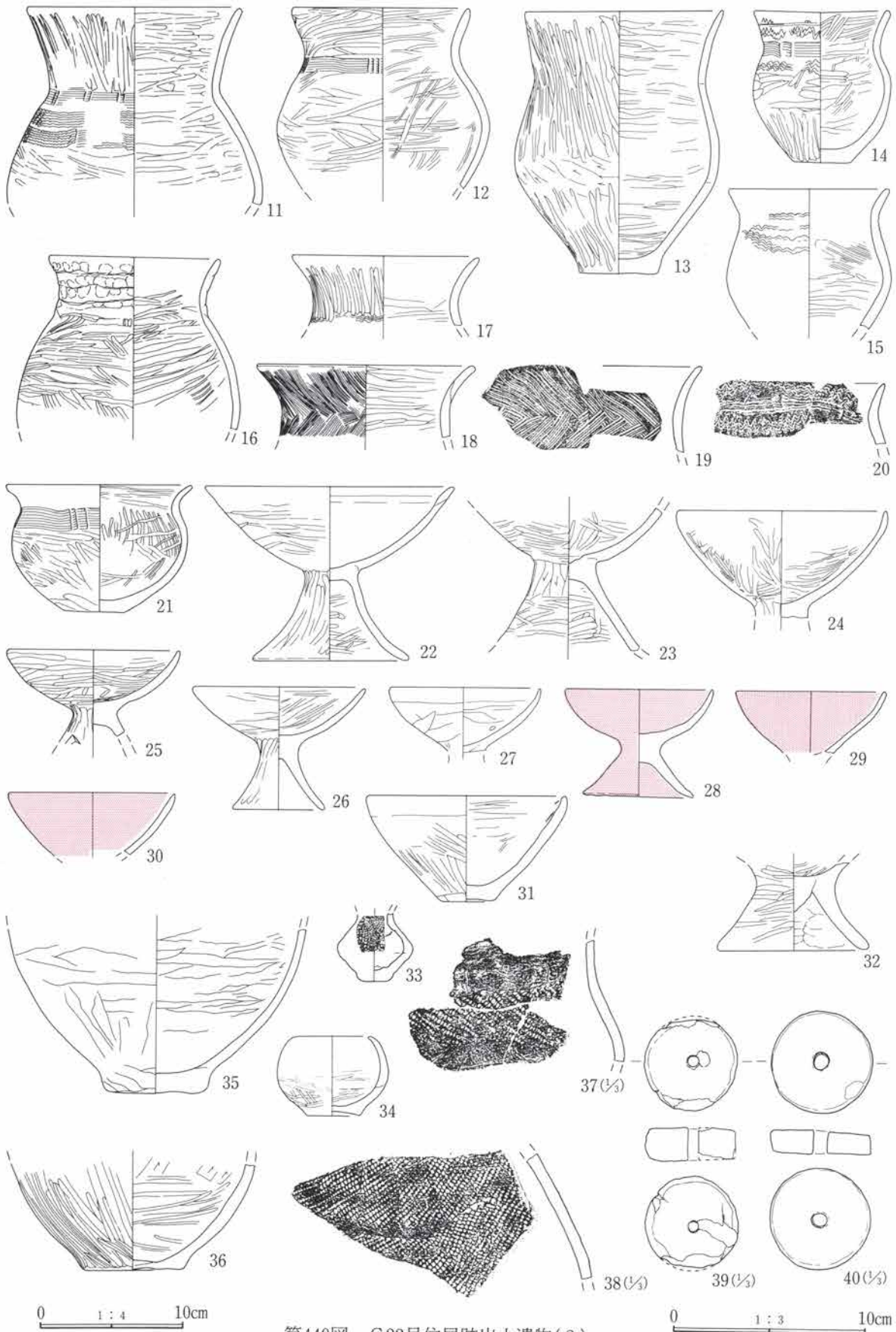
第437図 C20号住居跡出土遺物(2)



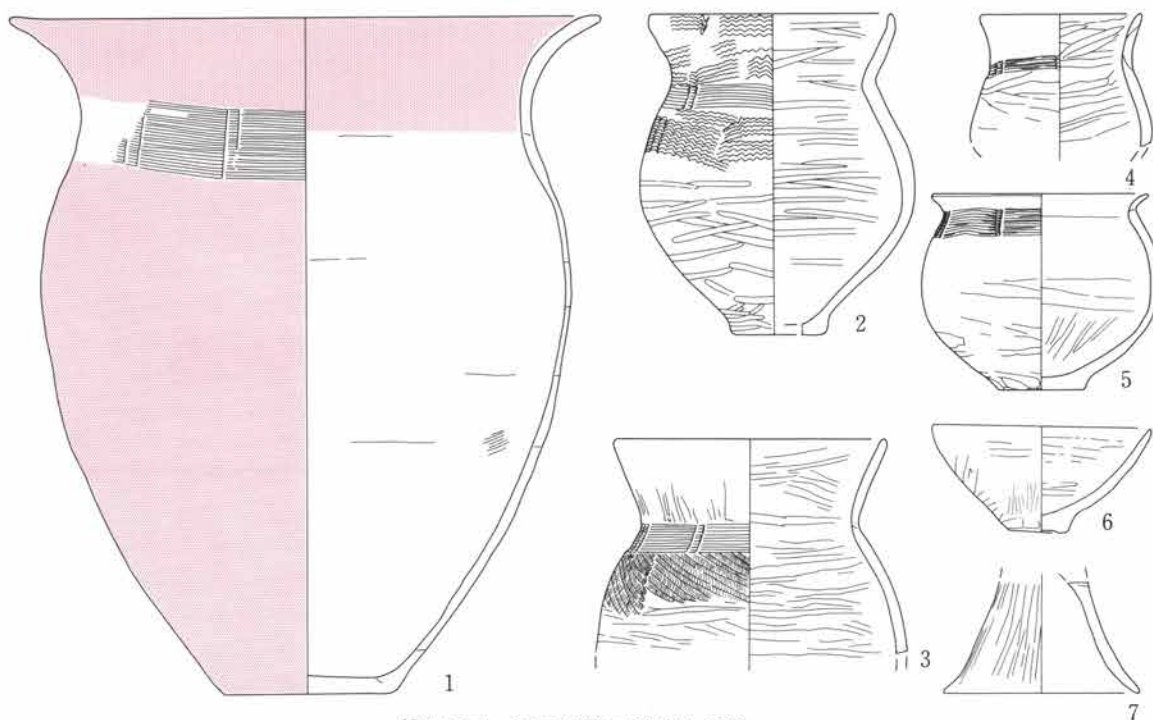
第438図 C21号住居跡出土遺物



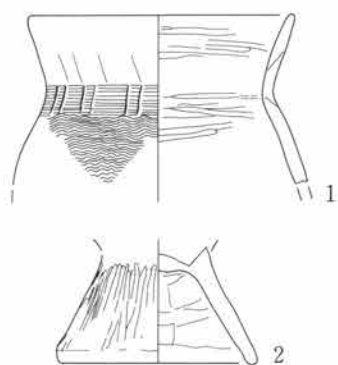
第439図 C22号住居跡出土遺物(1)



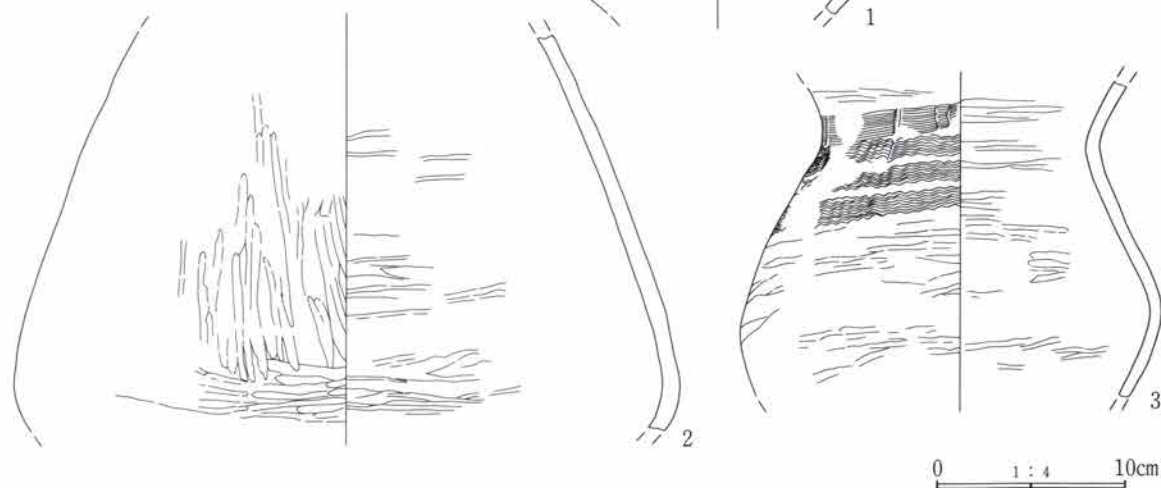
第440图 C22号住居跡出土遺物(2)



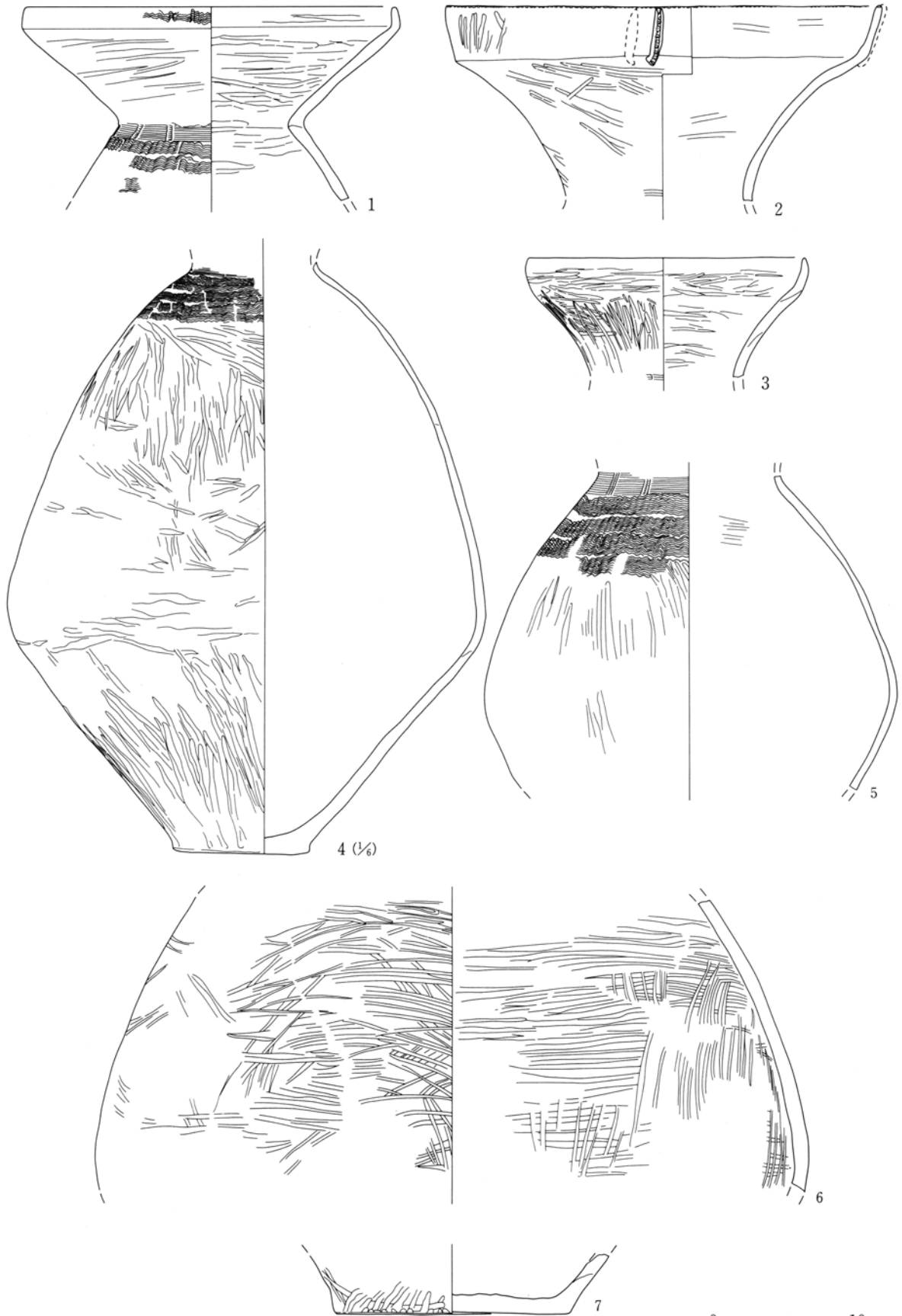
第441図 C25号住居跡出土遺物



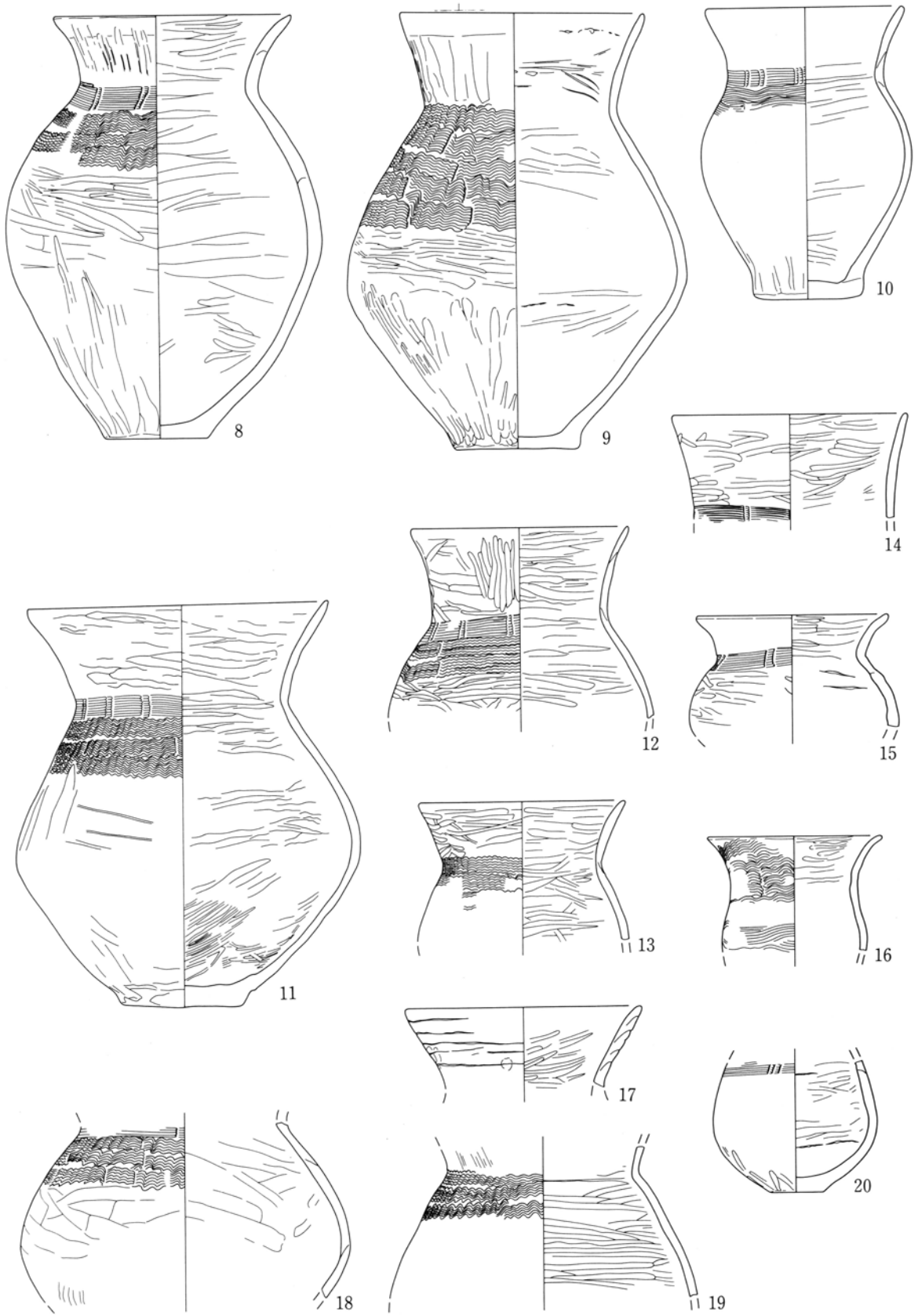
第442図 C23号住居跡出土遺物



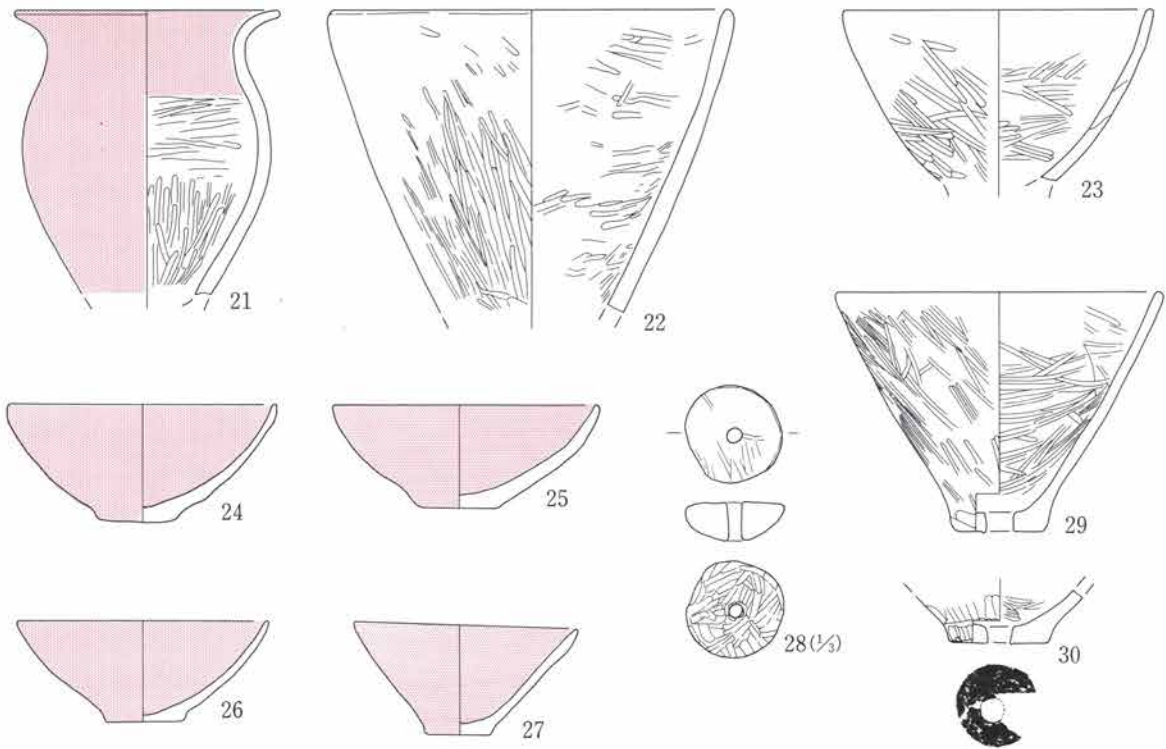
第443図 C27号住居跡出土遺物



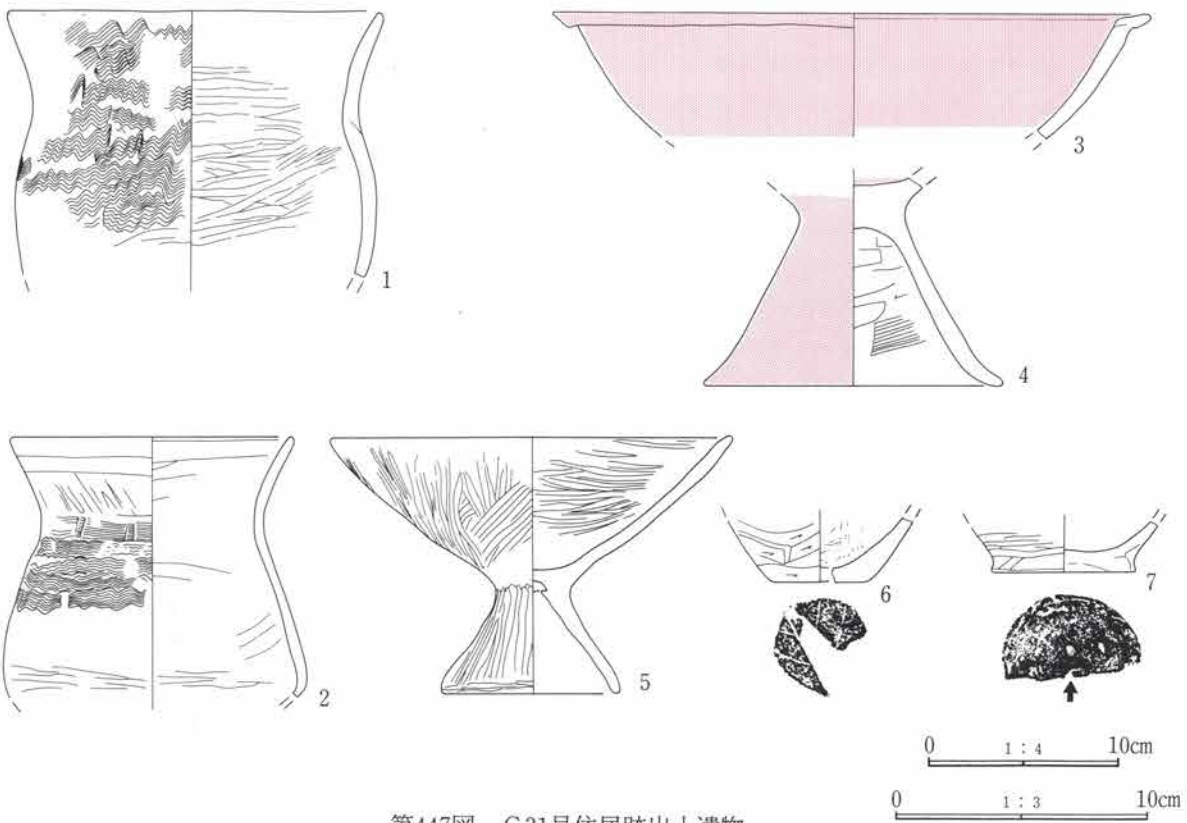
第444図 C28号住居跡出土遺物(1)



第445図 C28号住居跡出土遺物(2)

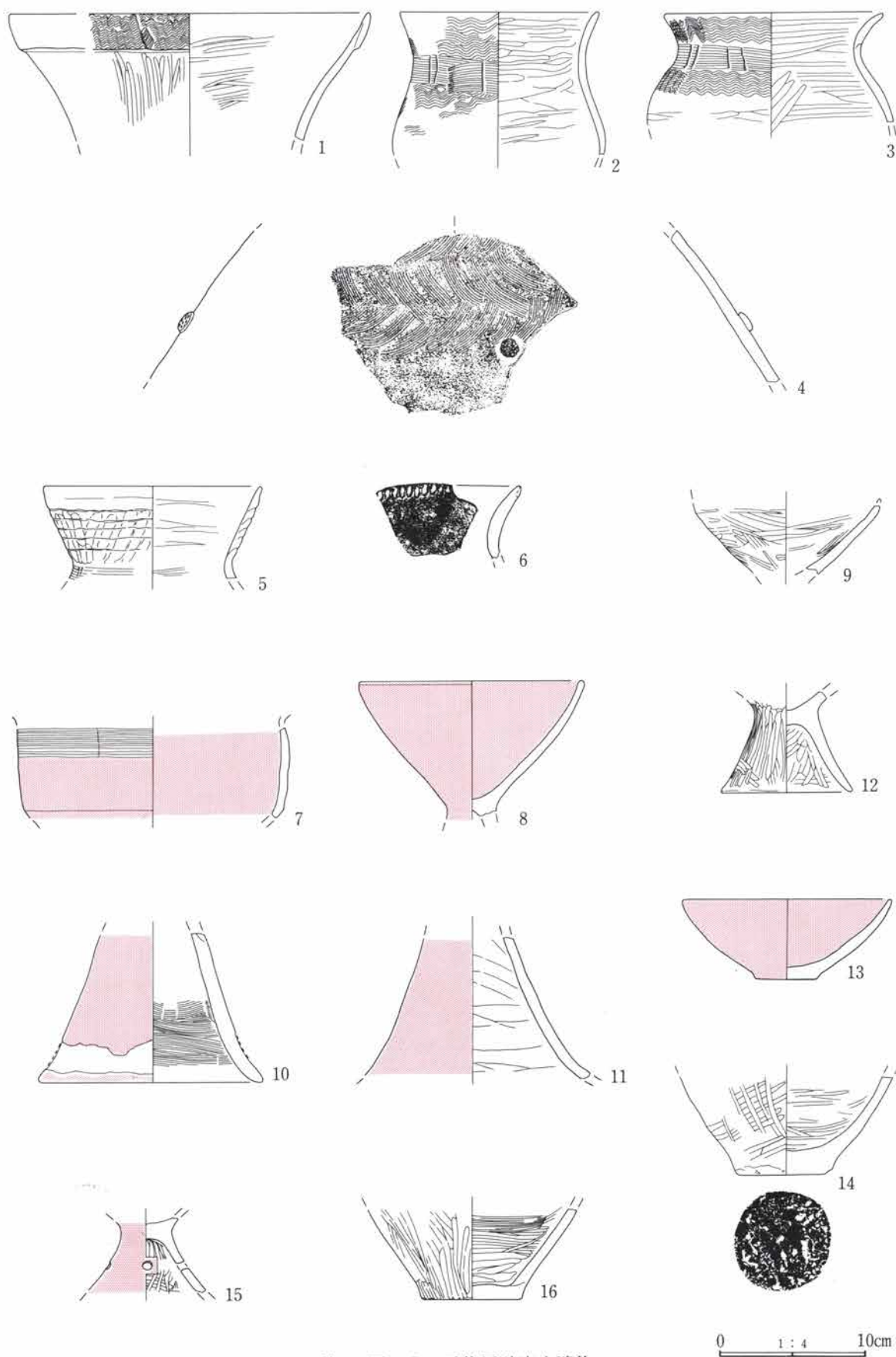


第446図 C28号住居跡出土遺物(3)

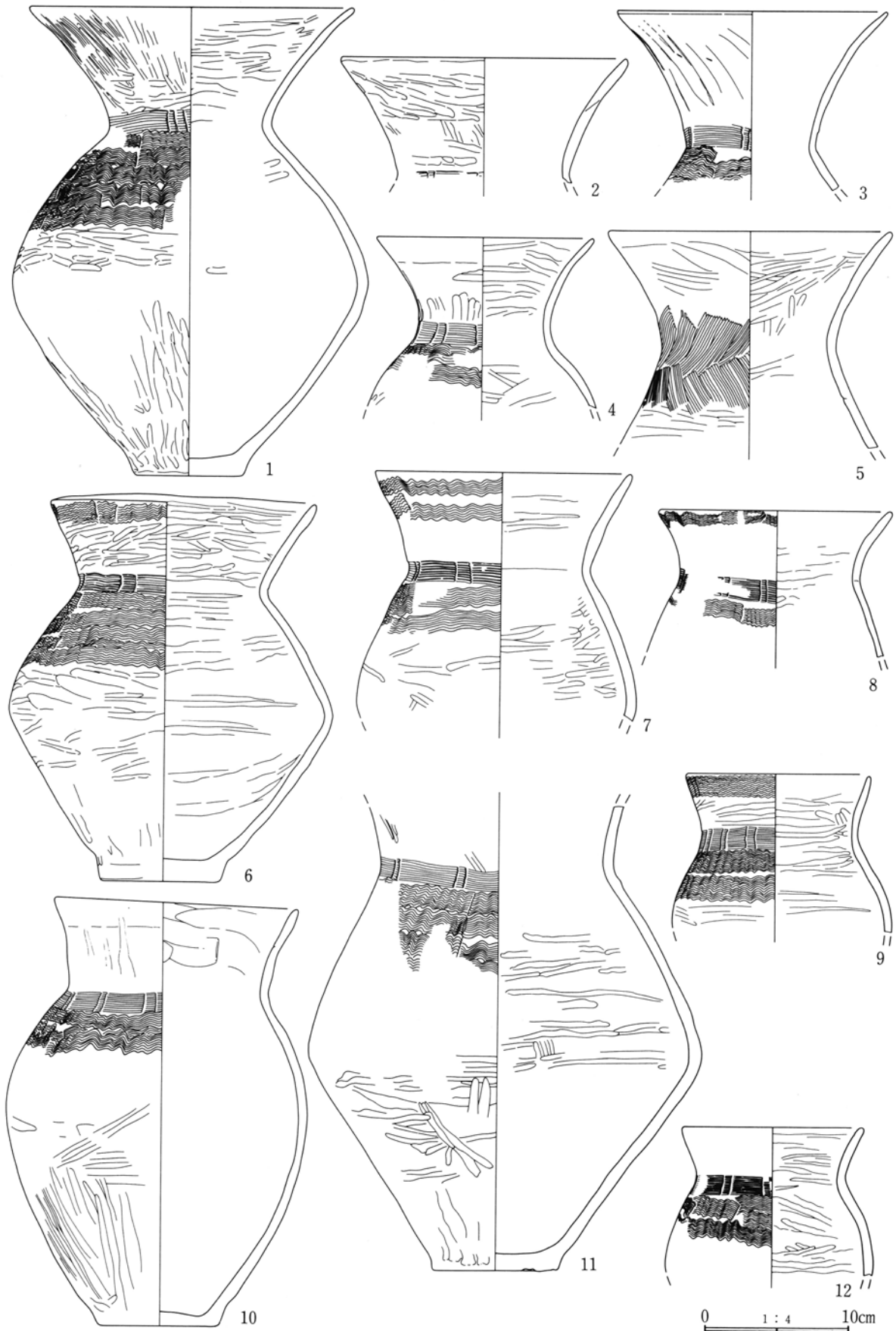


第447図 C31号住居跡出土遺物

第4章 出土遺物

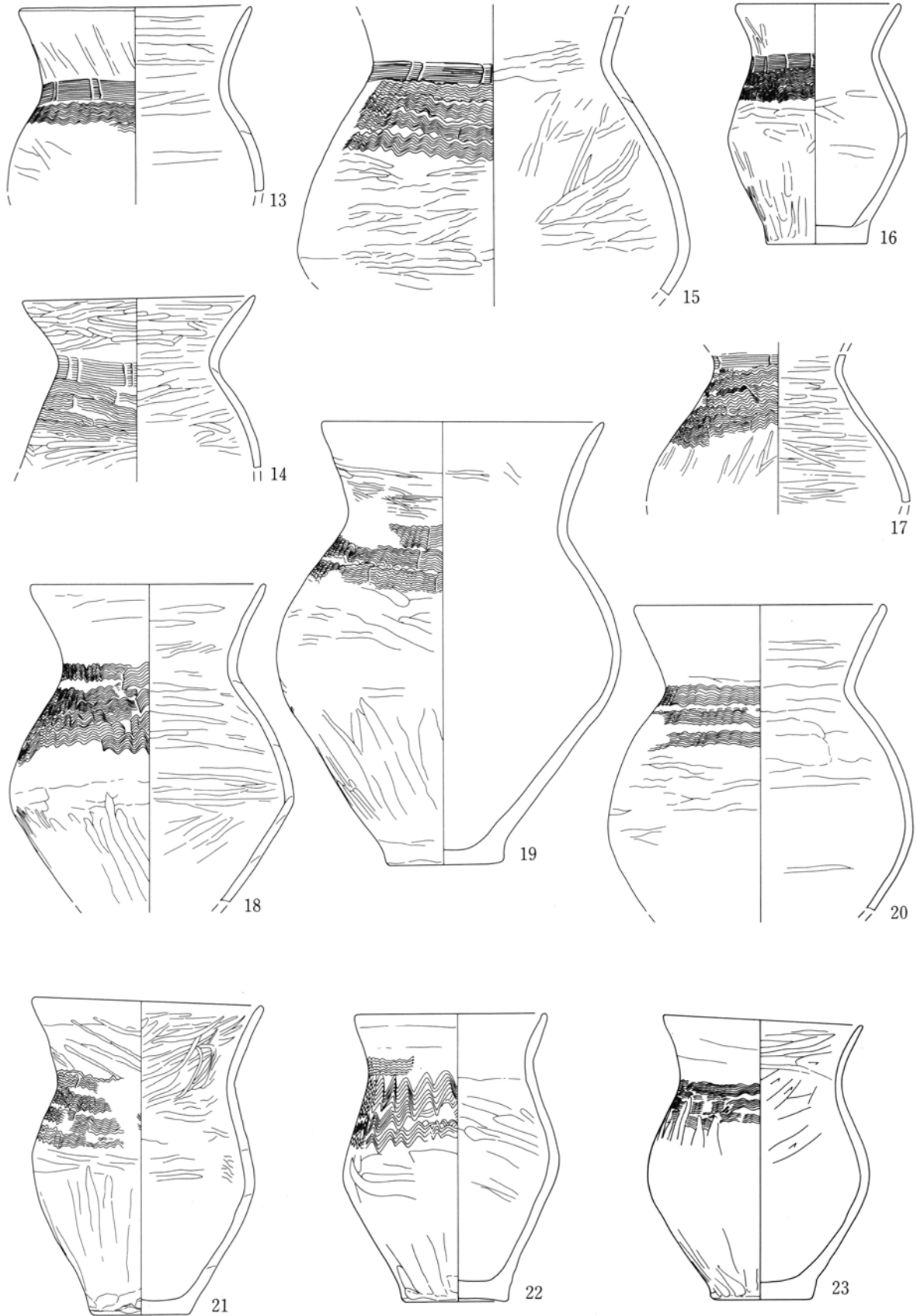


第448図 C33号住居跡出土遺物

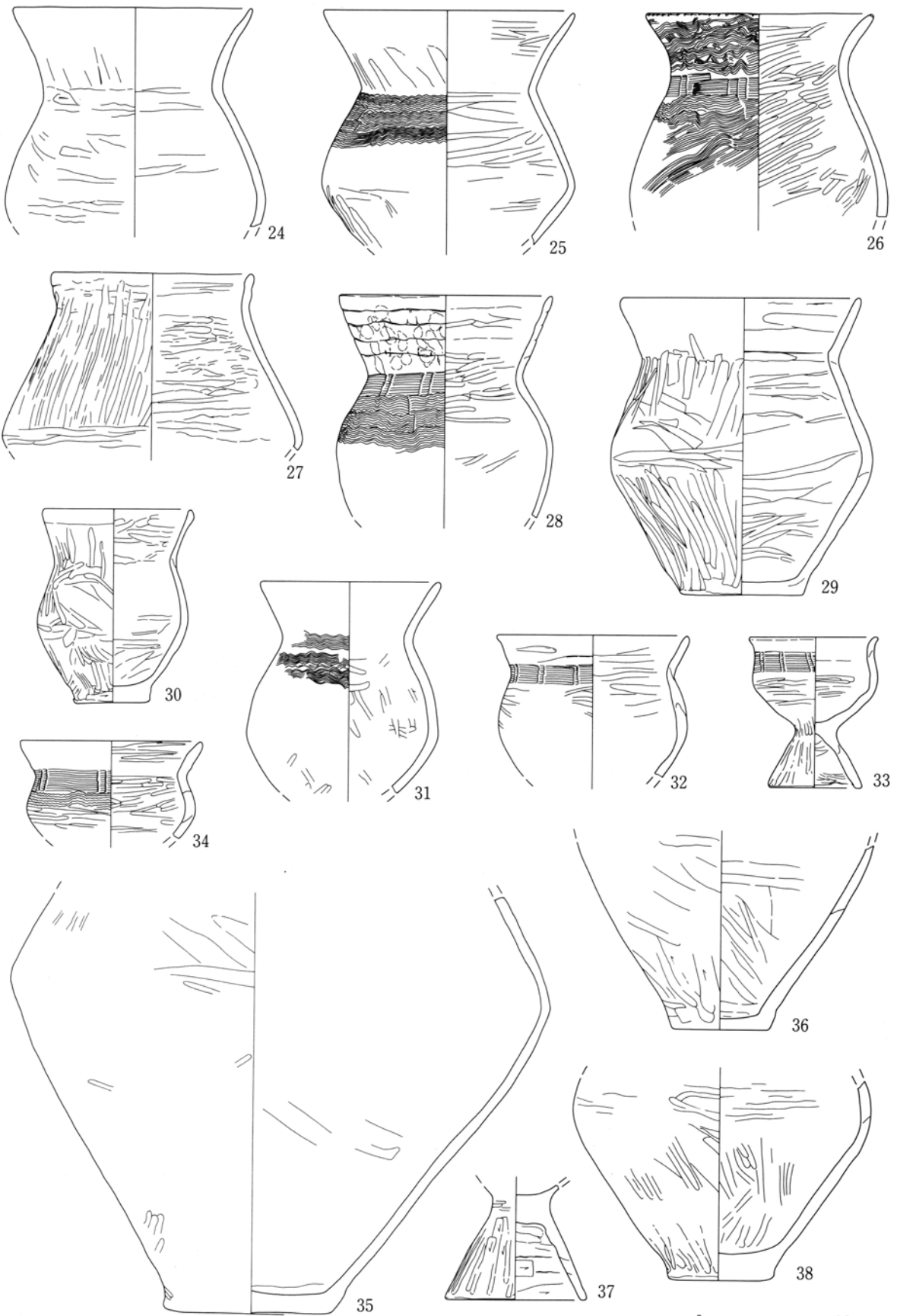


第449図 C34号住居跡出土遺物(1)

第4章 出土遺物

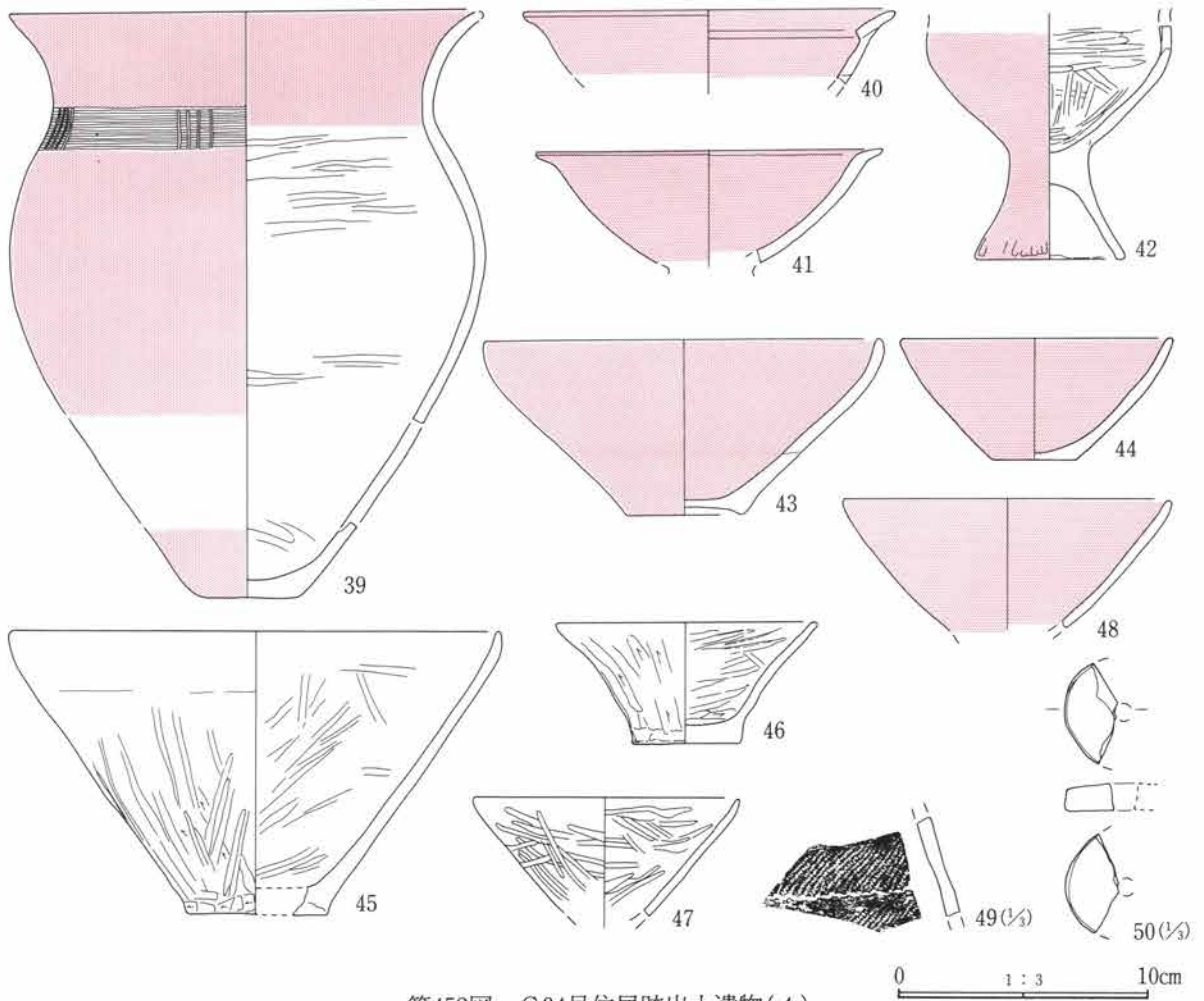


第450図 C34号住居跡出土遺物(2)

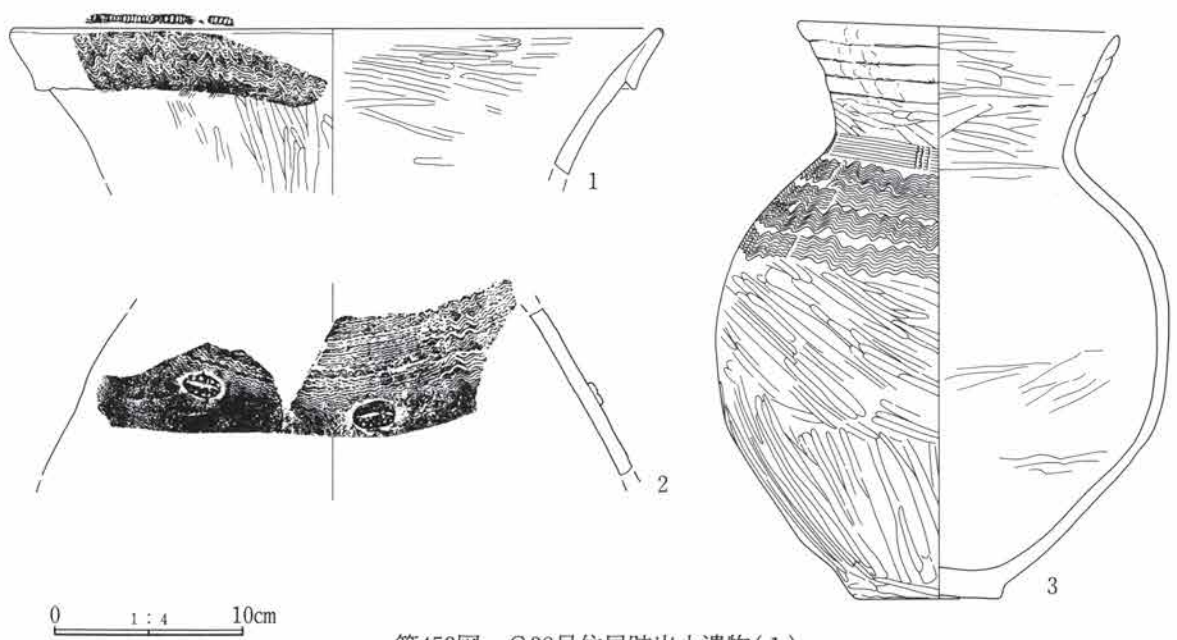


第451図 C34号住居跡出土遺物(3)

0 1:4 10cm

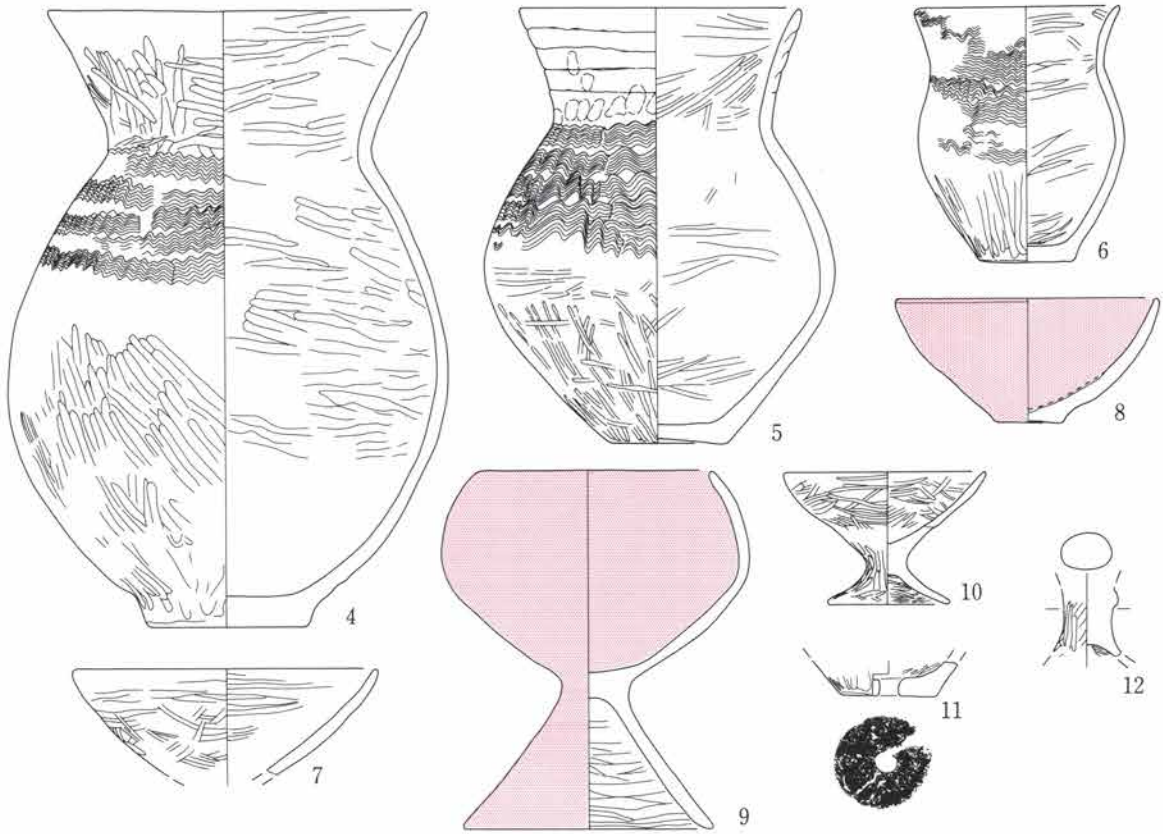


第452図 C34号住居跡出土遺物(4)

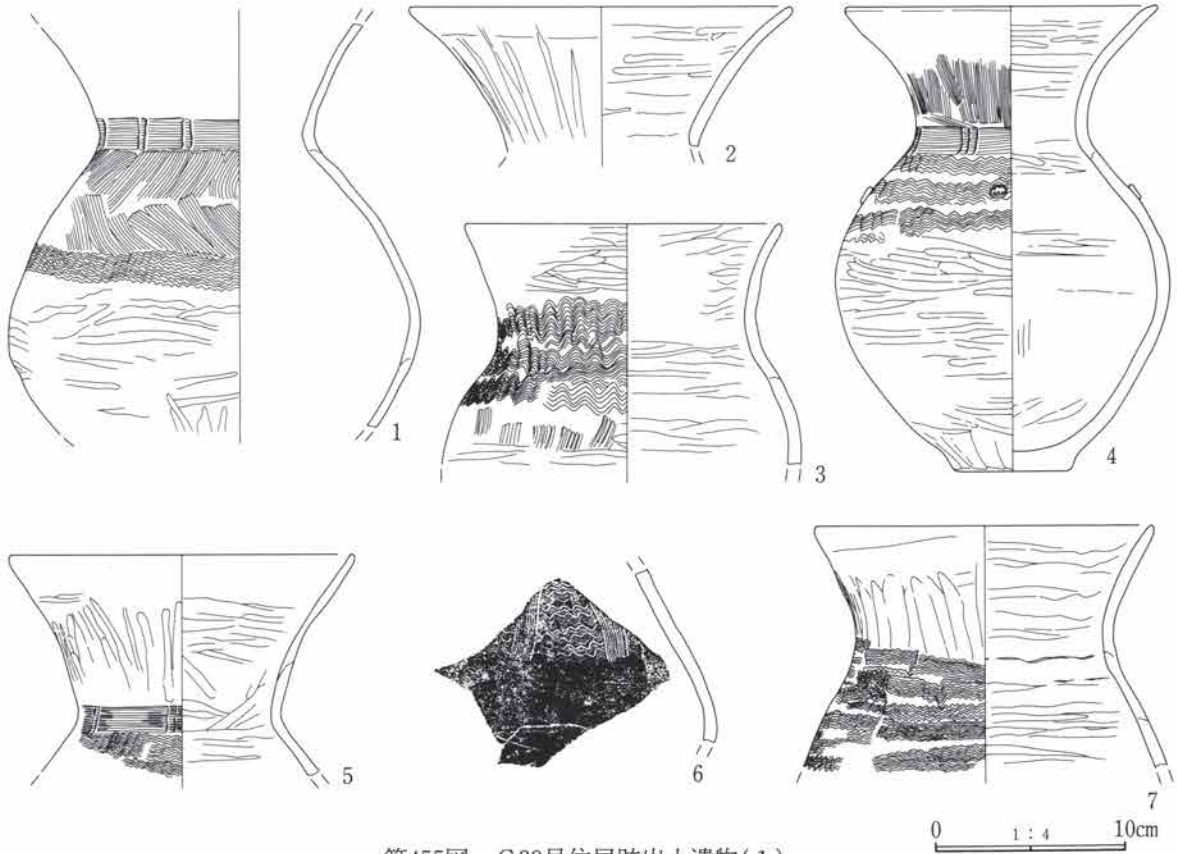


第453図 C38号住居跡出土遺物(1)

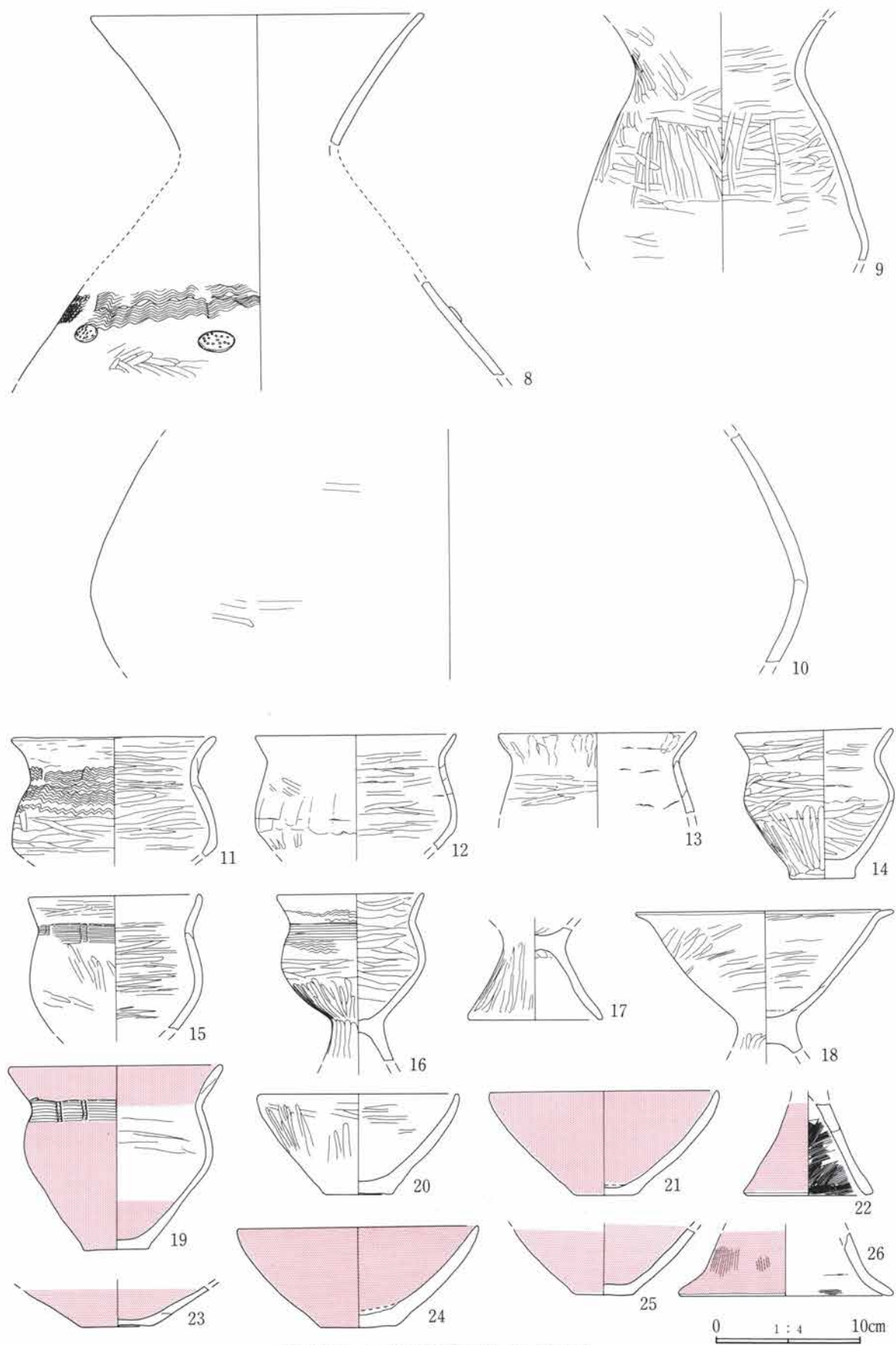
第2節 弥生土器



第454図 C38号住居跡出土遺物(2)

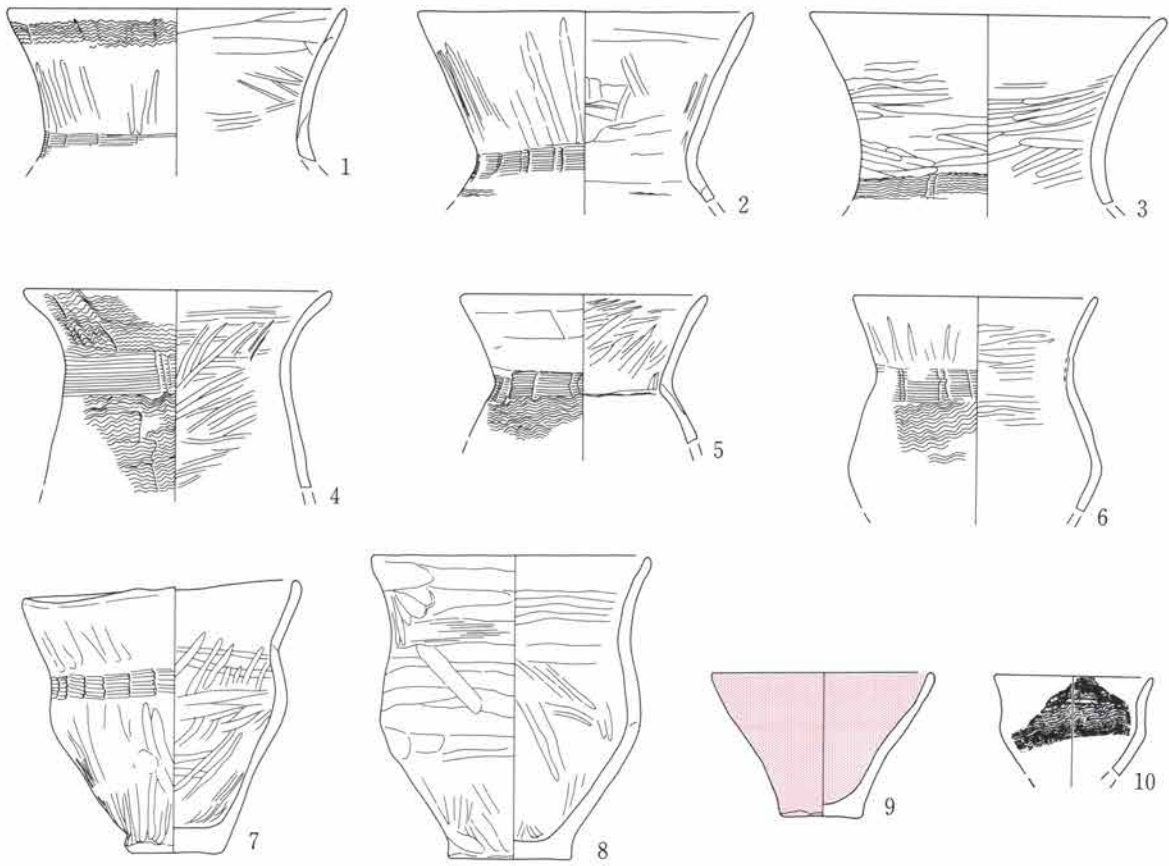


第455図 C39号住居跡出土遺物(1)

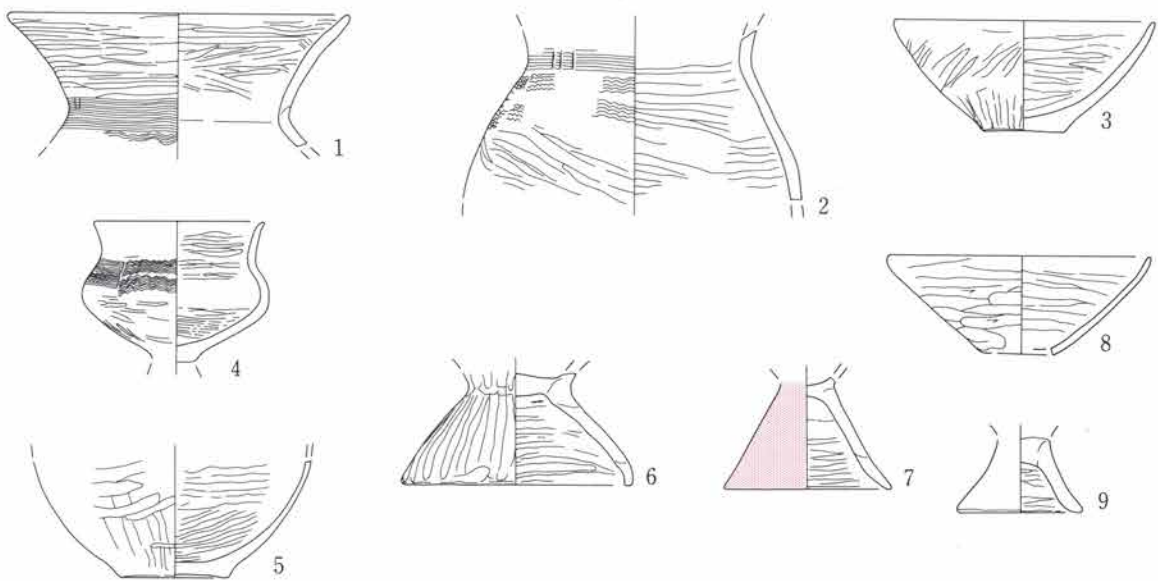


第456図 C39号住居跡出土遺物(2)

第2節 弥生土器

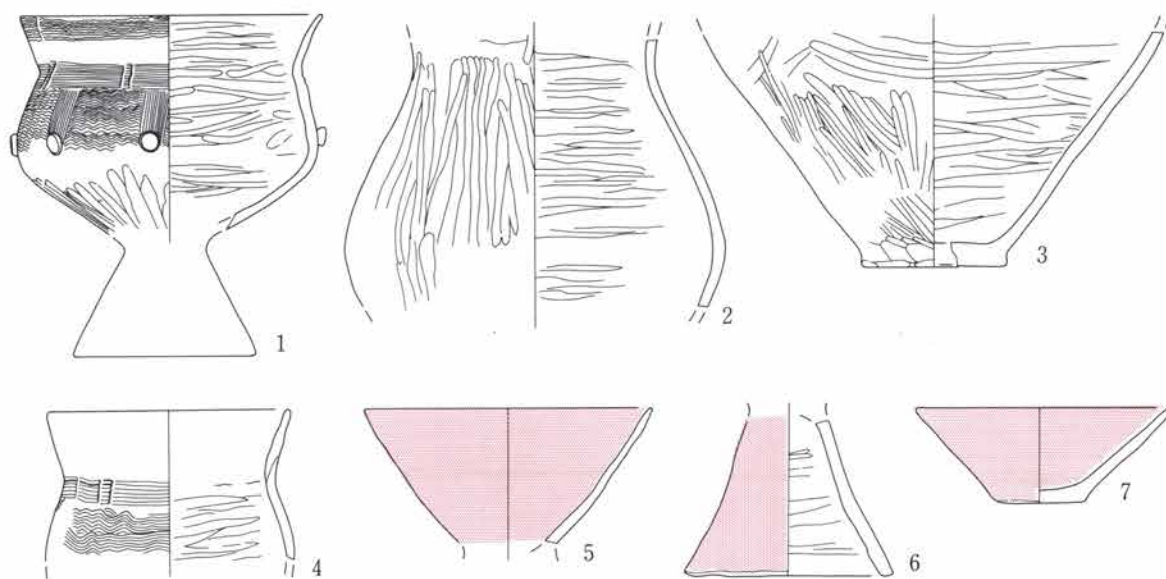


第457図 C44号住居跡出土遺物

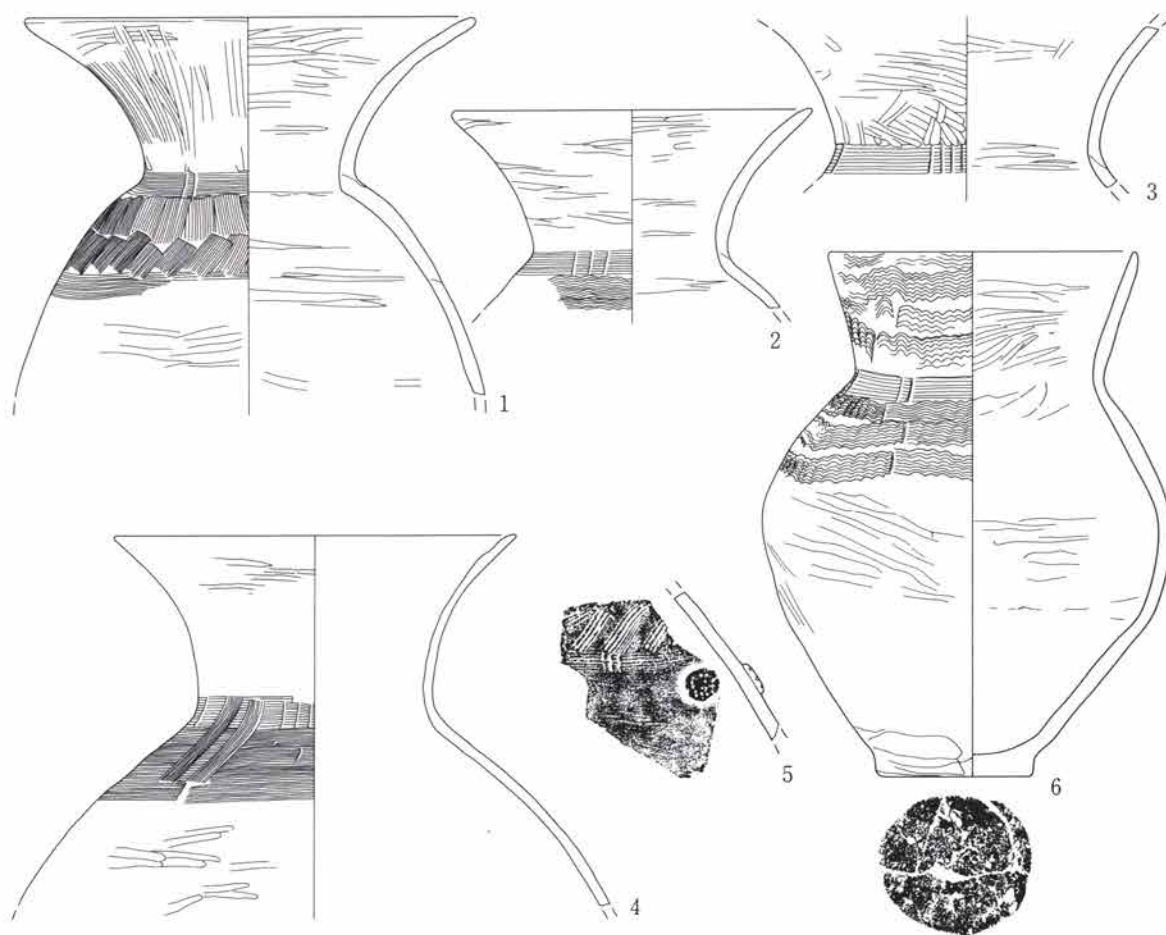


第458図 C46号住居跡出土遺物

0 1:4 10cm

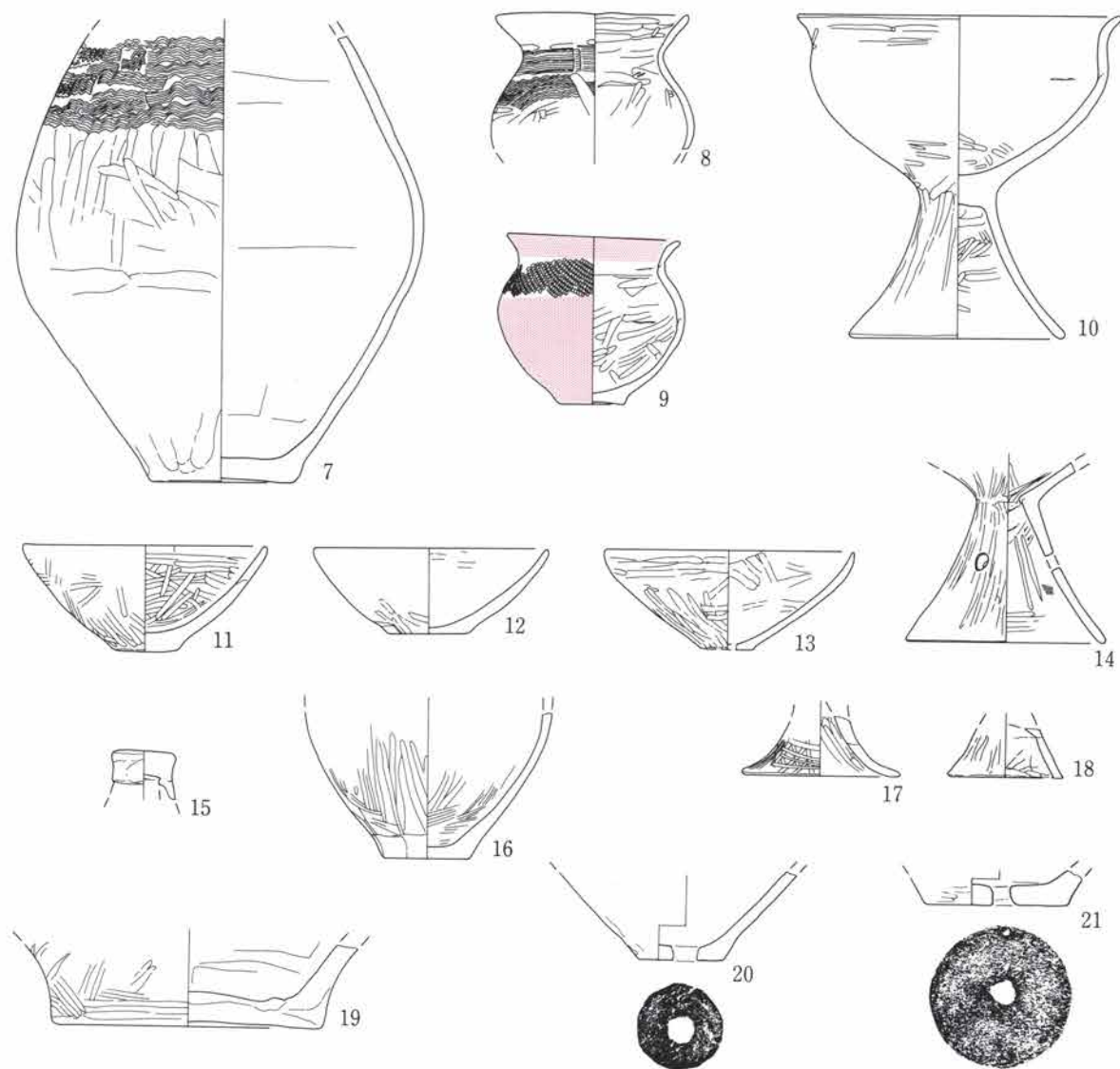


第459図 C47号住居跡出土遺物

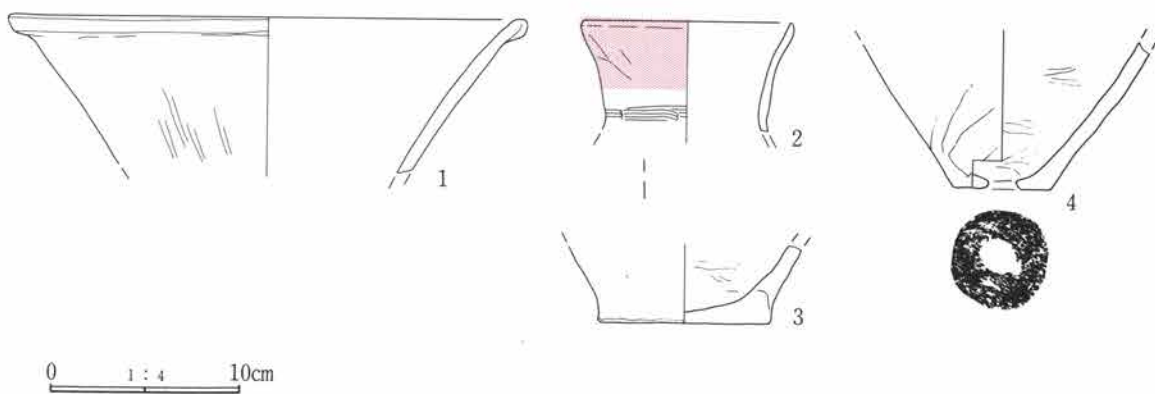


第460図 C50号住居跡出土遺物(1)

0 1:4 10cm

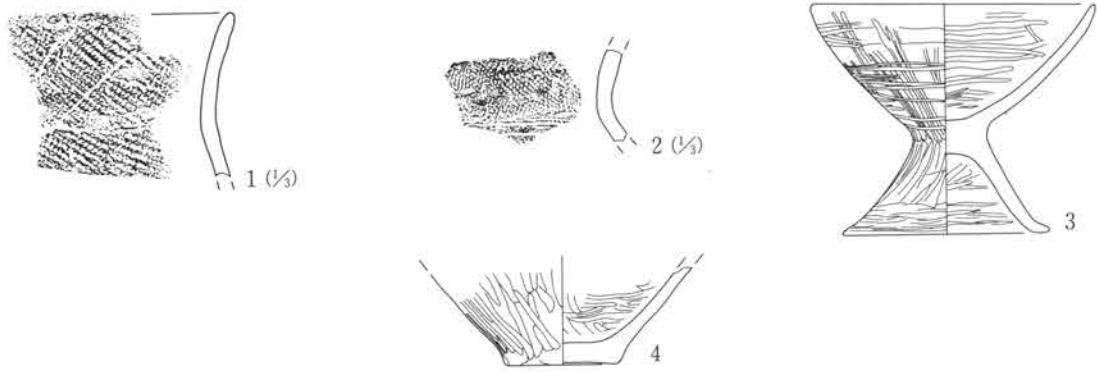


第461図 C50号住居跡出土遺物(2)

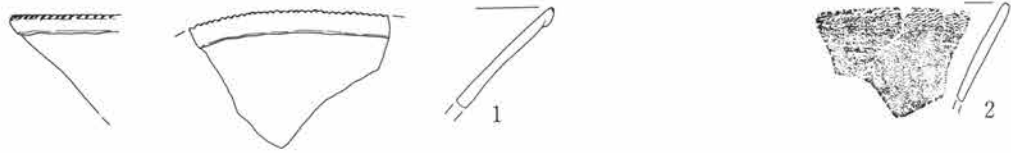


第462図 C52号住居跡出土遺物

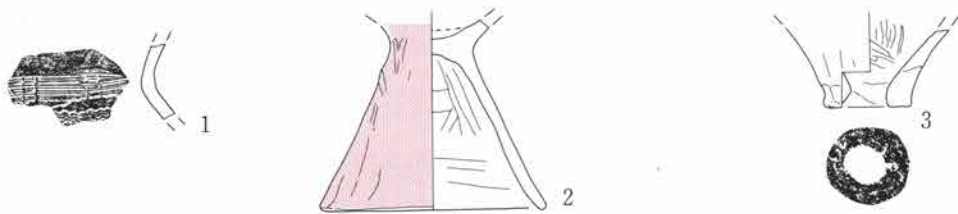
第4章 出土遺物



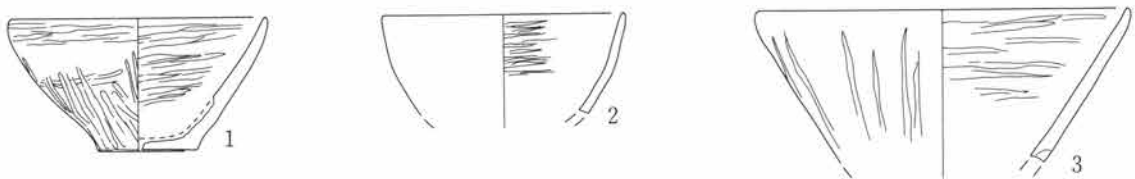
第463図 C53号住居跡出土遺物



第464図 C54号住居跡出土遺物

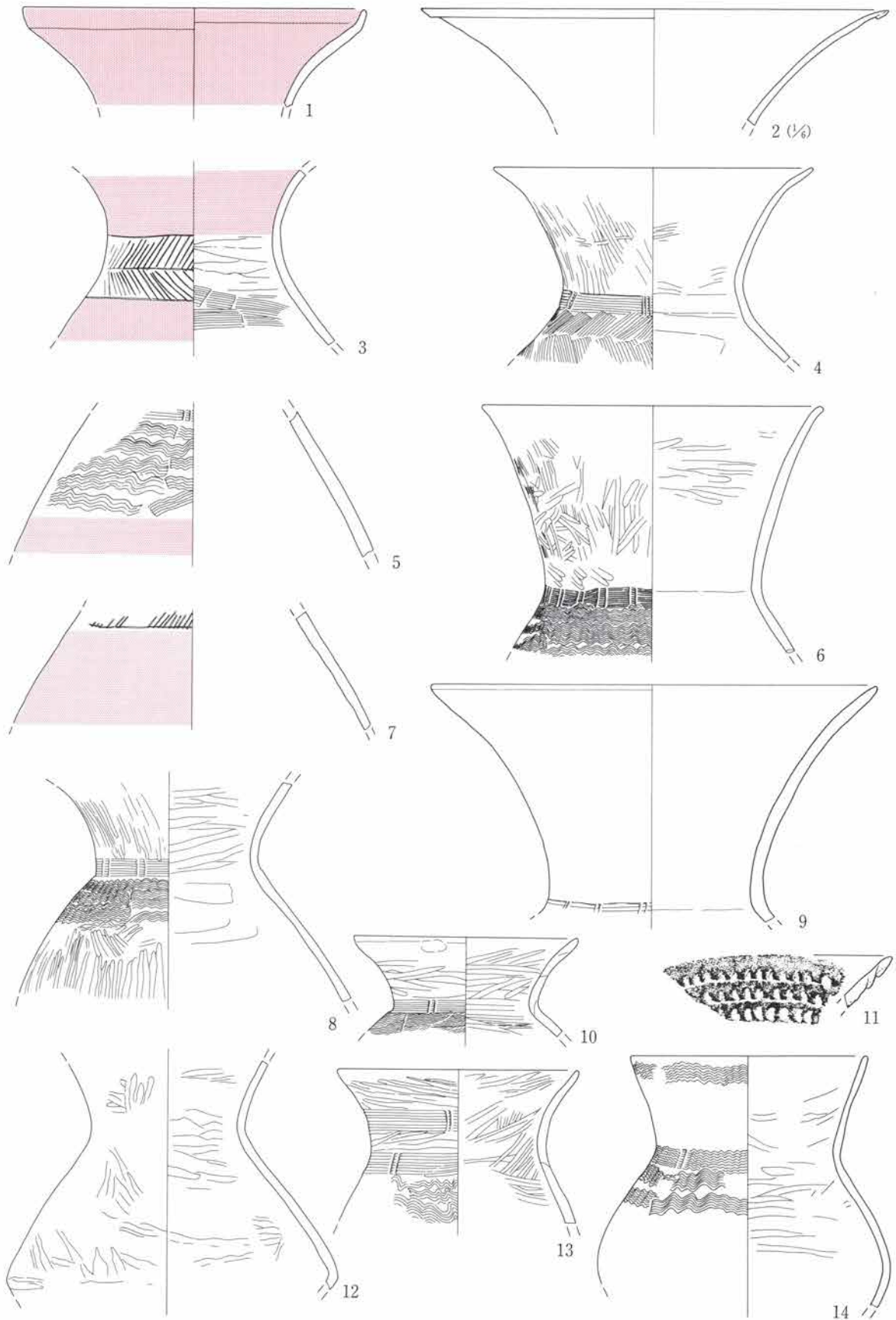


第465図 C56号住居跡出土遺物

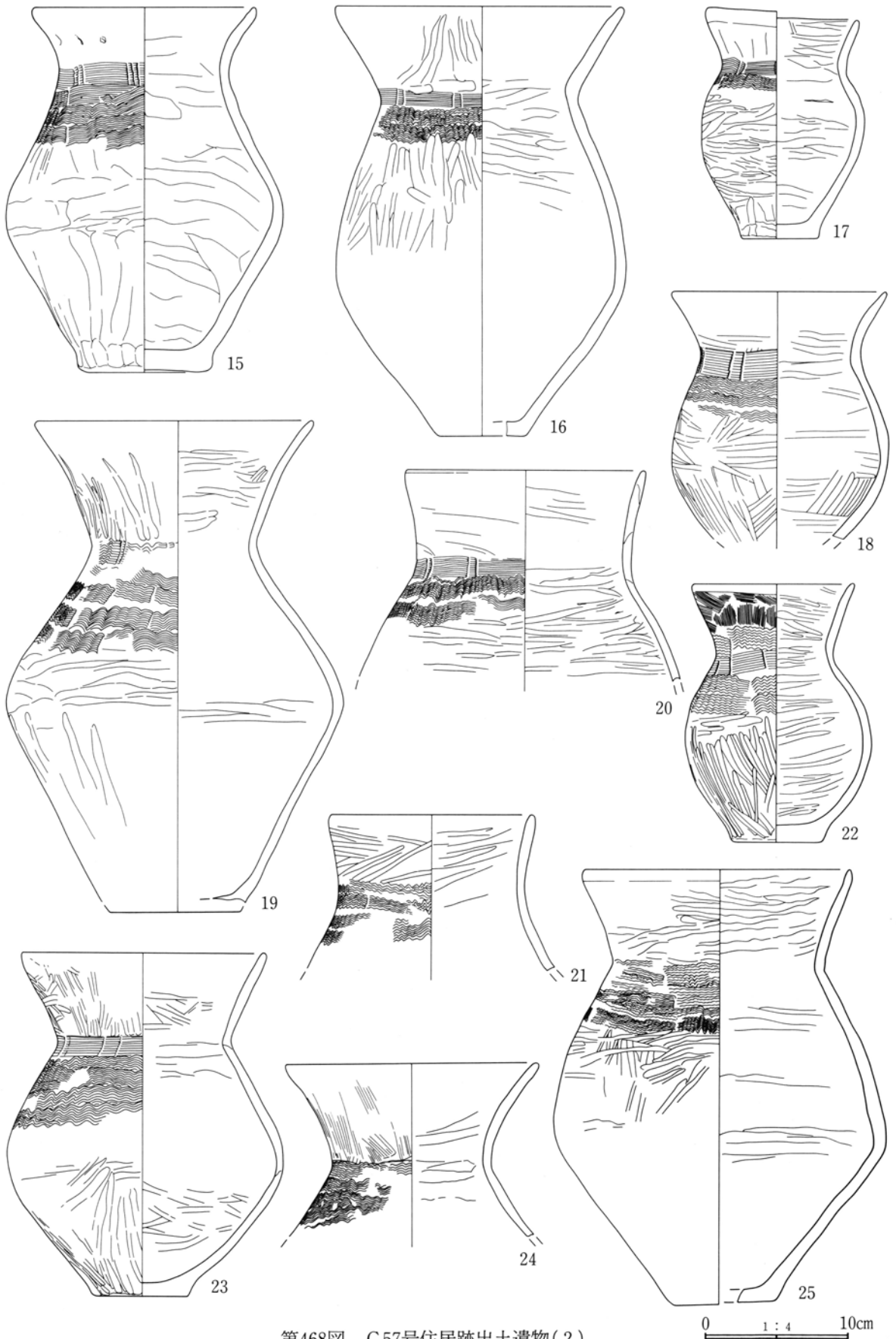


0 1:4 10cm

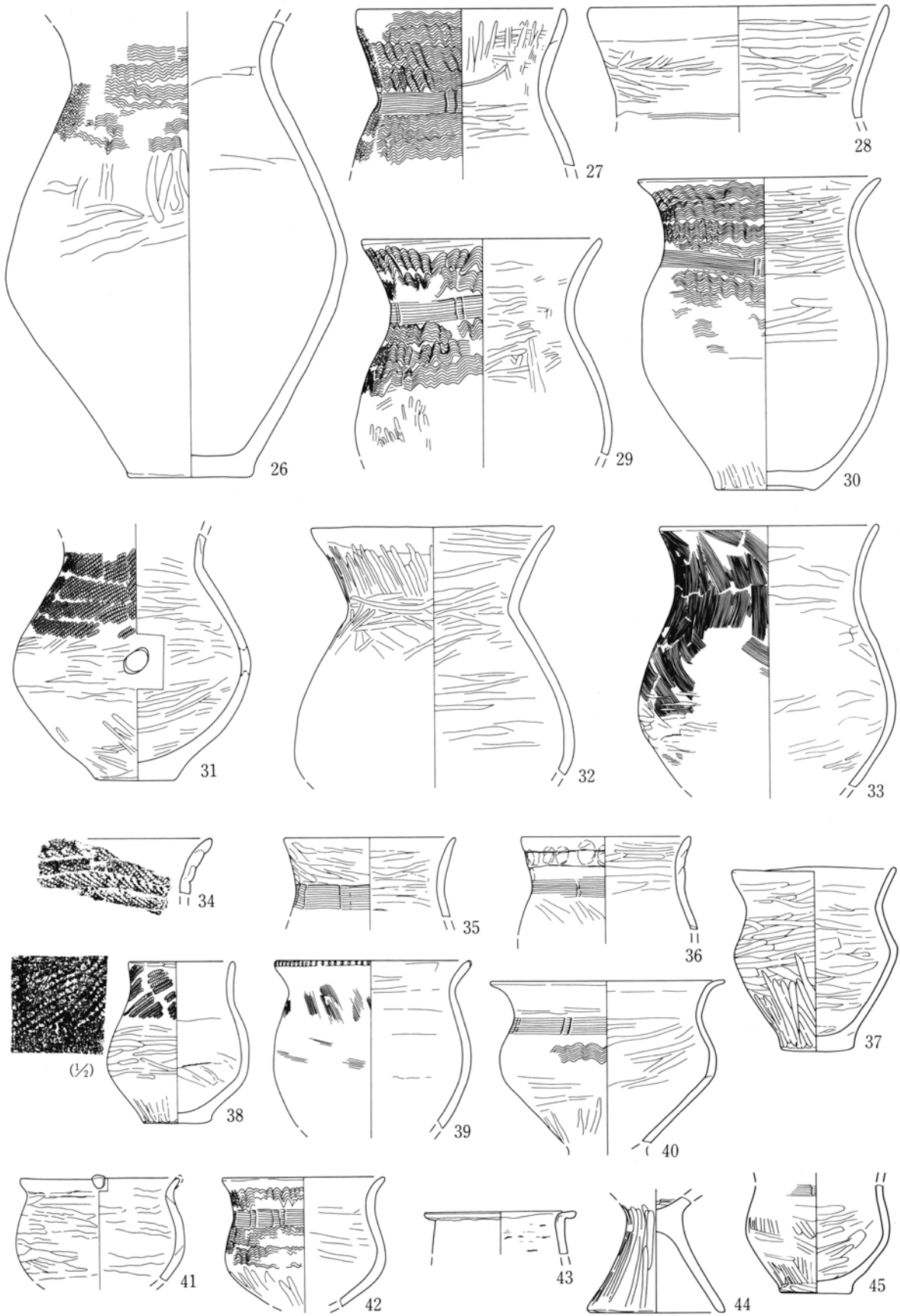
第466図 C60号住居跡出土遺物



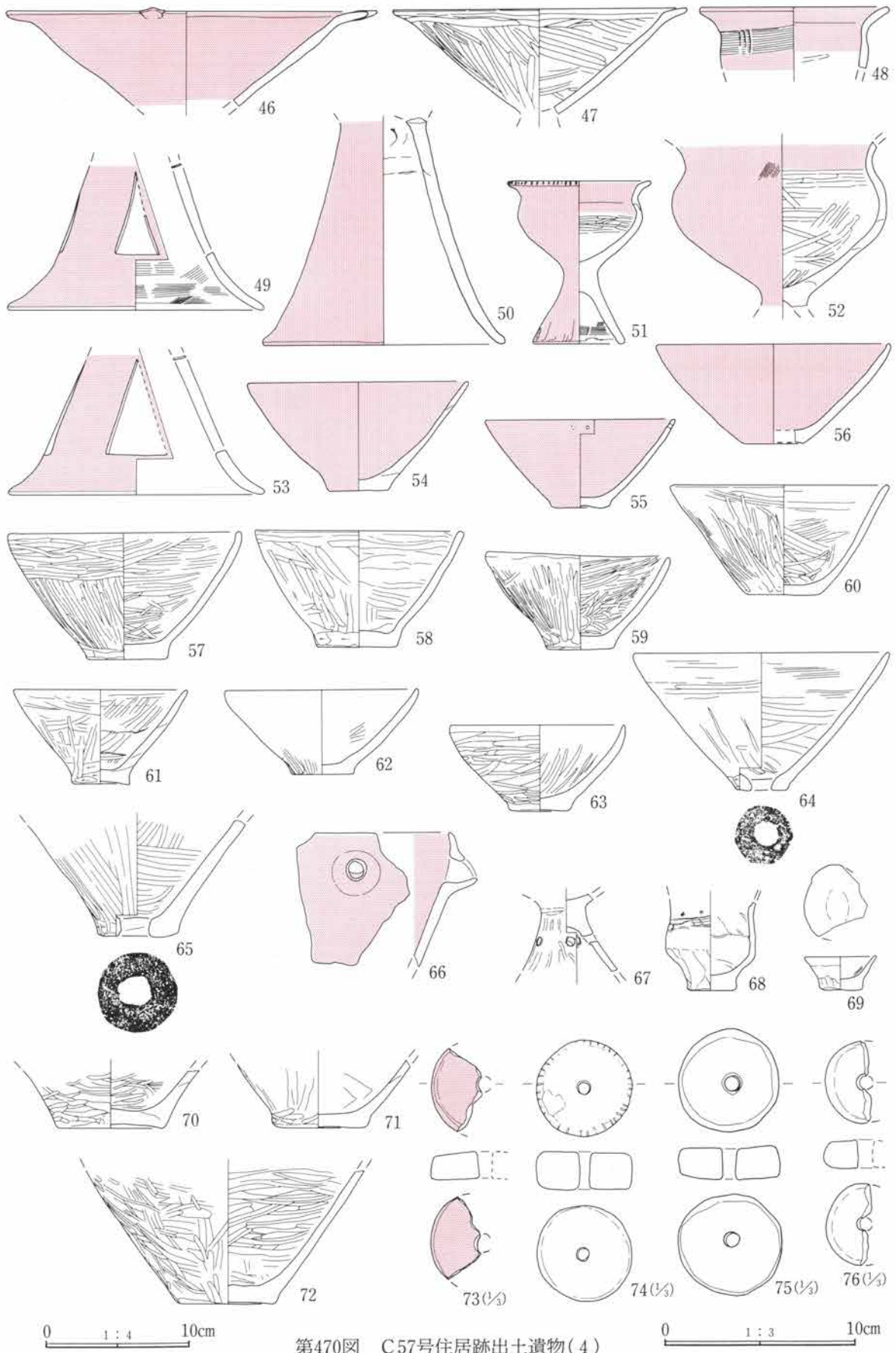
第467图 C57号住居跡出土遺物(1)



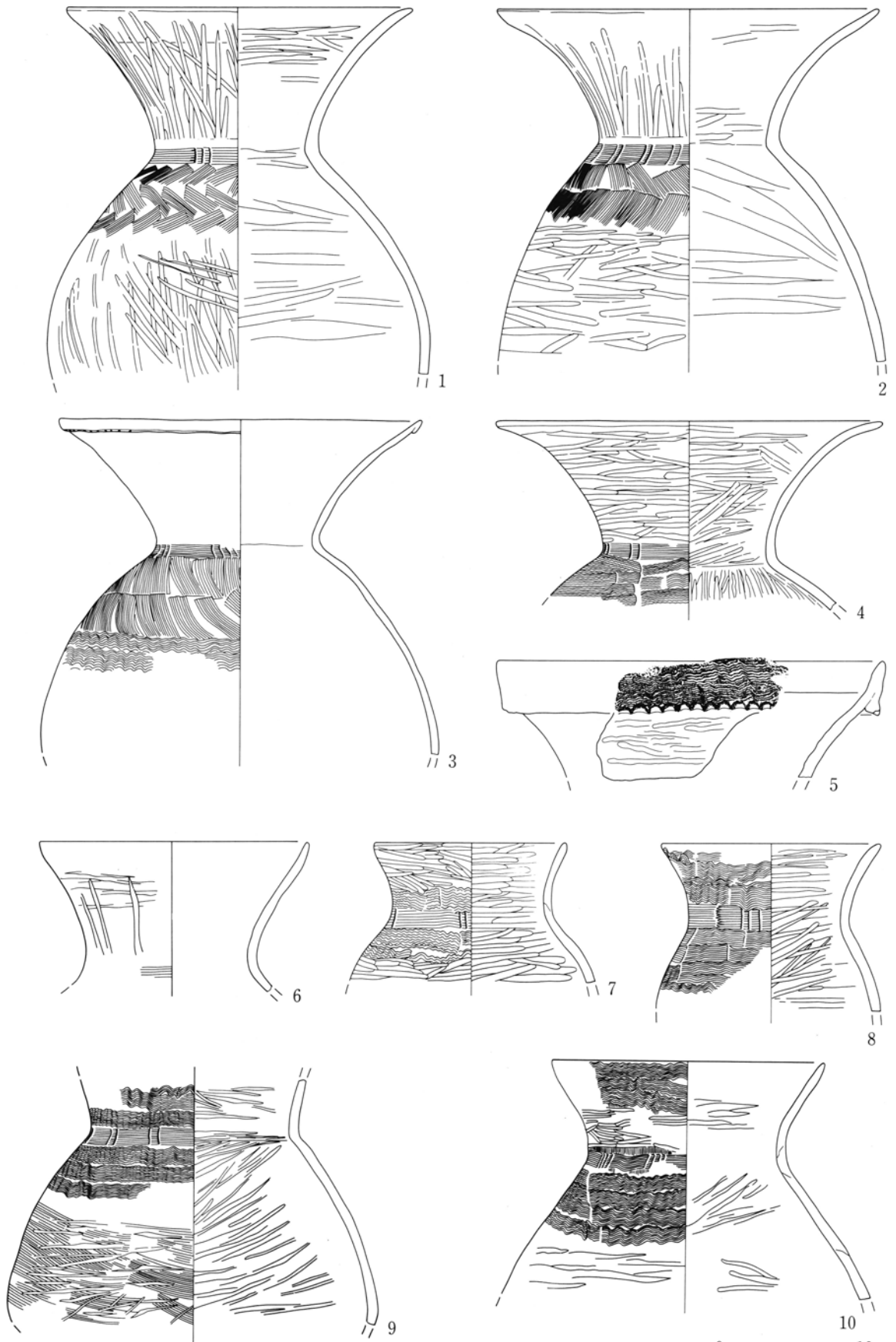
第468図 C57号住居跡出土遺物(2)



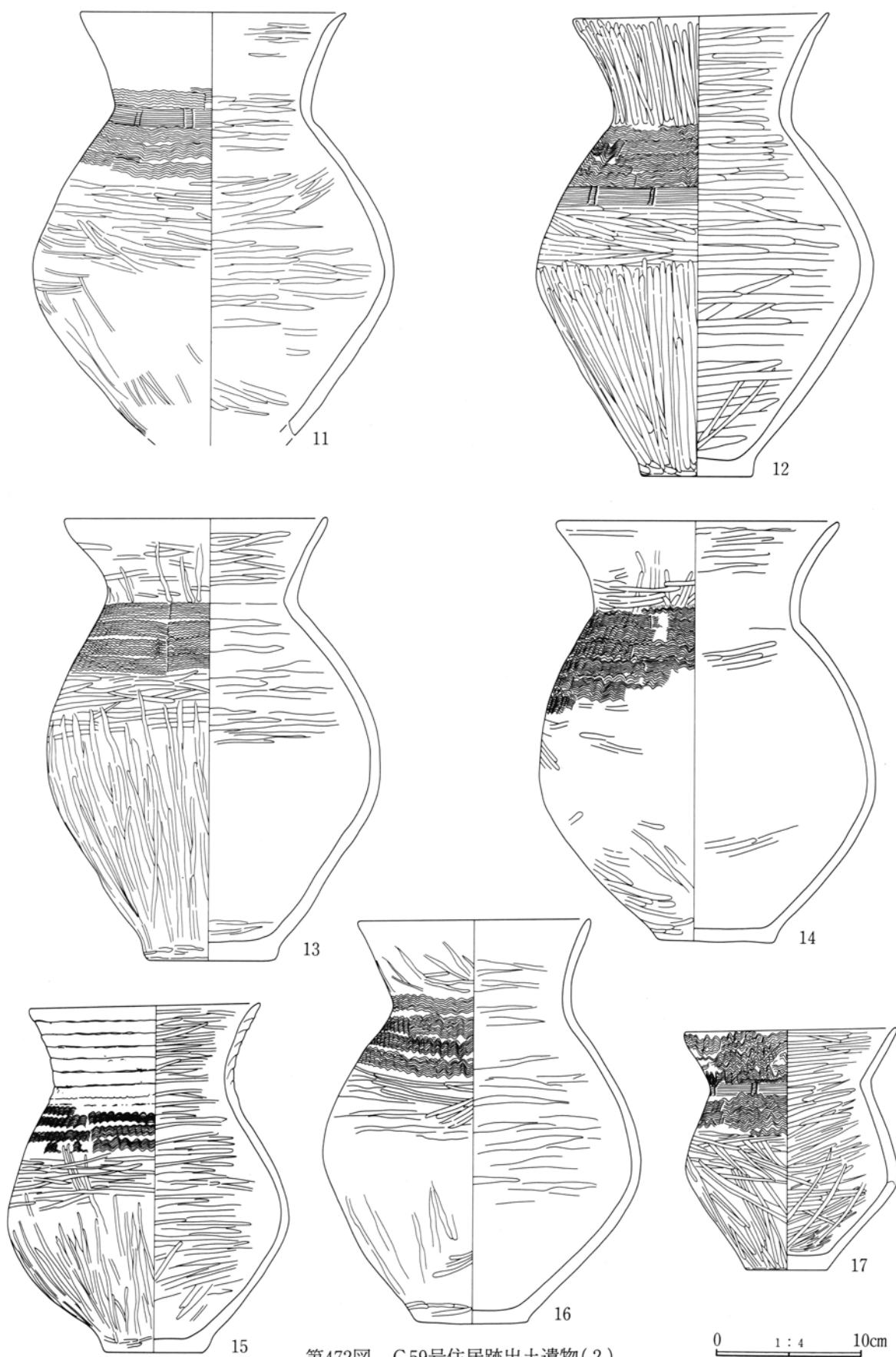
第469图 C57号住居跡出土遺物(3)



第470图 C57号住居跡出土遺物(4)

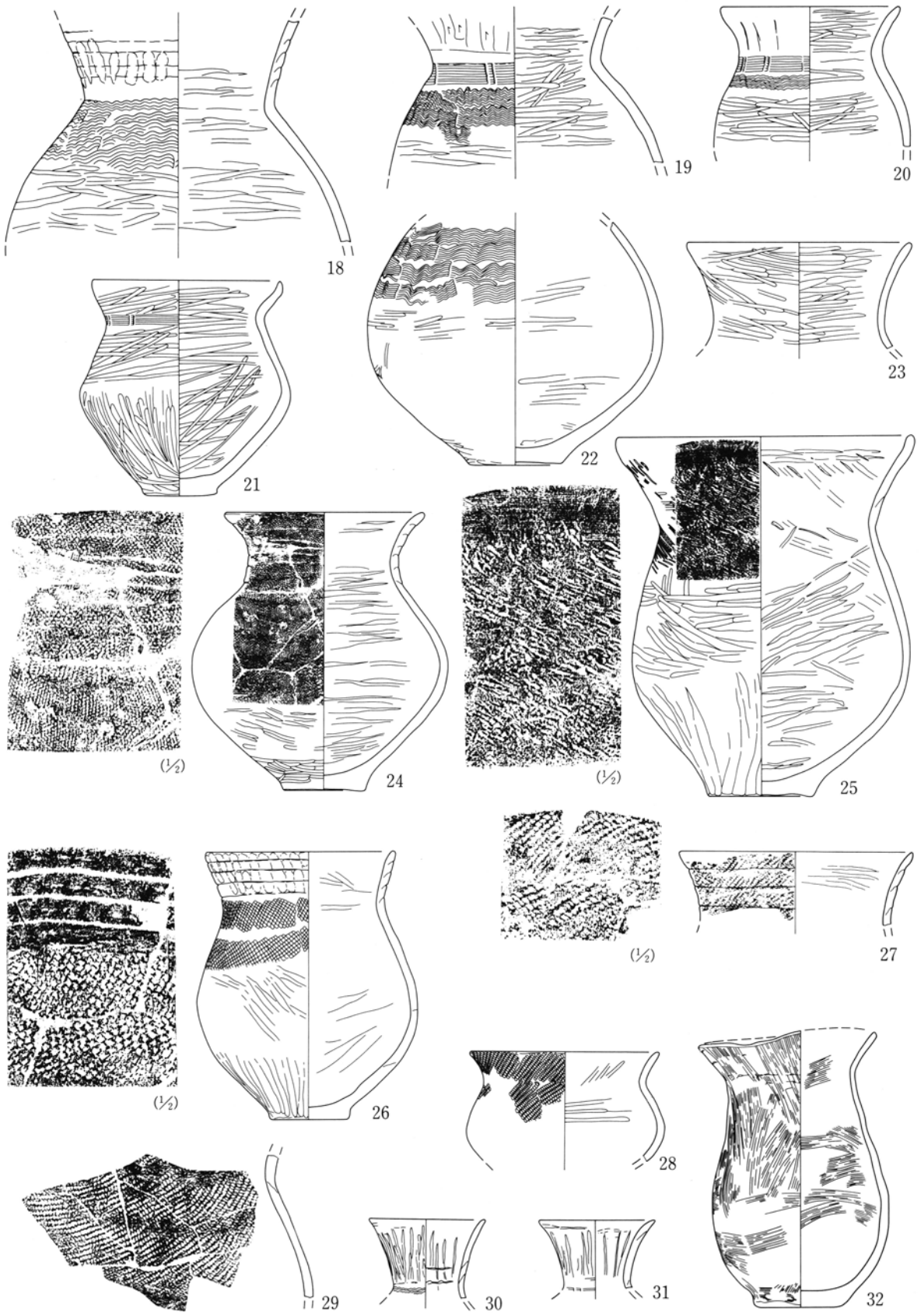


第471図 C59号住居跡出土遺物(1)



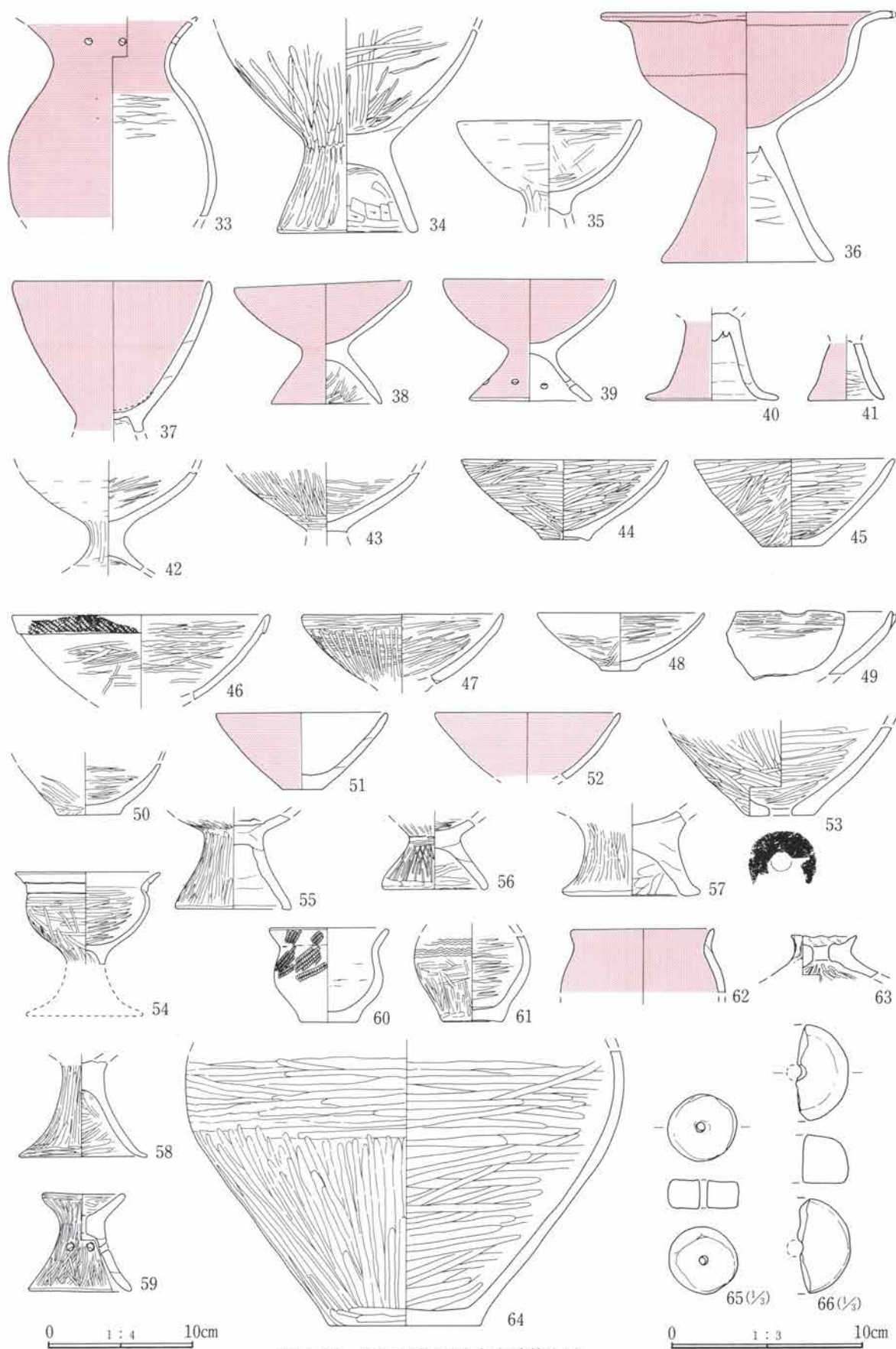
第472図 C59号住居跡出土遺物(2)

第2節 弥生土器

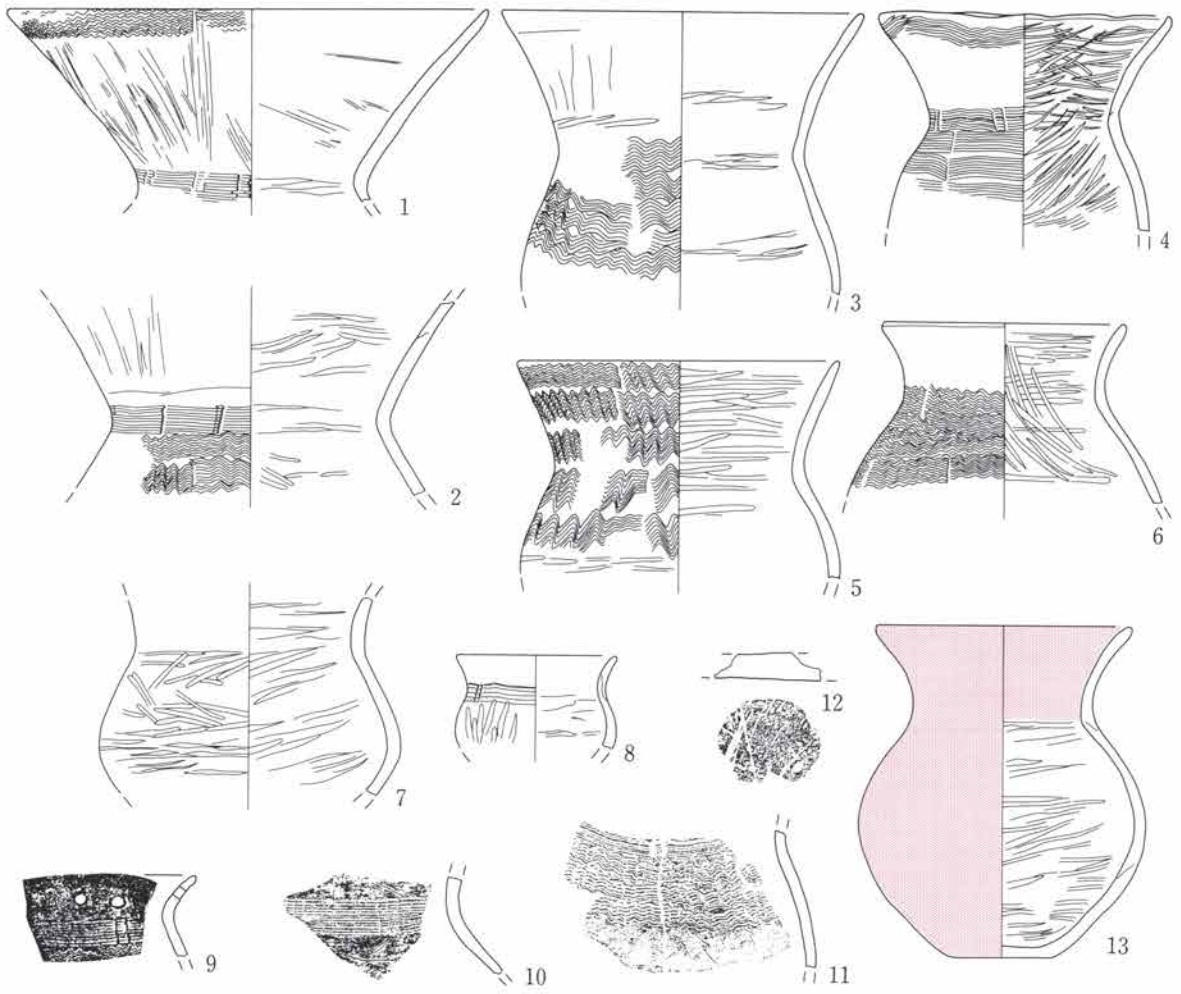


第473图 C59号住居跡出土遺物(3)

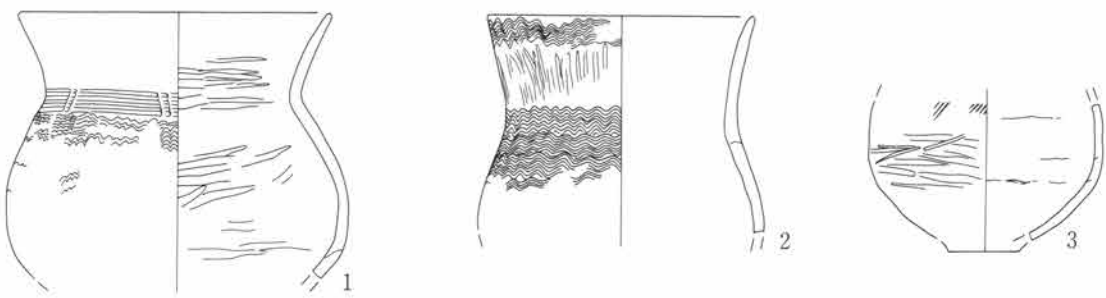
0 1:4 10cm



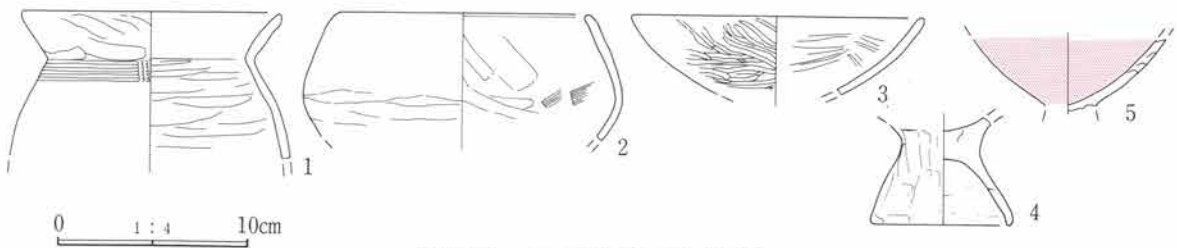
第474図 C59号住居跡出土遺物(4)



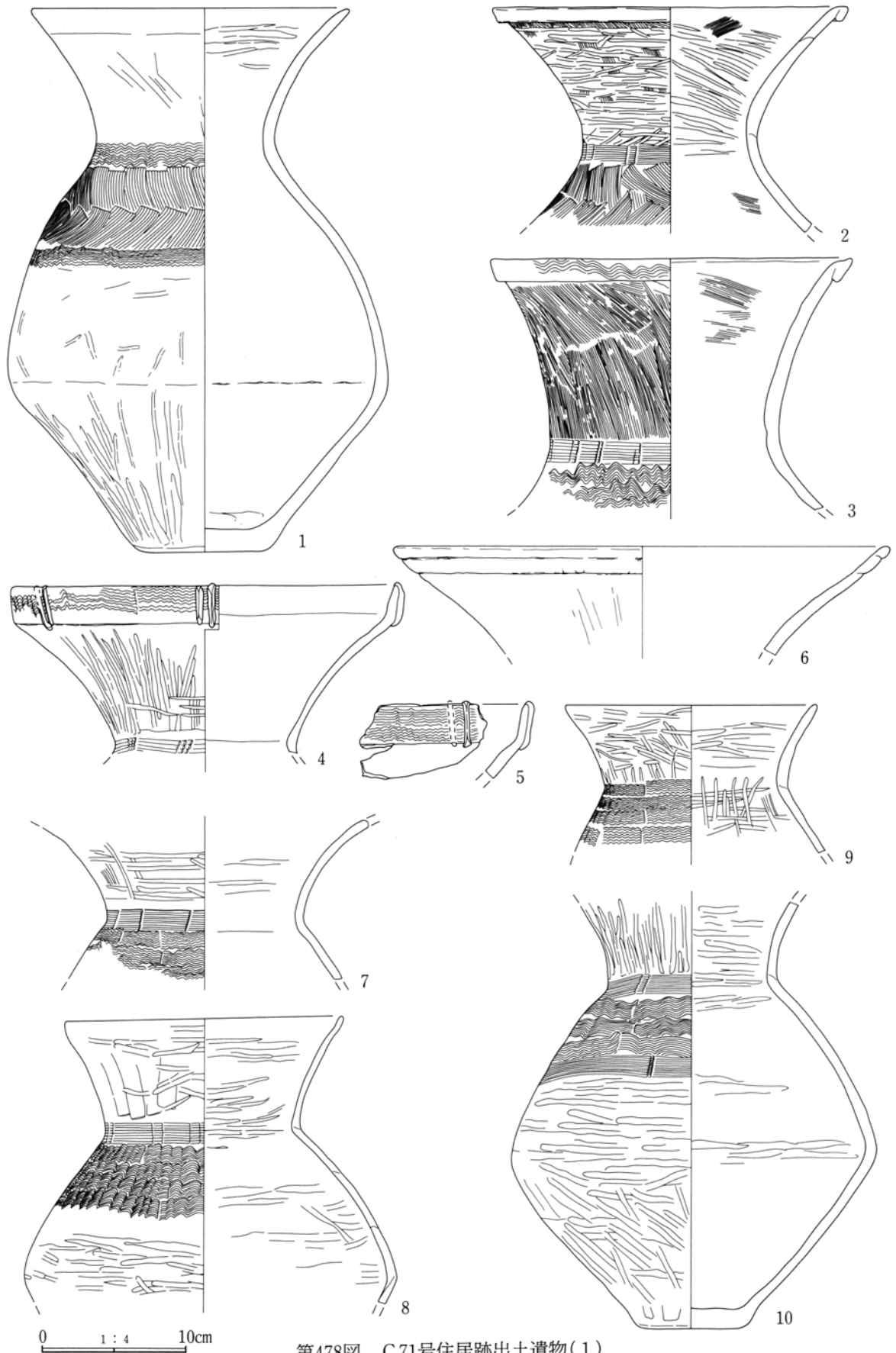
第475图 C64号住居跡出土遺物



第476图 C65号住居跡出土遺物

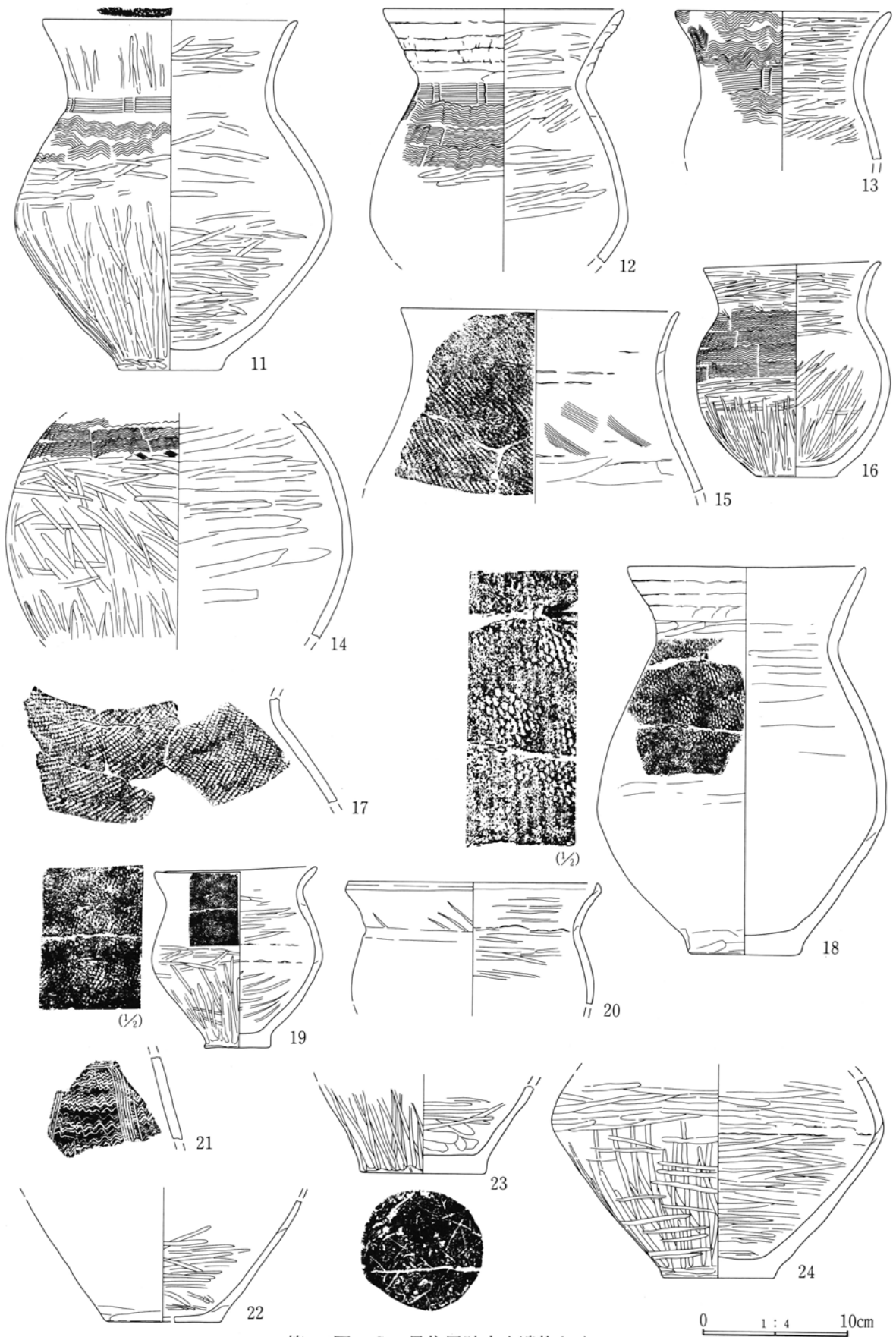


第477图 C68号住居跡出土遺物



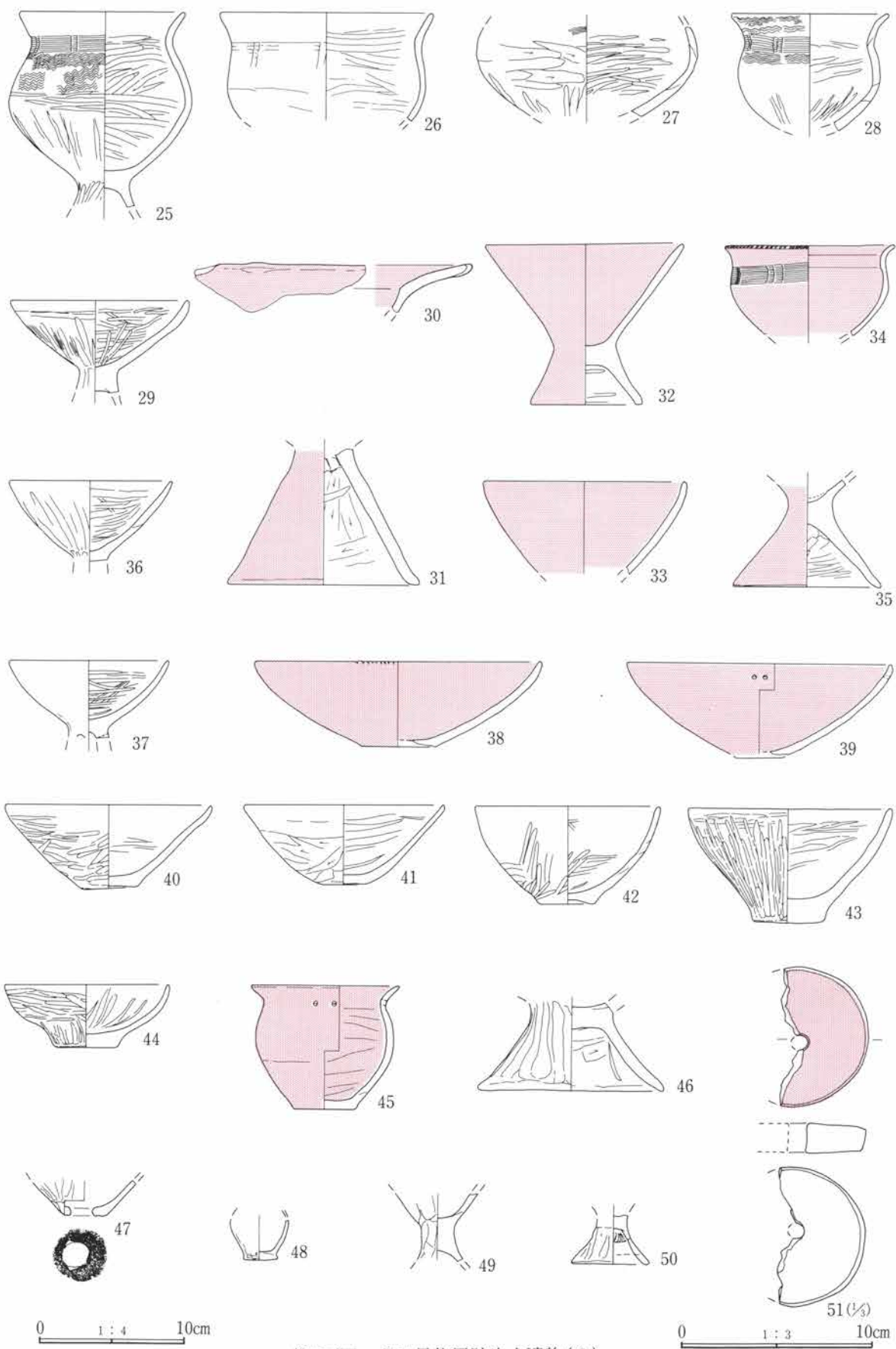
第478図 C71号住居跡出土遺物(1)

第2節 弥生土器



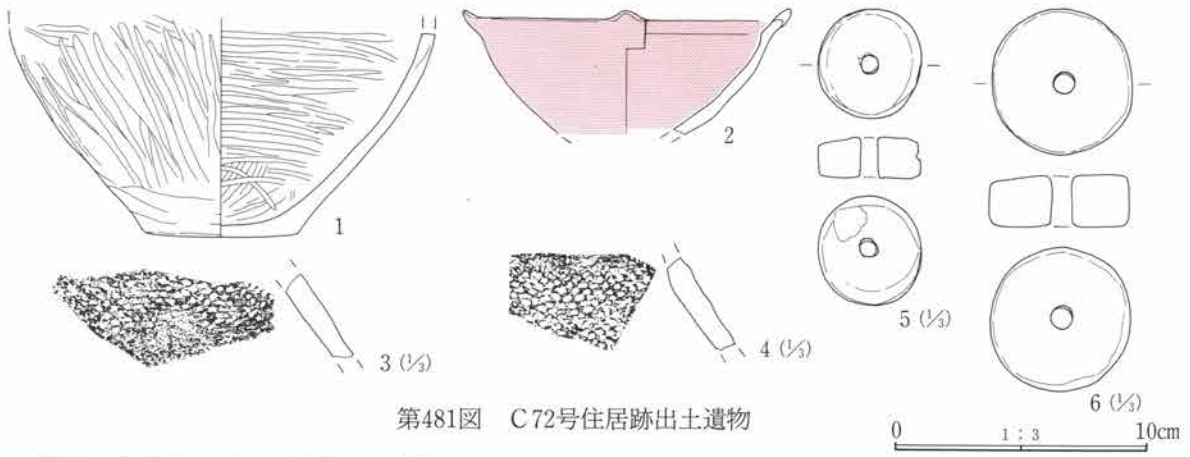
第479図 C71号住居跡出土遺物(2)

第4章 出土遺物

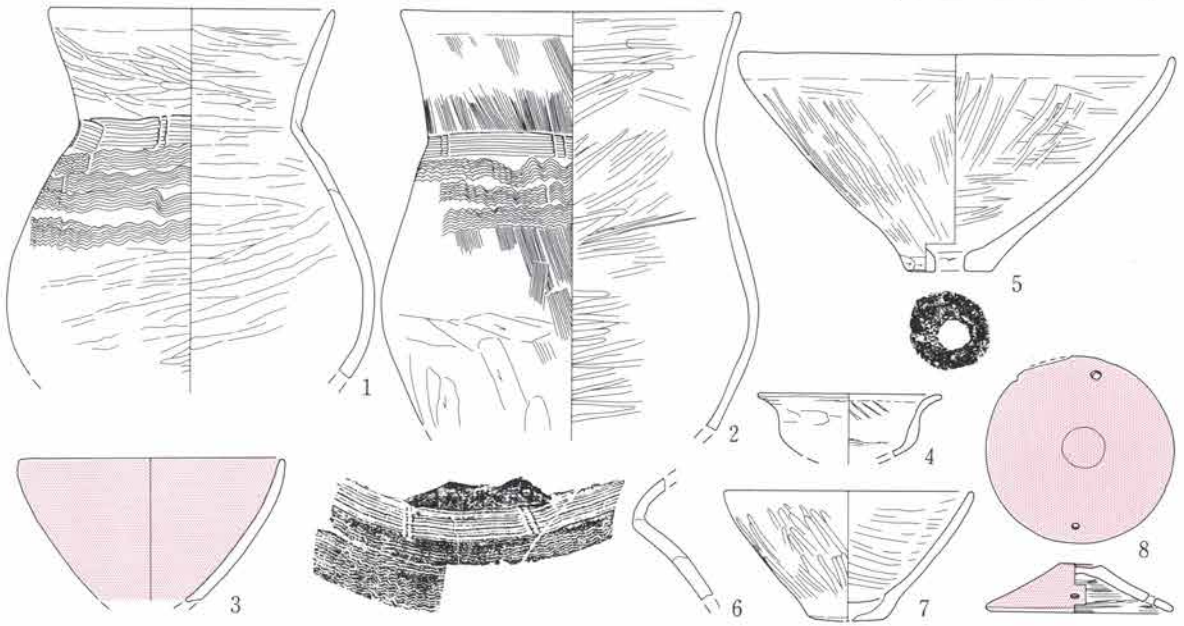


第480図 C71号住居跡出土遺物(3)

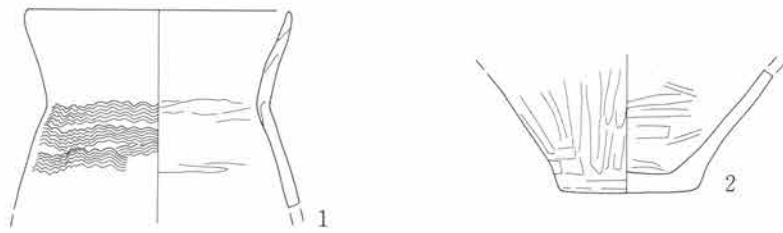
第2節 弥生土器



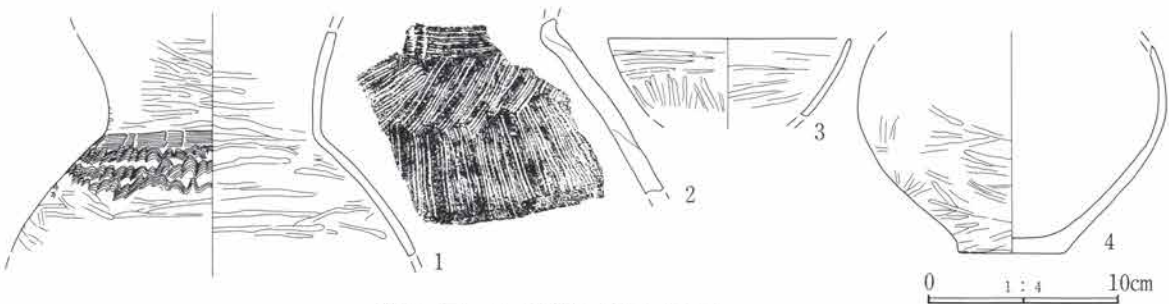
第481図 C72号住居跡出土遺物



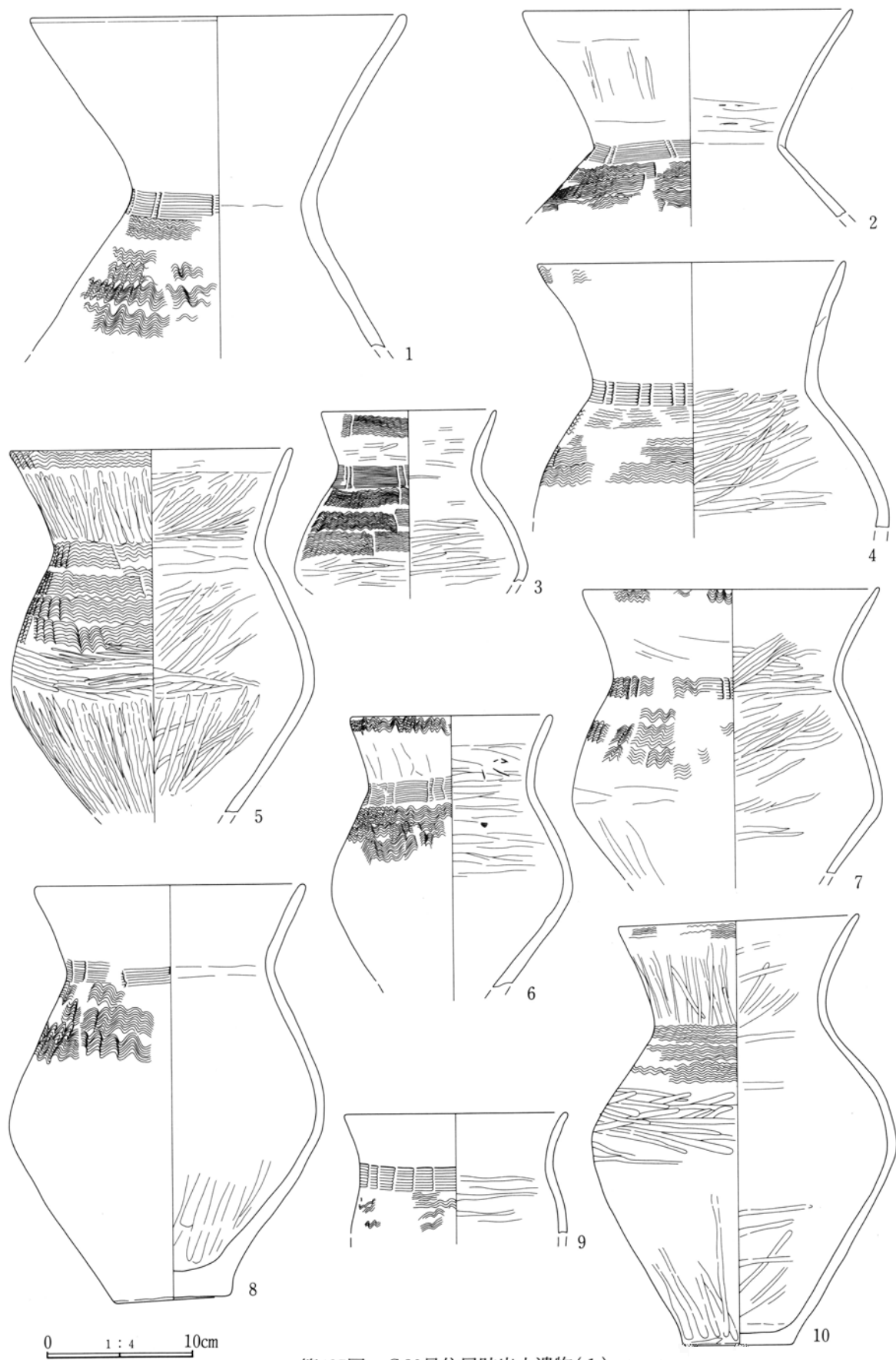
第482図 C73号住居跡出土遺物



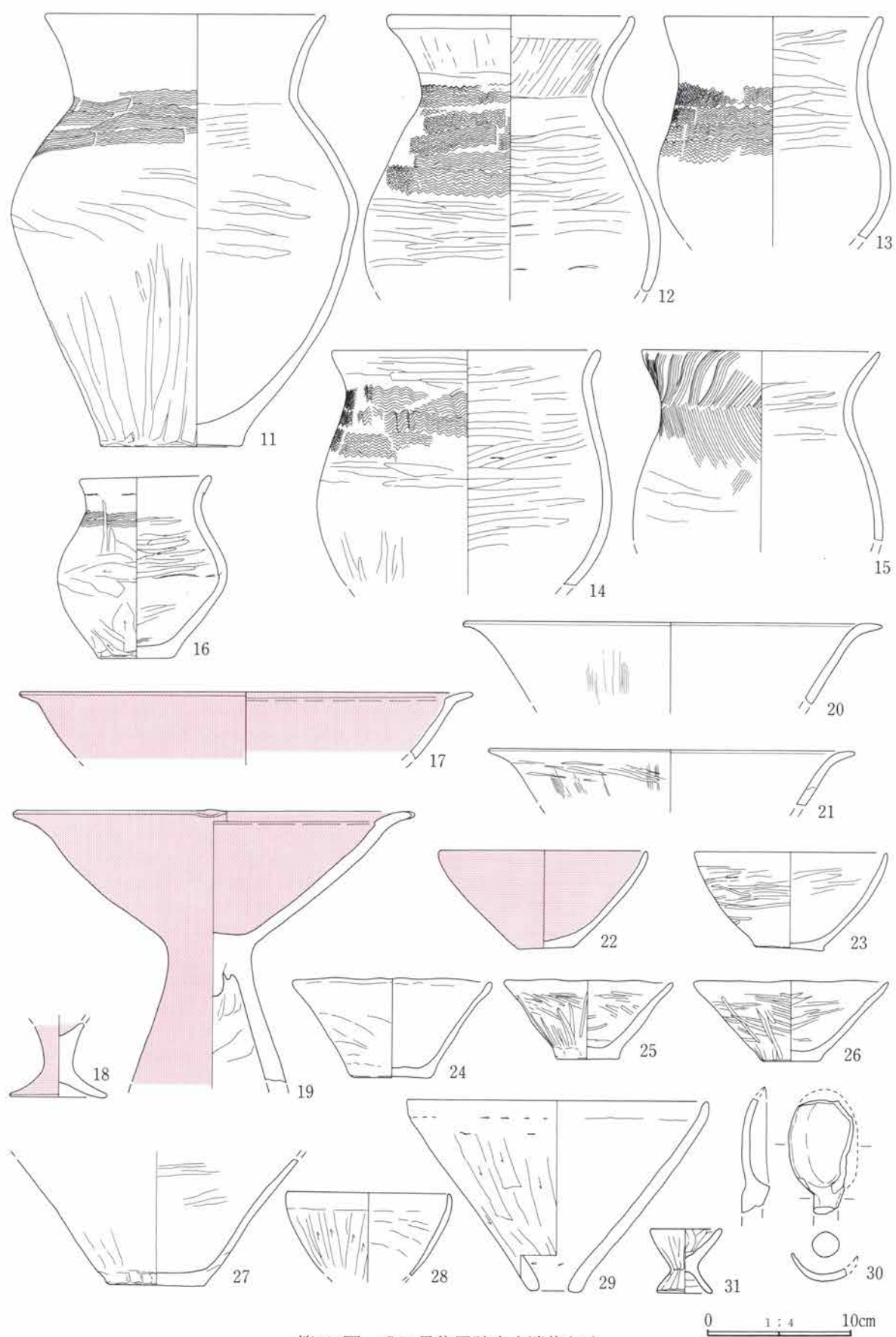
第483図 C75号住居跡出土遺物



第484図 C76号住居跡出土遺物

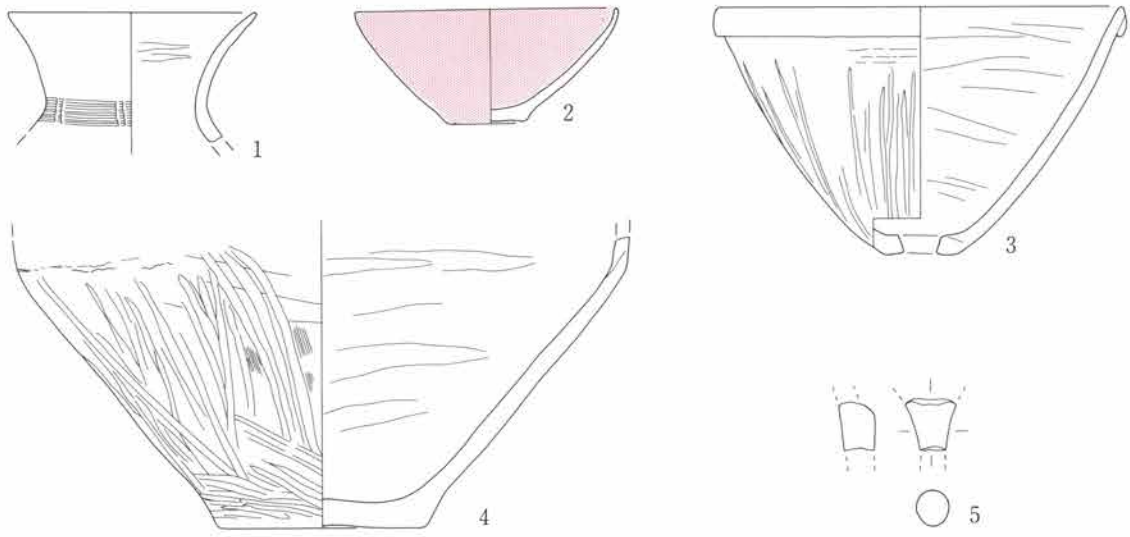


第485図 C80号住居跡出土遺物(1)

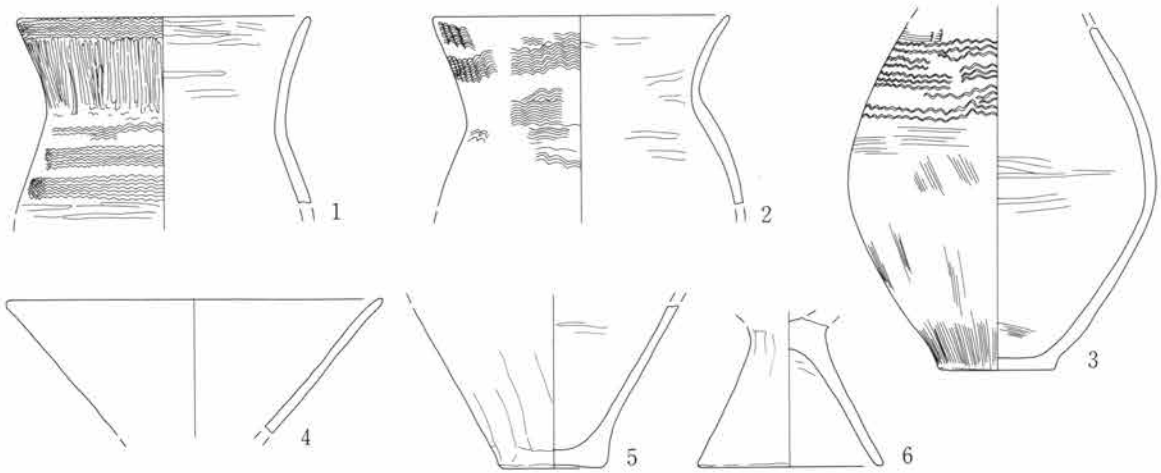


第486図 C80号住居跡出土遺物(2)

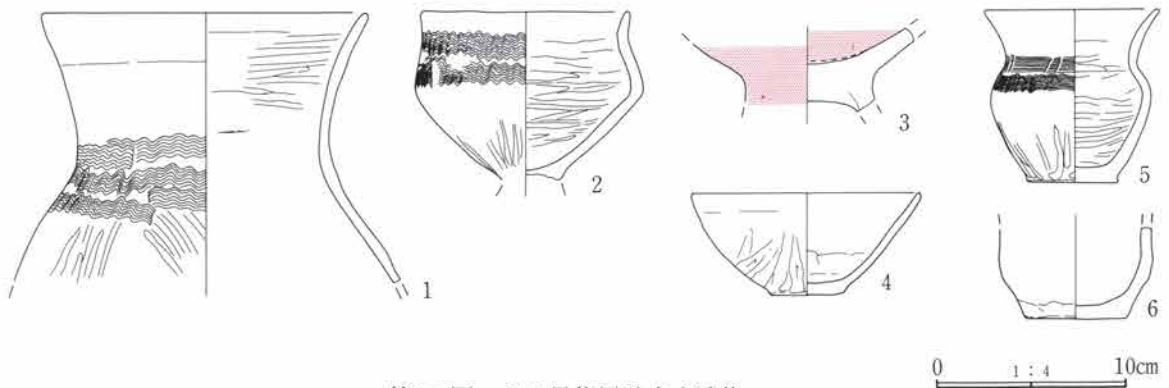
第4章 出土遺物



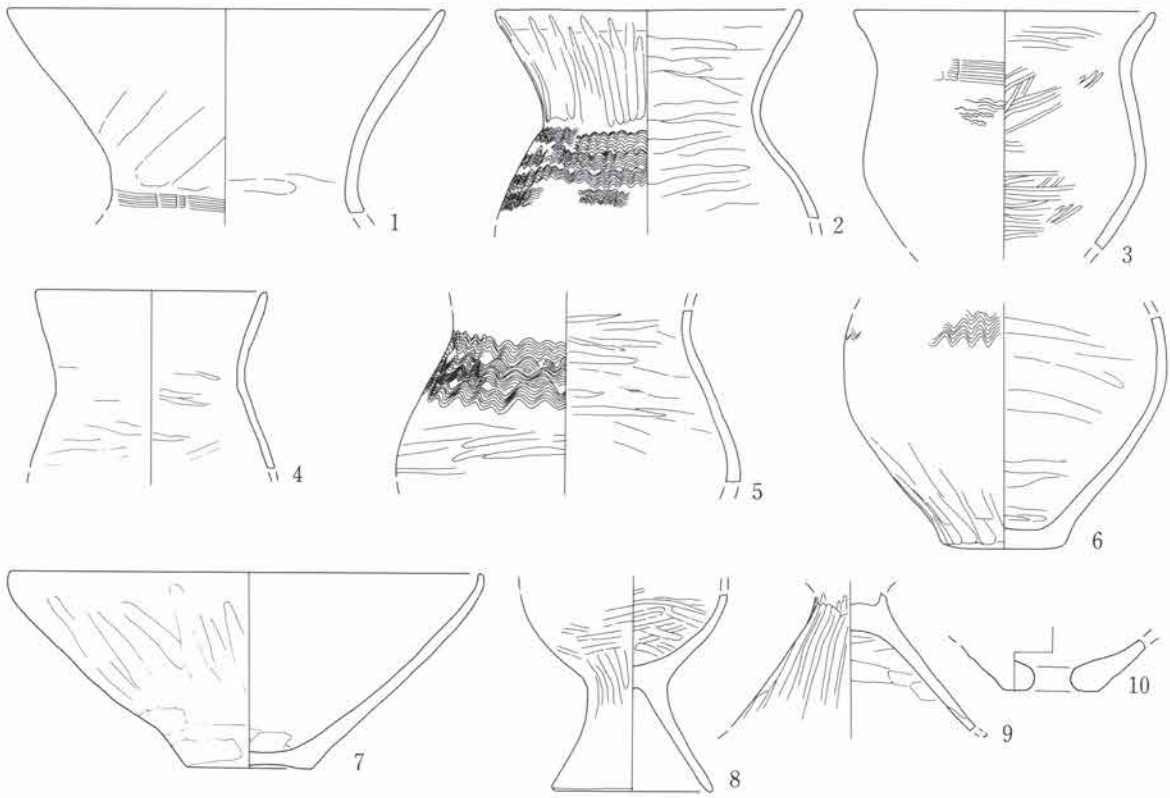
第487図 C81号住居跡出土遺物



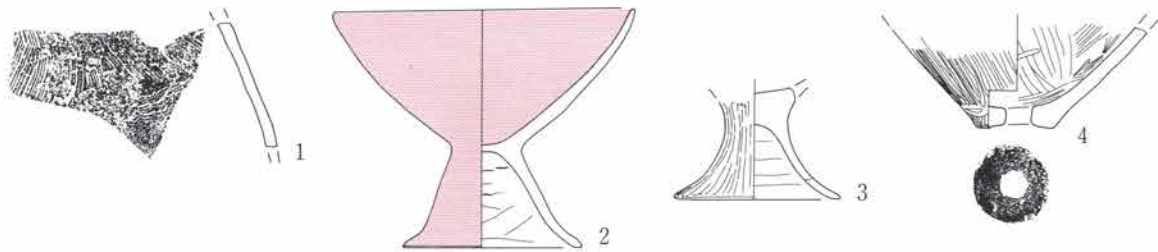
第488図 C83号住居跡出土遺物



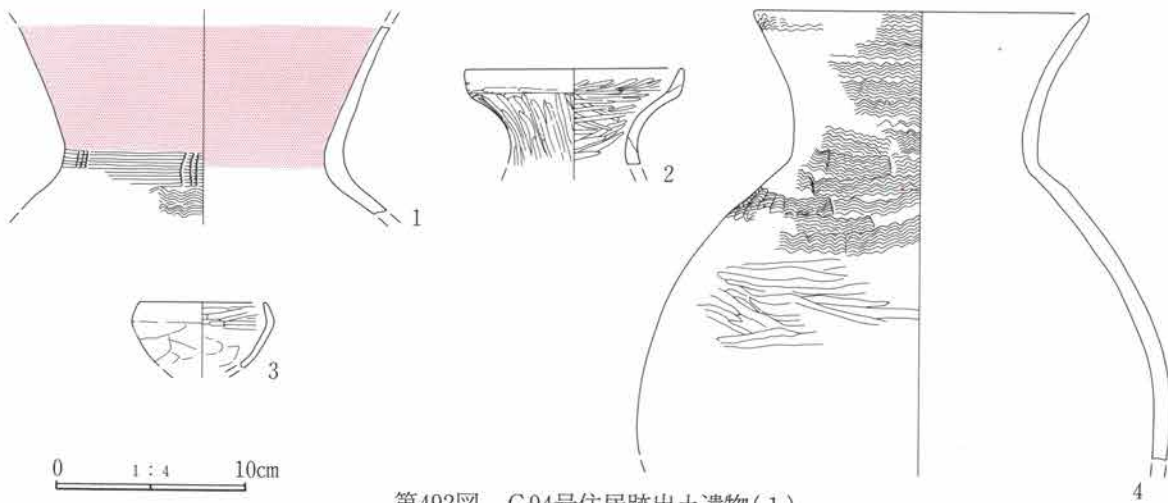
第489図 C86号住居跡出土遺物



第490图 C91号住居跡出土遺物

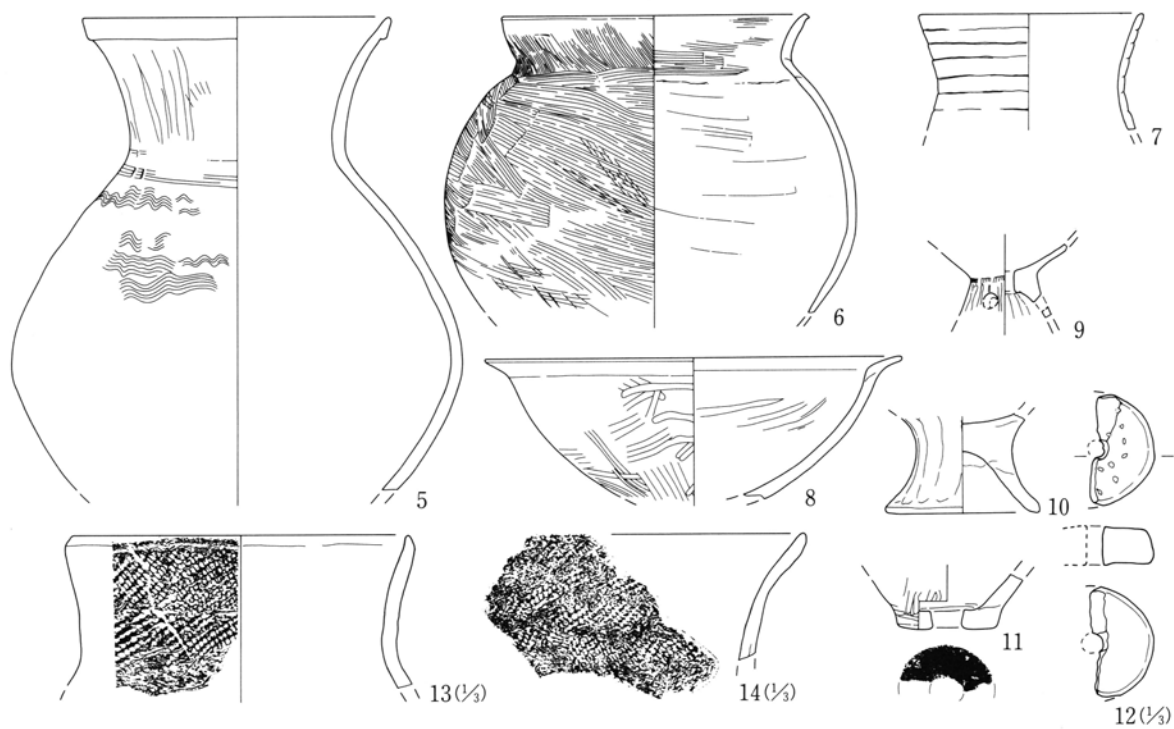


第491图 C93号住居跡出土遺物

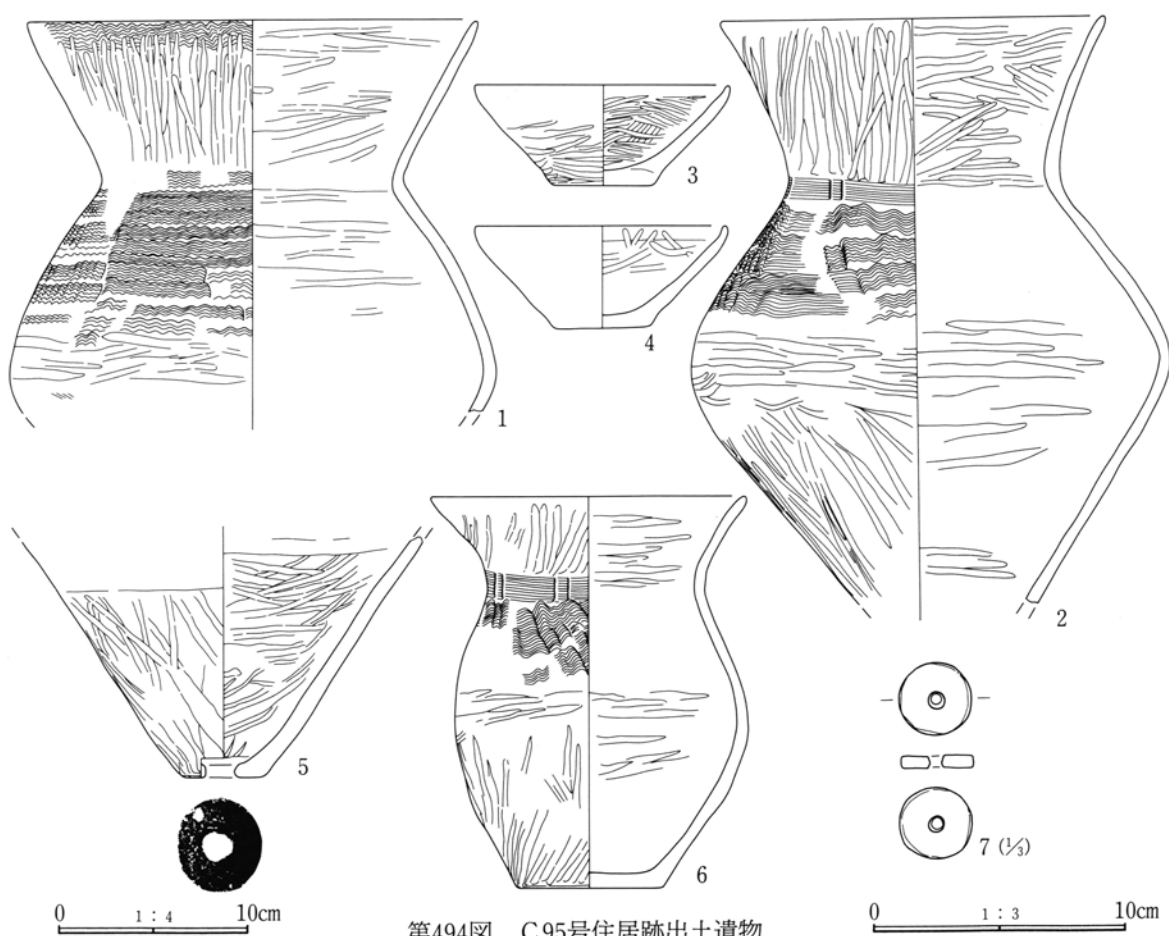


0 1:4 10cm

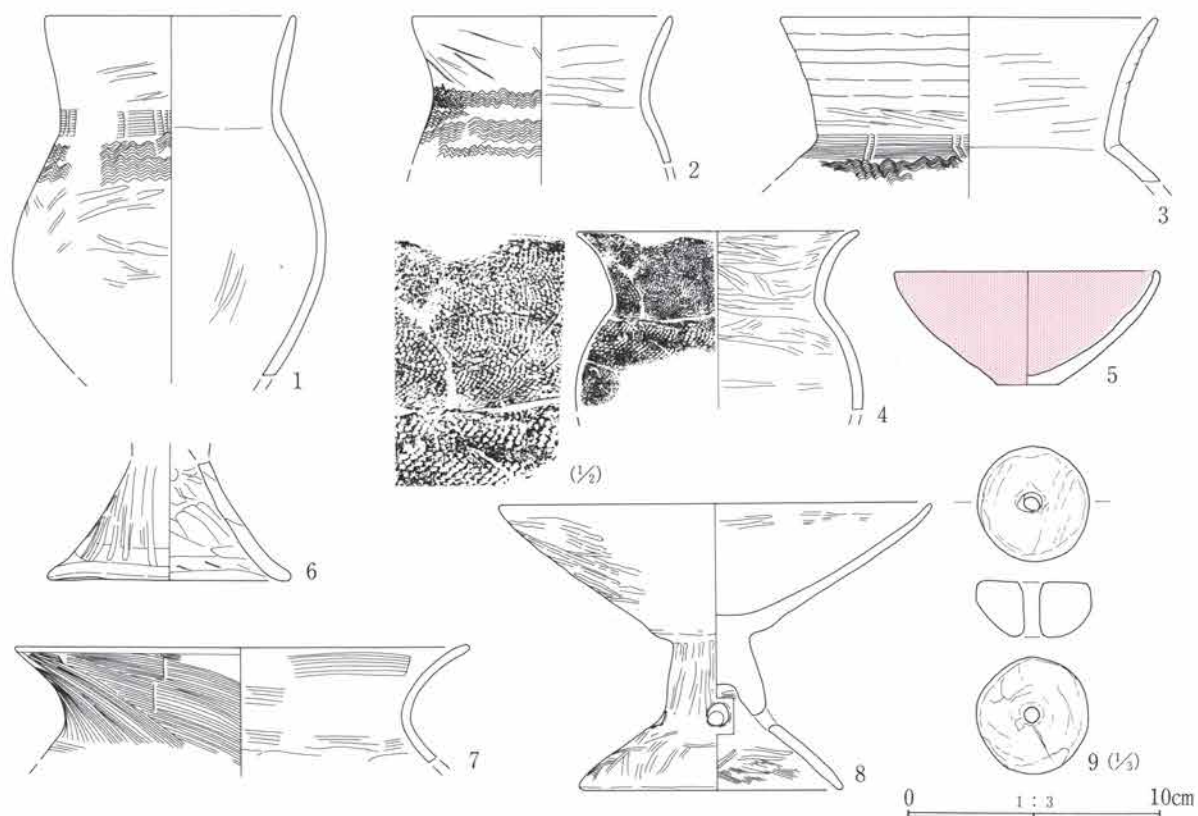
第492图 C94号住居跡出土遺物(1)



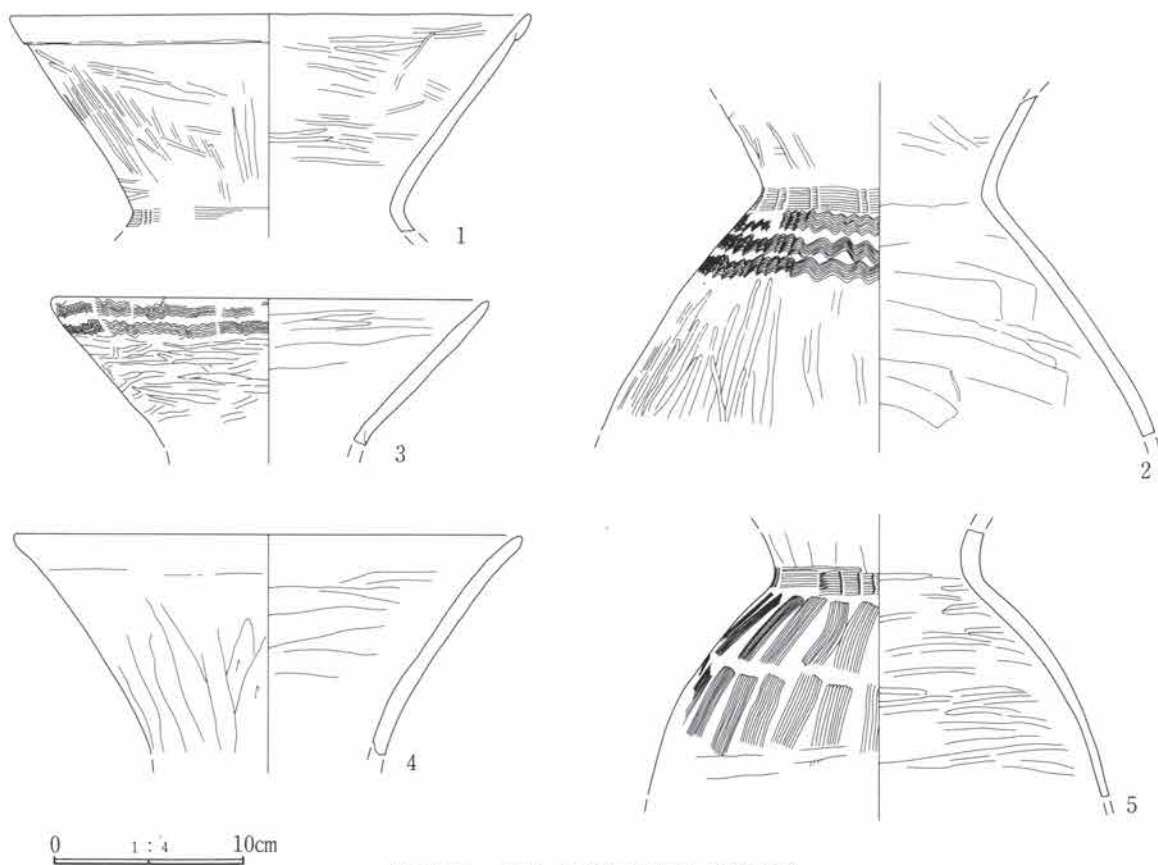
第493図 C94号住居跡出土遺物(2)



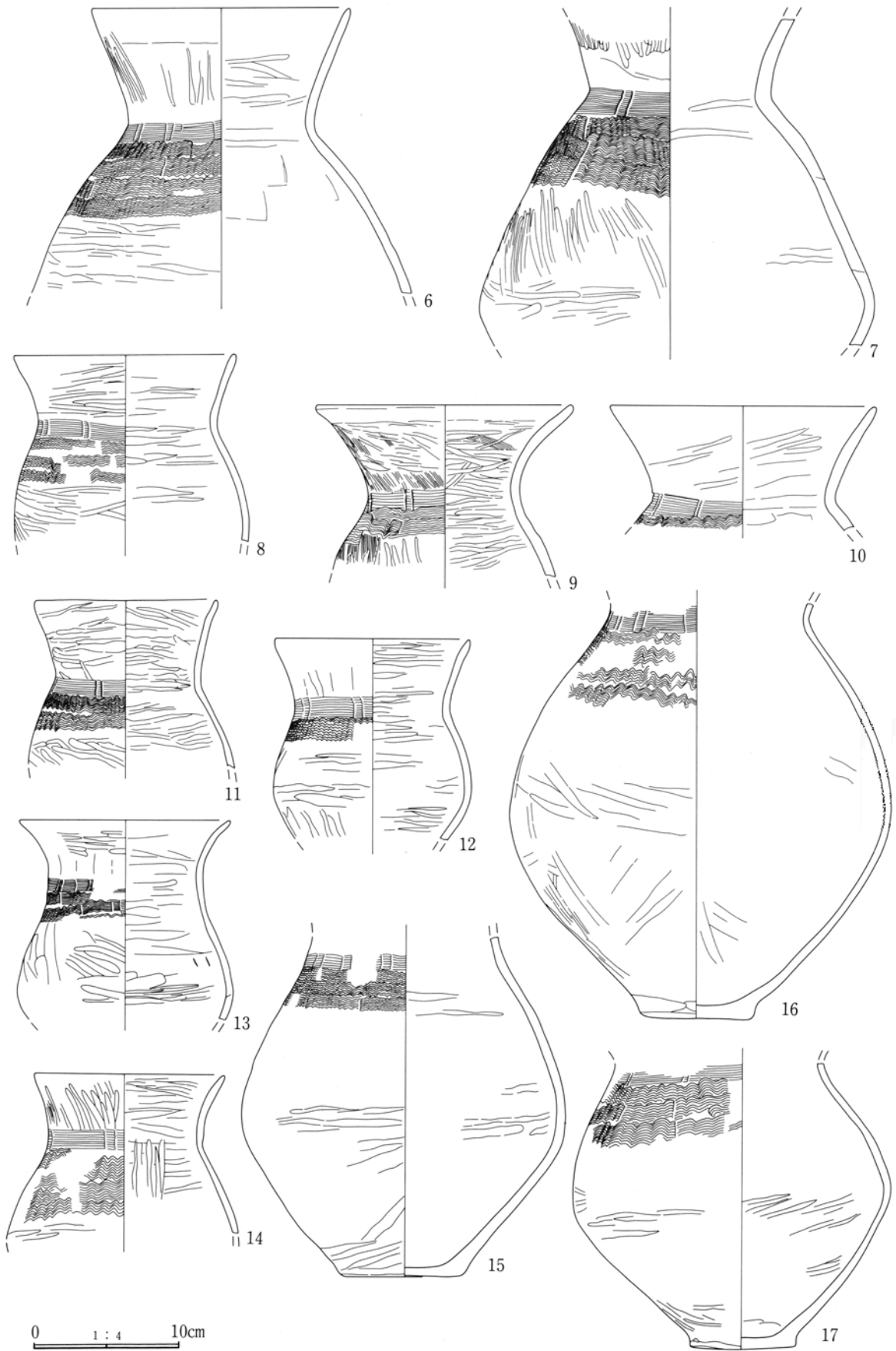
第494図 C95号住居跡出土遺物



第495図 C97号住居跡出土遺物



第496図 C104号住居跡出土遺物(1)



第497图 C104号住居跡出土遺物(2)